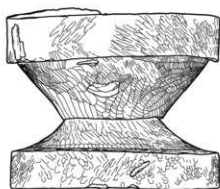


大道遺跡群 3

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6



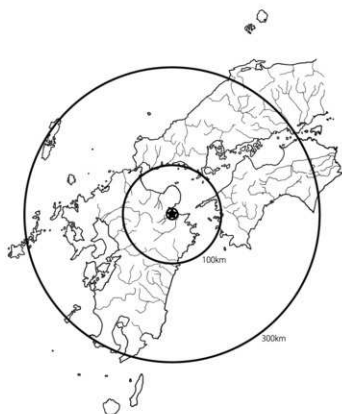
2010

大分市教育委員会

大道遺跡群 3

大分県周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6

第 9 次 第 10 次 第 11 次
第 14 次 第 15 次 第 16 次
第 17 次 第 18 次 第 19 次
第 22 次 第 24 次 第 25 次



2010

大分市教育委員会



上野台地を望む（北方向より 撮影：平成 20 年 7 月 17 日）



上野台地より別府湾を望む（南東方向より 撮影：平成 20 年 10 月 8 日）



大道遺跡第 24 次調査調査区全景（南方より）



大道遺跡第 24 次調査調査区全景（東方より）



大道遺跡第 24 次調査 24SE008 遺物出土状況（南方向より）



大道遺跡第 24 次調査 24SE008 臼・蓋出土状況（南方向より）



大道遺跡第24次調査 24SE008 出土 白レプリカ



上面



底面



樹皮残存部分



出土時の地上側部分（保存状態悪い）

序文

大分駅南地区では、平成 8 年度より大分駅周辺総合整備事業が進められており、中心市街地活性化に向けて新しい大分のまちづくりが進められています。

大道遺跡群は、こうした事業の柱のひとつである大分駅南土地区画整理事業に伴い、大分市教育委員会が平成 12 年度より年次計画に基づいて発掘調査を実施しているところであります。

これまでの発掘調査の結果、この地区には、縄文時代に入びとが住み始め、古墳時代初め頃には大規模な環濠に囲まれたムラが形成され、奈良時代から平安時代にかけては上野台地に推定されている豊後国府との関連が想定される施設が存在が明らかになりました。

本書に収録いたしました第 24 次調査では、古墳時代初め頃につくられたクスノキ製の臼がほぼ完全な形で発見され、全国的にも数少ない貴重な資料として注目されました。国立歴史民俗博物館による年代測定では、西暦 290 年頃に伐採されたクスノキを使用していることが明らかになりましたが、ヤリガンナで丁寧に仕上げられ、デザイン性さえ感じさせるその造形からは、古墳時代の人びとの高い技術と豊かな感性を感じとることができます。

このように、貴重な発見が相次いでおりますことから、今後とも適切かつ慎重な調査を進めて参りたいと考えております。

本書が、市民の皆さまとともに多くの方々の文化財保護へのご理解を深める一助となり、歴史研究や学術の振興に幅広く活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまでご指導いただきました諸先生方、ご協力いただいた諸機関各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成 22 年 3 月 31 日

大分市教育委員会

教育長 足立一馬

例 言

1. 本書は、大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、平成17年度に実施した大道遺跡群第9・10・11次調査、平成18年度に実施した同第14・15・16・17・18・19次調査、平成19年度に実施した同第22・24次調査、平成20年度に実施した同第25次調査分を収録する。
2. 発掘調査は、大分市教育委員会が調査主体となり、平成17年6月から平成20年3月までの間に実施したものである。このうち、平成19年6月以降に実施した第22・24・25次調査については平成19年度から導入された掘削・埋戻業務委託によっており、第22・24次調査は岡三リビング株式会社、第25次調査は明大工業株式会社に委託した。資料整理作業については、平成19年4月1日から平成22年1月29日まで行った。
3. 遺跡の調査担当は、調査組織に記す。報告書作成は、高畠豊、佐藤道文（大分市教育委員会）、井口あけみ、木村藍子、倉増美智代、佐藤孝剛、山下朋紀（大分市教育委員会嘱託）が行った。
4. 本書の執筆分担は、遺構は第22次・第24次を高畠が行い、それ以外を山下、佐藤（孝）がおこなった。遺物の版組・執筆については井口が行った。
5. 本書に掲載した遺構実測図トレースは、木村、倉増、佐藤（孝）、山下が行った。遺物実測・トレース作業については、平成20年度は有限会社九州文化財リサーチに委託し、平成21年度は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。また、作業の一部を木村が行った。
6. 遺物の選別は高畠、井口、佐藤（道）が行い、遺物の洗い・注記・接合・復元、一部の実測・トレース、各表作成については、平成19年度は井口が行い、平成20年度は井口、加藤眞優美、倉増美智代、佐藤久美、橋本千代美（大分市教育委員会臨時職員）が行った。平成21年度は井口、木村、倉増、小島愛、佐藤良子、山下（大分市教育委員会嘱託）が行った。
7. 遺構の写真撮影は、航空写真を九州航空株式会社に委託した。個別の遺構写真は、第9・10・11次調査を羽田野裕之、森岡晃司（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行い、第14・15次調査を永松正大（大分市教育委員会文化財課）が行い、第16・17・18・19次調査を有限会社九州文化財リサーチに委託し、第22・24次調査は高畠豊（大分市教育委員会文化財課）、上原翔平（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行った。第25次調査は中西武尚（大分市教育委員会文化財課）が行っている。また、遺物の写真撮影については、平成21年度に株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8. 出土遺物、記録資料は大分市文化財課に収蔵・保管している。
9. 本書の編集・構成は佐藤孝剛が行った。

凡 例

1. 本調査の座標は、世界測地系（日本測地系2000）の平面直角座標2系（北緯33° 0′ 東経131° 0′）をX・Y座標の基点として調査を行った。図中に記載される方位は座標北（G.N）を指している。
2. 本書に掲載されている遺構番号は、以下の要領で理解される。
「9SD002」 9（調査回数）SD（遺構種別）002（遺構番号）
3. 本書で用いた遺構略号は原則として、
SB：掘立柱建物、SE：井戸跡、SD：溝状遺構・用水路、SK：土坑、SX：性格不明遺構、SP：ピットを表している。
4. 遺構の規模はメートル（m）を、遺物の法量はセンチメートル（cm）をそれぞれ用いる。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	2
第2章 遺跡の立地と環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 大道遺跡群第9次・15次調査	9
第2節 大道遺跡群第10次・14次・17次・18次調査	31
第3節 大道遺跡群第16次・19次・22次・25次調査	67
第4節 大道遺跡群第11次・24次調査	114
遺物観察表	151
第4章 自然科学分析	175
第1節 大分市大道遺跡群第15次調査出土土器の年代学的調査 歴博年代研究グループ 藤尾慎一郎・坂本稔	175
第2節 大分市大道遺跡群第24次調査出土白と土器の年代学的調査 歴博年代研究グループ 藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔	179
第3節 大道遺跡群第24次調査における樹種同定 株式会社 古環境研究所	188
第5章 まとめ	192
第1節 大道遺跡群における土地状況および利用について（山下）	192
第2節 大道遺跡群第24次調査 24SE008 に廃棄された出土遺物の検討（井口）	193
第3節 白と塀の周辺遺跡からの出土例（井口）	196

图版目次

第 1 图	调查地周边地形分類图	4	第 39 图	大道 14 次調査区土層実測図	43
第 2 图	周辺遺跡位置図	5	第 40 图	大道 14 次調査区平面実測図	43
第 3 图	調査地配置図	8	第 41 图	14SE005 平面・断面・土層断面実測図	44
第 4 图	第 1 節 調査区配置図	9	第 42 图	14SE005 出土遺物実測図	45
第 5 图	大道 9 次調査区西壁土層断面実測図	10	第 43 图	14SD001 土層断面実測図	46
第 6 图	大道 9 次調査遺構平面図	11	第 44 图	14SD002 土層断面実測図	46
第 7 图	9SD010 平面・断面・土層実測図	11	第 45 图	14SK010 土層断面実測図	46
第 8 图	9SD010 出土遺物実測図①	12	第 46 图	14SD010 出土遺物実測図	46
第 9 图	9SD010 出土遺物実測図②	13	第 47 图	14SX006 出土遺物実測図①	48
第 10 图	9SK006・007 出土遺物実測図	14	第 48 图	14SX006 出土遺物実測図②	49
第 11 图	9SP009・011 出土遺物実測図	15	第 49 图	14SX006 出土遺物実測図③	50
第 12 图	9SK008 平面・断面・土層実測図	15	第 50 图	14SX006 出土遺物実測図④	51
第 13 图	9SX005 出土遺物実測図	16	第 51 图	大道 14 次出土縄文土器実測図①	53
第 14 图	15SE003 土層断面実測図	18	第 52 图	大道 14 次出土縄文土器実測図②	54
第 15 图	15SE003 出土遺物実測図	18	第 53 图	大道 14 次出土縄文土器実測図③	55
第 16 图	大道 15 次調査遺構平面図	19	第 54 图	大道 14 次出土縄文土器実測図④	56
第 17 图	15SE004 出土遺物実測図①	21	第 55 图	大道 14 次出土縄文土器実測図⑤	57
第 18 图	15SE004 出土遺物実測図②	22	第 56 图	大道 17 次調査遺構平面図	58
第 19 图	15SE005 土層断面実測図	23	第 57 图	17SE010 平面・断面・土層断面実測図	59
第 20 图	15SE005-008-015-018 出土遺物実測図	23	第 58 图	17SE010 出土遺物実測図	60
第 21 图	15SE020 出土遺物実測図	25	第 59 图	17SD009 土層断面実測図	61
第 22 图	15SD012・013・028 出土遺物実測図	26	第 60 图	17SD003・009 出土遺物実測図	61
第 23 图	15SX036 出土遺物実測図	27	第 61 图	17SK002 平面・断面実測図	62
第 24 图	15SX037・表土出土遺物実測図	28	第 62 图	17SD002 出土遺物実測図	62
第 25 图	大道 15 次出土縄文土器実測図	29	第 63 图	17SK007・014 出土遺物実測図	62
第 26 图	第 2 節 調査区配置図	32	第 64 图	大道 18 次調査区土層断面実測図	64
第 27 图	大道 10 次調査区北壁土層断面実測図	33	第 65 图	大道 18 次調査遺構配置図・平面図	65
第 28 图	10SD002・SD006 出土遺物実測図	33	第 66 图	18SX001 出土遺物実測図	66
第 29 图	A 調査区遺構配置図	33	第 67 图	第 3 節 調査区配置図	68
第 30 图	B 調査区遺構配置図	34	第 68 图	大道 16 次調査区土層断面図	69
第 31 图	10SD010 土層断面実測図	35	第 69 图	大道 16 次調査遺構平面図	70
第 32 图	10SD010 出土遺物実測図①	36	第 70 图	16SD029 土層断面実測図	70
第 33 图	10SD010 出土遺物実測図②	37	第 71 图	16SD030 土層断面実測図	71
第 34 图	10SD026 土層断面実測図	38	第 72 图	16SD001・002・029・030 出土遺物実測図	72
第 35 图	10SD026・SD036 出土遺物実測図	38	第 73 图	16SK028 平面・断面実測図	73
第 36 图	10SK005・042 出土遺物実測図	39	第 74 图	16SK035 土層断面実測図	74
第 37 图	大道 10 次出土縄文土器実測図①	40	第 75 图	16SK045 平面・断面実測図	74
第 38 图	大道 10 次出土縄文土器実測図②	41	第 76 图	16SK005・015・022・028 出土遺物実測図	75

第 77 图	16SK028・035・045出土遺物実測図 …	76	第 115 图	大道 25 次遺構切り合い図 ……………	109
第 78 图	16SK050平面・断面・土層断面実測図 …	77	第 116 图	大道 25 次全体平面図 ……………	109
第 79 图	16SK058平面・断面・土層断面実測図 …	77	第 117 图	25SD001 出土遺物実測図 ……………	110
第 80 图	16SK050 出土遺物実測図 ……………	78	第 118 图	25SX010 出土遺物実測図 ……………	110
第 81 图	16SK050・058 出土遺物実測図 ……	79	第 119 图	25SX005・010遺構・断面・土層断面実測図 …	111
第 82 图	16SX007 土層断面実測図 ……………	81	第 120 图	25SD010 出土遺物実測図 ……………	112
第 83 图	16SX007 出土遺物実測図 ……………	82	第 121 图	大道 25 次表採出土遺物実測図 ……	113
第 84 图	16SX007・SP024・056出土遺物実測 …	83	第 122 图	第 4 節 調査地配置図 ……………	114
第 85 图	大道 19 次調査区南壁土層断面実測図 …	84	第 123 图	大道 11 次調査区西壁土層断面実測図 …	115
第 86 图	大道 19 次調査遺構平面図 ……………	84	第 124 图	大道 11 次調査区遺構平面図 ……	116
第 87 图	19SB005平面・断面・土層断面実測図 …	85	第 125 图	11SD010 出土遺物実測図 ……………	116
第 88 图	19SB005 出土遺物実測図 ……………	86	第 126 图	11SK040 平面・断面・土層断面実測図 …	117
第 89 图	19SD002 土層断面実測図 ……………	86	第 127 图	11SK040 出土遺物実測図 ……………	118
第 90 图	19SD020 土層断面実測図 ……………	87	第 128 图	11SK045 出土遺物実測図 ……………	118
第 91 图	19SD002・018・020出土遺物実測図 …	88	第 129 图	11SK045 平面・断面・土層断面実測図 …	119
第 92 图	19SD020 出土遺物実測図 ……………	89	第 130 图	大道 11 次表土出土遺物実測図① …	120
第 93 图	19SK001遺構・断面・土層断面実測図 …	90	第 131 图	大道 11 次表土出土遺物実測図② …	121
第 94 图	19SK023遺構・断面・土層断面実測図 …	91	第 132 图	大道 24 次調査区遺構平面図 ……	122
第 95 图	19SK025遺構・断面・土層断面実測図 …	91	第 133 图	大道 24 次調査区土層断面実測図 …	122
第 96 图	19SK001・004・011・015・023出土遺物実測図 …	92	第 134 图	大道 24 次調査区土層模式図 ……	123
第 97 图	19SK023・025 出土遺物実測図 ……	93	第 135 图	24SE006・007平面・断面・土層断面実測図 …	124
第 98 图	大道 19 次表採出土遺物実測図 ……	94	第 136 图	24SE006 出土遺物実測図 ……………	124
第 99 图	大道 22 次調査区遺構平面図 ……………	96	第 137 图	24SE007 出土遺物実測図 ……………	125
第 100 图	22SE010 平面・土層断面実測図 ……	97	第 138 图	24SE008 上層遺物出土状態図 ……	126
第 101 图	22SE010 出土遺物実測図① ……………	98	第 139 图	24SE008 最下層遺物出土状態図 ……	127
第 102 图	22SE010 出土遺物実測図② ……………	99	第 140 图	24SE008調査過程及び出土白整理課程 …	128
第 103 图	22SE010 出土遺物実測図③ ……………	100	第 141 图	24SE008 出土遺物実測図① ……………	130
第 104 图	22SE011 平面・土層断面実測図 ……	100	第 142 图	24SE008 出土遺物実測図② ……………	132
第 105 图	22SE016 平面・断面実測図 ……………	101	第 143 图	24SE008 出土遺物実測図③ ……………	133
第 106 图	22SE016 出土遺物実測図① ……………	101	第 144 图	24SE008 出土遺物実測図④ ……………	134
第 107 图	22SE016 出土遺物実測図② ……………	102	第 145 图	24SE008 出土遺物実測図⑤ ……………	135
第 108 图	22SD002・004 土層断面実測図 ……	103	第 146 图	24SE008 最下層出土遺物実測図 ……	136
第 109 图	22SD002 出土遺物実測図 ……………	104	第 147 图	24SE008 出土 白蓋実測図 ……………	138
第 110 图	22SK003平面・断面・土層断面実測図 ……	105	第 148 图	24SE008 出土 白実測図 ……………	139
第 111 图	22SK003出土遺物実測図 ……………	105	第 149 图	24SE008 出土 木器・石器実測図 …	140
第 112 图	22SX005 平面・断面・土層断面実測 …	106	第 150 图	24SE009 平面・断面・土層断面実測図 …	141
第 113 图	22SX001・005 出土遺物実測図 ……	107	第 151 图	24SE009 出土遺物実測図 ……………	142
第 114 图	大道 25 次調査区土層断面実測図 …	108	第 152 图	24SE010平面・断面・遺物出土状態図 …	143

第 153 図	24SE010 出土遺物実測図①	144
第 154 図	24SE010 出土遺物実測図②	145
第 155 図	24SE012 平面・断面・遺物出土状態図	146
第 156 図	24SE012 出土遺物実測図	147
第 157 図	24SD015 出土遺物実測図	148
第 158 図	24SD003・015・016 土層断面実測図	148
第 159 図	24SK024・025 平面・断面実測図	149
第 160 図	遺構年代別色分け図	192
第 161 図	守岡遺跡 19 号住居跡出土土器資料	193

第 162 図	下部遺跡群第 90 次調査 90SX464 出土土器資料	194
第 163 図	大道遺跡群第 7 次調査 7SK002 出土土器資料	194
第 164 図	大道遺跡群第 24 次調査 24SE008 出土土器資料	195
第 165 図	白計測図・杵形態分類図	196
第 166 図	白集成図	197
第 167 図	竪杵集成図	199

表図版

第 1 表	調査地点一覧表	1
第 2 表	大道遺跡群第 9 次調査 出土遺物観察表	153
第 3 表	大道遺跡群第 15 次調査 出土遺物観察表	154
第 4 表	大道遺跡群第 10 次調査 出土遺物観察表	156
第 5 表	大道遺跡群第 14 次調査 出土遺物観察表	157
第 6 表	大道遺跡群第 17 次調査 出土遺物観察表	158

第 7 表	大道遺跡群第 18 次調査 出土遺物観察表	159
第 8 表	大道遺跡群第 16 次調査 出土遺物観察表	160
第 9 表	大道遺跡群第 19 次調査 出土遺物観察表	162
第 10 表	大道遺跡群第 22 次調査 出土遺物観察表	164
第 11 表	大道遺跡群第 25 次調査 出土遺物観察表	166
第 12 表	大道遺跡群第 11 次調査 出土遺物観察表	167
第 13 表	大道遺跡群第 24 次調査 出土遺物観察表	168

写真図版目次

写真図版 1

大道 9 次調査区全景（南方向から）	9SD010 遺物出土状況（南方向から）
9SD010 完掘状況（南方向から）	9SD010 土層断面状況（南方向から）
9SK007 遺物出土状況（東方向から）	9SK009 遺物出土状況（東方向から）
9SD001・002 完掘状況（東方向から）	大道 9 次調査区西壁土層断面状況（東方向から）

写真図版 2

大道 15 次調査区全景（東方向から）	15SE003 土層断面状況（西方向から）
15SE003 完掘状況（北西方向から）	15SE004 遺物出土状況（北方向から）
15SE004 完掘状況（北方向から）	15SE008 完掘状況（西方向から）
15SD012 土層断面状況（西方向から）	15SD020 遺物出土状況（東方向から）

写真図版 3

大道 10 次調査区全景（南方向から）	大道 10 次調査区東壁土層断面状況（西方向から）
10SD006 土層断面状況（南方向から）	10SD010 土層断面状況（北方向から）
10SD010 完掘状況（南方向から）	10SD015 土層断面状況（南西方向から）
10SD015 完掘状況（南西方向から）	10SD020 土層断面状況（南方向から）

写真図版 4

大道 14 次調査区全景（南方向から）	大道 14 次調査区東壁土層断面状況（北東方向から）
14SE005 土層断面状況（北西方向から）	14SE005 井戸枠・井筒検出状況（北西方向から）
14SE005 井戸枠検出作業状況（北西方向から）	14SE005 完掘状況（北方向から）
14SD001 完掘状況（南西方向から）	14SK010 完掘状況（西方向から）

写真図版 5

大道 17 次調査区全景（西方向から）
 大道 17 次調査区東壁土層断面状況（西方向から）
 17SE010 土層断面状況（南東方向から）
 17SE010 井戸枠検出状況（南東方向から）
 17SE010 完掘状況（南東方向から）
 17SD009 土層断面状況（北東方向から）
 17SD009 完掘状況（北東方向から）
 17SK002 完掘状況（西方向から）

写真図版 6

大道 18 次調査区全景（西方向から）
 大道 18 次調査区東壁土層断面状況（西方向から）
 大道 16 次調査区全景（南方向から）
 大道 16 次調査区西壁土層断面状況（東方向から）
 16SD026・SD029 完掘状況（西方向から）
 16SD030 土層断面状況（北方向から）
 16SK028 土層断面状況（西方向から）
 16SK035 完掘状況（東方向から）

写真図版 7

16SK045 遺物出土状況（東方向から）
 16SK050 遺物出土状況（西方向から）
 16SK058 遺物出土状況（西方向から）
 16SX007 完掘状況（東方向から）
 大道 19 次調査区全景（上北東方向）
 大道 19 次調査区南壁土層断面状況（北方向から）
 19SB005・SD002・SD003 位置状況（西方向から）

写真図版 8

19SB005 e 礎石・柱材出土状況（西方向から）
 19SB005 検出状況（西方向から）
 19SB005 完掘状況（西方向から）
 19SD002 完掘状況（西方向から）
 19SD020 完掘状況（北方向から）
 19SD020 土層断面状況（北方向から）
 19SD025 完掘状況（南方向から）
 大道 19 次発掘作業風景（北方向から）

写真図版 9

大道 22 次表土剥ぎ状況（北東方向から）
 22SX005 完掘状況（北方向から）
 22SD002 完掘状況（南西方向から）
 22SK003 遺物出土状況（南方向から）
 22SE010 土層断面状況（南東方向から）
 22SE011 土層断面状況（南東方向から）
 22SE016 完掘状況（南方向から）
 大道 22 次完掘状況全景（北西方向から）

写真図版 10

大道 25 次調査区全景（東方向から）
 25SD001 土層断面状況（北方向から）
 25SD001 検出状況（北方向から）
 25SD001 完掘状況（北方向から）
 25SX005 土層断面状況（東方向から）
 25SX005 完掘状況（東方向から）
 25SX010 完掘状況（南方向から）
 25SX010 完掘状況（北方向から）

写真図版 11

大道 25 次調査区南壁土層断面状況（北方向から）
 大道 25 次発掘作業風景（南方向から）
 大道 11 次調査区全景（北西方向から）
 大道 11 次調査区西壁土層断面状況（東方向から）
 11SK040 検出状況（北方向から）
 11SK040 土層断面状況（東方向から）
 11SK040 完掘状況（北方向から）
 11SK040 完掘状況（南東方向から）

写真図版 12

11SK045 完掘状況（南方向から）
 11SK045 十字ベルト設置状況（南方向から）
 大道 24 次表土剥ぎ状況（南方向から）
 大道 24 次道構検出状況（南東方向から）
 24SE006・SE007 検出状況（東方向から）
 24SE007 土層断面状況（東方向から）
 24SE006 完掘状況（東方向から）
 24SE008・24SK018 検出状況（南方向から）

写真図版 13

24SK018 上層断面状況（北方向から）
 24SK018 完掘状況（北方向から）
 24SE009 木製品出土状況（北方向から）
 24SE010 有機物出土状況（西方向から）
 24SE012 遺物出土状況（東方向から）
 24SK025 上層断面状況（北方向から）
 大道 24 次溝状遺構完掘状況（南西方向から）
 大道 24 次調査区全景空中写真（北方向から）

写真図版 14

8・8・10・9・12・9・13・13・30・10・17
 11・25・17・6・17・7・17・8・17・9
 18・15・17・10・17・12・18・18・18・17
 18・16・20・21・20・22・21・32・25・2
 25・1（内面）・25・1（上から）25・4

写真図版 15

25・3（外面から）・25・3（内面から）
 25・5・25・8・25・11・25・12・25・13（表）
 25・13（裏）・28・2（正面から）・28・2（上から）
 10SD026・10SD028・32・3・32・4・32・5・32・6

写真図版 16

32・7・33・19・35・4・35・6・35・7・36・2
 37・2・37・6・37・3・37・10・37・15・37・17
 37・18・14SD001・37・12・38・30・42・4
 42・6・42・8・47・5・14SX006・47・9
 48・20・48・28

写真図版 17

49・41（表）・49・41（裏）・51・1・51・2
 51・6・51・8・52・28・52・16・54・47
 54・49・54・51・55・59・55・63
 76・6（正面から）・76・6（上から）
 76・7・76・8・76・9・76・10
 77・12（正面から）・77・12（上から）

写真図版 18

77・14・80・23・91・10・92・26
 96・1・19SD002・19SD002
 96・7・96・15・96・16・96・18
 97・21・97・23・97・24・97・28
 101・2（正面から）・101・2（上から）
 101・3

写真図版 19

101・4・101・6・102・11・102・10
 103・16・106・1・106・2・106・3
 106・5・107・8・107・9・111・1
 117・4・120・17・127・8・127・9
 127・10・128・1・131・16・137・6

写真図版 20

141・1・141・4・141・5
 141・9（正面から）・141・9（上から）
 142・18・142・19・143・28・144・29
 144・30・144・31・144・32・145・35
 145・36・146・37・146・38・146・39
 153・2

写真図版 21

153・3・153・7・153・8・153・9
 154・11・154・12・157・2（外面）
 157・2（内面）・156・1
 24SE008 出土遺物集合写真

写真図版 22

17SE010 井戸枠（外側）・17SE010 井戸枠（内側）
 17SE010 井戸枠（橋穴近景）
 149・43（表）・149・43（裏）
 149・44（表）・149・44（裏）
 149・45（表）・149・45（裏）
 149・46（表）・149・46（裏）
 141・7（表）・141・7（裏）
 156・5（表）・156・5（裏）
 147・41（表）・147・41（裏）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

大分市は、平成8年度より、大分駅の高架化・都市街路整備・大分駅南土地区画整理を一体とする大分駅周辺総合整備事業を推進している。このうち、大分駅南土地区画整理事業は、長年の懸案であった大分駅及び駅近傍J線の高架化実施にあわせて、南北市街地の一体化をはかるとともに、商業・業務用地と都市型住宅地の両面を整備することで地方中核市としての大分市の中心としてふさわしい都市拠点の形成を目指したものである。この事業は平成8年3月15日に都市計画決定され、平成9年度から本格的に事業が着手されて、現在は平成26年度の完成予定で事業実施中である。なお、平成18年度後半から工事が開始された大分駅の高架化については、平成20年9月に久大線・豊肥線ホームが完成し、9月13日に仮開業するに至った。また、土地区画整理事業地区内を貫く都市計画道路大道金池線は平成18年度、同金池桜ヶ丘線は平成19年度に部分的に完成し一部供用が開始されおり、都市計画道路庄ノ原佐野線については本事業地区内の部分は平成20年度に完成して供用が開始されている。

本事業着手に先立ち、地区内の埋蔵文化財の所在状況に関して平成8年10月都市計画課駅南対策室より大分市教育委員会文化財室に照会された。事業予定地内における遺跡の所在状況については全く不明であったため、大分市教育委員会では平成8年9月25日から10月11日に現駅周辺総合整備課（平成9年4月に正式設置）事務所予定地の試掘調査を実施し、遺構が存在することを確認した。（＝東大道遺跡：平成12年度から大道遺跡群と改称）この結果を受け、大分市教育委員会では、平成9年度から住宅等の移転により空地となった地点から順次試掘調査を実施して、埋蔵文化財の所在状況を確認し、本調査が必要な箇所の絞り込みを行うことにした。平成9年度から11年度にかけて断続的に実施した試掘調査の結果、事業予定地内には2地区に埋蔵文化財包蔵地が所在することが判明し、それぞれ南金池遺跡と大道遺跡群として周知されることになった。

このうち大道遺跡群は、大分駅南土地区画整理事業地区の中心地域に所在する遺跡であり、東大道、金池南、桜ヶ丘地区に広がる微高地上に点在する遺跡を総称するもので、当初は東西約1.5km、南北約0.8kmの範囲としていたがその後の発掘調査が進展した結果、平成19年4月には大分駅の南側、東西約0.6km、南北約0.7kmに範囲が訂正されている。

本書に収録した大道遺跡群の各調査地点は、第9～11次が平成17年度、第14～19次が平成18年度、第22・24次が平成19年度、第25次が平成20年度に調査されたものであり、いずれも土地区画整理事業地区内における街路ないし街区の整備予定地を対象とした発掘調査である。

第1表 調査地点一覧表

調査次	所在地	調査担当	調査期間	調査面積
第9次調査	大分市金池南1丁目	高島 豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.06.07～2005.06.14	103㎡
第10次調査	大分市金池南1丁目	高島 豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.06.16～2005.08.30	560㎡
第11次調査	大分市金池南1丁目	高島 豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.08.12～2005.10.28	246㎡
第14次調査	大分市金池南1丁目	永松正大・吉田 陽	2006.04.25～2006.06.15	317㎡
第15次調査	大分市金池南1丁目	永松正大・吉田 陽	2006.06.19～2006.08.28	603㎡
第16次調査	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.10.27～2006.12.15	683㎡
第17次調査	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.08.21～2006.09.14	297㎡
第18次調査	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.08.28～2006.09.14	57㎡
第19次調査	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.09.15～2006.11.08	306㎡
第22次調査	大分市金池南1丁目	高島 豊・羽田野達郎・上原翔平	2007.07.02～2007.07.23	573㎡
第24次調査	大分市金池南1丁目	高島 豊・羽田野達郎・上原翔平	2008.02.04～2008.03.11	658㎡
第25次調査	大分市金池南1丁目	中西武尚	2008.05.22～2008.08.04	125㎡

第2節 調査組織

平成17年度（調査）

駅周辺総合整備課

都市計画部次長兼駅周辺総合整備課長 木崎 康雄

参事 首藤 国利

課長補佐 後藤 修

管理係

課長補佐兼管理係長 岩田 祐治

主査 中野志津香 板井敏男 山本雅博

換地工務係

課長補佐兼換地工務係長 森本 順次

主任 村田 潤

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

教育総務部文化財課長 佐藤 功

文化財課 参事 玉永 光洋

管理係 管理係長 安東 時男

主査 平野 勝敏

指導主事 姫野 公徳

主任 桑原 治 栗田 博之 安部 一成

加藤 キヌ

文化財係 課長補佐兼文化財係長 讃岐 和夫

指導主事 後藤 典幸

専門員 塔鼻 光司 坪根 伸也

主任 池田千太郎 塩地 潤一 高島 豊

河野 史郎

技師 中西 武尚

主事 永松 正大 佐藤 道文 五十川雄也

事務員 古川 匠

嘱託 井口あけみ 梅木 信宏 梅田 昭宏

衛藤 亮介 萩 幸二 奥村 義貴

小住 武史 菊谷 史穂 佐藤 孝則

仲矢 咲紀 羽田野達郎 羽田野裕之

服部 真和 姫野 久恵 松尾 聡

松田幸之助 松竹 智之 水町 裕子

古田 陽 宮田 剛 森岡 晃司

山下 美郷 山本 哲也 若林 善満

平成18年度（調査）

駅周辺総合整備課

都市計画部次長兼駅周辺総合整備課長 木崎 康雄

管理係

課長補佐兼管理係長 岩田 祐治

主査 板井 敏男 山本 雅博

主任 加藤真由美

換地工務係

係長 富永 好一

主査 後藤 正一

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

教育総務部文化財課長 佐藤 功（～平成18年9月30日）

玉永 光洋（平成18年10月1日～）

文化財課 参事 玉永 光洋（～平成18年9月30日）

管理係 管理係長 安東 時男

主査 幸 俊昭

指導主事 姫野 公徳 植木 和美

主任 桑原 治 栗田 博之 加藤 キヌ

加藤 真里

文化財係 文化財係長 塔鼻 光司

専門員 坪根 伸也

主任 池田千太郎 塩地 潤一 高島 豊

河野 史郎 中西 武尚

主事 永松 正大 佐藤 道文 五十川雄也

古川 匠

事務員 長 直信

嘱託 井口あけみ 萩 幸二 奥村 義貴

佐藤 孝則 仲矢 咲紀 羽田野達郎

羽田野裕之 姫野 久恵 古田 陽

水町 裕子 宮田 剛 山本 哲也

若林 善満 五十川慎也 神田 智美

山下 桂 山下 朋紀

平成19年度（調査）

駅周辺総合整備課

部参事兼課長 木崎 康雄

管理係 課長補佐兼係長 岩田 祐治

主査 板井 敏男 山本 雅博

主任 加藤真由美

換地工務係

課長補佐兼係長 富永 好一

主査 後藤 正一

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

足立 一馬

（平成19年5月～）

事務局	大分市教育委員会		
教育総務部文化財課長	玉永 光洋		
文化財課 参事	渋谷 建治		
管理係 管理係長	安東 時男		
主査	幸 俊昭	桑原 治	
指導主事	姫野 公徳	植木 和美	
主任	栗田 博之	加藤 キヌ	加悦 真里
文化財係 文化財係長	塔鼻 光司		
専門員	坪根 伸也	池道千太郎	
主任	塩地 潤一	高畠 豊	河野 史郎
	中西 武尚	永松 正大	
主事	佐藤 道文	五十川雄也	古川 匠
	長 直信		
嘱託	井口あけみ	五十川慎也	奥村 義貴
	佐藤 孝剛	羽田野達郎	羽田野裕之
	神田 智美	山下 朋紀	山本 哲也
	若松 善満	上原 翔平	三嶋 桂司

平成20年度(調査)

駅周辺総合整備課

都市計画部参事兼課長 木崎 康雄

管理係

参事兼係長 伊達 俊秀

主査 板井 敏男

主任 加藤真由美

主事 大川内匡史

換地工務係

課長補佐兼係長 富永 好一

主査 後藤 正一

調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

事務局 大分市教育委員会

教育部次長兼文化財課長 玉永 光洋

文化財課 参事 岩田 祐治

管理係 課長補佐兼管理係長 福田 誠一

主査 幸 俊昭

筒井 和信(平成20年12月～)

桑原 治

指導主事 姫野 公徳 植木 和美

主任 宮崎 勲 栗田 博之 加藤 キヌ

竹中 智美

文化財係 課長補佐兼文化財係長 塔鼻 光司

専門員 坪根 伸也 池道千太郎

主任 高畠 豊 河野 史郎 塩地 潤一

永松 正大

主事	佐藤 道文	五十川雄也	古川 匠
	長 直信		
嘱託	井口あけみ	五十川慎也	上原 翔平
	奥村 義貴	佐藤 孝剛	仲町 恵治
	羽田野達郎	羽田野裕之	神田 智美
	三嶋 桂司	山下 朋紀	山本 哲也
	若松 善満	廣瀬 育子	

平成21年度(整理)

都市計画部次長兼駅周辺総合整備課長 中畑 修

管理係

参事兼係長 伊達 俊秀

主査 高屋 修司

主査 加藤真由美

主事 大川内匡史

換地工務係

課長補佐兼係長 富永 好一

主査 後藤 正一

調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

事務局 大分市教育委員会

教育部次長兼文化財課長 玉永 光洋

文化財課 参事 岩田 祐治

課長補佐 塔鼻 光司

管理係 課長補佐兼管理係長 福田 誠一

主幹 後藤 典幸

主査 幸 俊昭(平成21年6月)

筒井 和信 桑原 治

渡辺 政雄(平成21年7月～)

神崎小由美(平成21年7月～)

指導主事 植木 和美

主任 宮崎 勲 麻生 重徳 山上洋二郎

栗田 博之 竹中 智美

加藤 キヌ(平成21年6月)

文化財係 文化財係長 坪根 伸也

専門員 池道千太郎 高畠 豊 河野 史郎

塩地 潤一

主任 永松 正大 佐藤 道文

主事 五十川雄也 長 直信

石川ゆかり

嘱託 井口あけみ 上原 翔平 奥村 義貴

佐藤 孝剛 仲町 恵治 羽田野裕之

神田 智美 廣瀬 育子 三嶋 桂司

山下 朋紀 小野千恵美 木村 藍子

倉増美智代 小島 愛 佐藤 良子

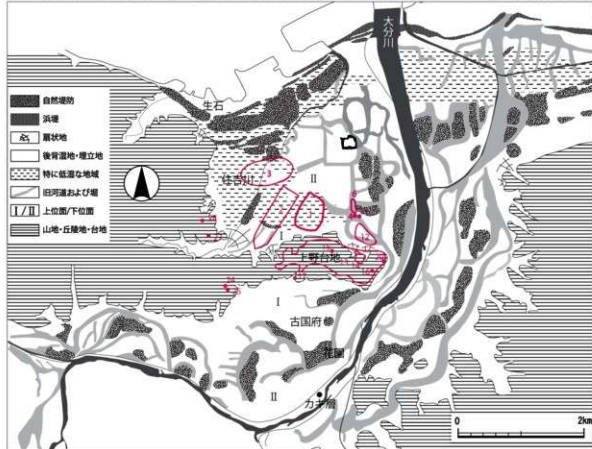
鍋島千恵子 姫野 久恵 松本 晴美

第2章 遺跡の立地と環境

地理的環境

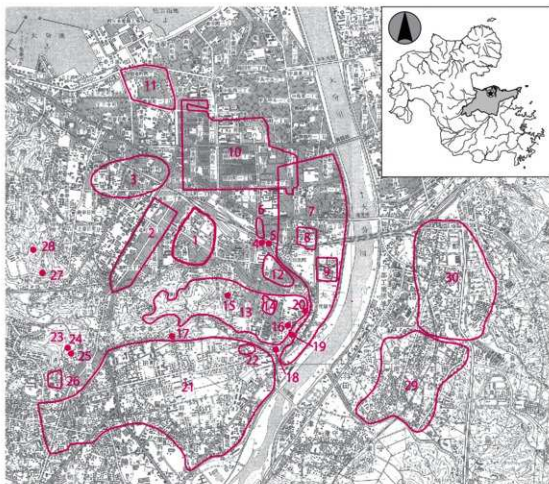
大分平野は九州北東部に位置し、その北側は瀬戸内海西端の別府湾に面する。平野の中央部を大野川が北流し、また平野西部には由布岳の東裾に源を発する大分川が東流のち北流する。この二つの河川はその流域に河岸段丘を発達させ、河口部には三角州を展開する。大分市街地はいずれもこの三角州上に形成されたものである。大分平野はその南を山地で限られており、東側の山地は結晶片岩からなる佐賀関山地、中部は霊山山地が位置する。一方、西側には国東半島の両子山から鶴見岳・由布岳・九重山・阿蘇山へ北東～南西方向に続く第四紀火山列があり、高崎山がこれに含まれる。平野の内部には新生代第三紀中新世から第四紀の地層である豊州層群が広く分布する。これらが、丘陵地・台地・低地を作り、いわゆる大分平野を形成している。そして、低地は重要な生産活動の場を提供している。大分川は大道遺跡群が位置する大分平野の西半分の形成に関わる河川である。大分川下流に広がる低地を総称して大分川デルタと呼ばれる。大分川デルタは微地形からみて、東西に延びる上野台地により二分される。上流側の自然堤防の卓越する地帯と下流側のいわゆる三角州地帯である。河川の浸食は、海水面の上昇時にはその力が低下して堆積作用が増し、後退時には浸食作用が大きくなることによって河岸段丘を形成していった。県内の大野川や大分川のような主要な河川の両側に平坦な段丘が発達しているが、これらも洪積世の間の形成になるものであり、おおくの旧石器時代の遺跡が残されている。

沖積平野で最も注目されるのは、今から約7400年前に最高水位に達した海域に堆積した時の海成層の分布である。この時に海域に堆積した海成層は、通常、沖積層中部粘土・シルト層と呼ばれる。現在の大分市街の中心部が立地している平野は、沖積層が特に厚く発達し、内陸部では鬼界アカホヤ火山灰層を挟む沖積層中部粘土・シルト層が内陸部まで広く分布する。海域は上野台地を越え、さらに内陸側に広がっており、古国府や玉沢地区



第1図 調査地周辺地形分類図(『大分市史』上 一部改変)および遺跡分布図(1/60000)

近くまで至っていた。この層の分布を確認することで、縄文時代の人々の生活環境が明らかとなる。さらに、上流の中部泥層は泥層地の堆積物のように、後背湿地の環境下で堆積したと考えられる。従って海岸線は大分川から約6km遡った地点になる「花園カキ層」が含まれる花園付近で、ここまでは確実に内湾が広がっていたと考えられる。第1図は、調査地周辺の地形分類図である。平野の地形はいわゆる台地と沖積平野に区分され、沖積平野はさらに扇状地、氾濫源、三角洲に分けられる。これらの扇状地、氾濫源、三角洲は、小地形にあたる。氾濫源では、微地形と呼ばれる自然堤防、後背湿地、旧河道などの地形を読みとれる。大分市街地には低い後背湿地が広がっており、大分駅付近には網状流路跡がみられる。多くの低地道跡は、流路と流路に挟まれた部分の紡錘形の平面をもつ微高地に立地している。大分川の氾濫源に分布する、自然堤防、後背湿地、旧河道の変遷が周辺に居住する人々の生活に大きな影響を与えている。自然堤防上に立地している遺跡は、生活環境として周辺



1 大道遺跡群	11 勢家遺跡	21 古国府遺跡群
2 大道条里跡	12 若宮八幡宮遺跡	22 岩屋寺遺跡
3 東田室遺跡	13 上野遺跡群	23 城南遺跡
4 上野町遺跡	14 上野大友館跡(上原館跡)	24 千人塚古墳
5 願徳寺遺跡	15 上野廃寺	25 弘法穴古墳
6 南金池遺跡	16 上野竜王畑遺跡	26 永興遺跡
7 中世大友府内町跡	17 元町石仏	27 古宮古墳
8 大友氏館跡	18 岩屋寺石仏	28 亀甲古墳
9 万寿寺跡	19 伽藍石仏	29 羽田遺跡
10 府内城・城下町跡	20 大臣塚古墳	30 下郡遺跡群

第2図 周辺遺跡位置図 (1/40000)

より乾燥した土地条件と、洪水氾濫という災害から集落を守るためであり、また、水田を行うのに適した後背湿地に隣接するという点も重要な条件であると考えられる。

歴史的環境

前述したが、活発な生産活動の場であり、人々が居住してきた沖積低地では、第四紀末期の環境変動が大きな影響を与え、さまざまな地形環境の変化を引き起こしてきたことが分かっている。

縄文時代

大道遺跡群では、当該期の遺構は未発見であるが、大道遺跡群第7次調査で多数の縄文時代後期の土器がまとまって出土している。今回の報告次数では第10次・第14次・第15次において縄文土器が遺構の下位や包含層から一定量出土している。縄文時代前期から晩期までの土器が断絶することなく出土していることから、周辺では、途絶えることなく人々の営みがあつたと想定される。また、縄文海進最盛期の海岸線の復元図を見ると、遺跡の東側に立地する横尾貝塚とは海岸線がつながっていることになる。今後、当時の海岸線と推定される地点に立地する遺跡を対象とした活動領域の推定も期待される。

周辺では、大道遺跡群が立地する微高地群を形成した大分川の河床において、縄文時代前期の縄文土器、中期の瀬戸内系土器である船元式土器、後期の磨光土器、晩期の刻目突帯文土器が多量に出土しており、周辺低地での遺跡の存在を示唆する。大道遺跡群の南側の上野台地上に位置する上野遺跡群では、腰岳産、姫島産黒曜石を使用した石鏃や金山産チャートを使用した石器が出土している。

弥生時代

上野台北側の低地に位置する若宮八幡宮遺跡では、溝状遺構から下黒式段階に比定される土器が一定量出土している。このことから、弥生時代早期段階には微高地としてすでに安定しており、人々が進出し活動していたとされる。また、大道遺跡群の西側の標高約5.00mに位置する東田室遺跡では、弥生時代前期末の貯蔵穴が多数確認されている。中期に入ると、台地上に加え沖積面上においても集落が確認され始める。若宮八幡宮遺跡では、中期後半～後期初頭には集落が展開していることが確認されている。東田室遺跡では、中期後半には竪穴住居がつけられる。また、板付式系壺、下城式系カメと共に頸部に多重沈線をもつ口縁下端突状カメが出土している。このカメは下城式系カメと西部瀬戸内系カメの特徴を残しており、東部九州と瀬戸内地方の文化交流を示す貴重な資料といえる。また、大道遺跡群の南西側に位置する尼ヶ城遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の集落が確認され、瀬戸内地方との交流を示唆する製塩土器が出土している。大道遺跡群の南側の上野台地上に位置する上野遺跡群では、弥生時代中期に比定される環濠が確認されている。このように、弥生時代には台地上と低地で集落が確認されるようになる。低地に立地する集落では、外來系土器が出土することからも、海上交通、河川交通による広範囲に及ぶ交流の跡がうかがえる。

古墳時代

大道遺跡群では、第20次・第23次において、土器が大量に破壊された幅約2～4mの環濠が確認された。集落の中心は現在の大部分付近と考えられるが、後世の削平によりほとんど失われている。環濠からは、大形の土鉢や多数の製塩土器、瀬戸内系土器といった海岸線付近の集落であったことを示唆する遺物が出土している。環濠からは、猿形土製品も出土しており注目される。また、今回報告する第24次調査地では、当該期の井戸跡が多数検出され、そのうちの1基からクスノキを使ったほぼ完形の臼と半円状の蓋が出土している。当該期は海に携わる人々の拠点集落であったと考えられる。

周辺では、東田室遺跡において、古墳時代前期後半～中期にかけての住居跡が多数確認される。出土遺物に布留式系、山陰系、畿内系など外來系の土器がみられ、古墳時代前期前半段階に比定される船形土製品が出土していることから海上交流が示唆される。さらに、古墳時代に入ると大分平野の首長墓と目される墳丘墓が大分川左岸の台地上に次々と造営される。これらの内、古墳時代前期の拠点集落に対応する墳墓として想定されるのが、

この地域最古の古墳である亀甲山古墳である。円墳もしくは前方後円墳とされており、主体部の箱式石棺からは、豊後で唯一の三角縁神獣鏡が出土している。

若宮八幡宮遺跡では、古墳時代中期末から後期の集落が確認されている。5世紀末から6世紀代にかけての堅穴住居跡が検出され、そのうち3基の内部から多量の未成品を含む石製玉類と素材剥片類、工具類が出土し、玉類製品製作関連遺構と判断されている。さらに、工房である住居内部から近畿地方との交流を示唆する大阪湾岸製塩土器が出土している。上野台地上には5世紀代の造営と考えられる全長50mの前方後円墳である大臣塚古墳が出現する。5世紀後半には永興台地上に推定全長47mの千人塚古墳が築かれる。その南側斜面には、6世紀末から7世紀に比定される大規模な横穴式石室をもつ弘法穴古墳が造営される。これらの古墳は一系列の首長墓であると考えられる。

当時の海岸線もしくは河川周辺での玉類製品製作関連遺構は、従来の外来系土器が出土し交通の要衝であるという低地遺跡の評価と別に、稲作以外の経済的基盤を提供している可能性を示唆する。

古代

大道遺跡群第23次調査では、8世紀末から9世紀前半の官衙跡と推定される掘立柱建物跡が14棟確認されている。また、第4・5次調査地点では当該期の井戸跡や掘立柱建物跡だけでなく、円面硯や奈良三彩陶器壺も出土している。第28次調査では、海とつながっていたと考えられる水路から『厨』と刻まれた土師器が出土している。

周辺では、従来の豊後国府の比定地であった古国府遺跡群にかわり上野台地上に豊後国府および国衙関連施設の存在を推定する考えが有力になってきている。上野庭王堀遺跡では、7世紀後半から10世紀代にかけての、まとまった大規模建物群が確認されている。遺構群が一定方向に沿って規則的に配置されている状況が確認され、これが「国司館」の一部であった可能性が考えられている。隣接地では古代寺院である上野庵寺が位置し、版築により築造された8世紀代から9世紀代に比定される基壇跡と基壇上に築かれた礎石建物跡が確認されている。

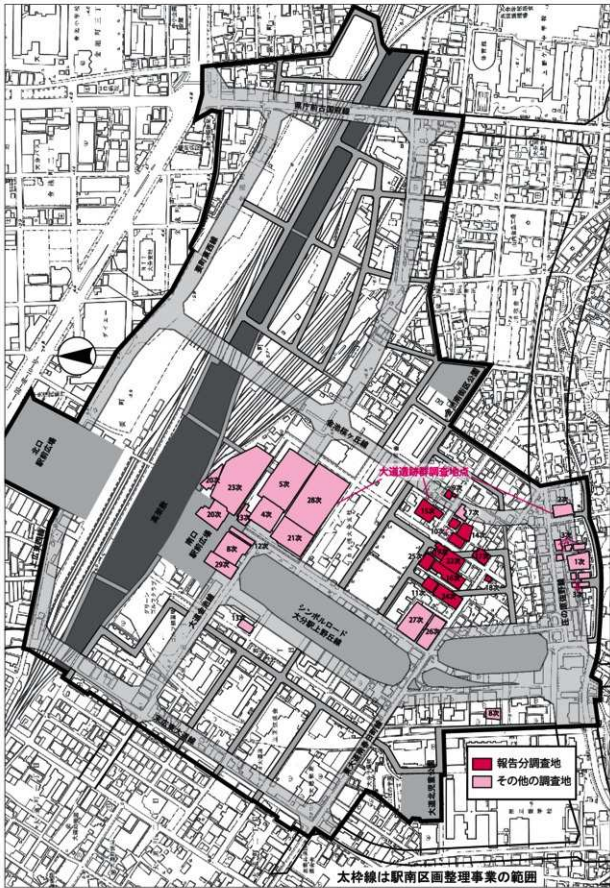
このような状況から、大道遺跡群に展開する当該期の遺構群は、大分川河口部の水上交通に関わる施設、古代堂や郷に関わる施設等が想定され、上野台地にあったと推定される国府との関連が注目される。

同様、上野町遺跡では、8世紀後半から9世紀前半にかけて埋積した自然流路の可能性がある落ち込みが確認され、9世紀中頃から後半の層位からは、大形土鍾79個、小形土鍾339個が集中して出土している。これらの土鍾の存在は海岸線付近であることと漁撈を営む集団が居住していたことを示唆している。さらに、埋土中からは墨書土器や円面硯、焼塩用製塩土器等が出土している。9世紀中頃から後半の遺物群の中にも、円面硯のほか、貿易陶磁器である長沙窯系黄褐彩水柱片が出土している。国府比定地の北側に位置しており、大道遺跡群同様に国府との関連性をもつ水上交通の拠点であった可能性が高い。

大道遺跡群には古墳時代と古代に画期があることが分かりつつある。当調査地は約1700年前には、海とのつながりを持つ大規模な集落が形成され、広範囲に及ぶ交易圏・流通網の中にあっただと考えられる。また、約1200年前には水上交通の要衝であり、国府に関連する建物群が展開し、政治的にも中心地であったと言える。

<参考文献>

- 大分市史編纂委員会編 1987『大分市史』上巻
- 大分市教育委員会『東田室遺跡2 都市計画道路田室町春日線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2005年
- 大分市教育委員会『上野遺跡群 大分市立美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1993年
- 大分市教育委員会『若宮八幡宮遺跡第1次発掘調査 上野ヶ丘中学校の校舎建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 大分県教育委員会『東大道遺跡（A地区）庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 第166』
- 大分県教育委員会『上野町遺跡・願徳寺遺跡 大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書1』2006
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター『東田室遺跡 大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（7）』2008



第3図 調査区位置図 (1/5000)

第3章 調査の成果

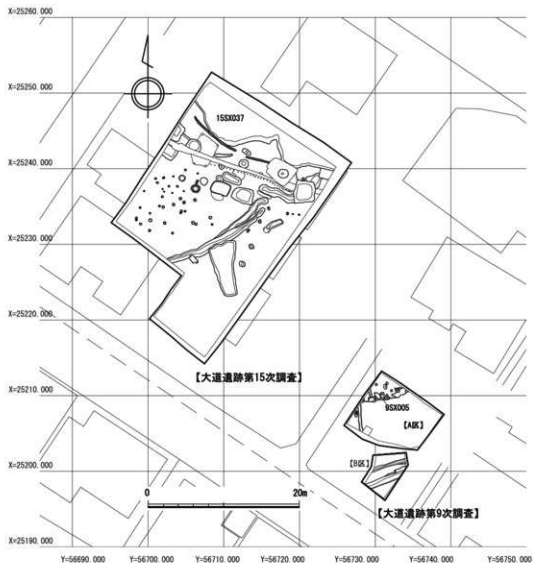
第1節 大道遺跡群第9次・第15次調査

概要

当該地点の周辺では、平成9年度以来、平成15年度までに行われた試掘・確認調査によっても遺構がほとんど検出されておらず、特に第7次調査の東側および北側地点では低湿地が広がっていることが判明していた。

第1節では、第7次調査の北側に位置することから大道遺跡群の東側の地形的な境であると想定される第9次調査および第15次調査について報告するものである。調査区からはいずれも地形的な落ちが確認されており、全体に北東方向へのゆるやかな傾斜をみせる。当該地における微高地のラインを復元する手がかりとなるとともに、第9次調査区が大道遺跡群の東端部であることを示唆するものといえよう。

第15次調査区では地形の落ちに沿うようにして古墳時代の井戸跡を確認した。一方の第9次調査区では、微高地から下る低地部分において古墳時代の廃棄土坑を確認している。集落を形成するにあたって地盤の安定した



第4図 第1節 調査区配置図 (1/500)

微高地を生活空間として選択し、一方で境外となる後背湿地を集落における廃棄空間として利用していた可能性も考えられる。

また第15次SX037は地形の落ちにあたる。遺物包含層からは縄文時代から近世にかけての広い範囲で遺物が出土しており、とくに縄文前期～中期に比定される船元式土器が出土している点は興味深い。微高地を形成する層に縄文土器が混入していることから、微高地の形成時期は縄文時代前期まで遡ると考えられる。出土している縄文土器は比較的良好な状態であることから、河川の影響を受けておらず、突発的に起きた洪水によって、縄文時代の遺構が展開されていた小微高地ごと破壊堆積物にのみ込まれ、検出面である微高地を形成したと推測される。同様の状況は調査区南側に接する第10次および第14次・17次・18次調査区においても確認されており、第15次調査区周辺において当該期の遺構が形成、あるいは展開する可能性を示すものといえる。

以下、調査次ごとに説明する。

大道遺跡群第9次調査

1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目に所在する。区画整理地内の宅地造成に伴い、平成17年6月7日から平成17年6月14日の期間に調査を実施した。調査面積は103㎡である。大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査区を設定する際に、北側をA区、南側をB区とした。調査の結果、溝状遺構、土坑を確認した。

2. 基本土層（第5図）

現地標高は約6.10mを測り、調査区を覆っている約0.40～0.50mの灰色粘質土の表土を除去すると、暗灰褐色土の耕作土層が確認される。耕作土の下位には、鉄分の沈着した層が確認でき、この層を除去すると黄茶褐色粘質土（基盤土層）が現れる。

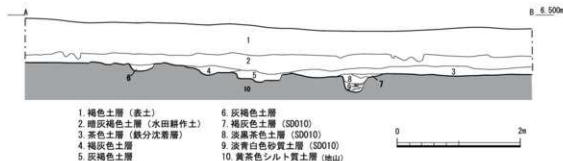
3. 遺構・遺物

溝状遺構（SD）

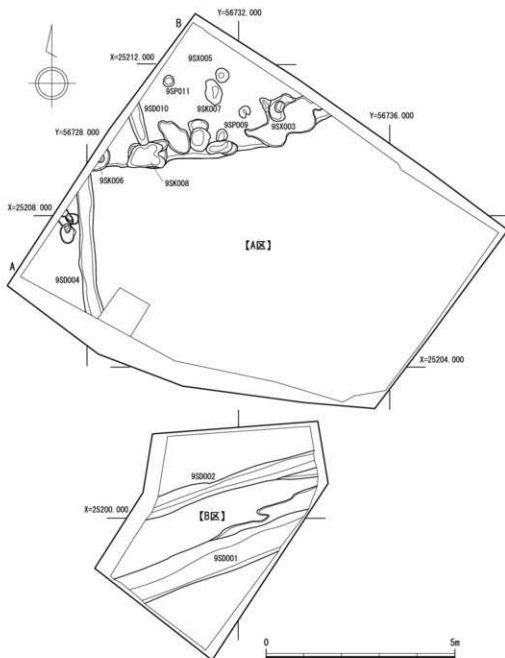
9SD001（第6図）

B区の北西で検出した東西方向の溝状遺構である。現状の検出長は約5.00m、幅約0.90mを測り、断面形状は逆台形を呈す。土層観察からは堆積上からは、流水等の状況は確認できなかった。

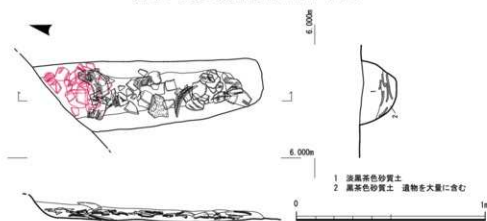
出土遺物（第8図）1は、陶胎染付碗底部。肥前産で、17世紀末から18世紀前半の所産である。2は、見込み蛇ノ目輪剥ぎの磁器皿。肥前産で、17世紀末から18世紀前半の所産である。3は、外面に梵字文を描く青花皿C群の底部。景德鎮窯系。4は、備前焼大甕の口縁部である。



第5図 大道9次調査区西壁土層断面実測図（1/60）

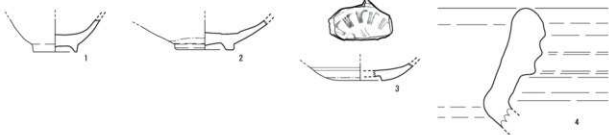


第6図 大道9次調査遺構平面図 (1/100)

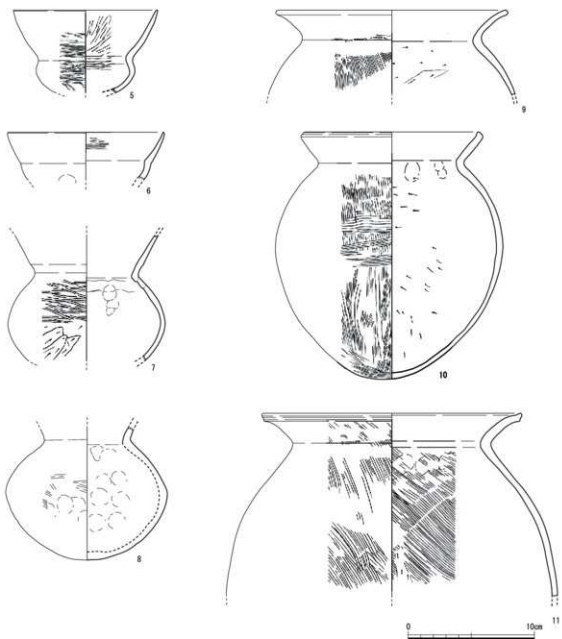


第7図 9SD010平面・断面・土層実測図 (1/20)

9SD001



9SD010



第8図 9SD010 出土遺物実測図① (1/3)

9SD002 (第6図)

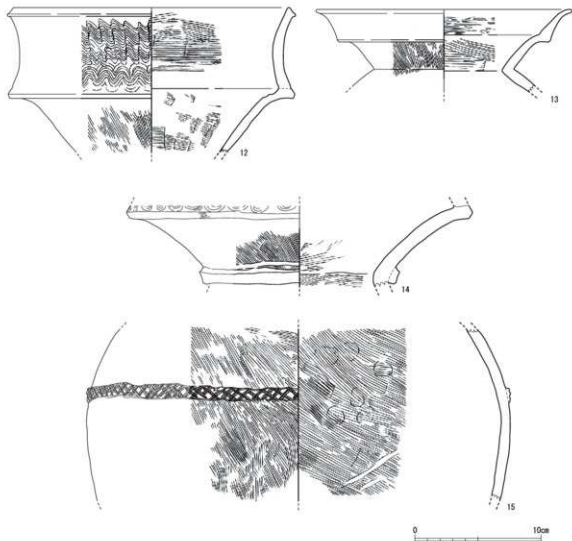
B区で検出した東西方向の溝状遺構である。現状の検出長は約4.50m、幅約0.30～0.60mを測り、断面形状は浅い皿形を呈す。堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。遺物は出土していない。

9SD004 (第6図)

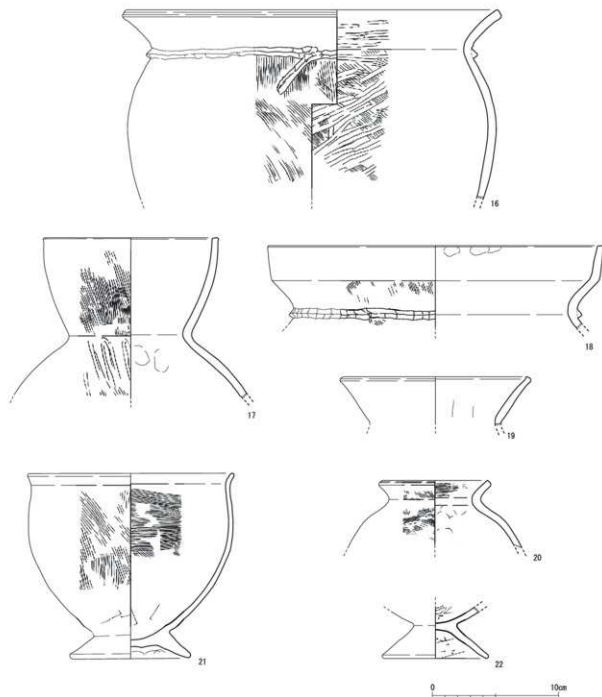
A区の西側隅で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約3.50m、幅約0.50m、深さ約0.15mを測り、断面形状は浅い皿形を呈す。遺構の検出標高は約4.70mを測り、溝の基底部の標高は約4.56mを測る。現状の調査区内で高低差は確認できなかった。堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。遺物は出土していない。

9SD010 (第6・7図)

A区の西側隅で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約1.00m、幅約0.40m、深さ約0.30mを測り、断面形状は逆台形を呈す。遺構の検出標高は約4.60mを測り、溝の基底部の標高は約4.30mを測る。調査区の壁に向かって徐々に深くなる。堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。



第9図 9SD010 出土遺物実測図② (1/3)



第10図 9SK006・007出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第8・9図）5、6、7は、土師器小形丸底壺で、5の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内外面ナデ後ミガキ調整、内面に指頭圧痕が認められ口径約11.4 cmを測る。

6の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約12.2 cmを測る。7の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面はケズリ後ナデ後ミガキ調整で内面に粘土の輪積み痕と指頭圧痕が認められる。

8は、胴部半ばに最大径が来るタイプの長頸壺で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で、内面に指頭圧痕が認められる。

9は、土師器裏口縁部。胎土は、石英・長石・角閃石を含み、色調は内面橙色、外面にぶい橙色を呈し内外面

ハケメ後ナデ調整で口径は約 18.0 cm を測る。

10 は、布留系の土師器甕で、胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内面明黄褐色、外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 13.6 cm、高さ 19.7 cm を測る。内面頸部に指頭圧痕が、外面に煤の付着が認められる。

11 は、在地系の土師器甕口縁部。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内面明褐色、外面にぶい褐色を呈し、内面ナデ、ハケメ、外面ナデハケメ後ナデ調整で口径約 20.5 cm を測る。

12～15 は複合口縁壺の口縁部と胴部。12・14・15 は、安国寺式壺で口縁部の形態や胴部の貼り付け突帯が上部に位置する事から古墳時代前期と考えられる。13 は、畿内系の口縁端部が外反するタイプの壺で古墳時代前期の所産と考えられる。12 の口径は約 21.9 cm、13 は約 20.0 cm を測る。

土坑 (SK)

95K006 (第 6 図)

A 区の西側で検出した土坑である。調査区にかかっているため全体のプランは不明であるが、現状で長軸約 0.70 m、短軸約 0.30 m、深さ約 0.10～0.15 m を測る。遺構の検出標高は、約 4.60 m を測り、基底部までの深さは約 0.15 m を測る。

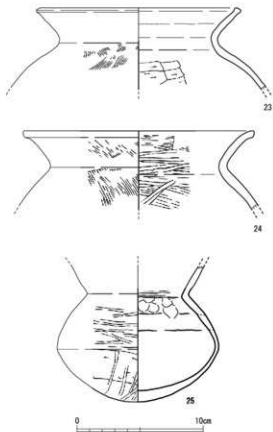
出土遺物 (第 10 図) 16 は、土師器鉢。口縁部は逆「く」の字状を呈し、頸部外面に断面三角形の突帯を巡らすものである。16 の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面褐色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 29.3 cm を測る。

95K007 (第 6 図)

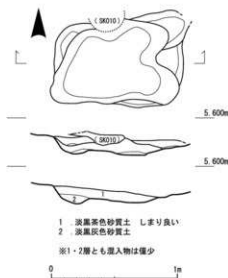
A 区の北側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、長軸約 0.70 m、短軸約 0.50 m を測る不定楕円形のプランを呈す。遺構の検出標高は、約 4.60 m を測る。上面が削平され底部のみ残存していると考えられるが基底部までの深さは約 0.15 m を測る。大量の土器片が出土しており、廃棄土坑と想定される。堆積土は、地山ブロック土を多く含む黄褐色土の単一土層で、一度に埋められた状況が確認できる。

出土遺物 (第 10 図) 17 は、口縁部が内湾するタイプの長頸壺口縁部。胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ミガキ調整で口径約 13.7 cm を測る。

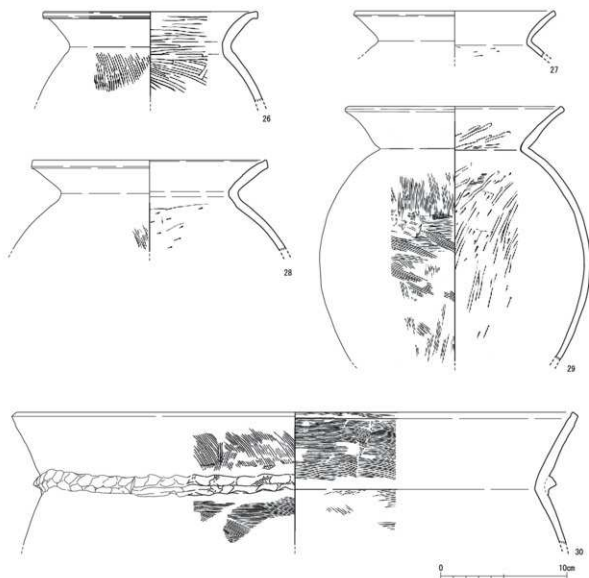
18 は、土師器鉢口縁部。頸部に断面三角形の突帯を巡らす。19 は、壺口縁部で、内外面ナデ調整で、口径約 14.4 cm を測る。



第 11 図 95P009・011 出土遺物実測図 (1/3)



第 12 図 95K008 平面・断面・土層実測図 (1/30)



第13図 95X005 出土遺物実測図 (1/3)

20は、土師器壺で、口縁端部は短く外反する。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径8.3 cmを測る。

21、22は脚台付き鉢。21の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約16.0 cm、器高14.8 cm、底径9.2 cmを測る。22の脚部底径は約8.2 cmを測る。

95K008 (第6・12図)

A区の東側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、長軸約1.00 m、短軸約0.70 mを測る楕円形のプランを呈す。遺構の検出標高は、約5.50 mを測り、基底部までの深さは約0.10～0.13 mを測る。

柱穴 (SP)

9SP011 (第6図)

A区の北側で検出した柱穴である。検出面での平面形状は、直径約0.30mを測り、楕円形のプランを呈す。

出土遺物 (第11図) SP011 出土遺物。23、24は、土師器甕口縁部。23の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色を呈し、内面はナデ、ケズリ、外面はハケメ後ナデ調整で口径約15.5cmを測る。24の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ調整で口径約18.2cmを測る。

25は、小形丸底甕で、口縁部を欠失している。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ナデ後ミガキ調整である。内面頸部下に指頭圧痕が認められる。

不明遺構 (SX)

9SX005 (第6図)

A区の北側で確認された地形的な落ちである。南側から北側に向かって落ちており、土器片が多数出土している。

出土遺物 (第13図) 26～29は土師器甕。26の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ミガキ風ナデ、外面ナデ、ハケメ調整で口径約16.8cmを測る。27の口径は約15.6cmを測る。28の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内面明褐色、外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、ケズリ外面ハケメ後ナデ調整で口径約18.4cmを測る。

29の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ケズリ後ハケメ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約16.8cmを測る。

30は、土師器鉢口縁部。頸部に貼り付け突帯を1条巡らす。胎土は石英・長石・赤色粒子を含み、色調は内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約44.0cmを測る。SD010、SK006・007、SP009・011、SX005からの出土遺物は、どの遺構とも接合関係が見られることなどをみると、同じ遺構と考えられるものである。遺物の時期は古墳時代前期と考えられる。

小結

調査区南東に向かい、ゆるやかな傾斜がみてとれ、自然地形の落ち部分にあたり、地形的な落ちを利用した土器の廃棄場所であったと想定される。また、明確な遺構が検出されないことから、本調査区は遺跡内の東端部と想定される。

大道遺跡群第15次調査

1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内街路整備事業に伴い、平成18年6月19日から平成18年8月28日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は603㎡を測り、大道遺跡群内の南に位置している。調査の結果、古墳時代から近世にかけての遺構群を確認している。

2. 基本土層

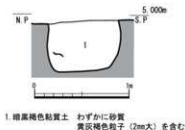
現地地表約0.60mで層厚約0.20mの旧水田耕作土が検出され、その直下の黄褐色細砂～シルト層上面で遺構が検出される。調査区の北部、概ね15SD007（近世溝）以北では地形が北側に向かって大きく落ち込んでおり、調査区北端では低湿地に移行している。北端部では水田耕作土層下部まで地表下約1.70mを測る。

3. 遺構・遺物

井戸跡（SE）

15SE003（第14図）

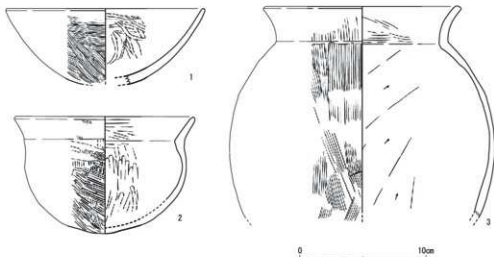
調査区西に位置する井戸跡である。平面円形、断面は円筒形を呈し長径約0.80m、短径約0.76m、深さ約0.50mを測る。素掘りと考えられる。上面が削平をうけていたため土層は暗黒褐色粘質土のみが確認でき、基底部からは湧水が認められた。埋土からは古式土師器などが出土しており、一部の土器は隣接する15SE004と接合することから、古墳時代以降の廃絶時期が考えられる。



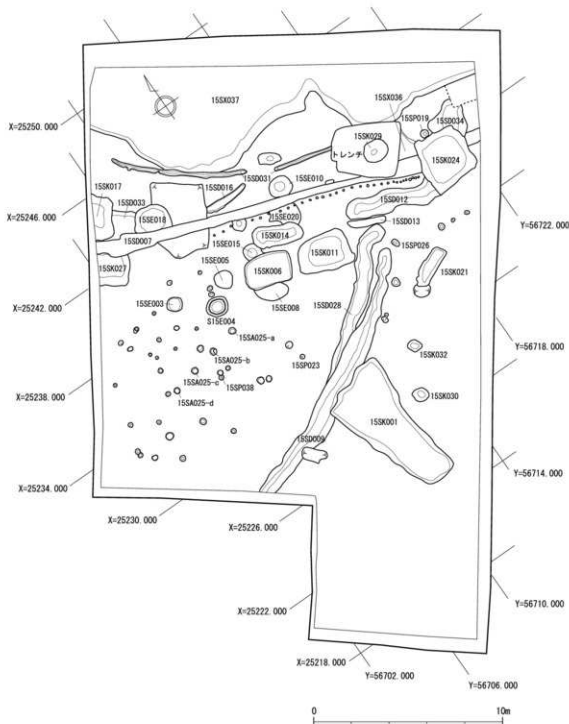
出土遺物（第15図） 1は土師器碗で、胎土は長石・角閃石・白色粒子・雲母を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ミガキ、外面ハケメ調整で口径約15.6cmを測る。

第14図 15SE003 土層断面
実測図（1/40）

2は小形丸底甕で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ後丁寧ナデ調整で口径約14.1cm、器高9.3cmを測る。3は土師器甕で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ調整で口径約15.6cmを測る。



第15図 15SE003 出土遺物実測図（1/3）



第16図 大道15次調査遺構平面図 (1/200)

15SE004 (第16図)

調査区中央よりやや西に位置する。平面は楕円形を呈しており、長径約1.1 m、短径約1.02 mを測る。断面形状は上面に浅い丸底、下面に筒状を呈するもので、井筒抜き取り後に埋め戻した可能性も考えられる。埋土からは大量の土器片が廃棄されている状況を確認しており、出土遺物から古墳時代に帰属する遺構と推測される。また北西に隣接する15SE003、北に隣接する15SE005の出土遺物との接合関係も見られており、これらの井戸跡はほぼ同時期に廃絶されたと考えられる。

出土遺物 (第17・18図) 4、5は、土師器碗。4は、口縁部端部が尖るタイプ。胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約12.2 cmを測る。

5の胎土は石英・角閃石・赤色粒子・雲母を含み、色調は内面橙色、外面にぶい褐色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ナデ後ミガキ調整で口径約17.4 cm、器高5.7 cmを測る。外面に指頭圧痕、底部に黒斑が認められる。

6は土師器鉢で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面赤褐色～明赤褐色、外面赤褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整で口径約18.5 cm、器高10.1 cmを測る。外面底部に黒斑、内外面に指頭圧痕が認められる。

7は小形丸底甕で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約13.4 cm、器高6.3 cmを測る。内面に黒斑が認められる。

8は台付き鉢で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子・雲母を含み、色調は内面明褐色、外面にぶい赤褐色を呈し、内面ハケメ後ミガキ風ナデ、外面ハケメ調整で口径約18.0 cm、器高10.5 + α cmを測る。外面に煤付着が認められる。

9は小形丸底甕で、胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面口縁部ハケメ内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約13.3 cm、器高11.3 cmを測る。外面に煤付着が認められる。

10は複合口縁甕で、口縁部が逆「く」の字形に開く畿内5様式の甕。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で口径20.0 cmを測る。

11～19は土師器甕。11の胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色～赤褐色、外面赤褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約22.0 cmを測る。外面に土器焼成のハツレ痕が認められる。

12はケズリを意識した布留系の甕で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色～赤褐色、外面赤褐色を呈し、内面ハケメ後ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約15.0 cm、器高22.7 cmを測る。外面に煤付着が認められる。煤は、炭化物の炭素14年代測定に使用し、1800 ± 30、校正年代AD130-AD260に82.7%の確率密度との測定値が出ている。

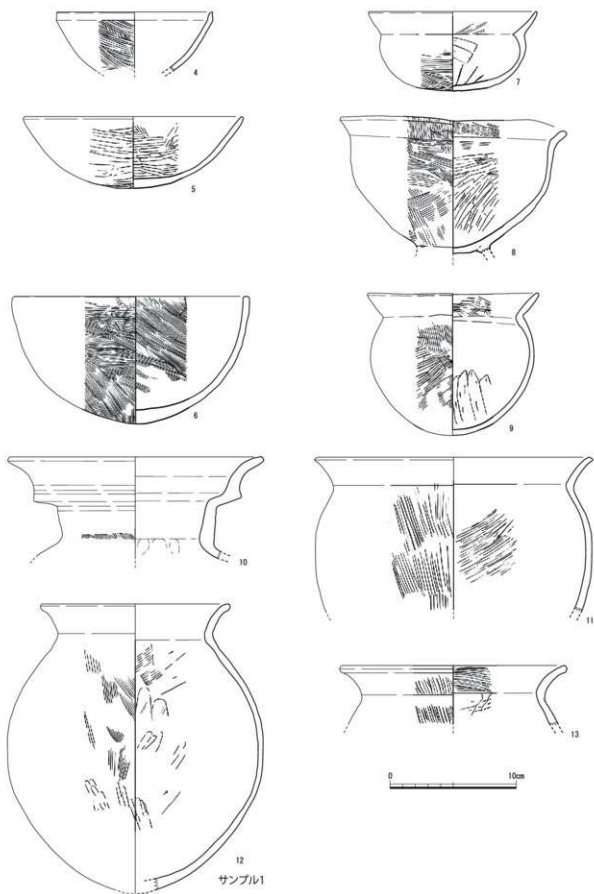
13の胎土は長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面褐色、外面黒褐色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口縁部外面に煤付着が認められる。口径約18.0 cmを測る。

14の胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径は約16.6 cmを測る。

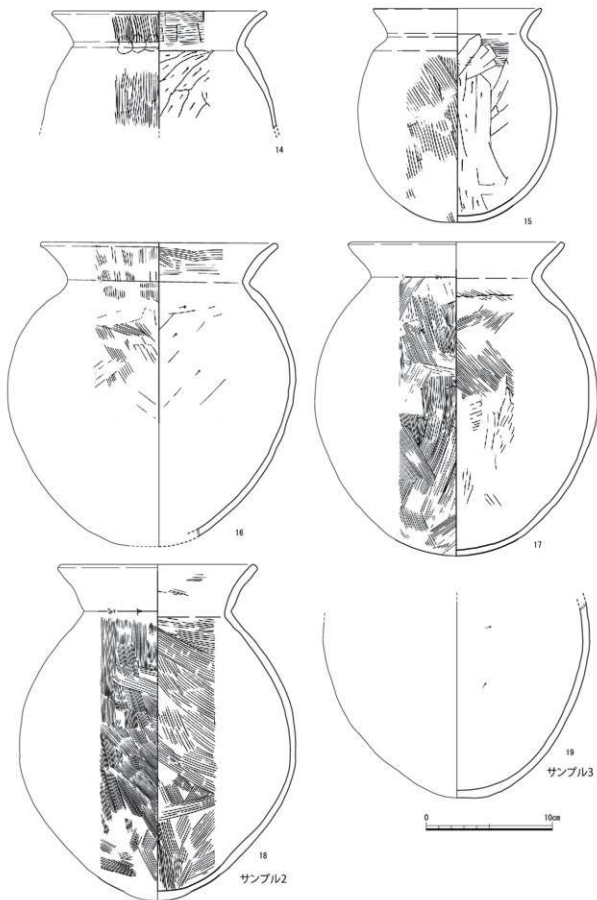
15は小形の甕で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内面ハケメ後ケズリ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約13.2 cm、器高17.0 cmを測る。

16は布留系の甕を意識したもので、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面明赤褐色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口縁部外面全体に煤付着が認められる。口径18.8 cm、器高約24.1 + α cmを測る。

17は在地系の甕で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内外面明赤褐色を呈し、内面ハケメ後ケズリ、外面ハケメ調整で、口径約17.1 cm、器高24.9 cmを測る。外面に一部黒斑が認められる。



第17図 15SE004 出土遺物実測図① (1/3)



第18図 15SE004 出土遺物実測図② (1/3)

18 は在地形の裏で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面ハケメ調整で口縁部外面に煤付着が認められる。口径約 15.0 cm、高さ 26.7 cm を測る。外面に煤の付着が認められる。煤は、炭化物の炭素 14 年代測定に使用し、 1880 ± 30 、較正年代 AD65-AD225 に 95.4% の確率密度との測定値が出ている。

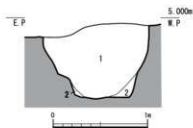
19 は在地形裏底部。外面に煤付着が認められる。煤は、炭化物の炭素 14 年代測定に使用し、 1940 ± 30 、較正年代 AD1-AD130 に 94.6% の確率密度との測定値が出ている。

15SE005 (第 19 図)

調査区中央よりやや西に位置し、15SE004 に隣接する井戸跡である。平面楕円形を呈し、長径約 1.20 m、短径約 1.00 m を測る。また断面は 2 段にわたって掘り下がり、深さは約 0.80 m を測る。埋土は暗黒褐色粘質土が大半を占め、遺物もこの層からの出土が確認された。遺物は古墳時代に比定されるものが中心であり、その他種子が数点出土している。また出土した土器の一部は 15SE004 の出土遺物との接合関係がみられることから、15SE003・004・005 がほぼ同時期において廃絶された可能性が考えられる。

出土遺物 (第 20 図) 20 は、小形台付き鉢。胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面暗褐色、外面明褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ナデ調整で、口径 12.4 cm、器高約 $7.8 + \alpha$ を測る。

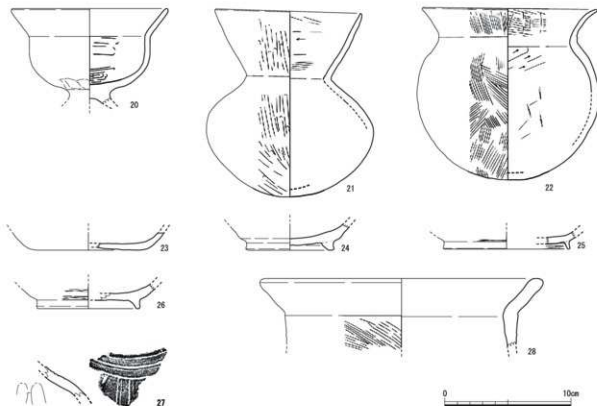
21 は小形の長頸壺。胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面明褐色～黄褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ナ



1. 暗黒褐色粘質土 わずかに砂質
黄灰褐色砂子 (2mm 大) を含む
2. 黄灰褐色砂質土 黄灰褐色砂質土と
暗黒褐色粘質土の混土層

第 19 図 15SE005 土層断面

実測図 (1/40)



第 20 図 15SE005・008・015・018 出土遺物実測図 (1/3)

デ後ミガキ調整で、口径 13.5 cm、器高約 14.9 cm を測る。内外面に黒斑が認められる。

22 は小形の甕。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄橙色、外面赤褐色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ調整で、口径 13.6 cm、器高約 13.7 cm を測る。内外面に指頭圧痕と外面に煤の付着が認められる。

15SE005 からは、桃の種子 1 点、イチイ櫂の実 1 点、瓜類の種子 5 点の種子類が検出されている。また、第 15 図 1、第 18 図 18 のように 15SE003 と 004 の出土遺物に接合関係がみられ、第 17 図 13 は、15SE005 と接合関係が見られる事からほぼ同時期に廃棄された事が認められる。遺物は、布留 1 式の時期と考えられるもので古墳時代前期前期葉に比定される。

15SE008 (第 16 図)

調査区中央に位置し、北側部分を 15SK006 に切られる井戸跡である。平面楕円形、断面浅丸底状を呈するが、削平を大きくうけているため規模は不明である。土層は 3 層に分層され、観察から井戸使用時の淡灰褐色砂質土(3 層)と埋め戻し時の黒褐色粘質土(2 層)および黒褐色砂質土(1 層)の堆積状況を確認した。出土遺物から古代に帰属する遺構と考えられる。

出土遺物 (第 20 図) 23 ～ 25。23 は土師器坏底部。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、内面はナデ、外面はヘラ切り後ナデ調整で、底径 10 cm を測る。

24、25、26 は高台付きの坏底部。いずれも古代で 8 世紀末～9 世紀初頭に比定されるものである。15SE008 から桃の実 5 点が出土している。

15SE015 (第 16 図)

調査区中央に位置し、15SK006・15SK014 に切られる井戸跡である。平面円形、断面はやや歪な逆台形を呈し、現存する長径 0.90 m、短径 0.70 m、深さは約 0.60 m を測る。埋土からは井筒や木枠が確認されず、素掘りの井戸である可能性が高い。埋土から混ざり込みと思われる弥生土器の壺が確認された。出土した遺物は古代に比定されるものが中心となっており、井戸の廃絶時期に伴い、廃棄されたものと考えられる。

出土遺物 (第 20 図) 27 は、弥生土器で下城式壺の頸部である。時期としては、弥生時代中期に比定される。

15SE018 (第 16 図)

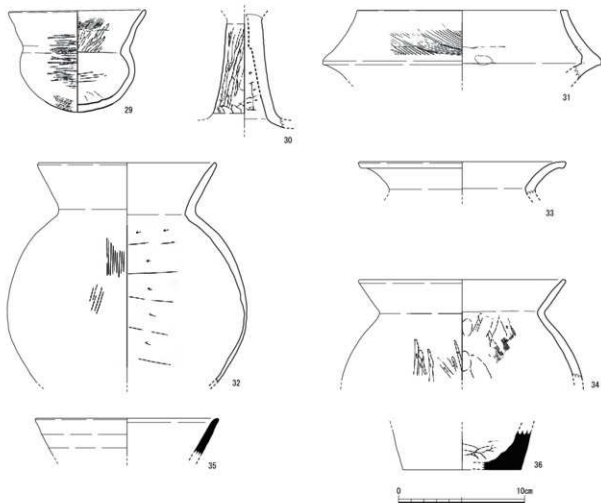
調査区北西に位置し、15SD007・15SD033 を切る井戸跡である。平面楕円形、断面は逆台形状を呈しており、長径約 2.00 m、短径約 1.80 m を測る。土層堆積からは灰褐色粘質土と淡灰褐色砂質土の 2 層を確認し、基底部分からの湧水が認められる。埋土からは企救型甕片が出土しており、8 世紀から 9 世紀代に帰属する遺構と考えられる。

出土遺物 (第 20 図) 28 は土師器甕で、企救型甕の口縁部。胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面の口縁部はナデ、胴部はハケメ調整で口径約 22.4 cm を測る。時期としては 8 世紀末～9 世紀初頭に比定される。

15SE020 (第 16 図)

調査区中央よりやや北に位置する井戸跡である。遺構は 15SD007・15SK014 に切られるため全容は不明であるが、現存長は東西約 1.70 m、南北約 0.80 m を測る不整形平面プランを呈す。埋土からは古式土師器の他に須恵器片が出土しており、遺構の埋没時期が古代であることが推測される。

出土遺物 (第 21 図) 29 ～ 34 は土師器。29 は小形丸底甕で、口径 10.7 cm、高さ 8.1 cm を測る。



第21図 155E020 出土遺物実測図 (1/3)

30は、高坏脚部で内面ケズリ後ナデ、外面ケズリ後ミガキ調整である。

31は、複合口縁壺の口縁部で、口径約16.6cmを測る。32は、甕で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面灰黄色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約14cm、高さ17.5 + a cmで、外面に煤付着が認められる。

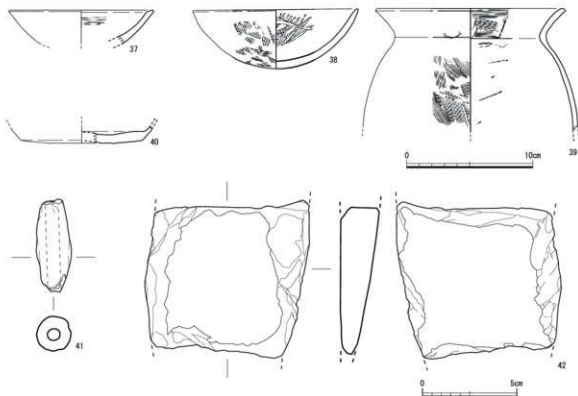
33は、甕口縁部で口径約16.4cmを測る。34も甕口縁部で口径約16.2cmを測る。

35は須恵器坏口縁部。口径約14.4cmを測る。36は、須恵器壺底部。回転ナデ調整後指頭圧痕が認められる。底径約9.4cmを測る。古墳時代前期前葉の遺物も見られるが、須恵器の坏と壺の存在を考えると、8世紀末～9世紀初頭の時期に比定される。

溝状遺構 (SD)

155D007 (第16図)

調査区中央からやや北に位置する溝跡である。東西方向へと延びており幅約0.50mを測るが、区外へと続くため全長は不明である。溝の南側には杭跡が一定の間隔で多数配置しており、近世の水路であったと想定できる。また、遺構からは縄文晩期に比定される打製石斧が出土しているがおそらくは流れ込みによる混入品であると考え



第22図 15SD012・013・028 出土遺物実測図 (1/3) 42は (1/2)

えられる。

出土遺物（第22図）42は凝灰岩製の打製石斧で、幅8.1cm、長さ7.6cm、重量189.0gを量る。上部と下部を欠損しているが、左右に打ち欠いた調整痕が認められる。縄文時代晩期に良く見られるもので、土掘りの道具と考えられている石器である。

15SD012（第16図）

調査区の東に位置し、北西方向へと延びる溝跡である。断面形状は浅い逆台形を呈しており、深さは約0.10mを測る。また遺構は北西部で15SK024に切られており、現存長は約4.80m、幅約0.90mである。土層は淡黒灰褐色砂質土の単一層であった。埋土から水性堆積は認められず、出土遺物から古代以降に埋没したものと考えられる。

出土遺物（第22図）37は土師器碗の口縁部。40はSD012出土の土師器杯の底部で、底径は約9.6cmを測る。時期は古代に比定される。

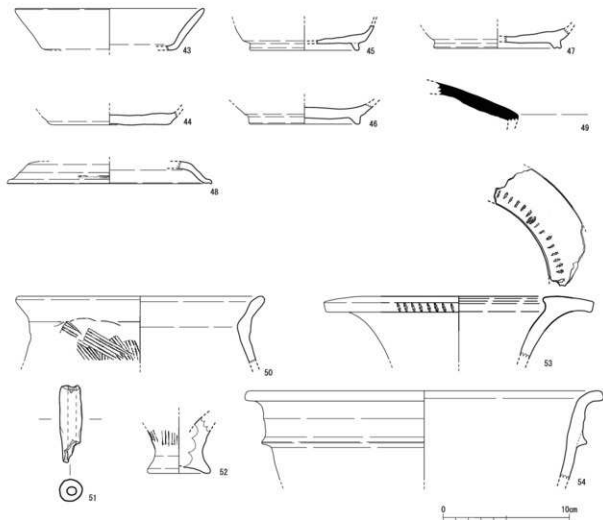
15SD013（第16図）

調査区東に位置し、北西から南東方向へと延びる溝跡である。溝状遺構としての残部は僅少であり、遺物の出土時期から遺構が古墳時代以降に埋没した可能性が考えられるといえる程度である。

出土遺物（第22図）38は土師器碗、39は土師器甕。いずれも古墳時代前期前葉に比定されるものである。

15SD028（第16図）

調査区中央からやや東に位置し、南西方向へと延びる溝跡である。遺構は15SD009に切られているため全容



第23図 15SX036 出土遺物実測図 (1/3)

は不明であり、現存長は約 6.70 m を測る。埋土からは土鍾 1 点が出土しているが、これで遺構の時期を比定することは出来ない。

出土遺物（第22図） 41 は、SDO28 出土の土師器土鍾。幅 1.7 cm、長さ $4.9 + \alpha$ cm、孔径 0.9 cm を測り重量 14.7 g を量る。土鍾のみの出土などで時期比定は困難である。

不明遺構（SX）

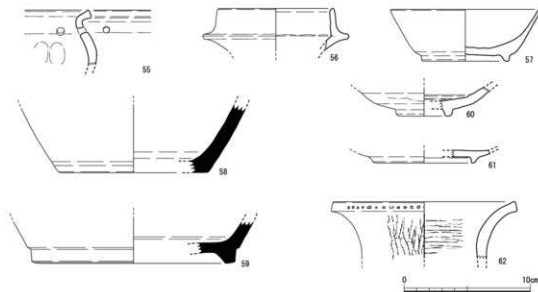
15SX036（第16図）

調査区東に位置する不明遺構である。遺構の大部分を 15SX037・15SD007・15SK024 に切られているために規模・性格を判断するのは困難な状況であった。出土遺物からは 8 世紀から 9 世紀代に帰属するものと考えられる。

出土土器（第23図） 43～54。43～50 は、古代の遺物である。43 は、土師器環口縁部で口径約 15 cm を測る。44 は、土師器環底部で底径約 9.7 cm を測る。45～47 は、高台付き杯の底部で底径約 8.6～9.8 cm を測る。

48 は、土師器環蓋で口径約 16.2 cm を測る。49 は須恵器長恵壺の胴部。50 は企救型甕口縁部で口径約 19.6 cm を測る。時期としては 8 世紀末～9 世紀初頭に比定される。

51 は土師器土鍾で一部欠損している。幅 1.8 cm、長さ 6.1 cm、孔径 0.75 cm を測り、重量 16.5 g を量る。



第24図 15SX037・表土出土遺物実測図 (1/3)

52は弥生後期に比定される甕底部で、底径約4.8cmを測る。53は弥生土器壺口縁部。鋤先口縁部を呈し口径約21.4cmを測る。

54は口縁下部に断面三角形の貼り付け突帯を巡らす甕。時期としては弥生時代後期初頭に比定される。弥生土器は流れ込みによるもので、古代の遺構と考えられる。

15SX037 (第16図)

調査区北東で確認されているが、区外へと延びるために全容は不明である。不整形な平面プランおよび浅い段状の断面形状を呈す。現存長は調査区東壁から西壁までの約20.50mに及び、南北長は約5.40mを測る。遺物包含層からは縄文土器から近世陶磁器まで出土しているが、とくに古墳時代から古代にかけての遺物を中心に出土している。

出土遺物 (第24図) 55～62。55は、弥生土器壺口縁部。口縁部下に穿孔が施されている。

56は、弥生土器複合口縁部で、口径は、約9.0cmを測る。57は、土師器杯。

58、59は、須恵器壺底部。60は唐津焼皿底部。61は、白磁皿底部。出土遺物の時期は弥生時代～17世紀初頭にまたがっており時期比定は困難である。

62は表土出土の壺口縁部。口縁端部に竹管による文様を巡らす。また、第15次遺跡の包含層から縄文土器中期に比定される船元式土器が検出されていることは注目できる。

縄文土器

第15次遺跡では、縄文時代中期～後期の遺物が出土している。1は、里木式と考えられる深鉢口縁部。

2は、口縁部外側に肥厚させそれに平行の沈線、同心円状の沈線をめぐらした津雲上層式と考えられる緑帯文土器の口縁部。

3の外面は爪形文が全面に施されており、縄文時代中期から後期にかけての船元式の浅鉢と考えられるものである。

4は口縁部が外反する深鉢で内外面とも貝殻条痕文が施されている。5は、深鉢口縁部で内面の調整は貝殻条

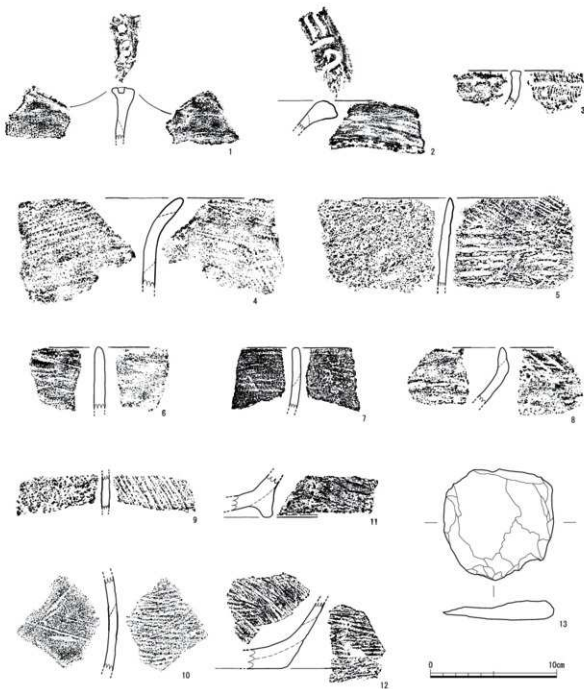
痕文後ナデ、外面は貝殻条痕文である。

6は、深鉢口縁部で内外面の調整は貝殻条痕文である。7は、口縁部からやや丸みを帯びた形の深鉢口縁部。内外面の調整は貝殻条痕文である。8は、浅鉢口縁部で、内外面貝殻条痕後ナデ調整で、口縁部外面に斜めの沈線が認められる。

9、10は、無紋土器の胴部破片。11、12は、縄文土器深鉢の底部。

12は、小池原上層式の深鉢の底部で内外面貝殻条痕調整である。縄文時代後期でも古い様相を示している。

13は、一部欠損が認められるが凝灰岩製の打製石斧と考えられるものである。重さ150gを量る。



第25図 大道15次出土縄文土器実測図 (1/3)

小結

本調査では古墳時代および古代を中心とする井戸跡8基、溝状遺構9基、土坑11基、ピット4基、柵列遺構1列、性格不明遺構2基を確認した。遺構出土遺物は古墳時代前期前葉と古代の2時期がみられる。

古墳時代初頭に比定される井戸跡15SE003・004・005は隣接しほぼ同程度の規模を呈するもので、また出土遺物は互いに接合関係を持っていることから、井戸の機能および廃絶がほぼ同時期に成された可能性が考えられる。

古代になると調査区内に新たな井戸（15SE008・018・020）が作られ、それに伴い水路となる溝（15SD009・028）が形成される。この時点で古墳時代の井戸・土坑は大半が埋没しているが、井戸底には廃除けとなる種子を入れて廃絶しており、古墳時代の遺構に近接して造成された遺構群からは当該地を引き続き水利の空間として利用した痕跡が窺える。この時期の井戸跡からも基底部から廃絶時の廃除けと考えられる桃の実5点が出土した。

近世に比定される遺構では東西方向へと延びる溝（15SD007）が存在する。南側には木杭跡が多数見られ、水路として機能したものであろう。中世に比定される遺構は確認できなかったが、調査区に古墳時代から水利に伴う空間が存在し、以後一部を踏襲しつつ継続して利用された状況が明らかとなった。さらに包含層から縄文土器が検出されている。縄文時代中期～後期に比定される土器が出土している。そのなかで注目されるのは、津雲上層式と考えられる緑帯文土器の口縁部、里木式と考えられる深鉢口縁部、船元式浅鉢など縄文時代中期に比定できる遺物である。瀬戸内海の西岸にあたる当遺跡も近畿、四国、中国地方に分布する船元式文化圏の影響を受けていた事を窺わせる事例である。横尾遺跡でも船元式土器が出土しており、海岸線にそった交易の存在も示唆できる事は、注目できることである。また、出土遺物の中に弥生時代後期の遺物が認められるが、遺構の検出が見られないことから、周辺にこの時期の遺構が展開する可能性が考えられる。

第2節 大道遺跡群第10次・第14次・第17次・第18次調査

当該地点の周辺では、平成9年度以来、平成15年度までに行われた試掘・確認調査によっても遺構がほとんど検出されておらず、特に第7次調査の東側および北側の地点では低湿地が広がっていることが判明していた。第10次A区の東側に隣接する第7次調査では、調査区を東西に走る溝状遺構（7SD001）と溝下層から100個体を超える古墳時代の遺物が一括廃棄された土坑（7SK002）が検出されている。

第2節では、大道遺跡群の東側の地形的な境であると考えられる、第10次・第14次・第17次・第18次の4地点の説明を行う。この4地点ではそれぞれの地点で地形的な落ちもしくは溝状遺構が検出されており、周辺の地形復元のヒントになる可能性が考えられる。

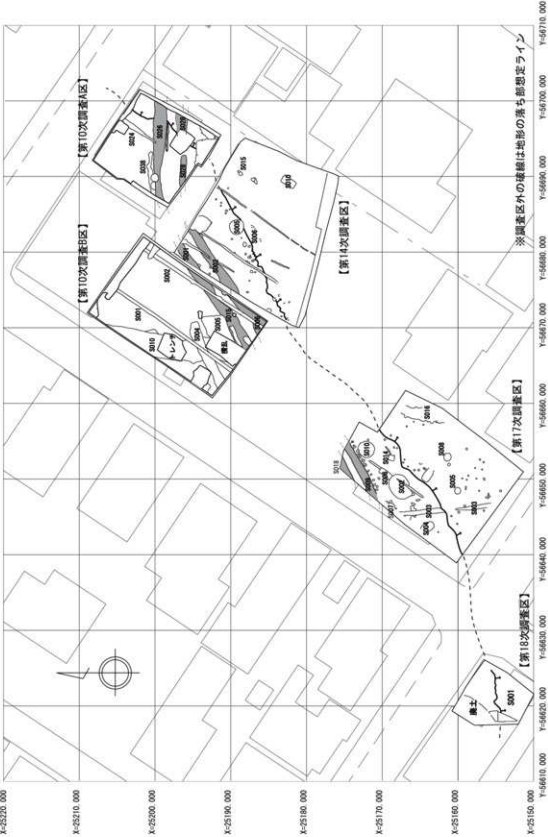
第26図は調査区配置図であるが、示している線は、各次数で確認された落ちもしくは溝状遺構をつないだ地形想定線である。この線から東方向へ向かい緩やかに下っていくと想定される。

地形的な落ちにほぼ沿うように、溝①・溝②が確認された。あくまでも復元であるが、同一の溝である可能性が高い。また、出土遺物に関しては調査区ごとに時期が違っている。弥生時代から近世まで幅広い時代の遺物が出土している。第10次A区10SD026の土層断面の観察により、上層は16世紀代、下層は弥生時代後期中葉と分層できた。このことから、同地点に踏襲して溝が形成されていた可能性も指摘できる。また、地形的にも緩やかに下る先端付近となることから、水利的な性格を持つ溝であった可能性も指摘できる。

また、第7次・第10次・第14次調査においては、遺構の下層および包含層から一定量の縄文土器が出土している。これまでは、第7次調査において、縄文時代後期～晩期の遺物が出土していたが、今回の調査では、前期～弥生早期の遺物が出土している。このことから、当調査区周辺では、縄文時代の遺物が断絶することなく出土することが確認された。

微高地を形成する層に縄文土器が混入していることから、微高地の形成時期は縄文時代前期まで遡ることとなる。出土している縄文土器は比較的良好な状態であることから、河川の影響を受けておらず、突発的に起きた洪水によって、縄文時代の遺構が展開されていた小微高地ごと破堤堆積物にのみ込まれ、検出面である微高地を形成したと推測される。

以下、調査次数ごとに述べる。



第26図 第2節 調査区配置図 (1/500)

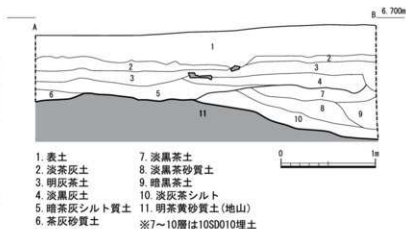
大道遺跡群第10次調査

1. 調査の概要 (第26図)

調査地は大分市金池南1丁目に所在する。区画整理地内の宅地造成に伴い、平成17年6月16日から平成17年8月30日の期間に調査を実施した。調査対象地区のうち北東部をA区、南西部をB区として調査を行った。調査面積は約560㎡である。大道遺跡群内の東端部分に位置する。調査区東側の隣接地に第7次調査地があり、第7次調査地より東側および北側では低湿地が広がっていることが確認されている。調査の結果、溝状遺構、土坑を確認した。

2. 基本土層 (第27図)

現地標高は約6.64mを測り、調査区を覆っている礫混じりの淡褐色土を約0.30m除去すると、淡茶灰色土の耕作土層が確認される。この耕作土を含み下位には、数層にわたり耕作土層が確認できる。これらの耕作土を約0.30m除去すると暗茶灰色シルト質土安定面(基盤土層)が現れる。検出面の標高は約6.00mである。



第27図 大道10次調査区北壁土層断面実測図 (1/40)

3. 遺構・遺物

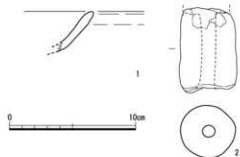
溝状遺構 (SD)

10SD001 (第30図)

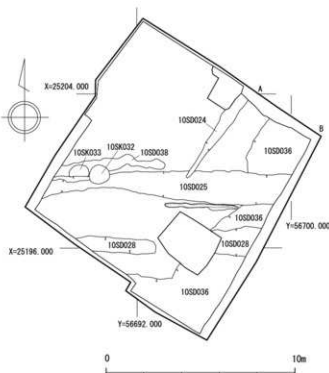
B調査区中央付近で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約18.5m、幅約0.40mを測る。出土遺物から近世に比定される。

10SD002 (第30図)

B調査区の東側で検出した南北方向の溝状遺構



第28図 10SD002・SD006 出土遺物実測図 (1/3)



第29図 A調査区遺構配置図 (1/200)

である。現状の検出長は約 18.5m、幅約 0.40 ～ 0.50m を測る。出土遺物から近世に比定される。

出土遺物（第 28 図）1 は、京都系土師器口縁部で、時期は 16 世紀後半に比定できる。

10SD004（第 30 図）

B 調査区の中央で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約 9.00m、幅約 1.00 ～ 1.40m、深さ約 0.06m を測り、断面形状は浅い逆台形を呈す。堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。

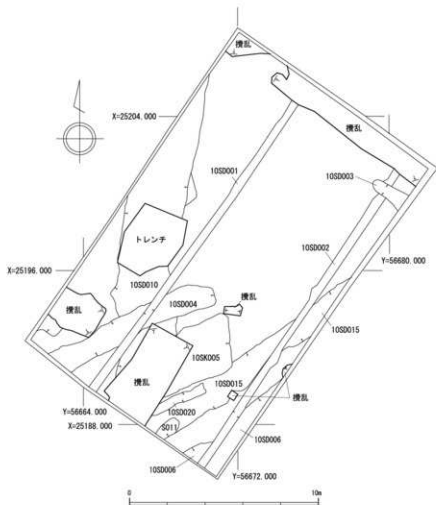
10SD006（第 30 図）

B 調査区の南東隅で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約 4.50m、大半が調査区外になるため規模は不明である。A 区の SD028 と同一であると考えられる。

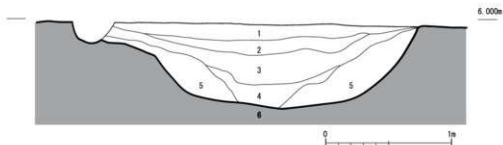
出土遺物（第 28 図）2 は、大形の管状土鍾。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は、にぶい橙色を呈す。上下端部に使用したときの欠損が認められる。また、被熱を受けた痕跡も見られるもので、最大長 6.8 cm、幅 4.5 cm、孔径 1.5×1.2 cm、重さ 149.6g を量る。

10SD010（第 30・31 図）

B 調査区の西側で検出した南北方向の溝状遺構である。検出標高は約 5.60 m である。現状の検出長は約



第 30 図 B 調査区遺構配置図 (1/200)



- | | | |
|---|--------|-------------------|
| 1 | 暗黒褐色土 | (橙色粒子、白色粒子を多く含む。) |
| 2 | 黒褐色土 | (橙色粒子、白色粒子を多く含む。) |
| 3 | 暗灰褐色土 | (白色粒子を多く含む。) |
| 4 | 暗黒褐色土 | |
| 5 | 暗黒褐色土 | |
| 6 | 黄褐色粘質土 | (地山) |

第31図 105D010 土層断面実測図 (1/30)

14.00m、幅約3.00m、深さ約0.65mを測り、断面形状は浅い逆台形を呈す。堆積土は大部分が黒色を呈しており、流水等の状況は確認できなかった。

出土土器 (第32・33図) 1は、高坏坏部で、内湾気味に口縁が立ち上がる器形で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ミガキ調整で、口径約10.7cmを測る。時期は、弥生時代中期の所産。

2は台付き鉢の受け部で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含み、色調は内面にぶい黄橙色、外面橙色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ヘラミガキ調整である。時期は、弥生時代中期。3は、高坏脚部で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ミガキ調整で、底径約14.5cmを測る。脚部端部は指で成形しており指頭圧痕が目立つ。時期は、弥生時代後期中葉。

4は、小形の長頸壺で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面黄灰色、外面橙色を呈し、内面ナデ後に指による整形、外面ハケメ後ミガキ調整で、底径5.1cm、器高 $12.6 + \alpha$ cmを測る。時期は弥生時代前期末。

5は、台付き鉢の脚部で、粘土板充填の痕跡が確認できる。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ヘラナデ調整で、内外面指頭圧痕が認められる。弥生時代中期。

6は、長頸壺の口縁部で、頸部に断面三角形の突帯を巡らし、その下に浮文を貼り付けている。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面黒褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ハケメ調整で、口径約10.4cmを測る。時期は、弥生時代後期中葉。

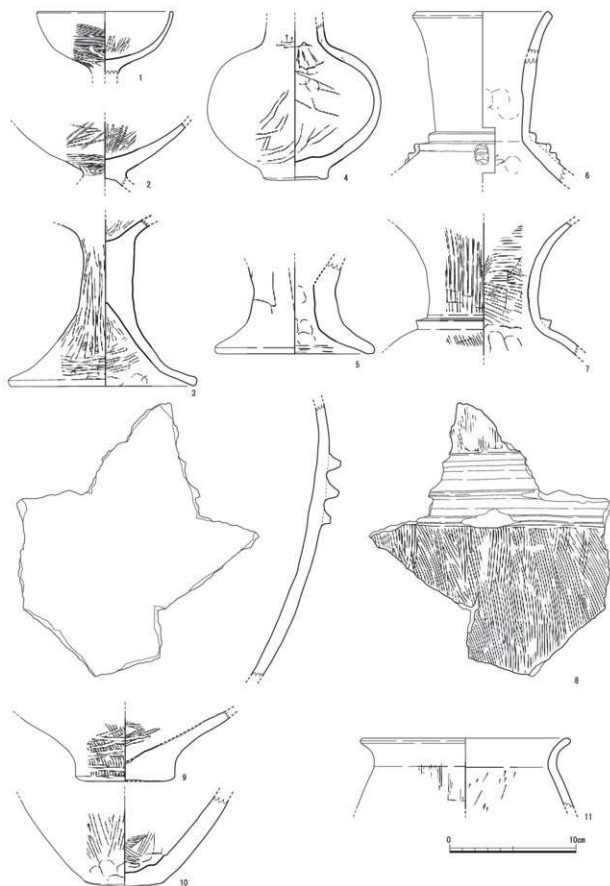
7は、長頸壺で頸部に断面三角形の突帯を巡らす。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面縦方向のハケメ、外面縦方向のハケメ調整で外面には赤色顔料貼付が認められる。時期は、弥生時代後期中葉。

8も頸部に突帯を巡らすタイプの壺胴部で、断面三角形の突帯を3条巡らす。時期は後期中葉。

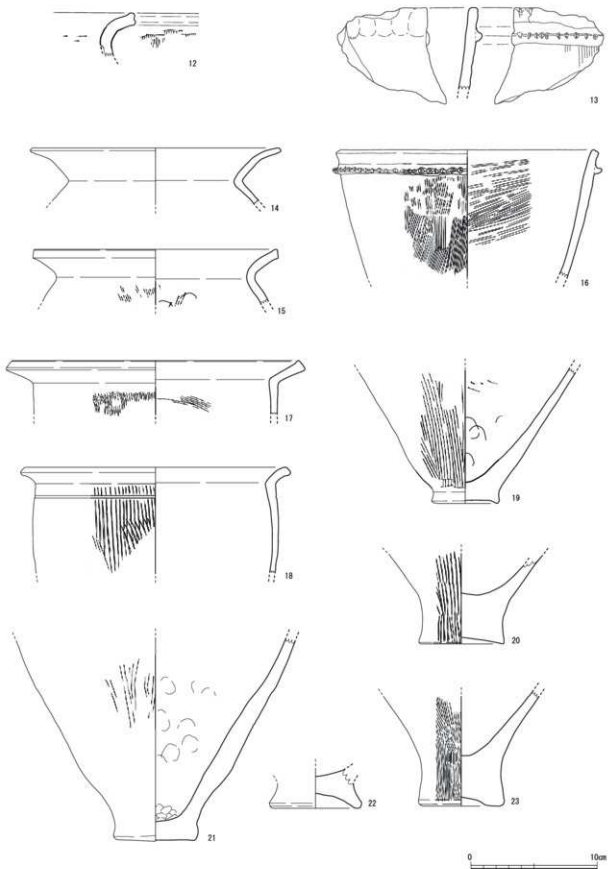
9は、弥生土器壺底部で、胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面褐灰色、外面暗黒褐色を呈し、内面ミガキ、外面ハケメ後ミガキ調整で底径は約7.8cmを測る。時期は、弥生時代前期末。

10は、弥生土器壺底部で胎土は、長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面明黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ヘラナデ調整で底径約6.0cmを測る。時期は、弥生時代中期。

11は、弥生土器壺口縁部。内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約16.2cmを測る。時期は、弥生時代後期初頭。12は、弥生土器壺口縁部。13は、弥生土器壺口縁部で、口径は約19.4cmを測る。



第32図 10SD010 出土遺物実測図① (1/3)



第33図 10SD010 出土遺物実測図② (1/3)

14 は、口縁が「く」の字状にのびる狭口縁部で、口径は約 20.0 cm を測る。15 は、はね上げ口縁部の口縁部で、口径は約 22.6 cm を測る。時期は弥生時代後期初頭。

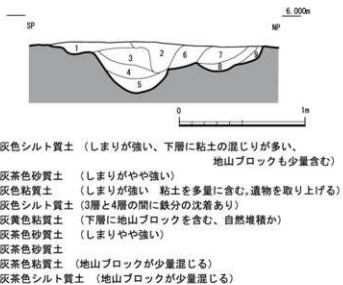
16 は、胴部上部にハケメ後に沈線を 1 条巡らす裏で、胎土は、石英・角閃石を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で口径約 20.3 cm を測る。時期は、弥生時代中期初頭。

17 は、下城式狭口縁部。18 も下城式裏で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で口径約 20.3 cm を測る。時期は、弥生時代中期初頭。19・20・23 は弥生土器裏底部。21 は、裏底部。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整後ミガキ風ナデ調整で底径約 6.2 cm を測る。時期は、弥生時代中期初頭。22 は、弥生土器底部で底径 6.6 cm を測る。時期は弥生時代後期中葉。遺物は、弥生時代前期末から中期初頭と弥生時代後期中葉の所産と考えられる 2 群が出土している。

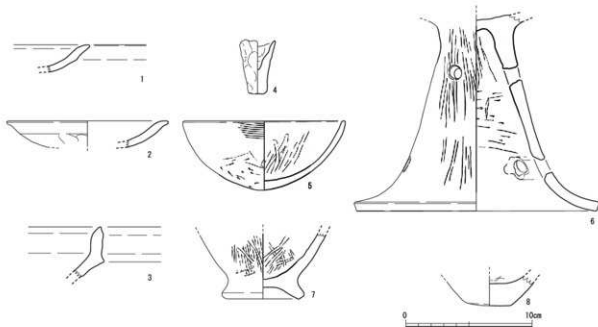
10SD026 (第 29・34 図)

A 調査区の中央で検出した東西方向の溝状遺構である。現状の検出長は、約 12.30m、幅約 0.80～1.80m、深さ約 0.40m を測り、土層堆積から最低でも 2 回の掘り返しが行われたと推定される。堆積土はシルト質土と砂質土が含まれるが礫層は含まれない。B 区の 10SD015 と同一と考えられる。

出土遺物 (第 35 図) 1、2 は、京都系土師器環で、色調は内外面角褐色を呈するもので、2 の口径は約 12.6 cm を測る。3 は、備前焼播鉢口縁部。5 本の播



第 34 図 10SD026 土層断面実測図 (1/30)



第 35 図 10SD026・SD036 出土遺物実測図 (1/3)

り目単位が認められる。時期は中世で、16世紀後半代の所産。

4は、手づくねによるミニチュア土器で、口径は2.8cm、底径1.1cm、高さ4.3cmを測る。5は、碗。胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ調整後ナデ後ミガキ調整で口径12.7cm、器高5.5cmを測る。

6は、高坏脚部で、胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面に絞り痕、ケズリ後ナデ、外面ハケメ後ミガキ調整で底径18.8cmを測る。7は、甕底部。底径約5.7cmを測る。8は、壺底部で底径は約3.5cmを測る。4～8は弥生土器で、時期は弥生時代後期中葉と考えられる。したがって下層の時期は弥生時代後期中葉、上層では、16世紀後半と考えられる遺物が認められ、時期の違う2群の土器群が認められる。

10SD036 (第29図)

A調査区の東側で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は、約11.80m、幅約2.60～4.60m、深さ約0.40mを測る。溝の東側の肩は調査区外であるため、確認されていない。よって、この西側の肩より東側への地形的な落ちである可能性も考えられる。縄文土器が多数出土している。

土坑 (SK)

10SK005 (第30図)

B調査区の南側で検出した土坑である。南側の大部分を攪乱で削平されている。検出面での平面形状は、幅約3.00mを測る方形のプランを呈す。

出土遺物 (第36図) 1は、弥生土器で袋状口縁壺の口縁部。胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内外面ナデ調整で口径約8.2cmを測る。時期は、弥生時代後期中葉。

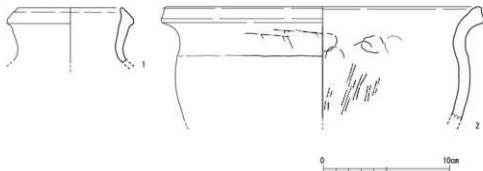
10SK042 (第29図)

A調査区の南側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、直径約0.60mを測り、不定楕円形プランを呈す。

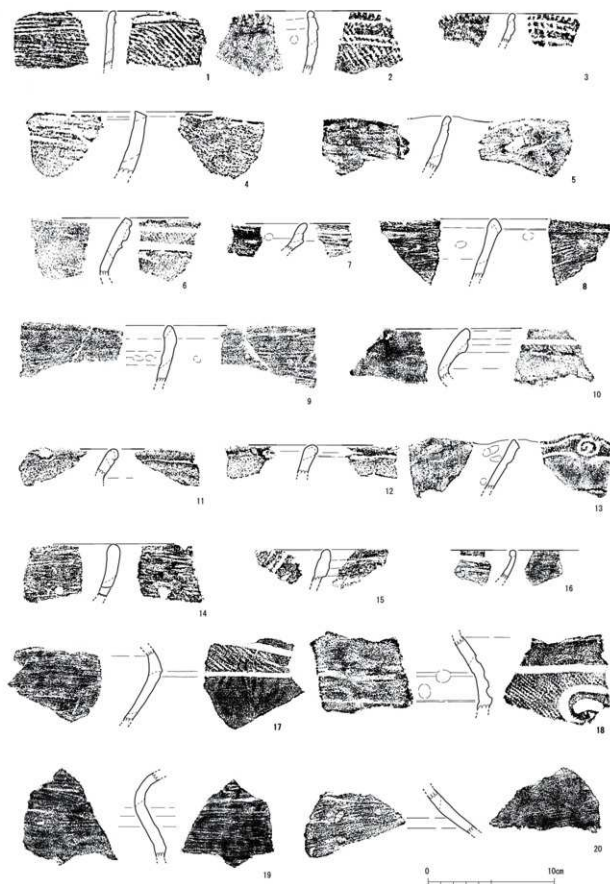
出土遺物 (第36図) 2は、弥生土器甕。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ナデ調整で口径約24.8cmを測る。時期は、弥生時代後期中葉。

縄文時代の遺物

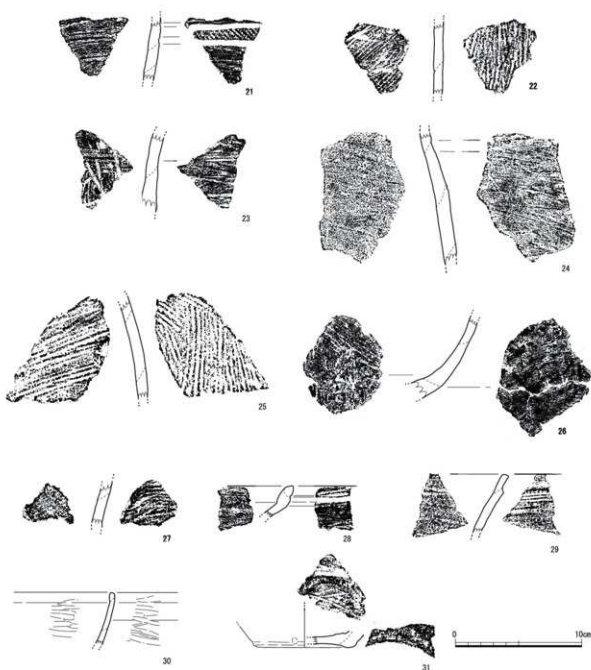
10SD010・026・036、10SK042の下層から縄文土器が出土している。出土している層を確認すると、標高



第36図 10SK005・042 出土遺物実測図 (1/3)



第37図 大道10次出土縄文土器実測図① (1/3)



第38図 大道10次出土縄文土器実測図② (1/3)

に若干のぼらつきがあるものの、検出面より下層に縄文土器を一定量包含している層が存在することが想定される。第10次B区の東側に隣接する第14次や第15次調査地でも同様に確認しており、周辺での当該期の遺物を包含する層が比較的広範囲にわたって形成されていることが示唆される。

縄文土器（第37・38図）

1は、口唇部外面に2条の隆起線文を巡らし、内面横方向の条痕、外面斜め方向の条痕が認められる。深鉢口縁部で、竊式土器4式の時期で、縄文時代前期後葉のものと考えられる。2は、内面はナデ後指オサエ、外面および口縁端部に爪状の刻み目文が施されている。縄文時代中期の船元式土器の口縁部。3は、口縁端部に爪による刻み目を施す縄文時代中期の船元式土器の浅鉢口縁部。

- 4 は、口縁端部を平坦に作り、内面条痕、外面条痕後ナデ調整の縄文時代後期前葉の深鉢口縁部。
- 5 は口縁端部を指で摘み上げや波状につくり、胎土は角閃石・長石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい褐色で、内外面条痕後ナデ調整の鉢口縁部。
- 6 は、口縁部内面は条痕後ナデで、外面に2本の沈線を巡らした間に磨消縄文が認められる緑帯文土器で、縄文後期前葉の深鉢口縁部。7 は、口縁内面はナデ後沈線を1条巡らし、外面は条痕で縄文時代後期前葉の浅鉢口縁部。8 は、口縁端部をやや尖らせた形で、胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色、外面褐灰色で内外面工具痕が認められるもので、縄文時代後期前葉の深鉢の口縁部。
- 9 は、口縁部がやや内湾する形で内外面条痕後ナデ調整の縄文時代後期の深鉢。10 は、口縁部内面は、条痕後ナデで、外面に1本の沈線を巡らした間に磨消縄文が認められるもので、縄文後期前葉緑帯文土器の深鉢口縁部。
- 11、12 も深鉢口縁部。13 は、ゆるい波状口縁で外面に沈線で文様を付け、変形渦巻状文を沈線で描いたものである。時期は、縄文時代中期から後期に比定される。14 は、口縁部下に外面から内面へ土器焼成後の穿孔が認められるもので、内外面貝殻条痕調整の条痕文土器の鉢口縁部で縄文時代後期。
- 15 は、深鉢口縁部で、縄文時代後期の産と考えられる。内、外面横ナデ調整である。16 も浅鉢口縁部と考えられるものである。17 の内面は、条痕後ナデ調整で、外面に2本の沈線を巡らした間に磨消縄文が認められ、外面下部は、条痕後ミガキを施された緑帯文土器で、縄文後期前葉の深鉢胴部。
- 18 の内面は、条痕後ナデ調整で、外面に沈線や変形渦巻状文を沈線で描いた間に磨消縄文が認められるもので、縄文後期前葉の小池原上層式深鉢胴部。23 も磨消縄文が認められる深鉢胴部。
- 19、20、22～25 は、胴部破片であるが、内外面に条痕文が認められ、縄文時代後期に比定される粗製深鉢の胴部。26 は内外面条痕後ナデ調整の底部。器形から、縄文時代後期の深鉢底部と考えられる。
- 27 は、内面ナデ、外面巻貝による条痕が施された縄文土器の底部に近い胴部破片。28 は、内面ナデ、外面条痕調整で縄文時代晩期の浅鉢。29 は縄文後期と考えられる鉢の口縁部。
- 30 は、黒色研磨の鉢口縁部で時期は、縄文時代晩期。31 の胎土は、石英・角閃石・長石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい褐色、外面褐色を呈し、内外面ナデ調整で底径約8.0 cmを測る。網代痕が見られる縄文時代後期の深鉢底部。

小結

東側に隣接する第7次調査地の検出面の標高が約5.50～5.60 mであり、当地点が約6.00 mであったことから東側へ地形的に緩やかに下っていく状況が確認された。また、遺構密度も地形の落ちにつれ、減っていくことも確認された。

今回検出された10SD026 は7SD001 と同一の遺構である可能性が考えられるが、10SD026 は、下層が弥生時代後期中葉で上層が16世紀代に比定される遺物が出土しているのに対し、7SD001 では8世紀末～9世紀初めに比定される遺物が出土している。周辺の調査から、当調査地点付近では、古代の遺物を包含する層が検出面上層に存在していると考えられ、今回の調査ではこの層を表土除去の際に削平した可能性が考えられる。

また、今調査地からは縄文時代前期から後期に比定される遺物が出土している。出土地点は遺構の下層や落ちに伴う包含層内から出土したものであり、当該期の遺構は認められなかった。第7次調査地と同様に、出土した土器は比較的大きな破片が含まれており、鉄分が付着し、器面が若干荒れているものの、比較的良好な状態であるといえる。調査地周辺に当該期の遺構が展開していた可能性が高いと考えられる。このことから、当地域における微高地の形成年代が縄文時代前期後葉にまで遡ることが確認された。

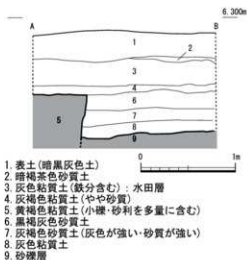
大道遺跡群第14次調査

1. 調査の概要 (第26図)

調査地は大部分金池南1丁目に所在する。区画整理地内の宅地造成に伴い、平成18年4月25日から平成18年6月15日の期間に調査を実施した。調査面積は317㎡である。大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査の結果、溝状遺構、井戸跡、土坑を確認した。

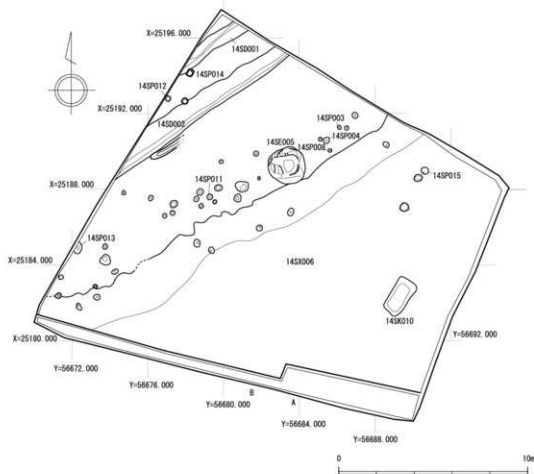
2. 基本土層 (第39図)

現地標高は約6.20mを測り、調査区を覆っている約0.30mの灰色粘質土の水田層を除去すると、灰褐色粘質土の耕作土層が確認される。この耕作土を含み下位には、数層にわたり耕作土層が確認でき、6層を除去すると約5.40mで検出面である灰褐色砂質土が現れる。

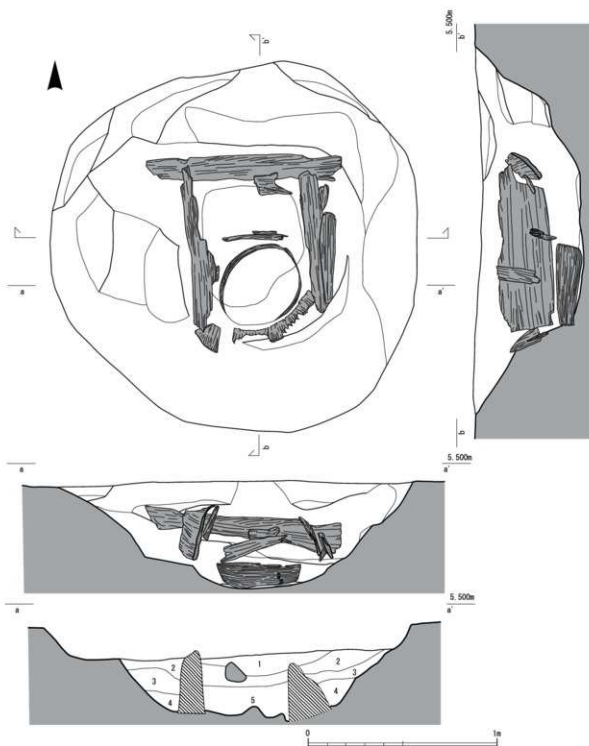


- 1 表土(暗黒灰色土)
- 2 暗褐色砂質土
- 3 灰色粘質土(数分含む): 水田層
- 4 灰褐色粘質土(やや砂質)
- 5 黄褐色粘質土(小礫・砂利を多量に含む)
- 6 黒褐色砂質土
- 7 灰色粘質土(灰色が強い・砂質が強い)
- 8 灰色粘質土
- 9 砂礫層

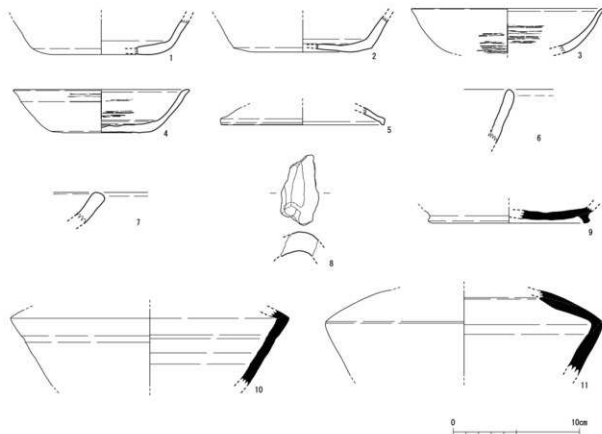
第39図 大道14次調査区南壁土層断面
実測図(1/40)



第40図 大道14次平面図(1/200)



第41図 14SE005 平面・断面・土層断面実測図 (1/20)



第42図 14SE005 出土遺物 実測図 (1/3)

3. 遺構・遺物

井戸跡 (SE)

14SE005 (第40・41図)

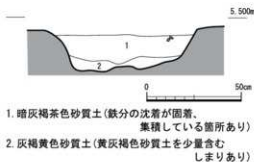
井戸跡は調査区のはほぼ中央に位置する。径約 1.95m の円形プランを呈し、約 0.60m 遺存する鉢形の掘り方をもつ大型の井戸である。長方形に木組がなされた井桁が、掘り方のはほぼ中央に位置し、その内部に、薄板を留め具で固定した曲物が設置されている。井桁に使用されている板材は約 1.00m を測り、その内部は約 0.55m 四方である。曲物は、径約 0.40m の円形で、約 0.25m の高さである。遺構の検出面の標高は、約 5.40m である。井桁の上面の標高が約 5.20m、井筒の上面の標高が約 4.95m を測る。材質は不明である。出土遺物から 8 世紀中頃～後半頃に廃絶したものさされる。

出土遺物 (第42図) 1, 2 は、土師器環底部。底部は、ヘラ切りで、底径は 1、2 とも約 11.0 cm を測る。

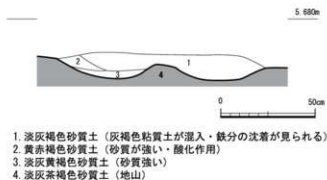
3 は、土師器環で、口縁部先端部が外反し、胴部形態は内湾気味に立ち上がる形で、内外面ミガキ調整で口径約 15.2 cm、器高 3.5+ α cm を測る。4 は、土師器環で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色で、底部ヘラ切り、内外面ナデ調整で、口径約 14.0 cm、器高 3.5 cm、底径 8.0 cm を測る。

5 は、土師器環蓋で、口縁部内面に沈線状のくぼみが認められる。6 は、製塩土器口縁部。形造り成形で砲弾形をした焼塩用の土器。小田和利編年のⅡ類に当たる。7 は、土師器企救型甕の口縁部。

8 は、羽口の破片で外面に被熱痕が認められる。9 は、底径が約 12.8 cm の踏ん張り気味の角高台を持つ須恵器壺で長頸壺と推定される。10, 11 は、須恵器壺の胴部屈曲部。1～11 を観察した結果、時期は 8 世紀中頃～後半の範囲に入る遺物群といえよう。



第 43 図 14SD001 土層断面実測図 (1/20)



第 44 図 14SD002 土層断面実測図 (1/20)

溝状遺構 (SD)

14SD001 (第 40・43 図)

調査区の北西隅で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約 3.70m、幅約 0.80m、深さ約 0.20m を測り、断面形状は逆台形を呈す。遺構の検出標高は約 5.45m を測り、溝の基底部の標高は約 5.25m を測る。現状の調査区内で高低差は確認できなかった。堆積土は砂質であり、水性堆積の状況がうかがえる。

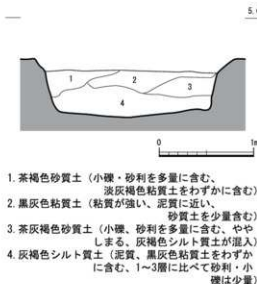
14SD002 (第 40・44 図)

調査区の北西で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約 10.00m、幅約 0.90 ~ 1.40m、深さ約 0.15m を測り、断面形状は中央付近に高まりがある浅い皿形を呈す。遺構の検出標高は約 5.48m を測り、溝の基底部の標高は約 5.33m を測る。現状の調査区内で高低差は確認できなかった。堆積土は砂質であり、水性堆積の状況がうかがえる。

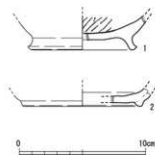
土坑 (SK)

14SK010 (第 40・45 図)

調査区の東側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、長軸約 2.00m、短軸約 1.00m を測る隅丸長方形プランを呈す。遺構の検出標高は、約 5.25m を測り、基底部までの深さは約 0.50m を測る。堆積土は、地山



第 45 図 14SK010 土層断面実測図 (1/40)



第 46 図 14SK010 出土遺物 実測図 (1/3)

ブロック土を多く含む黄褐色土の単一土層で、一度に埋められた状況が確認できる。遺構の性格は不明であり、出土した土師器片から古代以降に埋められたと言える程度である。

出土遺物（第46図） 1は、踏ん張り高台を持つ土師器碗底部。底径は、約7.8cmを測る。

2は、高台付杯底部。底径は、約9.2cmを測る。どちらとも8世紀後半から9世紀初頭に比定できる。

不明遺構(SX)

145X006（第40図）

調査区の中央で検出した西から東方向へ下る落ちの肩である。現状の検出長は約20.0mで調査区を縦断している。この肩から東側の包含層より多数の遺物が出土している。

出土遺物（第47～50図） 1は、土師器碗で、内外面ヘラナデの後に指で成形を行っており、口径約12.0cm、器高3.1cmを測る。2は、土師器器台で、胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、内外面ナデ調整で、底径約12.2cmを測る。

3は、高坏坏部。胎土は石英・長石を含み、色調は内外面浅黄橙色を呈し、内外面ナデ調整で口径約18.0cmを測る。

4は、土師器高坏。坏部下段が平坦化し、坏部上段が直線的に外反する器形で、胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子・砂粒を含み、色調は、内面にぶい橙色、外面浅黄橙色を呈し、内外面ナデ調整で、口径15.0cm、器高12.2cm、底径12.0cmを測る。

5は、小形丸底壺で、胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面明赤褐色、外面橙色を呈し、内外面ナデ調整で、口径11.7cm、器高8.5cmを測る。口縁部と胴部の境に成形時の指オサエ痕が認められる。

6は、小形丸底壺の口縁部で口径約16.4cmを測る。

7は、台付き鉢の坏部。胎土は、石英・角閃石を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約13.0cmを測る。8は、台付き鉢の鉢部。胎土は、石英・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約16.6cmを測る。

9は、台付き鉢。口縁部が逆「く」の字状を呈し口縁端部は細く伸び、体部は丸く収まる器形である。胎土は、石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約17.0cmを測る。内面全体に黒斑が認められる。

10～12は、大形鉢の口縁部で、頸部外面に1条の突帯を巡らすタイプ。13、14は、安国寺式複合口縁壺の口縁部。9の口径は、約20.2cm、14は、約15.0cmを測る。15は、土師器甕。胎土は、石英・長石・角閃石を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約14.0cmを測る。

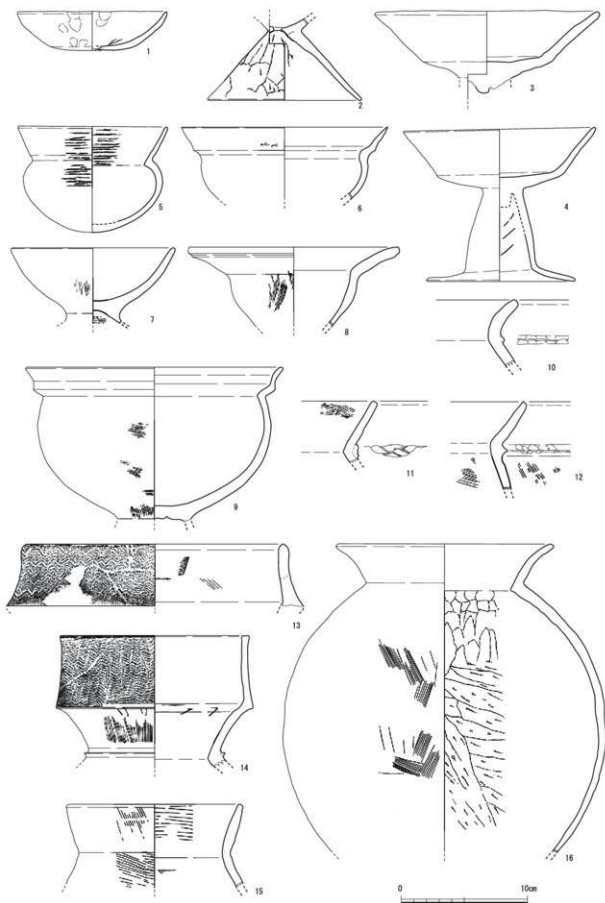
16は、土師器甕で、頸部から「く」の字状に伸びる口縁形態で、胎土は、石英・角閃石・赤色顔料を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部ケズリ、頸部指ナデ調整で、口径約17.2cm、器形24.5+a cmを測る。内外面指頭圧痕が認められる。

17は、土師器甕。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ調整で、口径約16.8cmを測る。18は、土師器坏蓋。蓋中心部から緩やかに端部へ曲り、端部で一度屈曲する器形で、口径約16.4cmを測る。

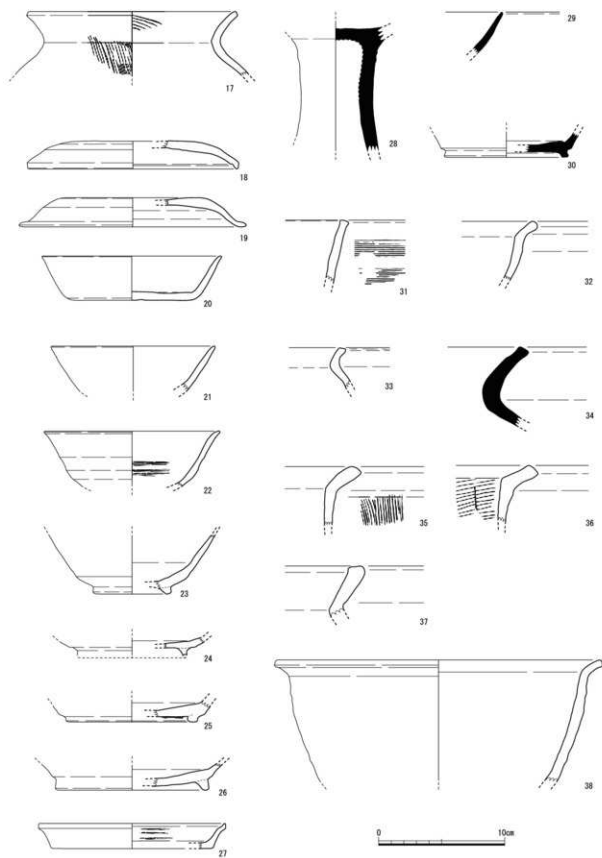
19は、土師器坏蓋。天井部は、ヘラ切り、端部で角度を持って曲がり口縁端部は丸みを持つ器形で口径約18.0cmを測る。20は、土師器坏で、口縁部は先端をやや尖り気味に仕上げ、胴部は、直線的に立ち上がるもので、口径約14.2cm、器高3.5cm、底径約10.0cmを測る。

21は、坏。口縁部が外反し先端部をやや尖り気味に仕上げるもので、口径約13.0cmを測る。22は、21と同様の器形であるが外面にミガキが認められるもので、口径約13.8cmを測る。

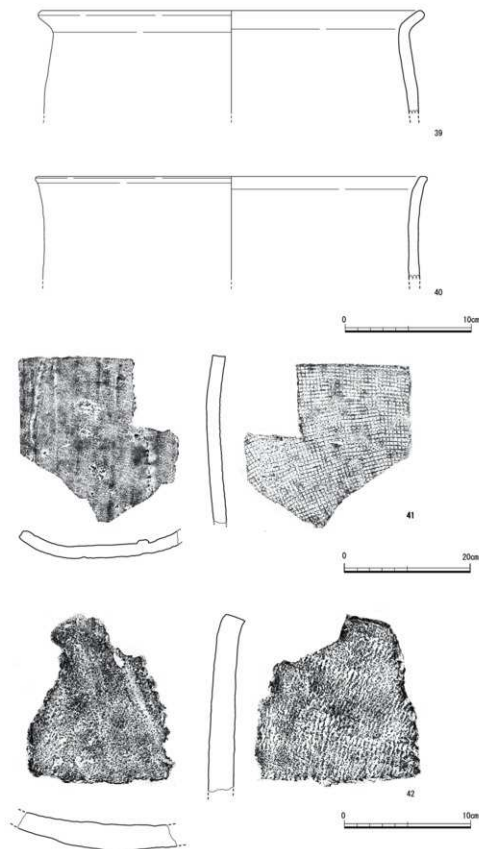
23～26は、土師器高台付坏である。27は、土師器皿で、口縁部内面に1条の沈線を巡らすもので、口径約



第47図 145X006 出土遺物実測図① (1/3)



第48図 145X006 出土遺物実測図② (1/3)



第49図 14SX006出土遺物実測図③ (1/3、41は1/6)

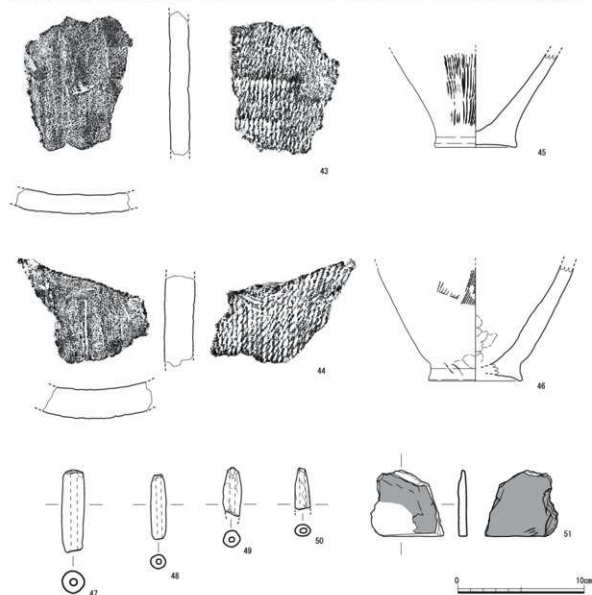
14.2 cm、高さ 2.0 cm、底径約 12.8 cmを測る。28 は、須恵器高坏の脚部。29 は、須恵器坏の口縁部。

30 は、須恵器高台付坏の底部で、やや踏ん張り気味の角高台が貼付されており、底径は約 13.0 cmを測る。31 は、豊後大分型甗の口縁部。32 は、鉢の口縁部。33 は、土師器壺口縁部。

34 は、須恵器甕口縁部で、緩やかな肩部から外反する口縁部を有し、口縁部内面は、回転ナデ、外面はタタキ後ナデ調整である。35 ～ 37 は、企救型甕口縁部。38 は、土師器甕。口縁端部は強いナデ調整でやや丸みを帯びた端部を形成する。器面調整は横方向のナデ調整を行っている。口径約 25.6 cmを測る。

39 は、土師器甕。口縁部形状は外反し、比較的短い口縁部で、やや丸み帯びた端部を形成する。内外面ヨコナデで、口径は、約 30.0 cmを測る。40 は、豊後大分型甗の口縁部で、口径約 31.0 cmを測る。

41 ～ 44 は、軒平瓦。外面に布目痕が認められる。45 は、弥生土器で下城式甕の底部。底径は、約 6.5 cmを測る。46 は、弥生土器甕底部。内外面ハケメ後ナデ調整で、底径約 7.4 cmを測る。底部付近に指頭圧痕が認められる。時期は弥生時代後期末に比定できる。47 は、管状を呈する土鍾。胎土は、長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は灰白色を呈し、掛け紐によると考えられる横方向の圧痕が認められる。最大長 6.3 cm、最大幅 1.7 cm、



第50図 145X006 出土遺物実測図④ (1/3)

孔径 0.5 cm、重さ 24.7 g を測る。48 は、紡錘状を呈する土鍾。胎土は石英・角閃石・赤色粒子を含み、色調はにぶい黄橙色を呈し、中ほどに掛け紐によると考えられる斜め方向の圧痕が認められる。最大長 5.2 cm、最大幅 1.2 cm、孔径 0.4 cm、重さ 8.0 g を測る。49 は、紡錘状を呈する土鍾。1/3 ほど欠損している。胎土は、石英・長石・角閃石・黒色粒子・白色粒子を含み、色調は褐色色を呈し、掛け紐によると考えられる欠けと斜め方向の圧痕が認められる。最大長 $3.9 + \alpha$ cm、最大幅 1.3 cm、孔径 0.35 cm、重さ 6.3 g を測る。50 は、紡錘状を呈する土鍾。半分ほど欠損している。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調はにぶい橙色～明褐色を呈し、掛け紐によると考えられる欠けと斜め方向の圧痕が認められる。最大長 $3.3 + \alpha$ cm、最大幅 1.2 cm、孔径 0.4 cm、重さ 3.3 g を測る。51 は、粘板岩製の砥石破片。下部は真っ直ぐ切られている。裏面には、剥がれた痕跡が認められるが、その後使用された磨り痕が認められる。表面は、磨り痕が顕著に見られる。長さ 5.2 cm、幅 5.9 cm、厚さ 0.6 cm、重さ 32.6 g を測る。SX006 出土遺物の検討。SX006 は、落ち込み遺構と考えられるものである。出土遺物の 1～16 は概ね古墳時代前期の範疇に入る土器群であり、時期は古墳時代前期に比定される一群である。また、17～44 は、古代と考えられるもので時期は、8 世紀末～9 世紀初頭に比定される土器群である。瓦の出土は、上野台地上に存在した国衙に関連した遺構が存在する可能性を示唆しており興味深い。

縄文時代の土器

今回の調査区では、遺構の下層および包層から一定量の縄文土器が出土している。調査区内の下層に縄文土器を包含する層が確認された。ここでは、縄文土器をまとめて説明する。

縄文土器（第 51～55 図）

縄文時代後期を主体とした土器が出土している。

1 は、口縁部形態が波状形で、内面条痕文、外面磨消縄文のある深鉢口縁部。時期は、縄文時代後期前葉。

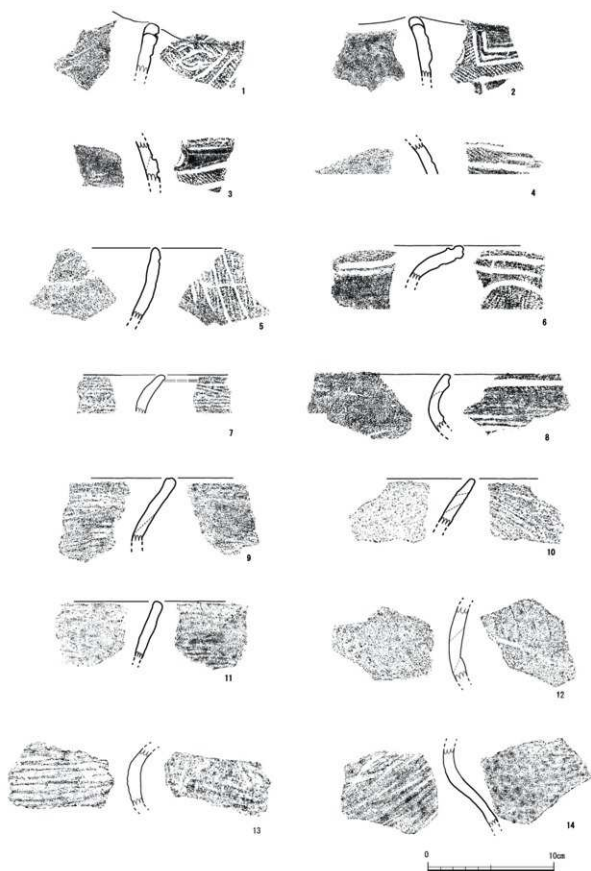
2 は、内面ナデ、外面磨消縄文のある深鉢口縁部で、文様から北久根式土器と考えられるもので、時期は縄文時代後期中頃。3、4 は、緑帯文土器の深鉢の胴部と考えられるもので、時期は縄文時代後期前葉。

5 は、外面に斜め方向の文様を入れる緑帯文土器の深鉢口縁部で、時期は縄文時代後期前葉。6 は、口縁部が外反する緑帯文土器の深鉢口縁部で、時期は縄文時代後期前葉。7 は、内面貝殻条痕文、外面貝殻条痕文後ナデ調整の口縁部がやや外反する深鉢口縁部。時期は縄文時代後期。8 の内面は、貝殻条痕文丁寧なナデ、外面は、貝殻条痕後ナデ調整で口縁部外面に沈線を巡らす緑帯文土器深鉢口縁部。時期は縄文時代前期前葉。9 は、内面条痕後ナデ、外面ナデ調整の深鉢口縁部で、時期は縄文時代後期。10 は、内面条痕文後ナデ、外面貝殻条痕文調整の深鉢口縁部で口縁部端部は指オサエで形成している。時期は縄文時代後期前葉。11 は、内外面条痕文後ナデ調整の深鉢口縁部。時期は縄文時代後期。12～14 は、内外面条痕文土器の縄文土器深鉢の胴部で、時期は縄文時代後期。15 は、内外面条痕後ナデ調整の深鉢口縁部。時期は縄文時代後期。16 の胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、内外面条痕後ナデ調整で、口縁部が波状の深鉢。時期は縄文時代後期。17 は、内外面条痕調整で口唇部に刻み目を入れる浅鉢口縁部。時期は、縄文時代後期。

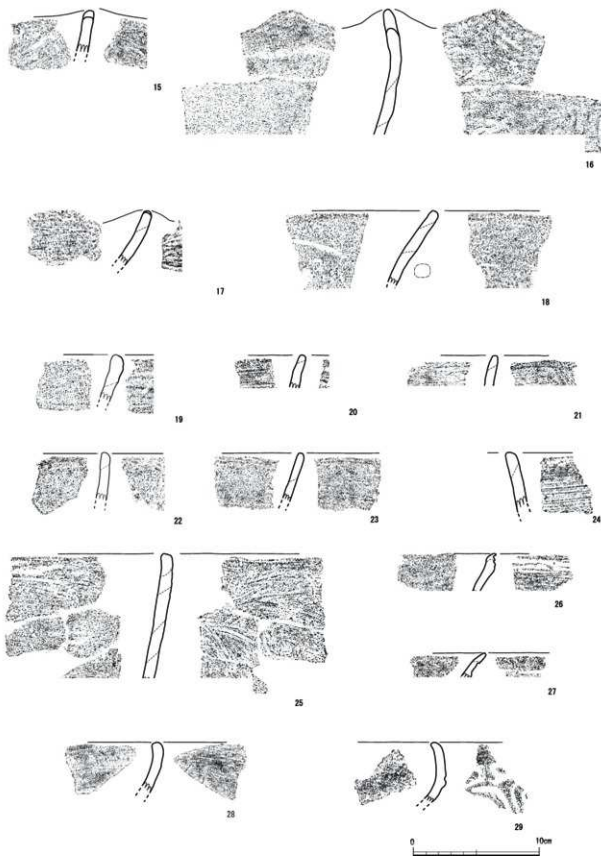
18～25 は、条痕文土器の口縁部。時期は、縄文時代後期。26、27 は、内面ナデ、外面沈線の鉢口縁部。時期は縄文時代後期。28 は、内外面条痕文後ナデ調整の鉢口縁部。時期は縄文時代後期。29 は、内面条痕文後ナデ調整、外面沈線文土器の鉢口縁部。時期は縄文時代後期前葉。

30～37 は、内外面条痕文を残す縄文土器の胴部。時期は縄文時代後期。38 は、内外面条痕文後ナデ調整で、口縁端部は内面に折りたたむ処理をして、端部に縄文を施した鉢口縁部。39～44 は、内外面条痕文調整の深鉢胴部。43 は、阿高系の土器胴部と考えられる。45～53 は、深鉢の底部。時期は縄文時代後期。

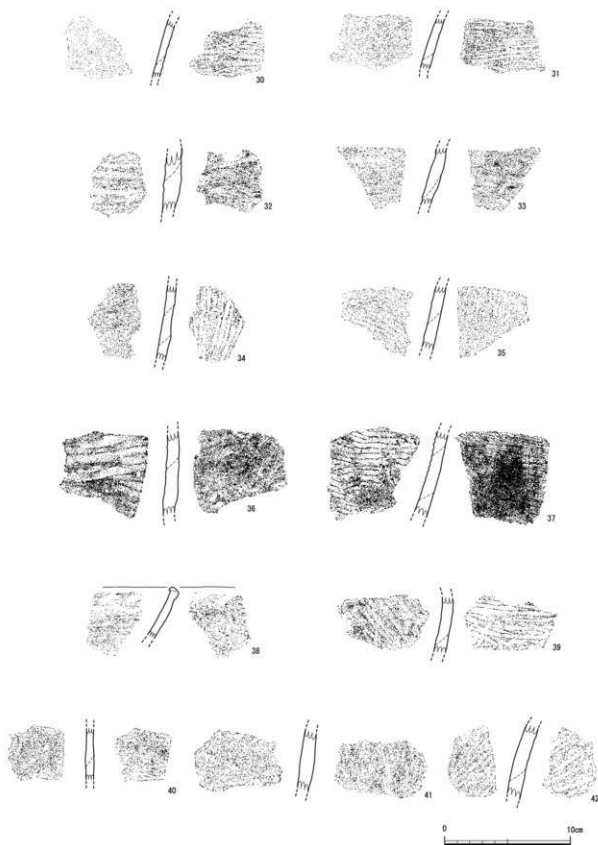
51 は底径約 12.2 cm を測る土器底部で、阿高系の底部と考えられる。54、55 は、内外面条痕文後ナデ調整の浅鉢と考えられる口縁部。時期は弥生時代早期と考えられる。



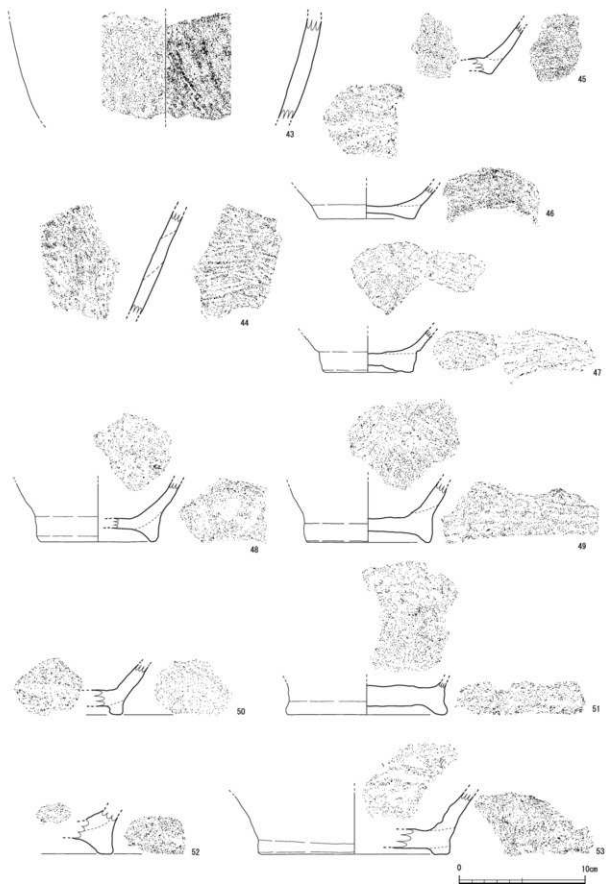
第51図 大道14次出土縄文土器実測図① (1/3)



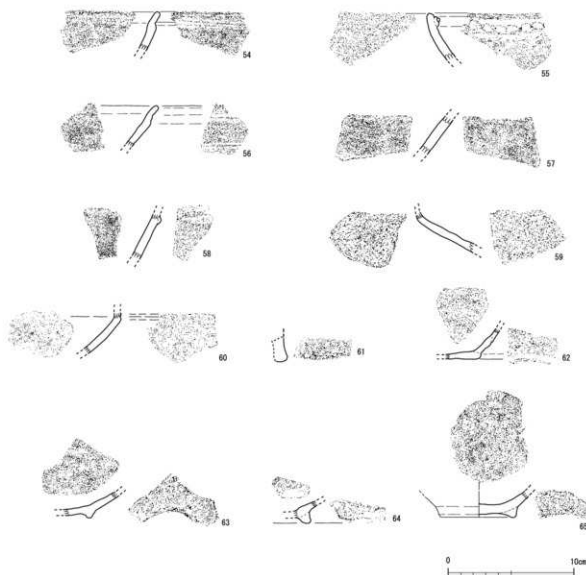
第 52 図 大道 14 次出土縄文土器実測図② (1/3)



第53図 大道14次出土縄文土器実測図③ (1/3)



第54図 大道14次出土縄文土器実測図④ (1/3)



第55図 大道14次出土縄文土器実測図⑤ (1/3)

56は、口縁部外面端部に貼り付け突帯を巡らす深鉢口縁部。弥生時代早期と考えられる。57は弥生時代早期の浅鉢胴部で、58,60は、同じく弥生時代早期の浅鉢の屈曲部。59は、壺の頸部で、弥生時代早期と考えられる。61,62は、深鉢の底部で、63～65は浅鉢の底部で65の底径5.2cmを測る。54～65の遺物の時期は弥生時代早期と考えられる。大道第14次遺跡から出土した遺物は、殆んどが縄文時代後期前葉から中頃に比定できる土器群であった。また、若干の弥生時代早期の遺物も見られた。遺跡の検出はいまだ確認できないが、縄文時代後期の自然環境を考える上で、重要な遺物群と考えられる。

小結

本調査区も第7次・第10次同様に西から東に向けて下る緩斜面の肩部にあたることが確認された。調査区の東側では、遺構も希薄であることから、本調査区は遺跡内の東端部と想定される。第7次・第10次と同一の可能性のある溝状遺構では、他の調査区では確認されなかった砂質の堆積が確認され、水を使用していた可能性が高いという結果を得た。井戸跡は、地形的な落ちの肩部に位置する。当時の湧水層は不明であるが、地形的な要因によりこの位置に設置した可能性が示唆される。

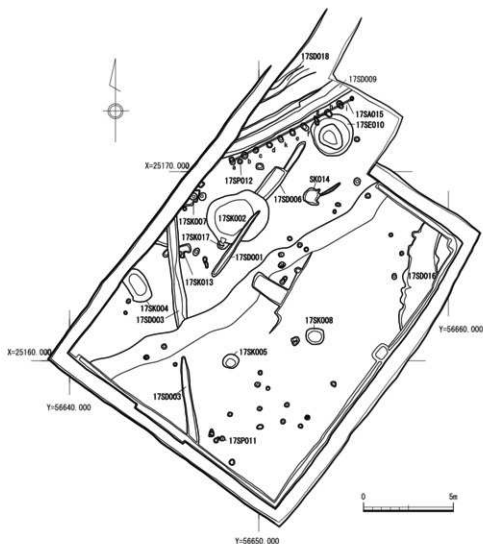
大道遺跡群第17次調査

1. 調査の概要（第26図）

調査地は大分市金池南1丁目に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内の宅地造成に伴い、大道遺跡第18次調査と並行して平成18年8月21日から平成18年9月14日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は297㎡を測り、大道遺跡群内の南に位置している。調査の結果弥生時代中期から近現代にかけての遺構群を確認している。

2. 基本土層

調査区を覆う土地整備に伴う客土を除去すると灰褐色～暗灰褐色の水田耕作上層が検出され、その下より検出された黄灰褐色シルト質土で遺構が確認されており、本調査区における遺構検出面と位置付ける。また、黄灰褐色シルト質土は調査区西側と比較して東側に深く、地形的に落ち込みが形成された地点と推定できる。遺構検出面となる黄灰褐色シルト質土は、落ちの肩部となる調査区西側で標高約5.80mを測る。



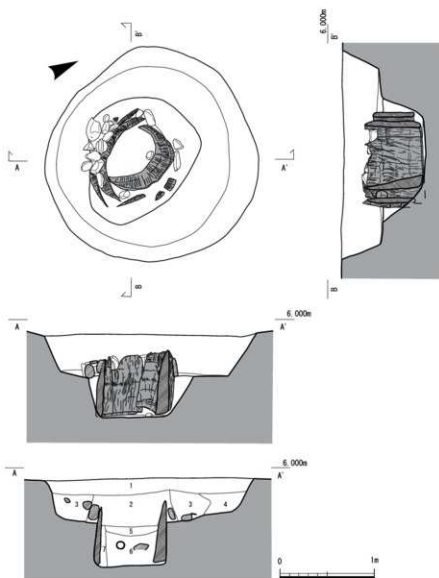
第56図 大道17次調査遺構平面図（1/200）

3. 遺構・遺物

井戸跡 (SE)

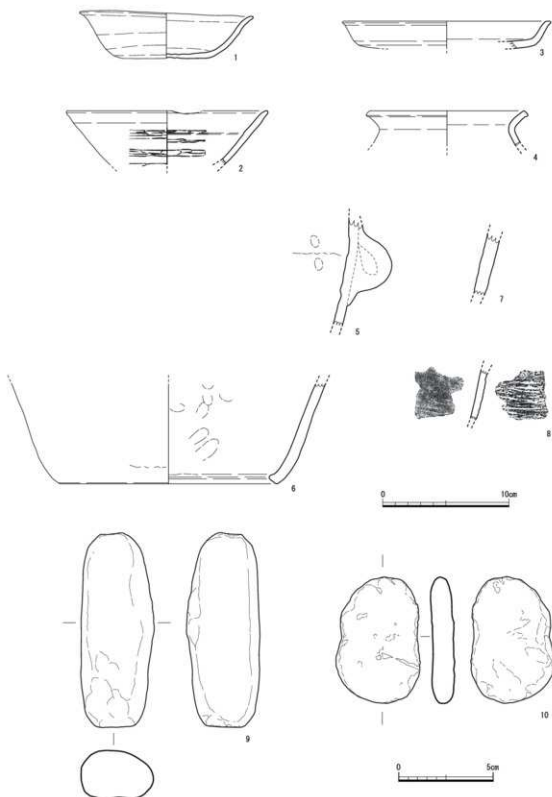
17SE010 (第56・57図)

調査区北側に位置する井戸跡である。遺構本来の標高は後世の削平のために不明であるが、検出面からは東西2.20 m、南北2.30 m、深さ0.87 mを測り平面円形、断面形状は段掘り状を呈す。検出面から深さおよそ0.20 mで木杵を確認している。井戸の水溜部にあたる木杵は丸太を刳り抜いたもので、真中で二つにわかれている。また西側の木杵は同様の板材が囲う二重構造になっており、その上面には裏込めに伴うと考えられる礫群が確認



1. 淡黒灰褐色砂質土 (砂質が強い・鉄分の沈着が斑状に見られる)
2. 暗黒褐色砂質土 (粘質)
3. 黒褐色粘質土 (砂質土が混入・10cm大の礫が混入)
4. 黒褐色灰砂質土 (硬化・しまりあり・砂質が強い・黄灰褐色砂質土を含む)
5. 黒褐色茶灰色粘質土 (灰褐色砂質土を混入・有機質の植物遺体が混入)
6. 暗黒灰褐色粘質土 (シルト質・泥質が強い)
7. 灰褐色黒色砂質土 (砂質が強い)

第57図 17SE010 平面・断面・土層断面実測図 (1/40)



第58図 17SE010 出土遺物実測図 (1/3、9・10は1/2)

されている。

土層はあわせて7層を確認した。このうち廃絶時の埋め戻し土である2層（暗黒褐色砂質土）と、裏込め土と考えられる3層（黒褐色粘質土）はほぼ垂直に分層されており、上方の井筒を抜き取った後すぐに埋め戻したものと考えられる。また土層観察から遺構が2層まで埋め戻されたのち1層（淡黒灰褐色砂質土）が堆積した状況がみてとれるが、いずれにせよ上面の大半が削平をうけているために詳細な情報は得られなかった。出土遺物から遺構の最終的な埋没時期は8世紀から9世紀ごろと推測される。出土した井筒は、樹種は、クスノキ材である。高さが70 cmほど残存するもので、水溜部の下部の内径が約70 cm、厚さ6.5 cm、上部の内径約89.2 cm、厚さ約4.8 cmを測るものである。半円形の井筒の下部2ヶ所に縦約3.2 cm、横約5.8 cmの柄孔を施してあり、クスノキ材の丸太を二分割にして中を削り貫き、柄孔どうしをつないで設置したものと考えられる。また、クスノキ材を削り貫いて井筒に使用している例としては、下郡遺跡群第5次調査で検出された9世紀に構築された5SE093や8世紀末から9世紀初頭と考えられる下郡遺跡群第19次調査19SE002がある。19SE002の井筒の内径は約1.20 mを測る大きなものである。

出土遺物（第58図） 1は、土師器環。口縁先端部が外反し、先端部は丸みを帯びるもので、口径約13.8 cm、器高3.8 cm、底径約6.6 cmを測る。

2は、土師器高台付環の口縁部。口縁部先端は丸みを帯び、内外面ヨコナデ後ミガキa2調整が施されている物で、口径は、15.8 cmを測る。

3は、土師器皿。内外面回転ナデ調整で口径約16.5 cmを測る。

4は、土師器甕口縁部で、口径約11.2 cmを測る。5、6は、豊後大分型甕の底部から胴部。5は、内面ナデ、外面ハケメ調整。内面に把手貼付け時の指頭圧痕が認められる。6は、底部の部分で、内面ナデ、外面カキメ調整で底径は約17.0 cmを測る。

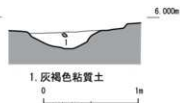
7は製塩土器の胴部片。胎土は石英・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面浅黄褐色を呈する。

8は、縄文土器鉢胴部破片。内面ミガキ、外面貝殻条痕調整である。

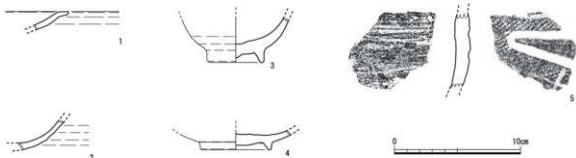
9は、安山岩製の敲石で、自然礫を利用している。長さ15.5 cm、幅5.7 cm、厚さ4.1 cm、重さ600gを測る。下端部は一部欠損が認められるが、上端部、下端部とも敲打による潰れ痕が顕著に認められる。側面は磨石としても使用されている。

10は、砂岩製の石鍾。長楕円形の扁平な自然礫を素材とし、裏面は殆んど礫面が残る。表面のみ調整を施した後、表裏面の周辺に整形のため二次加工を行い、左右側縁に打ち欠きによる抉りを入れている。長さ10.0 cm、幅6.7 cm、厚さ1.9 cm、重さ205gを測る。

1から7の時期は、8世紀末～9世紀初頭に比定できる遺物である。下層から石器と縄文土器破片が出土している。



第59図 17SD009 土層断面
実測図 (1/40)



第60図 17SD003・009 出土遺物実測図 (1/3)

溝状遺構 (SD)

17SD003 (第56図)

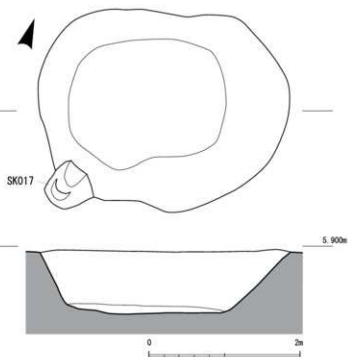
調査区西側に位置し、南北方向へ延びる溝跡である。区外へと延長するために規模は不明であるが、深さはおよそ0.05～0.30 mを測り、また中央付近では削平のため遺構の一部が消失する。遺構からは京都系土師器片、白磁皿などが出土しており、中世段階に帰属するものと考えられる。

出土遺物(第60図)1は、京都系土師器坏口縁部で、16世紀後半に比定される。2は、白磁碗の胴部。

17SD009 (第56・59図)

調査区の北東に位置し、南西方向から北西方向へと延びる溝跡であるが、両端ともに区外へと延長するため規模は不明である。深さおよそ0.20 mを測り、断面は浅めの逆三角形を呈す。出土遺物から近世に帰属する遺構と考えられる。

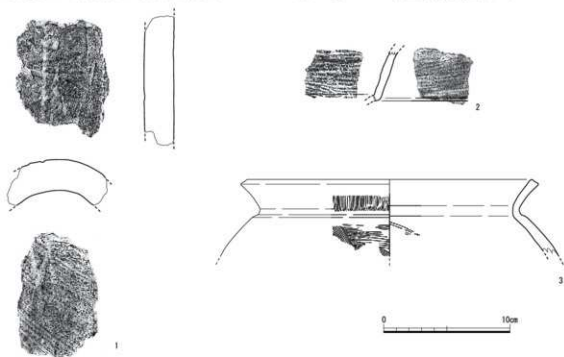
出土遺物(第60図)3は、陶磁器碗の底部。4は、見込みが蛇目軸刺ぎの白磁皿底部。底



第61図 17SK002 平面・断面実測図 (1/50)



第62図 17SK002 出土遺物実測図 (1/3)



第63図 17SK007・014 出土遺物実測図 (1/3)

径は約 5.6 cm を測る。

5 は、磨消縄文が認められる緑帯文土器深鉢の胴部。

土坑 (SK)

17SK002 (第 56・61 図)

調査区中央からやや北に位置する大型土坑である。平面楕円形、断面形状は逆台形を呈しており長径約 3.30 m、短径約 2.60 m、深さ約 0.84 m を測る。遺構は 17SD001 や 17SD006 と切り合い関係を持つが、写真記録・土層記録が存在しないため性格は不明であった。出土遺物についても破片資料であり、当該遺構については中世段階での機能または廃絶がなされていたと推測される程度である。

出土遺物 (第 62 図) 1 は、中国福建省産と考えられる天目碗の口縁部で、口径約 13.4 cm を測る。時期は 14 世紀～16 世紀に比定される。2 は、土師器高台付坏の底部。底径約 6.6 cm を測る。

17SK007 (第 56 図)

調査区西端に位置する土坑で、平面は不整形を呈する。調査区壁に切られるため全容は不明であり、東西径約 0.55 m を測る。遺構からは瓦片が出土し、中世に比定するものと考えられる。

出土遺物 (第 63 図) 1 は、丸瓦の破片。内面に金引き痕が認められる。時期としては中世。

17SK014 (第 56 図)

調査区中央からやや北に位置しており、平面は南東部がやや張り出す歪な隅丸方形を呈する。長径約 1.00 m、短径約 0.80 m を測る。また断面形状は未実測のため不明であり、深さは約 0.60 m を測る。遺構の性格は不明であるが、出土遺物から古代以降に埋没したものであろうと推測される。

出土遺物 (第 63 図) 2 は、内外面条痕文の浅鉢の胴部。3 は、土師器甕口縁部で、口径約 22.6 cm を測る。

4. 小結

第 17 次調査では溝状遺構を中心とする遺構群が検出された。調査区北側に位置する 17SD009 は近世に比定する溝跡であるが、これに並行するかたちで古代に比定される連結土坑 17SA015 が展開している。古代に比定される溝跡 17SD018 に関連するものであろうが、後世の 17SD009 形成時に 17SD018 のラインが踏襲された可能性も考えられる。また、調査区中央付近では南東方向へと下がる傾斜が確認されている。西に位置する第 18 次調査区や北東に位置する第 14 次調査区でも同様に落ちが確認され、当該地周辺の自然地形を実証する上での手がかりとなった。

大道遺跡群第18次調査

1. 調査の概要 (第26図)

調査地は大分市金池南1丁目に所在する。本調査は区画整理地内の宅地造成に伴い、大道遺跡群第17次調査と併行して平成18年8月28日から平成18年9月14日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は約57㎡を測り、大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査の結果、地形の落ちを確認した。

2. 基本土層 (第64図)

現地標高は約6.70 mを測る。調査区を覆っている約0.30 mの表土の茶灰褐色土を除去すると、淡茶褐色土の耕作土層を確認した。耕作土は以下5層までおよそ0.50 mの深さで続いており、この耕作土を除去すると黄茶褐色シルト質土が現れて調査区の安定面(基盤土層)となる。

3. 遺構・遺物

不明遺構 (SX)

18SX001 (第64・65図)

調査区中央付近に位置する不明遺構である。北から南方向へかけてゆるやかな傾斜を保ちながら段状にくだり、調査区外へと延長する。遺構の埋土は暗黒褐色の砂質土および粘質土であり、これは本調査区の北側に位置する第15次調査で確認されたものに類似する。埋土は多量の土器を包含しており、およそ8世紀から9世紀代に比定される。このことから当該遺構は自然地形の落ちにあたり、古代以後に整地等の目的から埋没したものと考えられる。

出土遺物 (第66図) 1は、土師器蓋。2は、土師器環で口縁部端部が外反し、先端部は丸みを帯びる器形で口径約12.9 cmを測る。

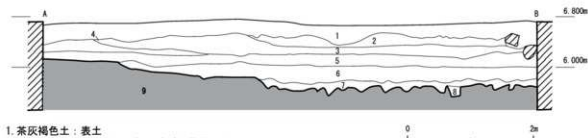
3は、土師器環で、胴部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部端部は丸く仕上げるもので口径約11.2 cmを測る。

4は、土師器環で、胴部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部端部は丸く仕上げるもので、口径約16.2 cmを測る。

5は、高台付き杯の底部で、底径は8 cmを測る。

6は、須恵器蓋で、口縁部に沈線状の窪みを持つタイプで、口径約12.4 cmを測る。

7は、須恵器環口縁部。8は、須恵器高台付き杯の底部で、底径は7.8 cmを測る。9～11は、企救型甕の口縁部。



1. 茶灰褐色土：表土

2. 茶褐色粘質土（粒子の粗い砂が少量混入する）

3. 灰茶褐色砂質土（粒子の粗い砂が多量に混入、鉄分の沈着が見られる）

4. 褐茶褐色粘質土（しまりが強い、粒子が粗い砂少量混入）

5. 灰褐色粘質土（粒子が粗い砂が層上位に堆積、鉄分の沈着が見られる）

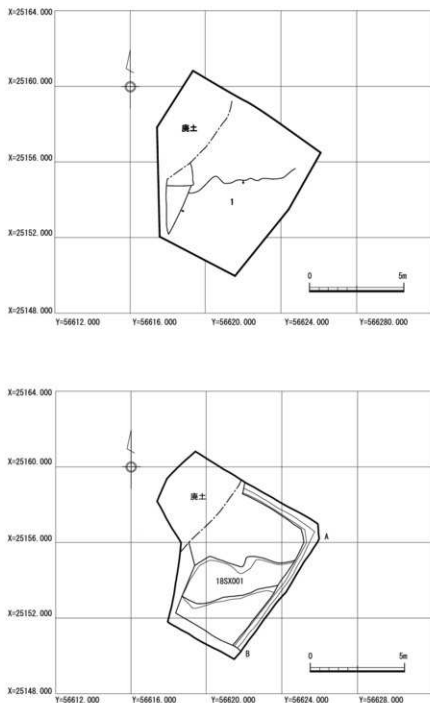
6. 黒褐茶灰色砂質土（しまりがやや強い、鉄分の沈着が見られる、小礫（1mm大）が混入、粒子の粗い砂が多量に混入）

7. 黒褐茶灰色粘質土（粒子の粗い砂が少量混入、小礫（2～4mm大）を多量に混入）※6・7層はSX001埋土

8. 黒褐色粘質土

9. 黄茶褐色シルト質土

第64図 大道18次調査区東壁土層断面実測図 (1/60)

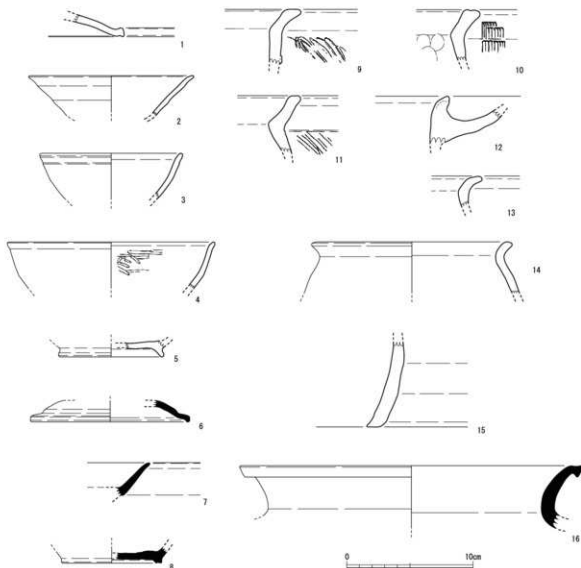


第 65 図 大道 18 次調査遺構配置図・平面図 (1/200)

12 は、口縁部外面に把手を持つタイプで、鍋または鉢と考えられる。13 は、土師器甕口縁部。
 14 は、土師器甕で頸部から口縁部に「く」の字状に外反する器形で、口径約 15.0 cm を測る。
 15 は、甕の底部。内外面にぶい黄橙色を呈し、内外面ナデ調整。16 は、須恵器甕口縁部で、口径は約 27.2 cm を測る。1 ～ 16 の遺物は、いずれも 8 世紀末から 9 世紀初頭の時期に該当するものである。

4. 小結

本調査では自然地形の落ちにあたる部分を確認した。落ちは南東方向へ向かうゆるやかな傾斜をなしており、同様の傾斜は隣接する第 17 次調査区および第 14 次調査区からも確認されており、他の遺構が検出されないことから本調査区が遺跡内の東南端部であることが想定される。加えて土層観察からは 18SX001 の下層である 7 層に攪拌の痕跡が顕著に見えており、当該地の水田利用を強く印象づける。18SX001 が、北から南東方向への地形的な落ちを利用した水田である可能性を想起させるものといえる。



第 66 図 18SX001 出土遺物実測図 (1/3)

第3節 大道遺跡群第16次・第19次・第22次・第25次調査

概要

第3節においては第16次・第19次・第22次・第25次調査の説明を行う。同地は本報告書で紹介する調査区のちょうど中央部に位置しており、旧地形における微高地上に位置するものである。

第3節において最も古いものとしては第22次調査区の土坑22SK031である。弥生時代前期から中期に比定するものとして挙げられるが、遺構の性格は不明であり、これに続いて弥生時代後期に比定される大型溝状遺構19SD020と弥生時代後期～末に比定される溝状遺構16SD003・22SD014・19SD029が検出され、後者については第26図で示した地形想定線とほぼ同じ角度で展開する。19SD020からは水性堆積が認められ、当該期の集落が水路を伴うものであった可能性が考えられる。

古墳時代の遺構のなかで特徴的なものに22SX005が挙げられる。方形周溝を呈するもので墳墓遺構の可能性をもつが、周囲に同様の遺構は確認できず、また遺物も僅少であることから詳細は不明である。古墳時代の遺構としては溝跡のほかに戸井状遺構4基と土坑5基が出土しており、主に第22次調査区からの検出が多くあった。遺構上面の多くは削平を受けており、一定の深度をもった遺構の一部が残存する状況であると考えられる。

古代の遺構としては区画溝と考えられる溝状遺構および掘立柱建物跡が検出されている。本調査で確認された建物跡は一部に柱材を残す19SB005の1棟のみであり、遺構の南西部から同様の建物跡は検出されなかった。第19次・第25次調査区の北側はいまだ調査が成されておらず、こちらに当該期の遺構が展開する可能性が残されている。溝状遺構は弥生時代の溝跡の東側に沿うかたちで配置しており、弥生時代の地割を踏襲、あるいは拡張したものと推定される。

中世・近世にかけての遺構は第16次・第25次調査区に集中するかたちで確認できる。近世において17世紀前半に実施された初瀬井路の整備により、微高地を含む大道遺跡群内の水田化が行われるにつれて形成された溜井遺構や、灌漑用水路となる溝状遺構が主に確認されている。大道遺跡群内では他の調査区からも同様の遺構が確認されているが、25SX010は機能時期が中世に特定できるものであり、近世の整備以前から水利施設を伴う区画であった可能性が想定できる。

本調査区において確認された溝跡は時代が異なるにも関わらずほぼ同様の振り幅であり、古くからのラインを踏襲した痕跡がうかがえるものである。当該地において、弥生時代以前に形成されたラインが古墳時代や古代になるとそれに沿うようなかたちで徐々に拡張され、中世・近世段階に水田化する際に前段階のラインの一部を継承しつつも新規の区画ラインを形成していったものと考えられる。

また、今回確認された古墳時代に比定される周溝遺構や古代に比定される掘立柱建物跡は、周囲の状況および出土遺物が僅少であるため詳細の判明には至らず、今後、集落部分にあたと想定される第25次調査区の北西部分における調査実施によって当該地における集落の様相が判明されることが期待される。

以下、調査回数ごとに述べる。



第 67 図 第 3 節調査区配図 (1/400)

大道遺跡群第16次調査

1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内街路整備事業に伴い、平成18年10月27日から平成18年12月15日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は683㎡を測り、大道遺跡群内の南に位置している。調査の結果、弥生時代から近世にかけての遺構群を確認している。

2. 基本土層（第68図）

調査区は西壁土層を基本層位とする。表土面である黒茶黄褐色土（1層）を除くと、近世の水田層である（3層）が確認できる。その下層には0.10m程の厚さで埋積する淡黒灰褐色土（5層）があり、基本として遺構は黒灰褐色土（6層）上面からの検出を見せる。遺構検出面の標高は約6.00mである。

3. 遺構・遺物

溝状遺構（SD）

16SD001（第69図）

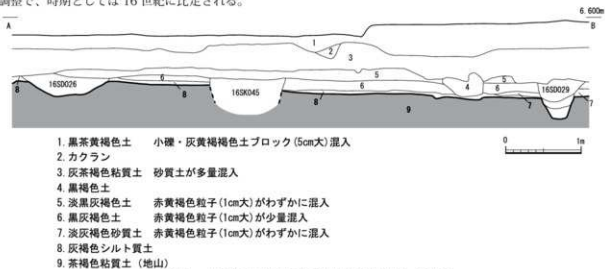
調査区中央から南東方向に延びる溝跡で、区外へと続くため全容は不明である。近世に比定される遺構である16SD030、16SK035、16SE040を切っており、幅約0.65～0.80mを測る。出土遺物から帰属年代は近世と考えられる。

出土遺物（第72図） 1は、白磁碗底部。畳部分のみ露胎で18世紀以降の伊万里産陶磁器。2は、鉄製品で馬の足につける蹄鉄。時期としては、近世に比定される。

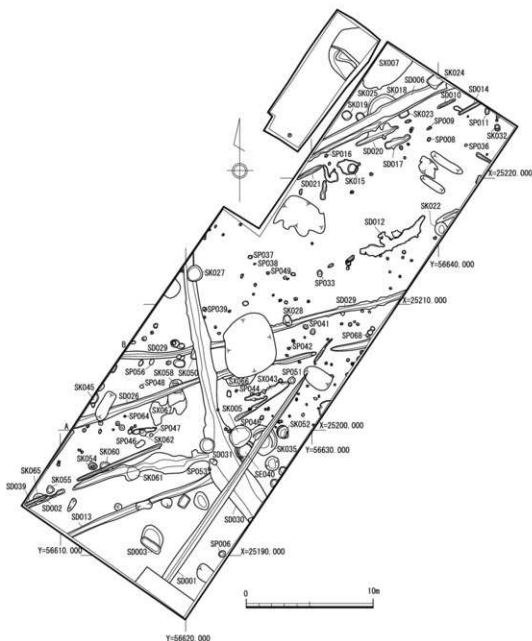
16SD002（第69図）

調査区南西端に位置する溝跡である。区外へと延びるため全容は不明であるが、遺構からは備前焼大口縁や瓦質鉢などが出土しており、近世に比定する遺構と考えられる。

出土遺物（第72図） 3は、備前焼大口縁部。4は、瓦質土器鉢の口縁部。内面ハケメ、外面ハケメ後ナデ調整で、時期としては16世紀に比定される。



第68図 大道16次調査区西壁土層断面実測図 (1/50)

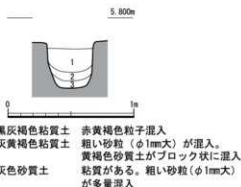


第 69 図 大道 16 次調査遺構平面図 (1/300)

16SD029 (第 69・70 図)

調査区の中央を東西に走り、断面逆台形を呈する溝跡である。幅約 0.40 m を測り、溝の両端は区外へと延長する。東端は 22SD014 と接続するが、西端は確認できなかった。埋土は 3 層を確認し、粘質と砂質の水性堆積が認められることから、水路として使用されたものである。縄文土器片が出土している。古墳時代に比定される 16SK028 に切られることから、それより以前に機能していたと想定される。

出土遺物 (第 72 図) 5～7 は、縄文土器鉢胴部。内外面ともに二枚貝による貝殻痕調整。時期は縄文時代後期と考えられる。

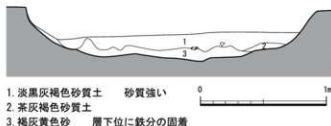


第 70 図 16SD029 土層断面実測図 (1/30)

16SD030 (第69・71図)

6,200m

調査区中央を南東から北西方向に、区外へと延びる溝跡で、幅約2.75 mを測る。断面は浅めの逆台形状を呈し、遺構中央で南西方向への分岐が確認できる。埋土は5層確認できており、流水・溜水の状況は認められない。区画に伴う溝として使用されたと考えられる。遺物は京都系土師器、備前焼鉢、唐津・肥前



第71図 16SD030土層断面実測図(1/30)

系陶磁器などが出土しており、遺構の所属年代は16世紀後半から17世紀初頭ごろと推測される。

出土遺物 (第72図) 8～12は京都系土師器環口縁部。10の胎土は雲母・白色粒子を含み、内外面ナデ調整で、口径は約8.2 cmを測る。11も内外面ナデ調整で口径は10.7 cmを測る。

12はやや大きめのタイプで、口径は約14.6 cmを測る。13は防長系瓦質土器鍋の脚部分。鼎状に脚部がつく物である。14、15は、備前焼鉢の口縁部。14は揃り目が4本確認できる。

16は中国産染付で蓮子碗の口縁部。17は中国景德鎮窯産白磁皿の口縁部で、口径約12.4 cmを測る。

18は中国漳州窯磁器皿の底部で、見込み部分に1本の回線があり、その中に花卉文が描かれている。畳付部分は露胎。19は唐津焼碗底部。見込み部分と底部に、砂目が多量に付着している。また、外面底部は露胎。17世紀初頭。20は備前焼大甕の口縁部。21は備前焼鉢の底部で、揃り目が11本観察できる。

22は土製灯火具で、坏部が欠失しているため、全形は不明であるが、やや細身に造られている。また、京都系土師器と類似するような、白っぽい色調の精良な胎土である。穿孔内部にロウソクを立てる木片が残っている。

23の土鍾は紡錘形を呈するもので、口縁部が欠損しているが、長さ4.7 + a cm、幅1.4 cm、口径約0.6 cmを測る。重さ約8.2 gを量る。16SD030の時期は、砂目積みの唐津焼碗が認められることから17世紀初頭と考えられる。

土坑 (SK)

16SK005 (第69図)

調査区南に位置し、近世に比定される16SD030・16SK035を切る土坑である。平面隅丸方形および断面逆台形を呈しており、長径約1.80 m、短径約1.50 mを測る。土層はブロックを含む粘性暗褐色土が確認されており、廃棄土坑と考えられる。埋土からは近世に比定される染付皿が出土し、他の遺構との切り合い関係から18世紀中頃に帰属する可能性が高い。

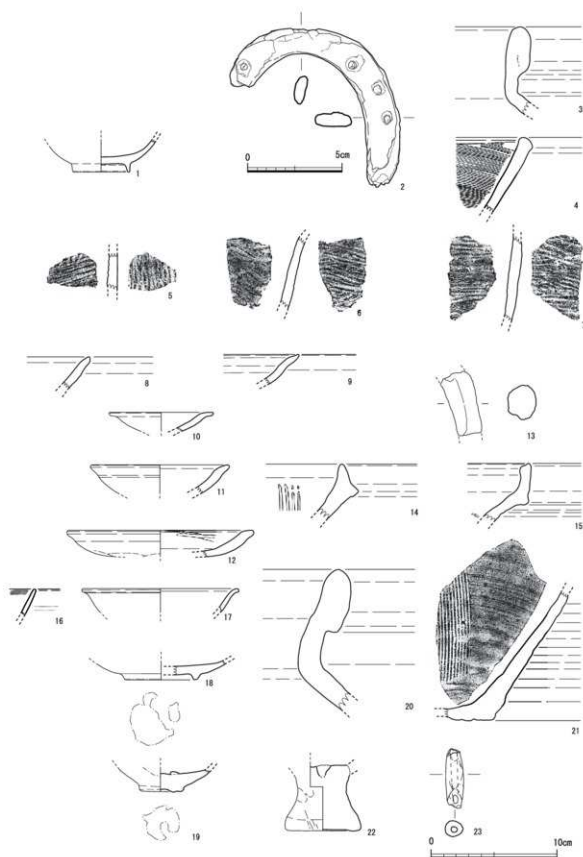
出土遺物 (第76図) 1は、染付磁器皿で、口径約12.8 cm、器高2.9 cm、底径約7.1 cmを測る。肥前産で18世紀中頃に比定される。3は、キセルの吸い口部分。

16SK015 (第69図)

調査区北西部に位置する土坑で、歪な円形平面プランを呈す。南北長約1.10 m、東西長約1.50 mを測る。埋土中からは弥生土器や瓦質鉢などが出土しており、埋没時期は中世以降と考えられる。

出土遺物 (第76図) 2は、瓦質の鉢底部で、揃り目が5本認められる。時期は中世。

4は、鉄製の釘で形状は角形をしており長さ4.5 cmで重さ2.5 gを測る。5は、弥生土器で下城式の裏口縁部である。口縁部下に刻み目突帯を2条巡らす。



第72図 16SD001・002・029・030 出土遺物実測図 (2は1/2、その他1/3)

16SK022 (第69図)

調査区北西部に位置する土坑である。遺構の西側は調査区壁にかかっており、残存径約0.80 m、南北長約1.00 mを測る楕円形の平面プランを呈す。埋土からは古墳時代に比定される土師器甕が出土しており、遺構が埋没した時期に相当するものと考えられる。

出土遺物 (第76図) 6は、土師器高環で坏部は内湾ぎみに外反し、脚部は短い。胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で口径13.8 cm、器高約7.6 + α cmを測る。時期は、古墳時代初頭。

7は、土師器甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部はハケメ、体部はケズリ後ナデ、外面口縁部はナデ、体部外面はハケメ調整で口径13.1 cm、器高約20.9 cmを測る。外面に煤付着が認められる。時期は古墳時代初頭。

16SK028 (第69・73図)

調査区の中央に位置し、16SD029を切る土坑である。長径約0.93 m、短径約0.66 mを測り平面楕円形を呈す。断面形状はやや歪な逆台形を呈する。遺構からは古墳時代の土師器甕・壺・高環などが出土した。埋没時のものと推測される。また、高環は完形で出土しており、埋納を目的とした可能性も考えられる。

出土遺物 (第76・77図) 8は土師器高環。胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で口径13.2 cm、器高約12.9 cm、底径11.4 cmを測る。

9は土師器小壺で、口縁部内面に1本の窪みが認められる。胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面赤褐色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ調整で口径11.5 cm、器高約16.9 cmを測る。外面に煤付着が認められる。

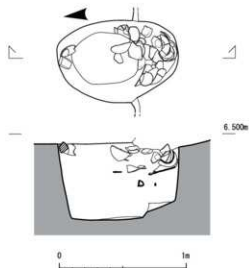
10は土師器甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は石英・雲母・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部はハケメ、体部はケズリ後ナデ、外面口縁部はナデ、体部外面はハケメ調整で口径16.3 cm、器高約25.7 cmを測る。外面に黒斑が認められる。

11は土師器複合口縁壺。口縁部は、逆「く」の字状を呈する。胎土は石英・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面暗赤褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ケズリ、外面口縁部はナデ、体部外面はハケメ調整で口径15.0 cm、器高約18.8 + α cmを測る。

12は土師器高環坏部で、胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は橙色を呈し、内面口縁部はハケメ、体部はケズリ後ナデ、外面口縁部はナデ、体部外面はハケメ調整で、口径は13.8 cmを測る。外面に黒斑が認められる。

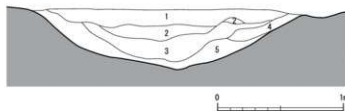
13は土師器甕胴部で、内面ケズリ、外面ハケメ調整である。古墳時代初頭の時期と考えられる。

14は土師器甕で口縁部は内湾状に外反する。胴部は、やや丸みを帯びる器形で、胎土は石英・雲母・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面赤褐色、外面淡黄褐色～明赤褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ケズリ、外面はハケメ調整で口径14.8 cm、器高約19.1 cmを測る。外面全体に煤の付着が認められる。布留系の甕であるが、内面にハケメ調整が施されるなど在地の技法も見られる。16SK028の遺物の時期は古墳時代初頭に該当する。



第73図 16SK028 平面・断面実測図 (1/30)

6.200m



- | | |
|-------------|--------------------------------------|
| 1. 灰黒色粘質土 | 砂質土が混入。層下位に鉄分の固着が見られる。
粒子の粗い砂粒が混入 |
| 2. 茶灰色砂質土 | |
| 3. 黒灰褐色砂質土 | |
| 4. 黒灰褐色砂質土 | 3層より暗い |
| 5. 淡灰黒褐色砂質土 | 層全体に鉄分の集積が見られる |

第74図 16SK035 土層断面実測図 (1/30)

16SK035 (第69・74図)

調査区中央から南に位置する土坑である。遺構上面を 16SD001 に、西端部を 16SK005、16SE040 に切られている。残存する平面は長径約 2.31 m、短径約 1.90 m を測る隅丸方形であり、断面形状は深さ約 0.21 m の浅い段状を呈する。出土遺物から近世に帰属する遺構と考えられる。

出土遺物 (第77図) 15 は白磁の花皿口縁部。口縁部が細く伸びるタイプで、長さ 4.9 cm を測る。

16 は肥前産染付の紅皿である。時期は、18 世紀中頃に比定される。

17 は肥前産染付碗の底部。底部外面に 4 本の回線が描かれ、スタンプ文の文様を描いている。18 世紀後半代。

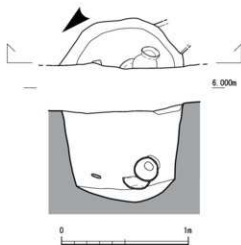
18 は肥前産染付鉢の蓋。外面に草花文が描かれている。時期は、18 世紀代に比定できる。

19 は関西系陶器の土瓶の蓋である。時期は、18 世紀後半代と考えられる。20 は軒平瓦の瓦当部。3 単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦である。府内城三ノ丸遺跡で出土している瓦分類表の E-3 類に該当する。18 世紀代。21 は 18 世紀前半頃～中頃の丹波系陶器描鉢底部。内面全体に描り目が認められる。16SK035 の時期は、江戸時代の 18 世紀中頃～後半代と考えられる。

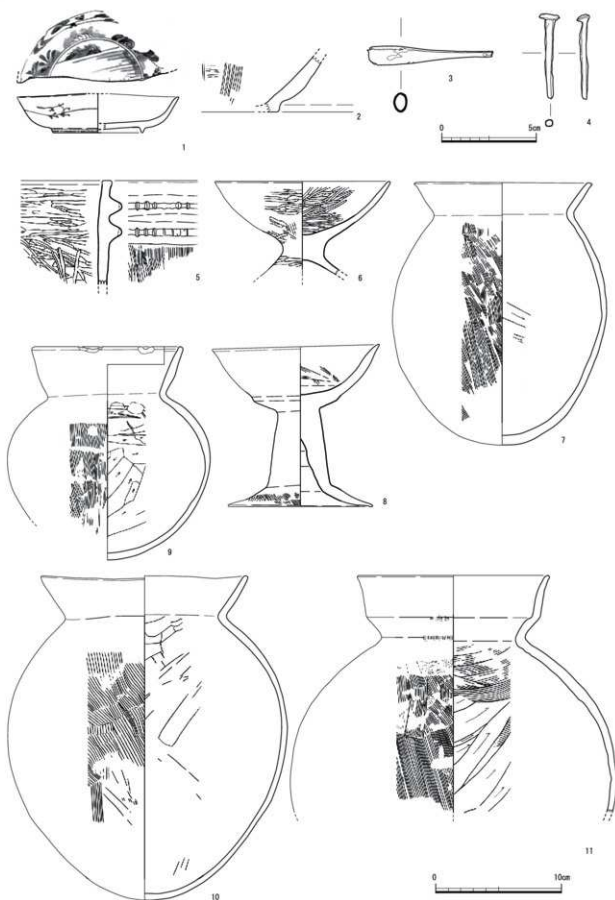
16SK045 (第75図)

調査区南西部に位置し、西壁より区外へと延長する土坑である。平面は楕円形、逆台形の断面形状を呈する。残存径は長径約 0.98 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.72 m を測る。底部は砂層であり、湧水も認められることから土坑ではなく素掘井戸である可能性が高い。なお底部からはほぼ完形の土師器甕が出土しており、古墳時代に帰属する遺構と考えられる。

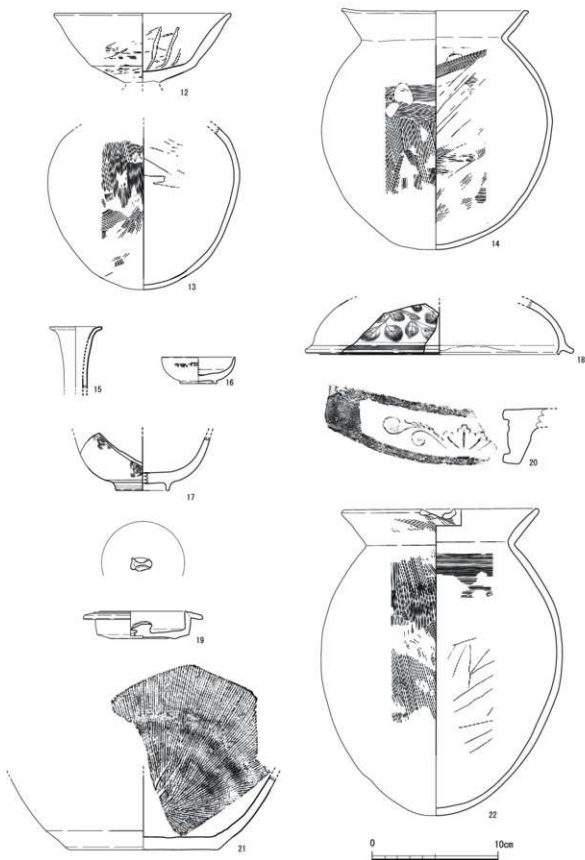
出土遺物 (第77図) 22 は、土師器甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は橙色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ケズリ、外面はハケメ調整で口径 15.3 cm、器高約 24.4 cm を測る。外面全体に煤の付着が認められる。



第75図 16SK045 平面・断面実測図 (1/30)



第76図 16SK005・015・022・028 出土遺物実測図 (3、4は1/2、その他1/3)



第77図 165K028・035・045 出土遺物実測図 (1/3)

16SK050 (第78図)

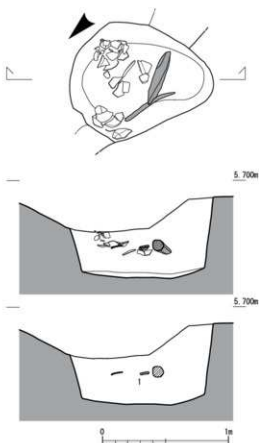
調査区のほぼ中央に位置し、東側を 16SD030 に切られる土坑である。残存径は南北約 1.14 m、東西約 0.95 m、深さは約 0.64 m を測る。埋土は黒褐色粘質土の単一層であり、遺物は複合口縁壺・土師器甕などが出土している。帰属年代は古墳時代前期と推測される。

出土遺物 (第80・81図) 23 は土師器複合口縁壺で、口縁部は、逆「く」の字状を呈する。胎土は石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部はナデ、外面口縁部は粗い波状文がみられる。頸部に断面三角形の突帯を巡らす。口径約 19.4 cm を測る。

24 は安国寺式複合口縁壺で、口縁部は逆「く」の字状を呈する。胎土は石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部はハケメ後ナデ、外面口縁部は波状文、頸部～胴部はハケメ調整がみられる。頸部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。口径約 16.0 cm を測る。頸部内面に指頭圧痕がみられる。

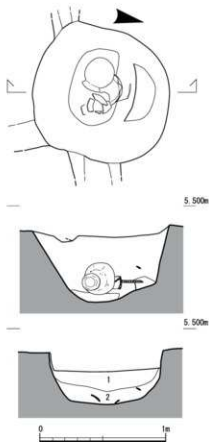
25 は土師器壺で、口縁部が長めに外反し、胴部もやや丸みを帯びる。胎土は石英・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面明褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はケズリ、外面ナデ調整で、口径は約 15.0 cm を測る。

26 は在地系土師器甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面赤色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ、外面はハケメ調整で口径 14.5 cm、器高約 21.1 cm を測る。外面全体に煤の付着が認められる。27 は在地系甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は角



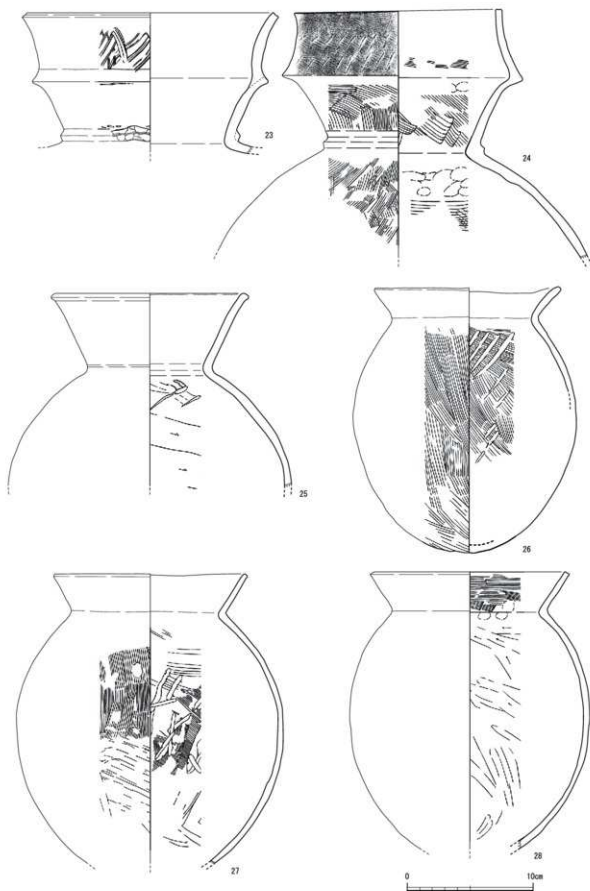
1. 黒褐色粘質土 淡黒灰褐砂質土がわずかに混入

第78図 16SK050 平面・断面・土層断面
実測図 (1/30)

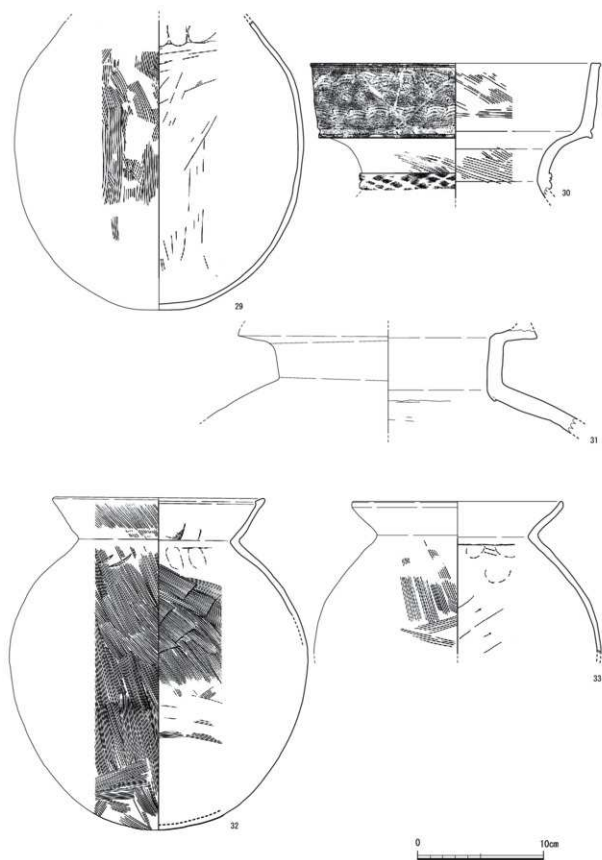


1. 暗灰色粘質土 しまりよい
2. 暗灰褐色粘質土 基底部にやや砂が混入、遺物包含層

第79図 16SK058 平面・断面・土層断面
実測図 (1/30)



第 80 図 16SK050 出土遺物実測図 (1/3)



第81図 16SK050・058 出土遺物実測図 (1/3)

閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面にぶい褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ケズリ後ミガキ、外面はナデ、体部はハケメ・ケズリ後ナデ調整で口径 15.1 cm、器高約 25.0 + a cm を測る。外面胴部に煤の付着が認められる。

28 は、27 と同じような器形を有するが、外面ナデ、内面ケズリ調整と布留系を意識した造り方である。口径は、約 15.1 cm を測る。29 は土師器壺胴部で、内面ケズリ、外面ハケメ調整である。16SK050 の時期は、古墳時代初頭と考えられる。

16SK058 (第 79 図)

調査区中央からやや南西に位置する土坑である。中央を 16SD026 によって切られており、平面は長径約 1.19 m、短径約 1.04 m、深さ約 0.42 m を測る。平面形は不整形を呈し、断面形状は歪な逆台形を呈する。埋土は暗灰色粘質土と、底部に砂が混じる暗灰褐色粘質土の層を確認している。下層（暗灰褐色粘質土）からは土師器甕や安国寺式の複合口縁部が出土しており、遺構の埋没時期は古墳時代前期ごろと推測される。

出土遺物 (第 81 図) 30 は土師器壺口縁部である。口縁部外面に波状文を施した安国寺式であるが、口縁部形態は内傾ではなく立ち上がり気味である。また、頸部に刻み目突帯 1 条を巡らす。口径は約 23.0 cm を測る。

31 は土師器壺の頸部～胴部であるが、畿内 5 様式と考えられるものである。32 は土師器甕で口縁部は、やや内湾気味に外反する。器形は布留系の形を意識しているが作り方は在地系である。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色～黄褐色、外面褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ナデ、外面はハケメ調整で口径 16.5 cm、器高約 26.4 cm を測る。内面頸部に指頭圧痕が、外面胴部に煤の付着が認められる。

33 は土師器甕で布留系である。胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み色調は内外面褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はケズリ、外面口縁部はナデ、体部は、ハケメ調整で口径 16.6 cm を測る。外面胴部に煤の付着が認められる。16SK058 の遺物も古墳時代初頭の時期と考えられる。

ビット (SP)

16SP008 (第 69 図)

調査区北に位置する。長径約 0.30 m、短径約 0.24 m の楕円形を呈するビットで、埋土中からは土製の紡錘車が出土している。

16SP056 (第 69 図)

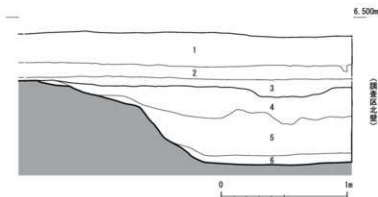
調査区中央よりやや西に位置する。長径約 0.60 m、短径約 0.30 m の楕円形を呈するビットである。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は縄文土器浅鉢片の出土が認められたが、これは下層である旧石器時代の包含層の遺物である可能性が高く、帰属年代の詳細は不明である。

出土遺物 (第 84 図) 16 は、弥生早期下黒野式土器の浅鉢口縁部。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面明褐色、外面褐色を呈し、内面ナデ、外面はナデ後ミガキ調整で、口縁部を形成するときの指頭圧痕が認められる。

性格不明遺構 (SX)

16SX007 (第 82 図)

調査区北西端に位置する。区外へと延びるため全容は不明である。現状では南北約 3.86 m、東西約 2.40 m を測り、平面楕円形、断面は浅い段掘り状を呈する。埋土は砂質と粘質の堆積を交互に繰り返しており、調査区の北側に位置する 25SX010 と同様の性格をもつ溜井のような施設であった可能性が高い。京都系土師器・備前焼・



- | | |
|-------------|--------------------------------------|
| 1. 淡茶褐色土 | 砂質土が混入、黒褐色土ブロック1/5程度混入
(表土・耕作土) |
| 2. 灰褐色粘質土 | やや砂質(水田層) |
| 3. 茶褐色粘質土 | 黄灰褐色土粒子を多量に混入 |
| 4. 黒褐黄灰色粘質土 | 黒褐色粘質土と黄灰褐色土と青緑灰褐色土の混土层
砂質土が多量に混入 |
| 5. 淡茶灰褐色粘質土 | 泥質がある、有機物が少量混入、粗い砂粒混じる |
| 6. 淡茶灰褐色砂質土 | 粗い砂粒を多く含む |

第82図 16SX007 土層断面実測図 (1/30)

唐津焼などが埋土中に含まれており、帰属年代は17世紀初頭ごろと考えられる。

出土遺物 (第83・84図) 1は萩焼陶器碗。置付部分は露胎で、底径約4.8cmを測る。

2は唐津焼皿の底部で、外面底部付近露胎で底径約3.6cmを測る。

3は唐津焼碗の底部で、内面見込み部に砂積み痕が認められる。内面施釉、外面露胎で、底径は4.4cmを測る。

4は肥前染付皿口縁部。口径約14.0cmを測るもので、17世紀中頃～後半代か。

5は中国景德鎮窯系青花皿底部で、底径約5.8cmを測る。

6、7は京都系土師器環口縁部で、6の口径は、約10.6cmを測る。

8は刷毛目で文様が描かれた肥前陶器皿口縁部。時期は、18世紀前半代。

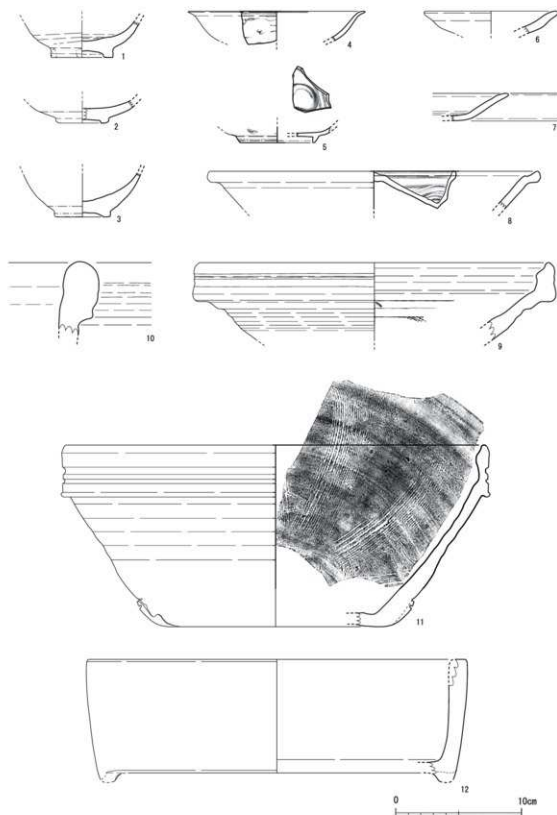
9は備前焼播鉢口縁部で、口径約27.6cmを測る。

10は備前焼大甕の口縁部。11は備前焼播鉢。色調は、内外面にふい赤褐色を呈し、口径約33.0cm、器高14.4cm、底径約17.0cmを測る。刷毛目単位は、9本である。

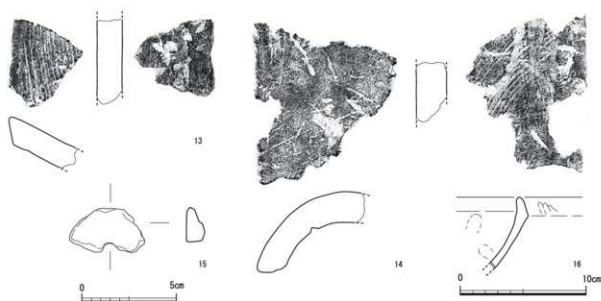
12は瓦質土器の火鉢。胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面灰色を呈し、内外面工具ナデ、調整で口径約29.8cm、器高約9.8+αcm、底径約27.0cmを測る。時期は、17世紀前半代。

13は平瓦の破片。14は丸瓦の破片。製作技法を見ると17世紀代か。

15は土製品で形は紡錘車をかたどっているが、用途不明。最大幅3.6cm、孔径約2.3cmを測る。時期としては、17世紀代と考えられる。



第 83 図 16SX007 出土遺物実測図 (1/3)



第84図 165X007・SP024・056出土遺物実測図（15は1/2、その他1/3）

4. 小結

本調査区では弥生時代から近世にかけての土坑、溝状遺構、性格不明遺構を確認した。

弥生時代の遺構として溝状遺構1条が確認されている。両端とも調査区外へ延長するが、西側は大道遺跡群第22次調査と隣接しているため続きを確認することができる。

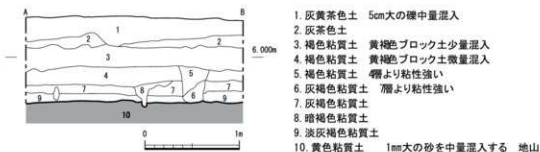
古墳時代の遺構としては底部に当該期の遺物を含む土坑が5基と性格不明遺構1基が確認されており、土坑中には素掘井戸と考えられるものも含む。土坑は深さ1.00mを切っているが、後世の削平をうけたものと考えられ、同地が当該期の集落の範囲に含まれていたことが確認できた。

近世の遺構では区画及び流路である溝4条と溜井と考えられる性格不明遺構1基、他多数の土坑を確認している。これら水利に伴う遺構群は北に隣接する大道遺跡群第25次調査区からも同様に確認されている。このことから同地では少なくとも中世段階、あるいはそれより前段階から水利施設を継続して使用し、徐々に規模を拡大していった経緯が推測される。

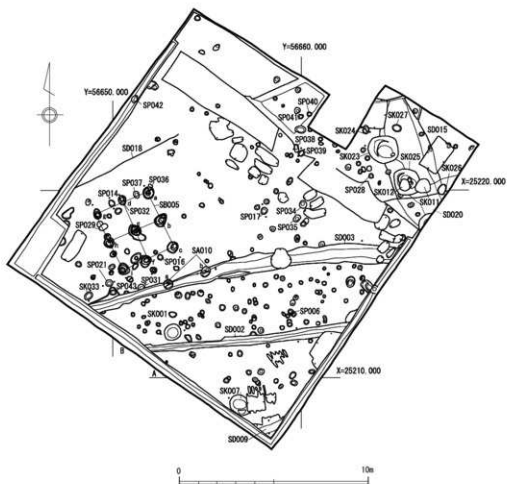
大道遺跡群第 19 次調査

1. 調査の概要

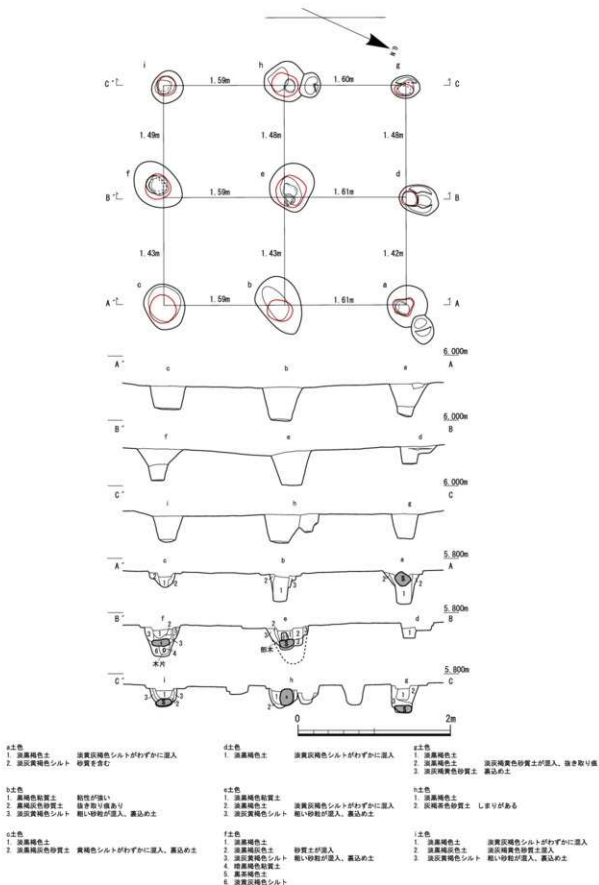
調査地は大分市金池南 1 丁目に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内街路整備事業に伴い、平成 18 年 9 月 15 日から平成 18 年 11 月 8 日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は約 306 m²であり、当該地は大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査の結果、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など弥生時代から近世にかけての遺構群を確認している。



第 85 図 大道 19 次調査区南壁土層断面実測図 (1/40)



第 86 図 大道 19 次調査遺構平面図 (1/200)



第 87 図 19S8005 平面・断面・土層断面実測図 (1/50)

2. 基本土層 (第85図)

調査区は南壁土層を基本層位とする。客土である灰黄茶色土(1層)および灰茶色土(2層)を除くと黄褐色ブロックを含む褐色粘質土(3・4層)が検出され、およそ0.40mの褐色粘質土の下部から灰褐色粘質土～淡灰褐色粘質土の安定面(7・9層)が現れる。土層観察から遺構は第4層上位より確認できたが、調査区内の遺構検出状況から安全面である第7層での検出が確実であると判断した。安全面である第7層(灰褐色粘質土)の標高は約5.70m、本来の遺構面である第4層(褐色粘質土)の標高は約5.90mを測る。

3. 遺構・遺物

建物(SB)

19SB005 (第86・87図)

調査区南西に位置する総柱建物跡である。南北2間×東西2間、身舎面積は約11.50㎡の規模を測り、柱間の総距離は桁行約3.20m、梁行約2.90mを測る。柱間は桁平均1.60m、梁平均1.45mと若干の差異が見られ、建物の主軸方向はN-24°62'-Wである。



第88図 19SB005 出土遺物実測図(1/3)

柱穴は長軸0.44～0.70m程度の不整円形を呈しており、深さは0.20～0.50mを

測る。全9基の内6基の底部に根締め石と思われる平石が確認できており、SB005-eからは礎石の上に柱材が直立した状態で出土している。柱となる木材の種類は不明であるが、柱材上部は均等な高さで丸みを帯びたもので、柱材を切斷・加工したうえで埋め戻した可能性も考えられる。この柱穴からは古代に比定される六連島式製塩土器口縁部が出土している。このことから建物跡は古代に比定される遺構であると考えられる。

出土遺物 (第88図) 1は、製塩土器口縁部。型作りで、六連島式と称されるものである。内面に布目痕が残るもので、口縁部はヘラ切り調整である。

2は、土師器環の口縁部で内外面ミガキa2が施されている。口径は約14.7cmを測る。

3は、土師器環の口縁部で、内外面ナデ調整である。

4は、土師器環底部。底部は手持ちヘラ切りで、内面はナデ調整である。底径約10.4cmを測る。

1～4の遺物は8世紀中頃～9世紀初頭に比定されるものである。

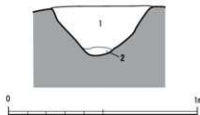
6.000m

溝状遺構(SD)

19SD002 (第89図)

調査区の南に位置し、北東方向から南西方向へと延長する溝跡である。溝の両端は区外へと続き、残存東西長約10.20mと南北幅約0.28mを測り、溝の西端は隣接する22SD013と接続する。深さは約0.28mを測る。埋土は黒褐色土と淡黄褐色茶色砂質土の2層を検出したが、水性堆積が確認できる。古代に比定される土師器の裏が出土しており、少なくとも8～9世紀段階には機能していたものと考えられる。

出土遺物 (第91図) 1は、弥生土器裏口縁部。2は、弥生土器裏口縁部。図化できるのは弥生土器裏口縁部であるが、古代に比定できる土師器環



1. 黒褐色土(砂質土がわずかに混入)
2. 淡黄褐色茶色砂質土
(φ1mm大の砂粒が少量に混入)

第89図 19SD002 土層断面
実測図(1/20)

片、製塩土器破片が出土しており、遺構の時期は古代と考えられる。

19SD018 (第86図)

調査区の北に位置し、北東方向から南西方向へと延長する溝跡である。染付片などが出土しており、近世に造成された区画溝と考えられる。

出土遺物 (第91図) 3は、古代に比定できる製塩土器の底部であるが、近世の肥前染付けの破片が見られ、時期としては近世と考えられる。

19SD020 (第86・90図)

調査区北東に位置し、南北方向へと延びる溝跡であるが、調査区北壁と東壁からは区外へと延びるため全長は不明である。現存長約7.34m、幅約2.64mを測る。断面形状は東へ向かって深くなる不整逆台形であり、深さは最深で約0.62mを測る。埋土は全体で10層を確認し、土層観察からは滞水の状況は確認できなかった。また、堆積状況より最低でも1回の掘り返しながされた状況が確認できる。遺構上面にあたる黒褐色粘質土(1・2層)と黒灰褐色砂質土(6層)からは弥生土器がそれぞれ出土しており、遺構の最終的な埋没時期は弥生時代後期以降であると考えられる。

出土遺物 (第91・92図) 4は、東北部九州系竪口縁部で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面浅黄褐色を呈し、内外面ナデ調整で、口径約26.8cmを測る。

5は、東北部九州系甕で、器壁は薄い。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面浅黄褐色を呈し、内ナデ、外面口縁部ナデ、胴部ハケメ調整で、口径約25.6cmを測る。

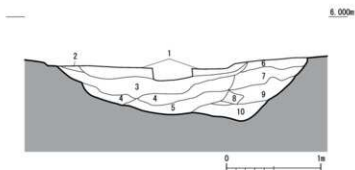
6は、東北部九州系甕底部で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子・黒色粒子を含み、色調は内面褐色、外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で、底径6.2cmを測る。外面に煤付着が認められる。

7は、角閃石安山岩製の蔵石と思われるもので、幅10.7cm、径7.2cm、重さ700gである。ただし、この石はかなり被熱を受けていることから、支柱石など別の用途も考えられる。この溝の時期は弥生時代中期に比定される。

8～28は遺構上層(黒褐色灰土)からの出土遺物。8は須玖式甕の口縁部で、頸部下に断面三角形の貼り付け突帯を1条巡らす。口径約23.0cmを測る。9は弥生土器甕底部で、底径約5.4cmを測る。8・9は、弥生時代中期の遺物であり19SD020の溝に付属するものである。

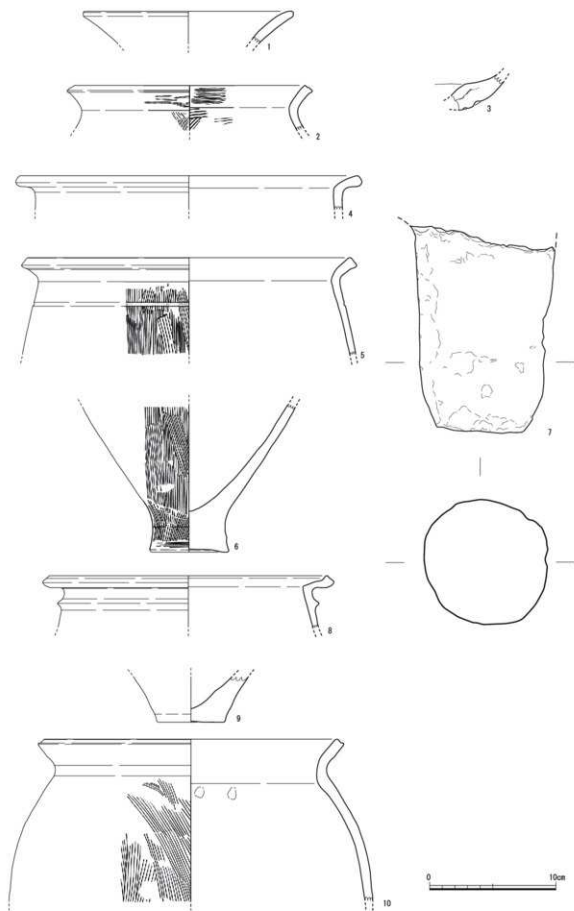
10は弥生土器甕で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で、口径約23.0cmを測る。外面に煤付着が認められる。

11は弥生土器甕で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色、外面灰黄褐色を呈し、

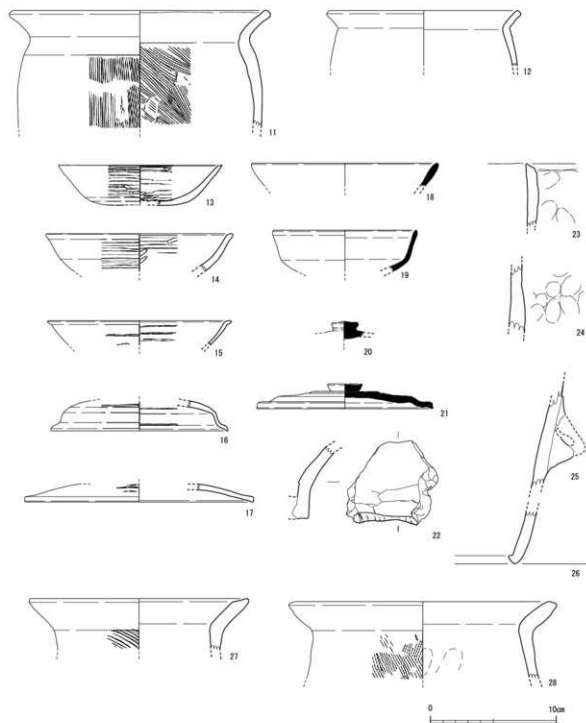


1. 褐色粘質土(赤黄褐色粒子φ5mm大が少量混入)
2. 黒褐色粘質土
3. 淡灰黒褐色砂質土(粘質がある・淡黄褐色粒子が少量混入)
4. 淡灰黒褐色砂質土(粘質がやや強い・粒子の粗い砂粒が少量に混入する)
5. 灰黒褐色砂質土(φ0.1mm大の砂粒が非常に少量に混入・φ5mm大の赤黄褐色粒子がわずかに混入)
6. 黒灰褐色砂質土—1層より深い
7. 淡灰褐色シルト質土
8. 淡灰黒褐色砂質土
9. 淡灰白褐色砂質土
10. 灰褐色砂質土

第90図 19SD020 土層断面実測図 (1/40)



第 91 図 19SD002・018・020 出土遺物実測図 (1/3)



第 92 図 195D020 出土遺物実測図 (1/3)

内外面ナデ調整で、口径約 20.2 cm を測る。10・11 は弥生時代後期と考えられることから、195D020 を切って構築された 19SK015 に帰属すると考えられる。

12 は土師器甕口縁部で、胎土は石英・長石・角閃石を含み、色調は内面明褐色、外面橙色を呈し、内外面ナデ調整で、口径約 14.8 cm を測る。12 は、195D020 を切って構築した 19SK015 に帰属すると考えられる。

13 は土師器環で、口縁部先端をやや尖り気味に仕上げる。胎土は、石英・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面にぶい橙色、外面にぶい赤褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面回転ヘラミガキ調整で、内面に暗文

が見られる。口径約 13.0 cm、器高 3.2 cm を測る。

14・15 は、土師器環で、口縁部先端部が外反し、先端部は丸みを帯びるもので、内外面にミガキ 2 調整を施している。

16 は土師器環蓋で、蓋上部と口縁部の中心部分が平行であり、端部で角度を持って曲がる器形を呈す。胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面回転ナデ調整で、口径約 14.0 cm を測る。

17 は土師器環蓋で、蓋中心部から緩やかに曲がる器形で、胎土は石英・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ調整で、口径約 18.2 cm を測る。

18・19 は須恵器環口縁部。20 は須恵器環蓋のツマミ部分で、宝珠形を呈する。21 は須恵器環蓋で、内外面回転ナデ調整で、口径約 14.0 cm、器高 2.1 cm を測る。

22 は土師器手持ち竈の底部で、胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面明赤褐色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ナデ調整。23・24 は、砲弾形をした「六連島式土器」の製塩土器の破片。

25・26 は、豊後大分型甕の把手部分及び底部。27・28 は、土師器甕で、外面に粗い縦方向のハケメを施すもので企奴型甕。27・28 の口径は約 17.4 cm、20.0 cm を測る。19SD020 上層の遺物は、8 世紀末から 9 世紀初頭に比定される 1 群である。

土坑 (SK)

19SK001 (第 93 図)

調査区の南、19SD002 と 19SD003 の間に位置する土坑である。平面形は円形を呈し、断面はやや丸底の形状を呈す。南北長約 0.86m、東西幅約 0.86m、深さは約 0.51m を測る。土層はいずれも埋没時の埋土と考えられ、廃棄土坑であると推定される。高環脚部、土師器甕・壺などが出土しており、古墳時代に帰属する遺構と考えられる。

出土遺物 (第 96 図) 1 は、土師器の器台脚部で、胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内外面ナデ後ミガキ調整である。

2 は、小形丸底甕の口縁部で、胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色を呈し、内外面ハケメ後ミガキ調整で、口径約 13.7 cm を測る。

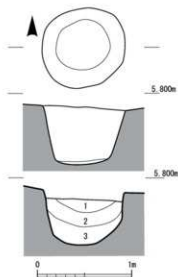
3 は、土師器壺口縁部で、口径約 15.2 cm を測る。

19SK011 (第 86 図)

調査区の北東に位置しており、19SK025 の東端を切る土坑である。長径約 0.40m、短径約 0.40m の不整な円形を呈しており、埋土からは企奴型甕や製塩土器の破片などが出土している。出土遺物より帰属年代は 8 世紀後半から 9 世紀と推定される。

出土遺物 (第 96 図) 4 は、土師器甕で、外面に粗い縦方向のハケメを施すもので企奴型甕。

5・6 は、砲弾形をした「六連島式土器」の製塩土器の破片。



1. 黒褐色粘質土
2. 褐黒茶色砂質土 (黒褐色粘質土が少量混入)
3. 暗黒褐色砂質土 (泥質土が混入)

第 93 図 19SK001 遺構・断面・土層
断面実測図 (1/40)

19SK015 (第86図)

調査区の北端に位置する土坑であるが、区外へと広がるため全容は不明である。遺構からは倉敷型甕や土師器高台付坏などが出土しており、8世紀後半から9世紀ごろに帰属する遺構と考えられる。

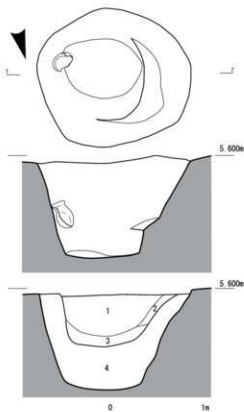
出土遺物 (第96図) 7は土師器小形丸底甕で、胎土は長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内面明赤褐色、外面橙色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面口縁部ヨコナデで胴部はハケメ・ケズリ後ナデ調整で、口径約11.4cm、器高8.4cmを測る。

8は土師器甕で、口縁部が「く」の字状に外反する器形。胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面明褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約16.0cmを測る。

9は弥生土器壺口縁部で、口唇部の中に1本の沈線を巡らし、その上に丸いツマミを貼り付けるもので、口径約21.6cmを測る。10は弥生土器須玖式甕で、胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面灰白色、外面浅黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約28.4cmを測る。

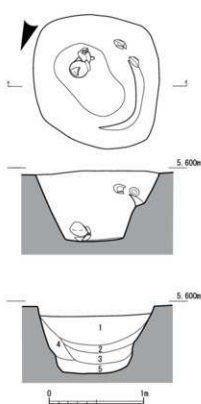
11は弥生土器甕底部。底径は、6.4cmを測る。外面に煤付着が認められる。12は土師器坏で、器形は箱型。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色を呈し、内外面回転ナデ、底部へラ切り調整で、口径約14.0cm器高4.0cm、底径8.5cmを測る。

13は高台土師器坏底部で、底径約9.5cmを測る。14は土師器甕で、外面に粗い縦方向のハケメを施すもので倉敷型甕の口縁部。19SK015は、19SD020を切って造られていることから、9～11は、19SD020に帰属



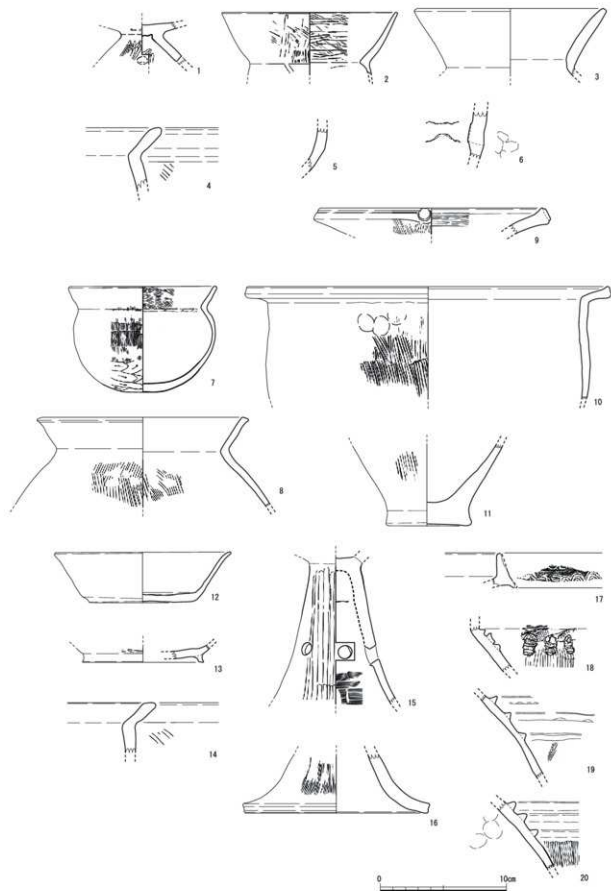
1. 黒灰褐色砂質土(赤黄褐色粒子が多量に混入)
2. 黒灰褐色砂質土(1層よりやや暗い)
3. 暗黒褐色粘質土
4. 暗灰色粘質土 遺物混入

第94図 19SK023 遺構・断面・土層断面
実測図 (1/40)

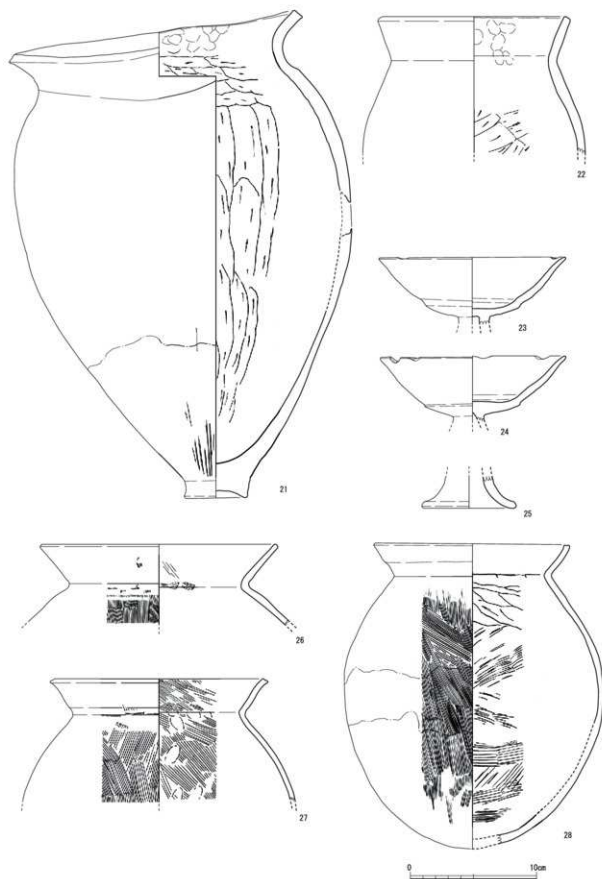


1. 黒灰褐色砂質土(赤黄褐色粒子が多量に混入)
2. 暗黒褐色粘質土(淡灰褐色砂質土がわずかに混入)
3. 暗黒褐色泥質土(φ0.1mm大の砂粒が多量に混入・淡灰白褐色シルトが水性堆積する)
4. 淡黒灰褐色泥質土(φ1mm大の砂粒が多量に混入)
5. 茶褐色泥質土(φ1mm大の砂粒が多量に混入)

第95図 19SK025 遺構・断面・土層断面
実測図 (1/40)



第96図 19SK001・004・011・015・023 出土遺物実測図 (1/3)



第97図 19SK023・025 出土遺物実測図 (1/3)

する遺物で弥生時代中期。12～14は、古代の遺物で19SD020上層に帰属する遺物であり、古墳時代初頭が19SD015本来の構築時期と考えられる。

19SK023 (第94図)

調査区北東に位置し、19SD020を切る大型土坑である。平面はやや不整な円形、断面形状は歪な逆台形を呈する。長径約1.62m、短径約1.45m、深さ約1.00mを測る。埋土からは弥生土器の甕、高環、壺などが出土しており、弥生時代に帰属する遺構であると考えられる。

出土遺物 (第96・97図) 15は、弥生土器高環脚部で、胎土は長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面縦方向のミガキ調整で脚部下付近に穿孔を5箇所、2段にわたって施している。外面に赤色顔料塗布が認められる。

16は高環脚部で、緩やかに外反する器形で、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で、底径約14.4cmを測る。外面に赤色顔料塗布が認められる。17は弥生土器複合口縁壺の口縁部で、外面に波状文が認められる。

18～20は弥生土器複合口縁壺の頸部で、弥生時代後期中葉～後葉に比定できる。21は弥生土器甕で、内面は、ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径23.6cm、器高38.7cm、底径5.0cmを測る。

22は弥生土器甕で、胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ・ケズリ、外面ミガキ風ナデ調整で、口径は、約14.4cmを測る。19SK023の時期は、これらの遺物から弥生時代後期中葉～後葉に比定できる。

19SK025 (第95図)

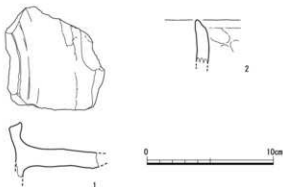
調査区北東に位置する大型土坑である。弥生時代に帰属する19SD020を切るが、古代に帰属する19SK011に切られる。平面は不整な隅丸方形を呈しており、断面は逆台形を呈する。長径約1.60m、短径約1.42m、深さ約0.75mを測る。土層からは暗黒褐色泥質土(3層)において水性堆積が認められるが、19SD020の埋土が混層している可能性も考えられる。埋土からは古墳時代の高環や甕が出土しており、帰属年代は古墳時代前期ごろと推定される。

出土遺物 (第97図) 23・24は、土師器高環部である。口縁部2段目が1段目より2倍以上長く、外反する器形で、23・24の口径は約14.8cmを測る。25は土師器高環の底部で、底径約7.2cmを測る。

26は土師器甕で口縁部が「く」の字状に外反する器形。胎土は長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面浅黄橙色、外面橙色を呈し、口縁部ハケメ後ナデ、胴部ケズリ後ナデ調整で口径約18.2cmを測る。

27は土師器甕で口縁部が「く」の字状に外反する器形。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面明赤褐色、外面明褐色を呈し、内面口縁部はハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約16.5cmを測る。外面に煤付着が認められる。

28は土師器甕で布留系の甕を意識してつくられている。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面黄橙色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部ケズリ・ハケメ後ナデ調整で口径約14.9cm、器高24.9cmを測る。外面に煤付着が認められる。19SK025の時期は、古墳時代初頭に比定できる。



第98図 大道19次 表採出土遺物実測図(1/3)

表採遺物（第98図）1は、土師器手持ち竈の口縁部と庇部分。2は、砲弾形をした「六連島式土器」の製塩土器の口縁部。口縁部はヘラ切りである。1・2ともに古代に比定できる遺物である。

4. 小結

本調査区では弥生時代、古墳時代、古代、近世にかけての遺構群を確認した。

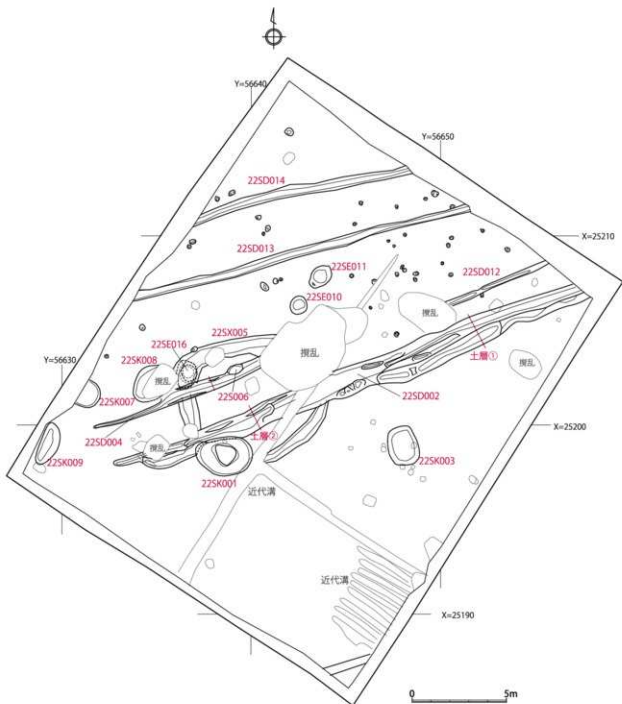
弥生時代中期から後期に比定される溝跡（19SD020）は区外へと延長し、南東に隣接する10次調査B区の溝へと繋がると想定される。またこれにほぼ直交するかたちで19SD003が南北方向へと伸びており、19SD020と同様、弥生時代中期から後期にあたる時期に水路として存在した可能性が考えられる。19SD020の上層からは古墳時代に比定される19SK025が検出され、19SD020の埋没後に掘り込まれたものであることがわかっている。

古代に比定される遺構で確認された建物跡は1棟のみである。北東部には攪乱が多く見られることから、建物跡が存在した可能性は残るが、南西部では本調査において建物跡が存在していた痕跡は見られない。溝跡（19SD002、19SD009）は弥生時代に比定される溝跡にほぼ並行しており、建物跡（19SB005）も溝跡に沿うかたちで配置している。一方で調査区北東部では新たな安定面が形成され、19SK025を切る19SK011、19SK015・023が造成される状況を呈する。同様の堆積は南東に隣接する大道遺跡群第10次調査でも確認されており、このことから調査区における弥生時代から古代にかけての集落および生活空間の形成が以前からの地割を踏襲していた状況が推測される。

大道遺跡群第22次調査

1. 調査の概要

第22次調査地点は、第19次調査の南側、および第16次調査の東側に隣接する地点である。当初、平成19年度はじめに家屋の移転・解体が完了した後、区画街路工事が着工されるまでの間を調査期間として発掘調査を実施する予定であった。しかし、平成19年度から実施された発掘調査にかかる業務委託の契約締結が予定よりも大幅に遅れたことにより調査の着手が遅れ、調査時期が梅雨末期にあたってしまい、実質的な調査期間が10



第99図 大道22次調査区遺構平面図 (1/200)

日間程度しかとれない事態に迫り込まれた。

平成 21 年 7 月 2 日に調査開始したものの、梅雨末期の雨が続いたため本格的な表土剥ぎ開始は 7 月 12 日となり、7 月 14 日から人力による掘削を開始、7 月 21 日に全景写真の撮影を行って調査を終了した。こうした調査期間の圧縮と、天候の不順のため、井戸等の遺構の掘り下げにおいて湧水による崩落等が発生するなど、不十分な調査となったことは否めないが、弥生時代中期、古墳時代前期および古代の遺構を検出することができた。

2. 基本土層

隣接する第 16 次・19 次調査と同様に近現代の水田土層直下が遺構検出面である。おそらく、昭和初期に実施された耕地整理により 0.50m ～ 1.00m もの大幅な削平を被っていると推定され、このため、比較的深い井戸においても検出面からの深さが 1.00m を超えない。遺構が検出される基盤土層は、黄灰色細砂層であり、北端部のみ暗褐色粘質土層であった。これらの土層は、当該地域における通常の基盤層である黄灰色シルト質土層よりも下位にある基盤土層であり、先述した削平の結果とみられる。

3. 遺構・遺物

井戸跡 (SE)

22SE010 (第 99・100 図)

調査区中央部で検出された遺構である。長軸 1.00m、短軸 0.90m のやや不整形な円形を呈し、検出面からの最大深は約 0.70m であるが、調査中の崩落が著しく、下底部の確認はできなかった。黒褐色土を基調とする埋土により埋積している。下底部は黄褐色土ブロックおよび炭化物を含む。標高 5.50m 付近以下には激しい湧水が認められ、そのためか、壁面の一部にオーバーハングが認められる。井筒は検出されていないが井戸の可能性が高いと思われる。下底部付近から、完形の土師器小形丸底甕が出しており、何らかの祭祀行為が行われたとみられる。出土遺物から、古墳時代前期に位置づけられる。

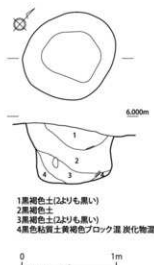
出土遺物 (第 101・102・103 図) 1 は土師器碗で胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面明褐色で、内面ナデ、外面ケズリ後ナデ調整で、口径 9.6 cm、器高 5.0 cm を測る。口縁部付近に指頭圧痕が、外面に黒斑が認められる。

2 は土師器碗で、胎土は長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色で、内面ナデ後ミガキ、外面ケズリ、ハケメ後ナデ・ミガキ調整で、口径 14.0 cm、器高 4.9 cm を測る。

3 は土師器高杯の坏部で、口縁部に向かってなだらかに外反し、端部は丸く仕上げる。胎土は石英・長石・角閃石、白色粒子を含み、色調は内外面明褐色で、内面ハケメ後ナデ後縦方向のミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約 20.0 cm を測る。4 は土師器小形丸底甕で、胎土は長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面橙色で、内面ヨコナデ、外面ハケメ後ナデ後横方向のミガキ調整で、口径約 11.6 cm、器高 6.1 cm を測る。

5 は土師器小形丸底甕で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色で、外面にぶい橙色を呈し、内面ナデ後縦方向のミガキ、外面横方向のナデ調整で、口径約 12.6 cm を測る。

6 は土師器小形丸底甕で、口縁部が直高気味に立ち上がり端部は丸く収める。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面明褐色で、内面ナデ後ミガキ、外面ナデ後ミガキ調整で、口径約 10.2 cm、器高 10.3 cm を測る。7 は土師器小形丸底甕で、器壁が厚く、口縁部が欠失している。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色で、内面ハケメ後ナデ・底部は指ナデ、外面ハケメ後ナデ調整である。外面に黒斑が認められる。

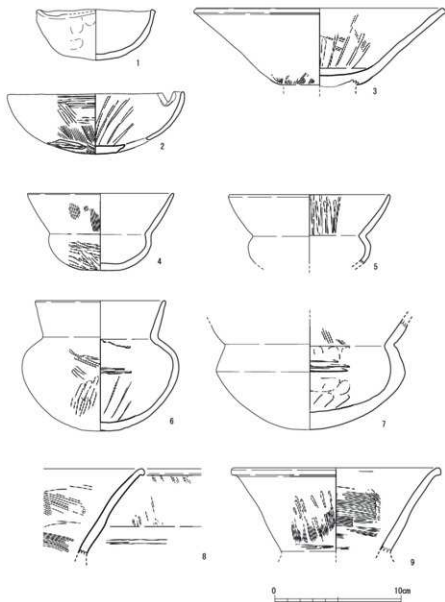


第 100 図 22SE010 平面・土層断面実測図 (1/40)

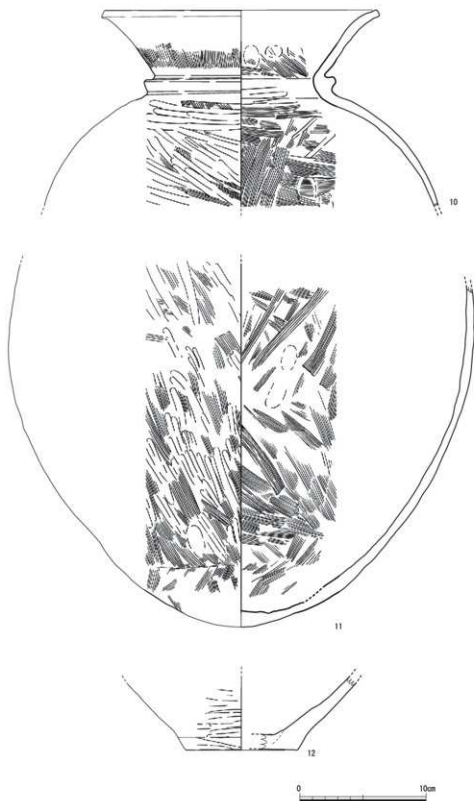
8・9は土師器壺口縁部。口縁端部にかけ外反し、端部は外側に丸く収める。9の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面暗赤褐色、外面黒褐色で、内面ハケメ後ヨコナデ、外面ハケメ後ナデ後縦方向のミガキ調整である。口径約16.2 cmを測る。

10・11は同一個体と考えられる壺である。頸部に断面三角形の突帯を1条巡らすもので、胎土は長石、角閃石、白色粒子を含み、色調は内面明黄褐色、外面明赤褐色で、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で、口径約16.2 cm、器高34.4 + α cmを測る。外面に煤付着が認められる。12は弥生土器壺底部。弥生時代前期末から中期初頭と考えられるもので、内面ナデ、外面ミガキ調整である。22SE010の時期には帰属しない。13・14・15は土師器甕の口縁部。15の口径は約18.6 cmを測る。

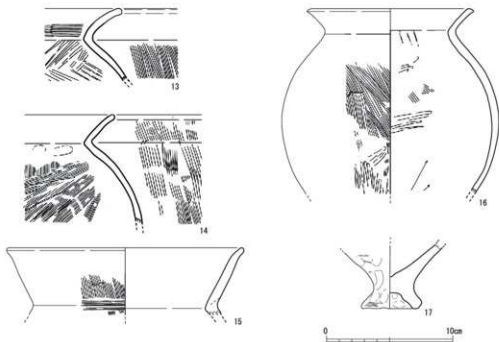
16は土師器甕で、胎土は、長石、角閃石、白色粒子を含み、色調は内面褐色、外面橙色で、内外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で、口径約10.6 cmを測る。外面に黒斑が認められる。17は備讃系の製塩土器脚部。胎土は、石英・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色を呈し、内面ナデ、外面指オサエ調整で、底径4.6 cmを測る。外面上部に一部タタキ痕が認められる。



第101図 22SE010 出土遺物実測図① (1/3)



第102図 22SE010 出土遺物実測図② (1/3)



第103図 22SE010 出土遺物実測図③ (1/3)

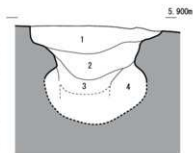
22SE011 (第99・104図)

調査区中央部で検出された遺構である。長軸 1.40m、短軸 1.00m の楕円形状を呈し、検出面からの最大深は約 1.00m であるが、調査中の崩落が著しく、下底部の確認はできなかった。黒褐色砂質土を基調とする埋土により埋積している。下底部は炭化物を含む。標高 5.50m 付近以下には激しい湧水が認められるが、遺構が機能していた当時も同様な湧水があったと考えられ、遺構の下半部は崩落し、壁面が著しくオーバーハングしている。井筒は確認できていないが、土層堆積状況から、井筒が埋置されていた可能性が高く、井戸と考えられる。出土遺物は僅少であるが、古墳時代前期に位置づけられる土器が出土していることから、当該期に位置づけられる可能性が高い。



22SE016 (第99・105図)

調査区中央部西寄りで検出された遺構である。長軸 1.40m、短軸 1.10m のやや不整な円形を呈し、検出面からの最大深は約 1.00m であるが、調査中の崩落が著しく、下底部の確認はできなかった。黒褐色土を基調とする埋土により埋積している。標高 5.20m 付近より直径約 0.80～0.90m の部分が一段深く掘り下げられており、この部分に特に激しい湧水が認められたことから、井戸の可能性が高い。湧水のため東側壁面の一部にオーバーハングが認められる。井筒は検出されていない。出土遺物から、古墳時代前期に位置づけられる。



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 (1 よりも黒い)
- 3 黒色土 粘質
- 4 黒色土 粘質 炭化物を含む

湧水と崩落が激しい為、下層は不明。



第104図 22SE011 平面・土層断面実測図 (1/40)

出土遺物 (第106・107図) 1 は土師器碗で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面明赤褐色、外面橙色で、内面はハケメ後ナデ、底部は指ナデ、外面はハケメ後ナデ調整である。外面に黒斑が認められる。

2 は土師器台付丸底甕。器台の上に丸底甕を乗せたイメージで形作ら

れている。胎土は角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面暗褐色で、外面にぶい褐色、内面はハケメ後ナデ、外面はナデ後ミガキ調整で、口径 11.8 cm、器高 $12.0 + \alpha$ cm、底径 $11.4 + \alpha$ cm を測る。外面に若干の黒斑が認められる。

3 は土師器高坏底部で、内面はハケメ・ナデ、外面はナデ後縦方向のミガキ調整で、4ヶ所の穿孔を施している。底径は、約 20.0 cm を測る。4 は土師器壺口縁部。口縁部がやや内側に内湾しながら立ち上がる器形で、口径約 12.0 cm を測る。

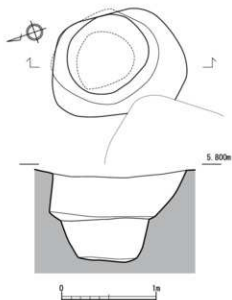
5 は安国寺系の複合口縁壺で、胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面赤褐色で、外面褐色、内面はハケメ後ナデ、外面はハケメ調整で、口径 11.5 cm を測る。

頸部等粘土接合部に、指頭圧痕が認められる。

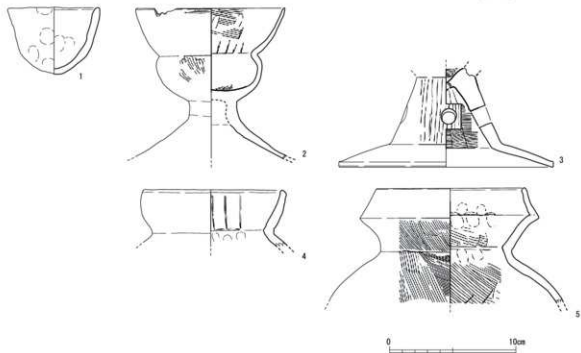
6 は土師器壺で、口縁部が「く」の字状に外反しながら立ち上がる器形で、胎土は長石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面灰褐色で、外面褐色、内面口縁部はハケメ後ナデ、胴部は、斜め方向のハケメ、外面口縁部はハケメ後ナデ、胴部はハケメ後ナデ後縦方向のミガキ調整で、口径 19.6 cm を測る。内外面に黒斑が認められる。

7 は在地系の技法で作られている土師器甕で、胎土は長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面橙色で、外面暗褐色、内外面はハケメ調整で、口径約 20.4 cm を測る。

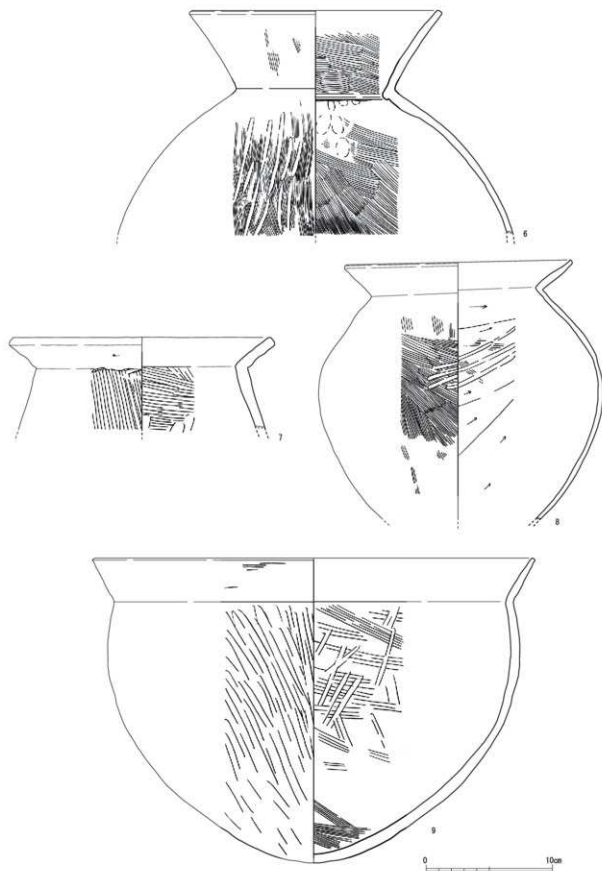
8 は布留系の土師器甕。胎土は角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面橙色で、外面暗褐色、内面口縁部ナデ、胴部ケズリ後ミガキ、外面口縁部ナデ、胴部ハケメ調整で、口径 18.1 cm、器高 $20.7 + \alpha$ cm を測る。



第 105 図 225E016 平面・断面実測図 (1/40)



第 106 図 225E016 出土遺物実測図① (1/3)



第107図 22SE016 出土遺物実測図② (1/3)

9は土師器大鉢で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面はハケメ後ナデ後一部ミガキ、外面はハケメ後ナデ後縦方向のミガキ調整で、口径約35.0cm、器高24.2+αcmを測る。

溝状遺構 (SD)

22SD002・22SD004 (第99・108図)

22SD002は調査区中央部付近を北東から南西方向に斜行する溝状遺構である。N69°Eを指向し、22SD002、22SD004および22SD012よりも東に振っている。最大幅約1.90m、検出面からの最大深は約0.40mを測る。黒褐色の砂質土を基調とする埋土で埋積している。少なくとも1回の掘り返し認められ、その際、南東側に重複する位置に掘りなおされている。底面のレベルからは僅かに南西側から北東側に向かう傾斜を認めることができる。調査中は常に湧水がある状態ではあったが、埋土の観察ではラミナ等は認められず、積極的に水流があったとはいえない状況で、水路としての機能を積極的に認められない。出土遺物からは8世紀末～9世紀初頭に埋積したものと判断される。

22SD004は22SD002の北西側に並行している溝状遺構である。調査区中央部で後世の擾乱が著しく、途切れているところがあるが、本来は22SD012まで一続きの溝であった可能性が高い。遺物は出土せず、所属時期を推定できるものはみられなかった。最大幅1.50～2.50mの間隔を置いてほぼ並行していることから、お互いに関連のある遺構と思われる。

出土遺物 (第109図) 1は土師器環で、箱形を呈する。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面ミガキa2調整で、口径約12.0cm、器高3.6cm、底径約6.4cmを測る。

2は大形の土師器環で、口縁部先端部が外反し、先端部は丸みを帯びる器形で、胎土は石英・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面は丁寧なミガキa2調整で、口径18.4cm、器高4.6cm、底径8.1cmを測る。

3は土師器碗で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色、内面はハケメ後ナデミガキ、外面はハケメ調整で、口径14.0cm、器高5.1cmを測る。古墳時代初頭。

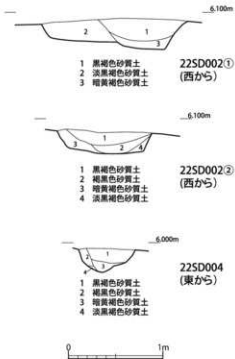
4は土師器環で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面は丁寧なミガキa2調整で、口径約15.0cm、器高6.1cm、底径6.8cmを測る。

5は土師器環蓋で、口縁部内面に沈線を巡らす。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面はミガキa2調整で、口径約15.3cm、器高約1.6cmを測る。

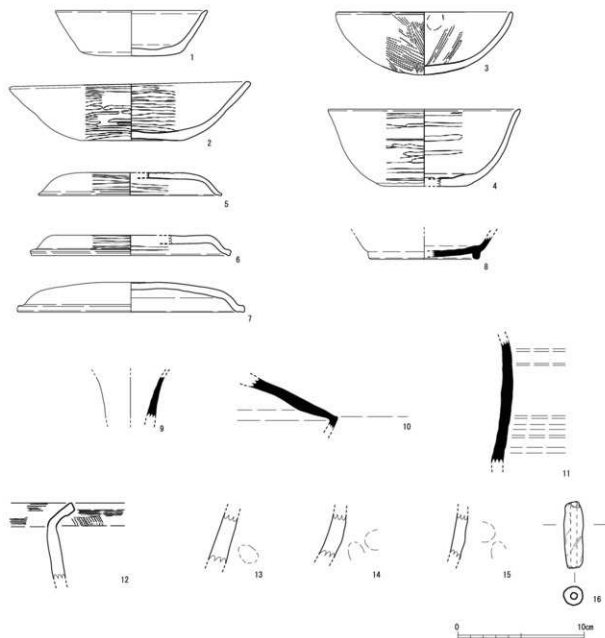
6は土師器環蓋で、内面に沈線を巡らす。胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面は丁寧なミガキa2調整で、口径約14.8cm、器高6.1cm、底径1.8+αcmを測る。

7は土師器環蓋で、口縁部内面に緩やかな沈線を巡らす。胎土は石英・長石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面はナデ調整で、口径約18.0cm、器高2.4cmを測る。

8は高台付須恵器底部。胎土は赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面灰白色を呈し焼きは甘い。内外面



第108図 22SD002・004土層断面実測図 (1/40)



第109図 22SD002 出土遺物実測図 (1/3)

はナデ調整で、底径約 8.4 cm を測る。9 は須恵器壺破片。10 は須恵器長頸壺の肩部。11 は須恵器長頸壺の胴部。12 は土師器甕で、外面に縦方向の粗いハケメを施すのが特徴で、企救型甕と称される。13 から 15 は製塩土器の胴部。

16 は紡錘形を呈する土鍾で、かけ紐によると考えられる欠けと、斜め方向の圧痕が認められる。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は橙色を呈する。長さ 5.3 cm、幅 1.5 cm、孔径 0.6 cm、重さ 10.9 g を測る。

22SD013・22SD014 (第99図)

22SD013 は調査区北端付近を北東から南西方向に斜行する溝状遺構である。N-72°-E を指向し、22SD002、22SD004 および 22SD012 よりも東に振っている。幅約 0.40m から 0.60m、検出面からの最大深は 0.40m を測り、

断面逆台形状を呈し、ほぼ黒色の粘質土で埋積していた。掘り返しは観察されなかった。遺物は出土せず、所属時期を推定できるものはみられなかった。2.30～2.90mの間隔を置いてほぼ並行していることから、お互いに関連のある遺構と思われ、間の空間部分を路面とする道路遺構の可能性も考えられる。

土坑 (SK)

22SK003 (第99・110図)

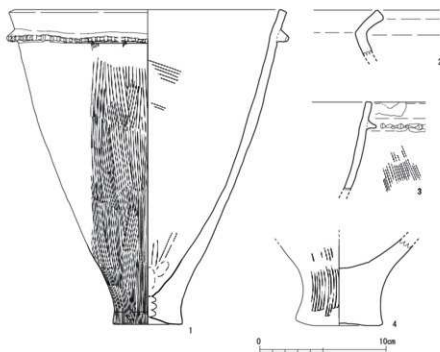
調査区南東部で検出された土坑である。長軸2.10m、短軸1.60mの楕円形状を呈し、検出面からの最大深は約0.30mである。黒褐色砂質土を基調とする埋土により埋積している。出土遺物は僅少であるが、弥生中期前葉に位置づけられる土器のみが出土していることから、当該期に位置づけられる可能性が考えられ、大道遺跡群において検出された遺構中で最も古い一群となる。

出土遺物 (第111図) 1は弥生土器甕。口縁部下に突帯を巡らす下城式甕で、胎土は長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整で、口径約22.0cm、器高25.0cm、底径約5.4cmを測る。

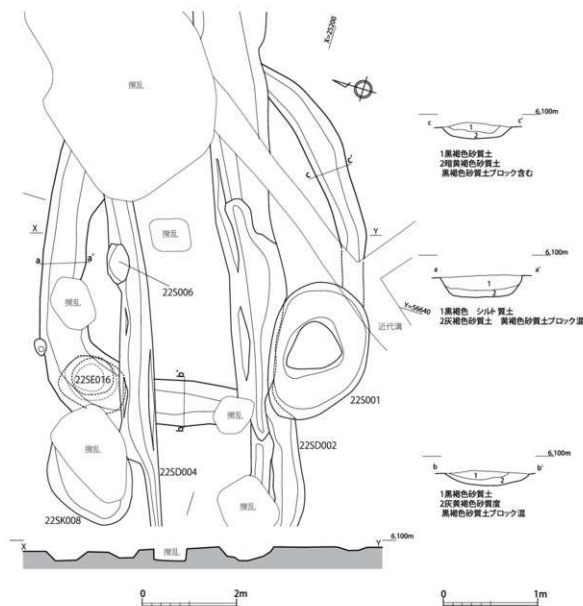
2は跳ね上げ口縁部の口縁部。3は弥生土器甕口縁部。口縁部下に突帯を巡らす下城式甕。4は弥生土器甕底部で、内面ナ



第110図 22SK003 平面・断面
・土層断面実測図 (1/40)



第111図 22SK003 出土遺物実測図 (1/3)



第112図 22SX005 平面・断面・土層断面実測図 (1/80・1/40)

デ、外面ハケメ調整で、底径 6.8 cm を測る。弥生時代中期前葉と考えられる一群である。

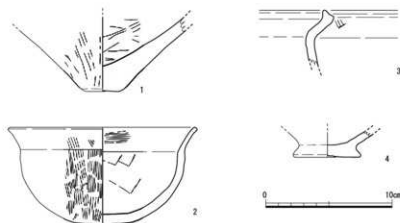
不明遺構 (SX)

22SX001 (第99図)

調査区中央部やや西寄りに検出された遺構である。長軸 3.10 m、短軸約 2.00 m を測る不整楕円形を呈す。22SX005 を切っている「落ち込み」であるが、掘り下げた結果人為的な掘り込みではない可能性が高いと判断された。おそらく風倒木痕（いわゆる土層横転遺構）ではないかと思われる。

出土遺物 (第113図) 1 は、弥生土器壺底部。胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面黄橙色を呈し、内面ミガキ、外面底部ハケメ、外面胴部は縦方向のミガキ調整で、底径 3.4 cm を測る。外面に黒斑が認められる。弥生時代中期に比定される。

22SX005 (第99・112図)



第113図 22SX001・005 出土遺物実測図 (1/3)

調査区中央部南寄りで見出された遺構である。幅 1.00 ～ 1.40m、深さ 0.20 ～ 0.30m の溝が、東西約 6.80m、南北約 7.80m のやや不整な隅丸長方形形状に廻るものである。溝は 22SE016 の埋植後にこれを切って掘られている。溝の埋土は下層が地山土と類似した砂質土で、上層は黒色の砂質土からなり、自然に埋積していったものとみられる。22SX005 の溝からは僅少な遺物しか検出されていないが、古墳時代前期に位置づけられる可能性が高いと思われる。当該期の方形周溝遺構は、中央部に石棺等の主体部を有する墳墓であることが想定されるが、ここでは溝で囲まれた範囲内に埋葬主体や土壌等は検出されず、また石棺材の可能性のある石片等も検出されていない。

出土遺物 (第113図) 2 は、土師器小形丸底壺で、胎土は長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面工具ナデ、外面ハケメ調整で、口径約 15.0 cm、器高 6.8 cm を測る。

3 は、弥生土器跳ね上げ口縁甕の口縁部。4 は、弥生土器小壺の底部で、底径 5.2 cm を測る。外面に黒斑が認められる。

4. 小結

第 22 次調査で見出された遺構のうち、最も古く位置づけられるものは弥生時代前期末～中期に比定される土坑 22SK003 である。これまで大道遺跡群において検出されている遺構は当該期のものであり、大道遺跡群第 6 次調査で土坑が複数検出されているが、22SK003 はこれらと並んで最も古い一群になると考えられる。第 6 次調査においては多数の同様な土坑が集中して検出されていたことから当該期の貯蔵穴の可能性が考えられたが、本調査地点では 1 基のみであり、どのような性格のものかは不明である。

古墳時代の遺構は複数検出されており、井戸 3 基、方形周溝遺構 1 基が検出されている。方形周溝遺構は井戸を切って築造されているもので、石棺等を主体部とする墳墓遺構あるいは、周溝内部に建物等を有する遺構の可能性が考えられる。大道遺跡群の南に隣接する上野遺跡群^{III)}においては、弥生時代後期初頭の同様な遺構が検出されている。

古代の遺構として確実なものは溝状遺構が検出されているが、積極的に水路としての機能を想定できるものではなく、何らかの区画遺構であろう。

【註】

『上野遺跡群 大分市立美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分市教育委員会 1993

大道遺跡群第25次調査

1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目28-33に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内の宅地造成に伴い、大道遺跡群第26次調査と併行して平成20年5月22日から平成20年8月4日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は125㎡を測り、大道遺跡群内の南に位置している。調査の結果、溝状遺構および土坑、性格不明遺構等を確認している。

2. 基本土層 (第114図)

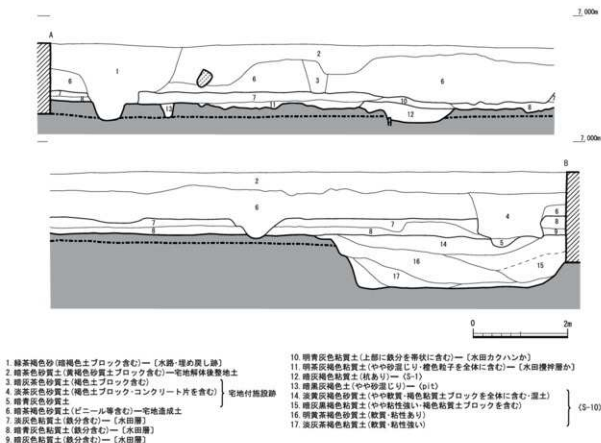
調査地は宅地であったため盛土が厚く覆われていた(6層)。それらを取り除くと、水田層である灰色及び青灰色を呈す粘質土層が表出する。遺構は、水田層下位の淡黄褐色粘質土より確認され、検出標高は約5.50mである。

3. 遺構・遺物

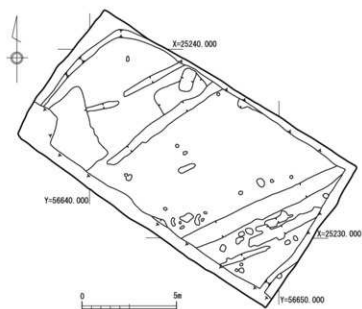
溝状遺構 (SD)

25SD001 (第116図)

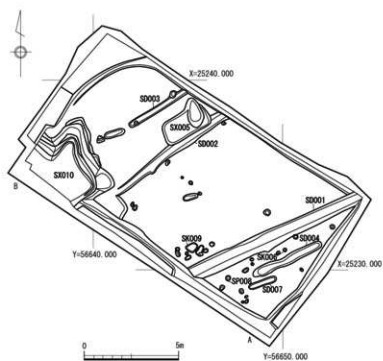
調査区南東部に位置する溝跡で、幅約0.90m、深さ約0.40mを測る。断面はやや浅めの逆台形を呈し、第16次調査区の16SD006の北方向への延長部である。埋土は黒褐色土と砂層を確認した。遺構の東側に多数の



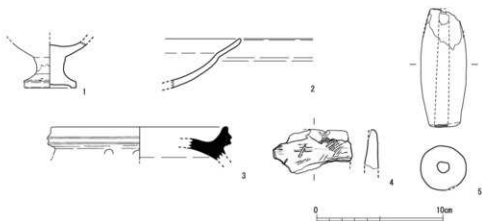
第114図 大道25次調査区土層断面実測図 (1/80)



第115図 大道25次 遺構切り合い図 (1/200)



第116図 大道25次全体平面図 (1/200)



第117図 25SD001 出土遺物実測図 (1/3)

杭跡が残存しており、西側にも同様の杭跡が確認できることから護岸機能を有する近世の水路である可能性が高い。出土遺物から帰属年代は17世紀から18世紀ごろと推測される。

出土遺物（第117図）1は、肥前磁器の仏飯器で、ロクロ成形で底部は削りだしてあり、高台内の削りは浅い。高台内は露胎。外面に文様が描かれた痕跡を残すもので、底径は4.1 cmを測る。17世紀末～18世紀後半に比定される。

2は、肥前磁器の皿の口縁部。釉薬をかけた後、内面に鉄釉を施している。外面にはロクロ痕が認められる。

3は、須恵器製の円面碗の上部。胎土は白色粒子・赤色粒子を含み、色調は内外面灰色を呈す。高台外面に2条の突帯を巡らせる。高台上方に角状をした穿孔が3ヶ所認められる。底径は約13.4 cmを測る。

4は、輝石安山岩製の砥石。両面に擦痕が認められる。最大長6.2 cm、最大幅3.6 cm、厚さ1.1 cm、重さ28.4 gを測る。

5は、紡錘状を呈する大形の土鍾。石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調はにぶい橙色～明褐色を呈し、掛け紐によると考えられる欠けと斜め方向の圧痕が認められる。最大長9.4 cm、最大幅3.6 cm、孔径1.1 cm、重さ101.4 gを測る。

性格不明遺構（SX）

25SX005（第119図）

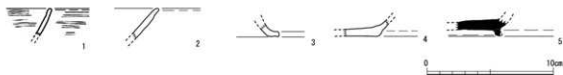
調査区中央に位置し、平面形は北側が張り出したやや歪な隅丸長方形を呈す。南北長約2.10 m、東西幅約1.00 m、深さ約0.40 mを測る。土層観察から掘り返し痕跡が窺え、底面から約0.40 mの規模を有すビットが確認される。掘り返し及び平面形の歪みはビットに据えられた柱等の抜き取りによる可能性がある。出土遺物は破片資料のため詳細は不明であるが、概ね8～10世紀に比定できる。

出土遺物（第118図）1・2は、土師器環口縁部。1は内外面ミガキa2調整、2は内外面ナデ調整である。

3は、土師器坏蓋。回転ナデ調整で、口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。

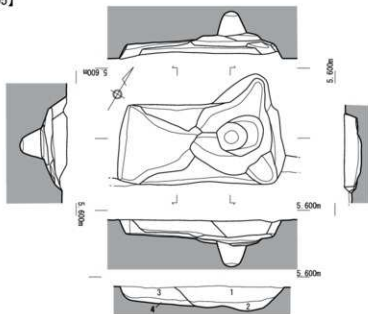
4は、土師器坏底部。底部はヘラ切り後ナデ、内面ナデ調整である。

5は、須恵器の高台付き杯の底部。胎土は石英・白色粒子・赤色粒子を含み、色調は内外面灰色を呈し、内外



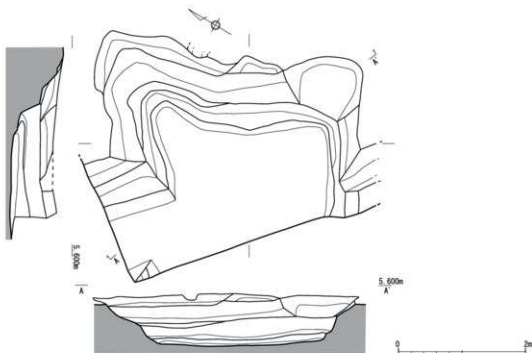
第118図 25SX010 出土遺物実測図 (1/3)

【25SX005】



1. 明黒褐色粘質土(大きい淡青灰黄色粘質土ブロック・黄灰色粒子を含む) 掘り返し
2. 暗黒褐色粘質土(粘性強い・シルト系)
3. 明黒茶褐色粘質土(淡青灰黄色粘質土・黄灰色粘質土の小ブロックを斑状に含む)
4. 暗黒茶褐色粘質土(やや砂混じり・鉄分含む)

【25SX010】



第119図 25SX005・010遺構・断面・土層断面実測図(1/60)

面回転ナデ調整である。

25SX010 (第119図)

調査区南東部で確認され、区外へと延びるため全容は不明である。現状では、南北約2.40 m、東西約4.00 m、検出面からの深さ約0.80 mを測り、平面隅丸長方形、断面形は段掘り状を呈す。埋土は粘質→砂質の水成堆積を繰り返していることから、溜井等の水利施設であったと推測される。出土遺物には東播系鉢が認められるため、中世前半段階に機能していたと考えられる。埋土上位には大きな掘り返しを伴う堆積土が確認でき、この埋土内から近世陶磁がみられたが、当該遺構の本来の機能停止時に形成されたもので、南側にあたる第16次調査16SX007に関連するものと考えられる。

出土遺物 (第120図) 1は、土師器環口縁部で、色調は浅橙色を呈し、内外面ミガキa2調整である。

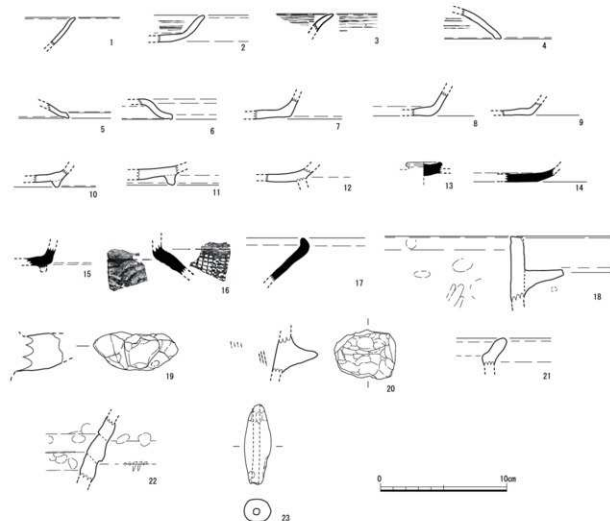
2は、土師器環口縁部で、胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子を含み、内外面橙色を呈し、内外面ナデ調整を施す。

3は、土師器環口縁部。内外面ミガキa2調整である。

4は、土師器環蓋口縁部。口縁部端部になだらかに伸ばし端部は丸くまとめる。端部内面に1条の浅い沈線を巡らせる。

5・6は、土師器環蓋口縁部。口縁部端部は丸くまとめる。端部内面に1条の浅い沈線を巡らせる。

7～9は、土師器環底部。



第120図 25SD010 出土遺物実測図 (1/3)

10～12は、台付き土師器の底部。

13は、須恵器蓋のツマミで、低い宝珠形を呈している。

14は、須恵器環の底部で、外面ヘラ切り、内面ナデ調整である。

15は、台付き須恵器環の底部。

16は、須恵器甕頸部。色調は内外面とも灰色を呈し、内外面タタキ痕が認められる。

17は、東轆系の須恵器鉢口縁部。胎土は、石英・白色粒子を含み、色調は、内外面回転ナデ調整である。

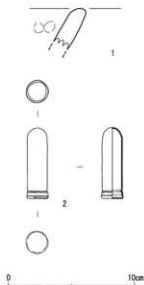
18は、土師器甕で把手を有する。胎土は、角閃石・長石・赤色粒子を含み、内面淡黄色、外面にぶい黄橙色を呈し、内外面ナデ調整である。

19・20は、土師器甕の把手。

21は、土師器甕。企救型式土器と呼称される物であり、8世紀後半から9世紀前半に比定される。

22は、製塩土器の胴部片で、粘土の輪積み痕と指頭圧痕が認められる。

23は、紡錘状を呈する土師。石英・長石・角閃石を含み、色調は灰褐色を呈し、掛け紐によると考えられる欠けと斜め方向の圧痕が認められる。最大長6.3cm、最大幅2.1cm、孔径0.6cm、重さ21.7gを量る。



第121図 大道25次表
探出土遺物実測図(1/3)

表探(第121図)

1は、甕口縁部。内外面ナデ調整である。

2は、銅製品に、長さ3.6cm、幅1.7cm、底径1.7cmを測り、近現代のものである。

4. 小結

本調査区では近世を中心とした溝状遺構5基、土坑3基、不明遺構2基を確認した。

溝状遺構はそれぞれの出土遺物から古代に比定される25SD002と、第16次調査区から延長する近世に比定される25SD001に分かれており、不明遺構である25SX005は出土遺物からその帰属する年代を8世紀～10世紀に、25SX010は中世段階に比定されるものと考えられる。本調査において25SX010が確認されたことにより、近世以前にも同様な水利に関する施設が存在することが明らかとなった。

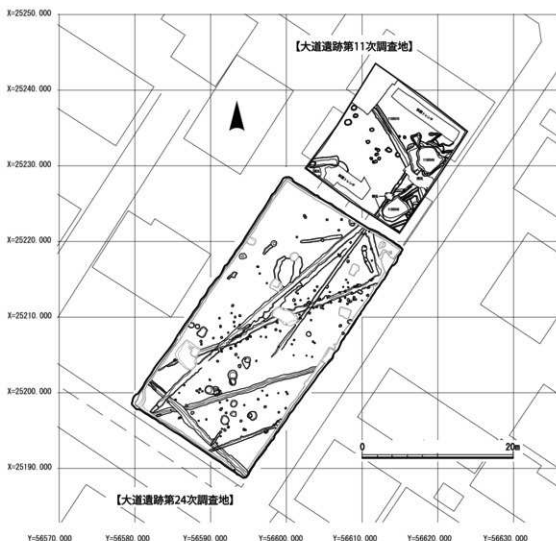
第4節 大道遺跡群第11次・第24次調査

概要

第4節においては第11次・第24次調査の説明を行う。今回の報告分の調査地では一番西側に位置しており、比較的安定している微高地上に位置するものである。

特筆すべきは、第24次調査での井戸跡(24SE008)であろう。古墳時代に切り出されたと考えられるクスノキを使ったほぼ完形の白が出土している。同時に出土した白の蓋は半円状を呈しており、二つ合わせて白の蓋として使用していたと想定される。国立歴史民俗博物館が放射性炭素年代測定法で調べた結果、西暦287年頃に伐採したクスノキで製作されていることが確認された。また年輪を調べた結果、底面の裏側に107本の年輪を確認することができ、一番外側の年輪は樹皮に限りなく近い部分と考えられることから、生育が始まってから107年+α年後に伐採されたことが確認された。自然科学分析の詳細な報告は、第4章で述べる。

第11次・第24次の調査区を地形的にみると、井戸跡が多数確認されていることから、湧水点が浅く、容易に水を得ることができたと想定される。これまでに確認されている、地形の落ちに沿って形成されている溝状遺構が、当調査地でも検出されており各時代に地形の変化を利用した溝状遺構が確認されることから、地形的な変化地点であると考えられる。以下、回数ごとに説明する。



第122図 第4節 調査地配置図(1/500)

大道遺跡群第11次調査

1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目に所在する。区画整理地内の宅地造成に伴い、平成17年8月12日から平成17年10月28日の期間に調査を実施した。調査面積は約246㎡である。大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査の結果、溝状遺構、土坑を確認した。

2. 基本土層（第123図）

現地標高は約6.40mを測り、調査区を覆っている約0.20～0.40mの灰色砂質土（1～3層）を除去すると、暗灰茶色土の耕作土層（4・5層）が確認される。この耕作土を除去すると暗灰褐色粘質土（6層）が現れ、遺構の殆どがこの層から検出されており、本調査区ではこの層を遺構検出面と位置付ける。検出標高は約5.80mで、暗灰褐色粘質土を約0.20mほど除去すると基盤層である黄灰色砂質土（8層）が現れる。

3. 遺構・遺物

溝状遺構（SD）

11SD010（第124図）

調査区のほぼ中央で検出した東西方向の溝状遺構である。現状の検出長は約13.50m、幅約1.00m、深さ約0.45mを測り、断面形状は逆台形を呈す。遺構の検出標高は約5.80mを測る。現状の調査区内で高低差は確認できなかった。土層観察より堆積土からは流水等の状況は確認できなかった。出土遺物から近世に比定される。

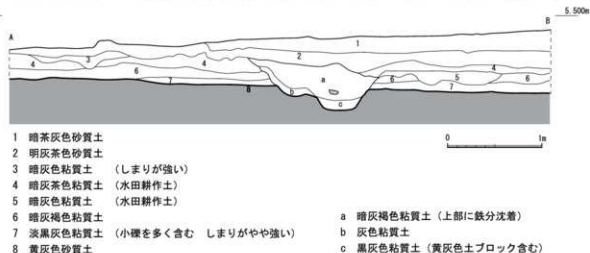
出土遺物（第125図）1は、中国景德鎮窯産の白磁皿。畳付部は露胎で、口径約12.5cm、器高2.9cm、底径約7.6cmを測る。

2は、肥前産染付皿で、内面に格子文、外面に唐草文が描かれているもので、口径約12.8cmを測る。時期は18世紀後半代。

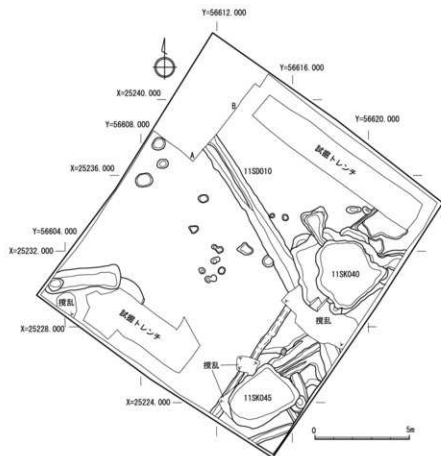
3は、肥前産の染付紅皿。口径約5.9cm、器高2.7cm、底径2.7cmを測る。時期は、18世紀代。

4は、肥前産の染付小杯。外面に圈線を巡らし山水文が描かれている。時期は18世紀代。

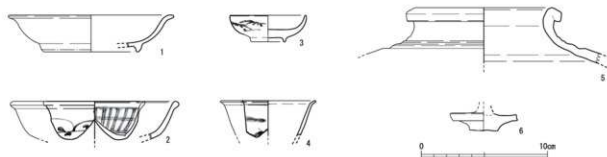
5は外面に鉄軸の施された陶器壺口縁部。福岡産の陶器と推定され、胎土の特徴から高取系の可能性が考えら



第123図 大道11次調査区西壁土層断面実測図（1/40）



第124図 大遺11次調査区遺構平面図 (1/200)



第125図 11SD010 出土遺物実測図 (1/3)

れる。時期は18世紀中頃～後半代。

6は、外面に鉄軸の施された陶器油さしの蓋と推定されるものである。福岡産の陶器と推定され、胎土の特徴から高取系の可能性が考えられる。蓋には糸きり痕が認められる。時期は18世紀中頃～後半代。

土坑 (SK)

11SK040 (第126図)

調査区の東側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、長軸約4.50m、短軸約4.40mを測る楕円形のプランを呈す。遺構の検出標高は、約5.55mを測り、基底部までの深さは約0.64mを測る。堆積土は、大部分を占める黒色粘質土と地山ブロック土と黒色粘土ブロックとの混成土である。このような状況から、比較的短期的、かつ人為的に埋められたと推測される。遺構の性格は廃棄土坑と推定される。出土した土師器片から古代以降に埋められたと言える程度である。

出土遺物 (第127図) 1は土師器環で、箱形をしている。

2は土師器環口縁部で外面にミガキ a 2調整をしている。口径は、約12.6cmを測る。

3は土師器環底部で、色調はにぶい橙色を呈し、内外面回転ナデ、底部はヘラ切り後手持ちヘラ調整を施している。底径約7.5cmを測る。

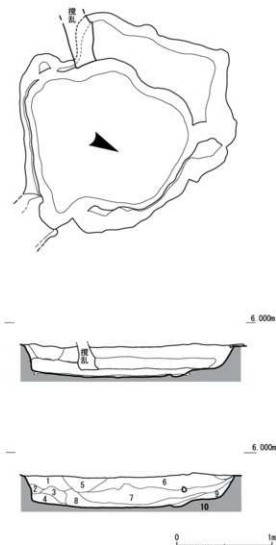
4は台付き土師器環の底部。底径約6.8cmを測る。

5は土師器環蓋で、口縁部端面内面に沈線を巡らす器形で口径約14.8cmを測る。

6は台付須恵器環底部で、高台は踏ん張った角状を呈し、底径は約9.4cmを測る。

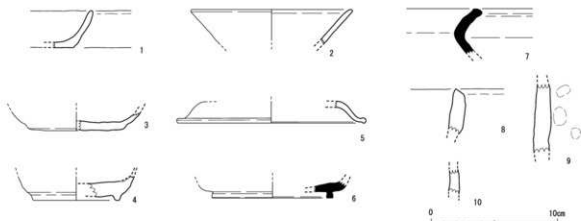
7は須恵器甕口縁部。色調は内外面灰白色を呈していることから焼きの甘い須恵器である。

8～10は砲弾形をした六連鳥式の製塩土器。型作りで口縁部はヘラ切り調整である。



1. 淡黒褐色粘質土 (地山ブロックを多量に含む。)
2. 1と同じ
3. 明灰色粘質土 (地山ブロックを多量に含む。グライ化、しまり弱い)
4. 明灰色粘質土 (地山ブロック混入少ない)
5. 暗灰黄色粘質土 (下層に砂が堆積、しまり弱い、攪乱)
6. 暗灰色粘質土 (褐色・黄色粒子を多く含む。粒子は上層に多い)
7. 暗灰色シルト質土 (粒子の混入少ない)
8. 淡黒色砂質土 (水が溜まっていた痕跡か? 混入ほとんどない 粒子のみ)
9. 明灰黄青色シルト質土 (地山ブロックを多く含む)
10. 淡灰茶褐色シルト質土 (地山)

第126図 11SK040 平面・断面・土層断面実測図 (1/80)

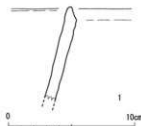


第127図 11SK040 出土遺物実測図 (1/3)

11SK045 (第129図)

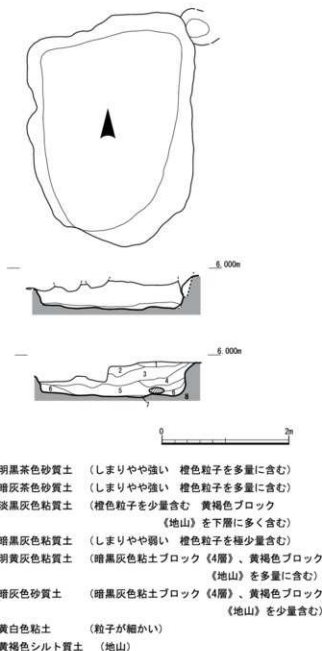
調査区の南側に検出した土坑である。検出面の平面形状は、長軸約 3.70 m、短軸約 2.60 m を測る楕円形のプランを呈す。遺構の検出標高は、約 5.80 m を測り、基底部までの深さは約 0.50 m を測る。堆積土は、1・2 層は黒色粘質土を基本に、それ以下の層には地山ブロック土が多く混入する。このような状況から、11SK040 同様に比較的短期的、かつ人為的に埋められたと推測される。遺構の性格は廃棄土坑と推定される。出土した土師器片から古代以降に埋められたと言える程度である。

出土遺物 (第128図) 1 は、砲弾形をした六連鳥式の製塩土器。型作りで胎土は石英・長石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面布痕、外面指頭圧痕が認められる。口縁端部はヘラ切り調整である。

第128図 11SK045 出土遺物
実測図 (1/3)

表探遺物 (第130・131図)

- 1 は、弥生時代早期 (下黒野突帯文単純期) の浅鉢胴部。内外面横方向のミガキ調整である。
- 2 は弥生土器壺底部。内外面ケズリ後ナデ調整で底径約 4.6 cm を測る。
- 3・4 は土師器小形丸底壺。口縁部がやや内湾ぎみに伸びる器形。
- 5 は小形丸底壺で、胎土は、石英・長石・角閃石を含み、色調は内外面橙色を呈し内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 13.4 cm、器高 8.1 cm を測る。
- 6 は土師器壺で、色調は内外面橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約 12.6 cm を測る。
- 7 は土師器壺で、口縁部に「く」の字状に外反する器形で口径約 15.1 cm を測る。
- 8 は土師器甕で、内面口縁部ハケメ後ナデ・胴部ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 14.8 cm を測る。3～8 は、古墳時代前期初頭に比定できる。
- 9 は土師器環で、内外面ミガキ a 2 調整を施す。10 は台付土師器環の底部で底径約 9.8 cm を測る。
- 11 は黒色土師器 A 類碗の底部で、内面ミガキ調整で底径約 8.0 cm を測る。
- 12 は台付き須恵器環の底部で、底径約 10.2 cm を測る。13 は須恵器円面硯の脚部。透かしが認められる。
- 14 は土師器甕で、形状はバケツ形を呈すると考えられる、内外面回転ナデで、外面に指頭圧痕が認められる。外面煤付着が認められる。15 は平瓦の一部で、タタキ痕と布目痕が認められる。9～15 は古代の遺物で、8 世



第129図 11SK045 平面・断面・土層断面実測図 (1/60)

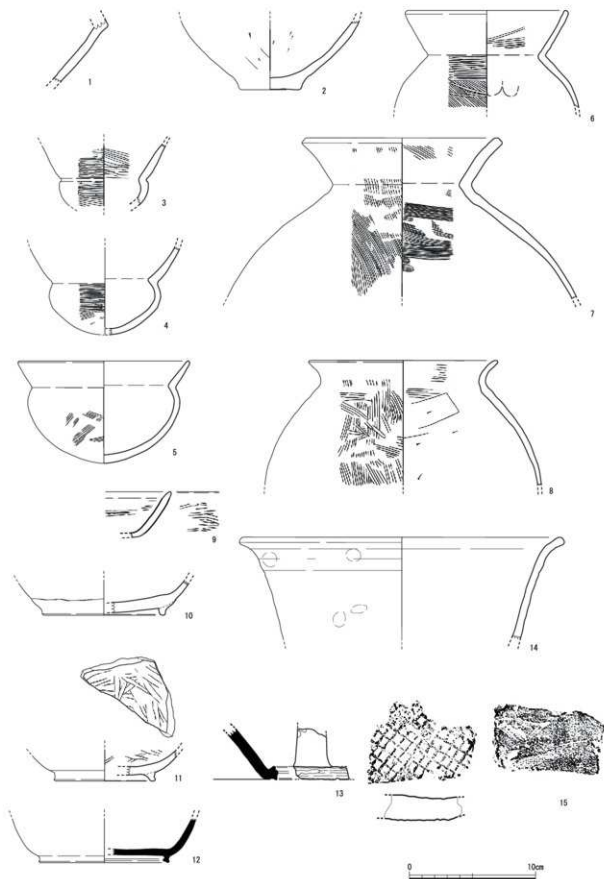
紀中頃～9世紀初頭に比定できる。

16 は和泉型系瓦器碗の口縁部。内面ミガキ、外面にミガキが顕著でない点を考えると13世紀前半ごろに比定される。

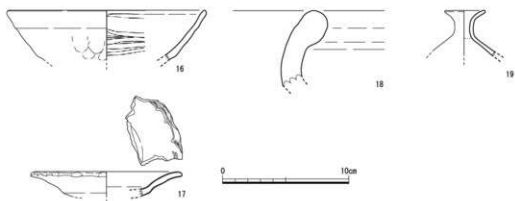
17 は中国龍泉窯系の皿口縁部。内面に波状の印刻を施すもので、14世紀代と考えられる。

18 は、備前焼大甕の口縁部。時期は16世紀代に比定される。

19 は肥前産小壺の口縁部で、餐付け油(椿油)を入れる物で化粧道具の一種。外面に赤絵が認められる。時期は18世紀代。



第 130 図 大道 11 次表土出土遺物実測図① (1/3)



第131図 大道11次表土出土遺物実測図② (1/3)

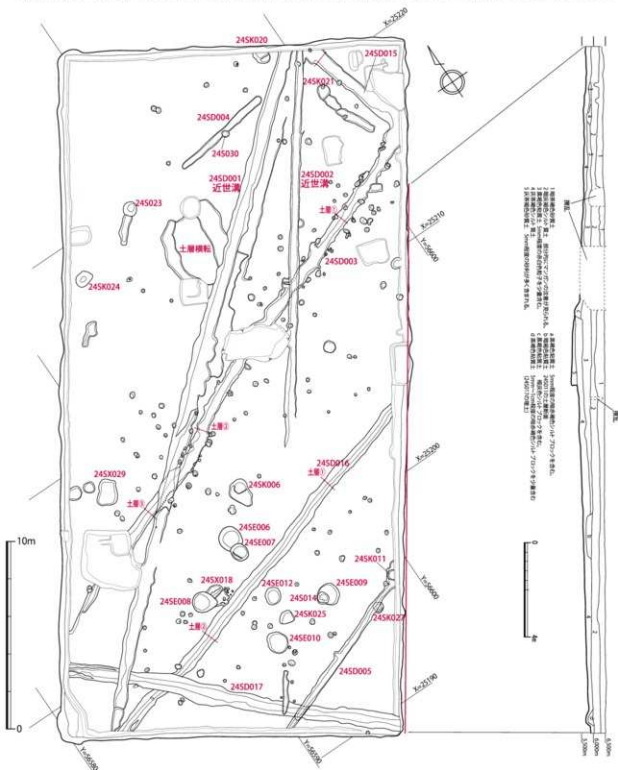
小結

第11次調査区は、第9次・第10次の西側に位置しており、これらの調査区が乗る微高地の西端付近に位置すると考えられる。北西方向に向かって地形的に落ちこんでいく状況が観察された。また、出土遺物では、遺構に帰属できないが、包含層中から円面硯（團足硯）が出土している。今回の調査地点は古代の遺構が検出された第5次調査の南側に位置しており関係が注目される。

大道遺跡群第24次調査

1. 調査の概要

第24次調査地点は、第11次調査地点の南隣、第16次調査の西隣にあたり、区画街路の施工が予定される



第132図 大道24次調査区遺構平面図 (1/200)

第133図 大道24次調査区東壁土層断面実測図(1/160)

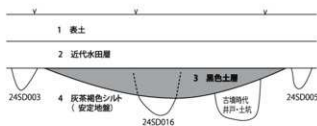
地点であったが、これら隣接地点の調査所見により本調査が必要と判断され、平成19年度に家屋が移転した後に発掘調査を実施することが予定されていた。

調査は平成20年2月4日に表土剥ぎを開始、人力による以降掘削を2月8日より行い、2月25日頃には遺構の掘削と、個別記録は概ね完了した。ところが、2月25日に古墳時代の井戸跡SE008からほぼ完形の木製臼が出土したため、これの取り上げ方法の検討と取り上げ作業実施のため、1週間以上の期間をそれに費やすこととなった。結果、木製臼取り上げ作業実施後、3月8日に空中写真測量を実施、3月11日に埋戻しを行って調査を完了した。

調査の結果、古墳時代の井戸跡5基、土坑2基、古代の可能性のある溝2条、時期不明の溝3条等が検出された。なお、24SD001、24SD002は近世～近代にかけての溝、24SK013は同時期の土坑である。この他、風倒木痕と推定される土層の横転が1ヶ所検出された。

2. 基本土層 (第134図)

第24次調査区では、第2層の水田耕作土直下が基本的な遺構検出面である。第2層は昭和9年頃に行われた耕地整理後の水田耕作土であり、これ以下の土層に水田層が認められないことから、当該耕地整理の際に地形の削平が行われたものと考えられる。調査区の中央部、概ね24SD003と24SD005の間にあたる部分では、安定地盤面が窪んでおり、



第134図 大道24次調査区土層模式図

そこに黒色～黒褐色粘質土(3層)の堆積が認められた。この土層は基本的に無遺物であることから、原地形の凹面に周囲から黒色土が自然に流入して形成されたものと考えられる。3層の分布している範囲で検出された井戸跡、土坑、溝は3層上面～3層中での検出がほとんど困難であった。井戸跡・土坑のうち、特に多くの遺物が出土したものに付いては3層中で多くの遺物が出土することが注意され、遺構の存在が強く示唆されたが、遺構プランの確認は非常に困難であったため、安定地盤面まで掘り下げて遺構を検出することとなった。耕地整理での削平を考慮すると、4層上面よりも上に本来の遺構面があったと推定される。

3. 遺構・遺物

井戸跡 (SE)

24SE006 (第135図)

切り合いをもって検出された遺構で、24SE006→24SE007の順に築造されたものである。

24SE006は長軸が推定で1.30m、短軸1.20mのほぼ円形を呈する遺構であり、検出面からの最大深は1.00mである。標高5.50m前後から下では湧水があり、特に標高5.00m以下では激しいが、壁面の著しい崩落やオーバーハングは認められなかった。埋土は上～中部が暗灰色～黒灰色土、下部がほぼ黒色の粘質土であった。上～中部の埋土は付近の基盤土に由来するとみられるシルトのブロックを含んでいることから、遺構廃絶後意図的に埋め戻された可能性が高いと判断できる。井筒は出土せず、土層にもその痕跡が認められないが、常に湧水のある地層まで深く掘りこまれた遺構であることから、井戸である可能性が高いと思われる。出土遺物から、古墳時代前期の所産であると考えられる。

出土遺物 (第136図) 1は、土師器小形器台の脚部で、胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ナデ後ミガキ調整、底径約10.4cmを測る。

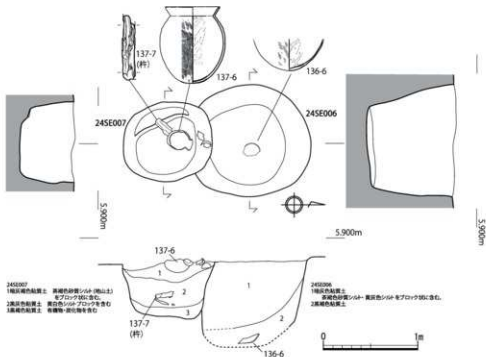
2・3は、土師器小形丸底壺の口縁部で、2・3ともに内外面ナデ後ミガキ調整。3の口径は約9.2cmを測る。

5は、土師器高坏の脚部で、底径約12.6cmを測る。

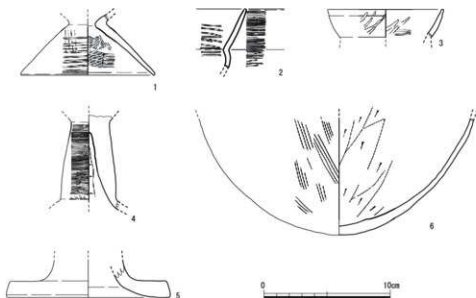
6は、土師器甕の底部で、胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面黒褐色を呈し、内面ハケズリ、外面ハケメ後ナデ調整を施している。

24SE007 (第 135 図)

24SE007 は 24SE006 が廃絶し、埋め戻された後に掘り込まれた遺構である。長軸 0.95m、短軸 0.85m の円



第 135 図 24SE006・007 平面・断面・土層断面実測図 (1/40)



第 136 図 24SE006 出土遺物実測図 (1/3)

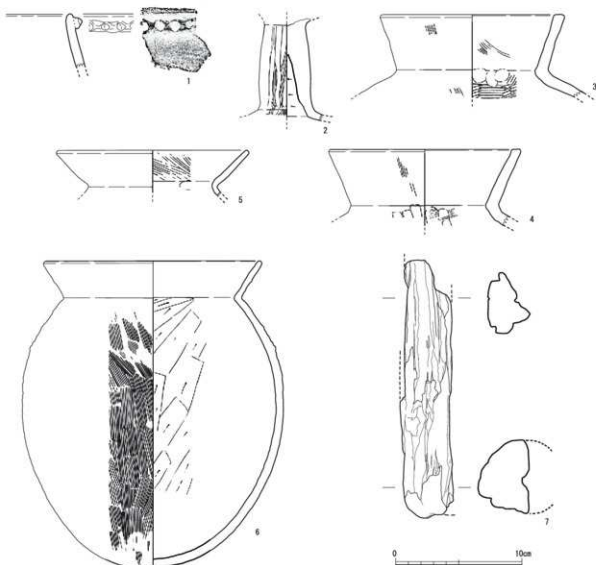
形状で、検出面からの最大深は0.60mである。下底部にはテラス状の段差が認められる。24SE006と同じく標高5.50m以下には湧水が認められ、下底部に近いほどそれが著しい。滞水していたためか、標高5.50m付近の壁面には挟れてオーバーハングしている部分がある。埋土は埋土は上～中部が基盤土由来とみられるシルトブロックを含む暗灰色～黒灰色土、下部が有機物・炭化物を多く含む黒色の粘質土であり、24SE006と同様に廃絶後に埋め戻された可能性が考えられる。埋土からは土師器類が出土しているほか、竪柱の先端部破片が出土した。

出土遺物（第137図）1は、弥生早期の突帯甕の口縁部。

2は、土師器高坏脚部で、内面ナデ、外面ハケメ後縦方向のミガキ調整を施している。

3・4は、土師器壺の口縁部。3の胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部ハケメ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約14.6cmを測る。4の胎土は長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約15.2cmを測る。どちらも頸部に指頭圧痕が認められる。

5は、土師器甕口縁部。内面ハケメ、外面ナデ調整で口径約15.2cmを測る。



第137図 24SE007出土遺物実測図(1/3)

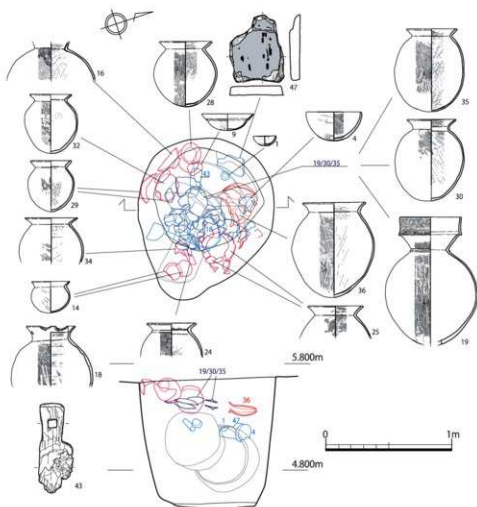
6は、土師器甕で口縁部が「く」の字状に外反し、胎土は長石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面赤色～明赤褐色、外面橙色～黒色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部ケズリ、外面口縁部ナデ胴部ハケメ調整で口径約17.3cm、器高24.3cmを測る。

7は、木製品で竪杆の先端部。材質はヤママモで最大長20.4cm、幅5.8cmを測る。古墳時代に比定される。

24SE008（第138～140図）

24SE008は調査区南部で検出された遺構で、24SD016に隣接している。基本土層の項で述べたように安定地盤面がやや窪んだところに黒色土（基本土層の第3層）が堆積している場所であるため、黒色土を若干掘り下げた時点で土師器のまとまった出土がみられたことから遺構の存在が窺われたものの、プランの検出には至らず、結局黒色土をほぼ除去するまで掘り下げ、ようやくプランを確定できた。隣接する遺構24SX018とは切り合い関係の確認が平面的にも土層断面でも困難であり、切り合い関係が無い、すなわち同時に存在した一連の遺構である可能性も考えられる。

遺構は長軸1.30m、短軸1.10mの楕円形状を呈し、検出面からの最大深は1.00mを測る。埋土は上層が黒灰色粘質土、下層はほぼ黒色の粘質土である。標高5.50m付近以下では湧水が認められ、底部付近に近づくほど激しい湧水となり、ポンプアップを行わないと1時間で満水になる程であった。しかし、壁面の崩落やオーバー



第138図 24SE008 上層遺物出土状態図（1/30）

ハングはほとんど認められない。井筒は出土せず、土層断面により井筒の痕跡を確認することも困難であったが、豊富な湧水がある土層まで掘り下げられている遺構であることから、井戸と考えておきたい。遺構の埋没年代については、出土した土師器の年代観により古墳時代前期、実年代では4世紀前半頃に位置づけられる。

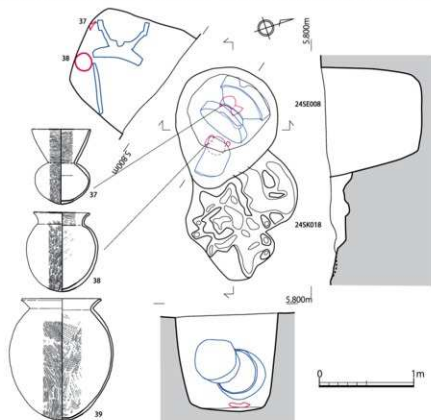
出土遺物は遺構土層から完形品を複数含む土師器類が出土しており（第138図）、その数は20個体を超えるまとまった量であった。これら土師器類の出土層位の直下からほぼ完形の木製臼、および臼の蓋の可能性のある半月形の木製品が検出された。臼は遺構の北西側壁面沿いにやや口を下にする形でほぼ横倒しとなっていた。検出面に近い側は口縁部がわずかに欠け、また脚台部の一部は腐朽して脆くなり、表面組織が崩れている部位がみられたが他の部分の保存状態はきわめて良く、ほぼ完形品であった。臼自体については後で詳述するが、長期にわたり使用されたものと推定できる。臼の蓋と推定される半月形の木製品は遺構南東端の遺構プランががやや張り出している部位の下層で出土している。臼よりも下位の遺構下底部からは完形の土師器が2個体出土した。長頸壺（第146図・37）は臼の直下にちょうど数きとなる形で押しつぶされた状態で出土している。また小



最下層からの遺物出土状況1（第146図37）



最下層からの遺物出土状況2（第146図38）



第139図 24SE008 最下層遺物出土状態図（1/40）



臼の一部が検出された状況



臼が出土した状況



臼及び半月形の木製品出土状況



発泡ウレタンを使用した臼の取り上げ



取り上げた臼のクリーニング



臼を非接触の3D スキャナを使用して図化



国立歴史民俗博物館による年輪年代サンプル採取



臼レプリカ作成のため雌型を作成 (東京都科学撮影)

第 140 図 24SE008 調査過程及び出土臼整理過程

形の甕(第146図-38)は半月形木製品の直下の床面直上から出土した(第139図)。これらの土師器は出土状況からいずれも意図的に遺構底部に置かれた状況が認められる。さらに出土状況を作図できなかったが、白及び半月形木製品の下位土層の遺構底部付近からほぼ1個体に復元できる土師器片(第146図-39)がまとまって出土しており、これの口縁部には隣接する24SX018と24SE008上層から出土した口縁部破片が接合することが整理段階で確認されている。これらのことから、出土した白および半月形木製品については遺構底において土師器壺(第141図-17)・甕(第146図-38)の安置や土師器甕の破砕と口縁部破片の隣接遺構への廃棄といった一連の行為の後に24SE008に埋置されたことが推定できる。こうした行為が白等の「廃棄」に伴う祭祀行為として位置づけられる可能性を考えておきたい。従って、白よりも上層において多量に出土した土師器類の出土状態についても、白等の埋置に伴う一連の祭祀行為の結果として意味づけできる可能性も考えられよう。

木製臼の取り上げと保存処理等(第140図)

出土した木製臼については、まず現地での出土状況の写真撮影・図面作成を行った後、保存処理の前提として樹種を確定させる必要性から、(株)古環境研究所に委託し樹種同定のためサンプル採取を実施した。さらに(株)東部文化財保存研究所に委託して発泡ウレタンによる保護を行いながら取り上げ作業を行った。取り上げた白は、クリーニングを行った後、仮設水槽で仮保存することとした。また、古墳時代前期の年輪年代資料としても貴重であるため、国立歴史民俗博物館により年輪年代測定のための年輪サンプル採取が実施された。保存処理を行う前に現状で実測図を作成する必要があったが、明大工業株式会社に委託し、3Dスキャナを使用して非接触により図面作成を行った。保存処理の方法としては、大分県立歴史博物館山田拓伸氏に指導いただき、方法を検討した結果、真空凍結乾燥法が最も適しているとの判断に達し、山田氏を通じて奈良文化財研究所保存修復科学研究室長高妻洋成氏に依頼することとし、平成21年2月3日に大分市教育委員会と奈良文化財研究所の間で保存処理のための共同研究協定が締結され、奈良文化財研究所に白を運搬して平成22～25年度の予定で保存処理を実施中である。一方、樹種同定の結果、白の材質がクスノキであることが判明し、材の性質上、真空凍結乾燥法によったとしても割れや変形が生じることが予想された。このため現状でのレプリカ作成が必要と判断されたため、平成21年2月から平成21年10月にかけて株式会社京都科学に委託してレプリカの作成を実施している。

出土遺物(第141図1～17) 1は、小形の土師器碗。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面指ナデ後指オサエ、外面指ナデ調整で口径7.2cm、器高3.2cmを測る。底部外面に黒斑が認められる。

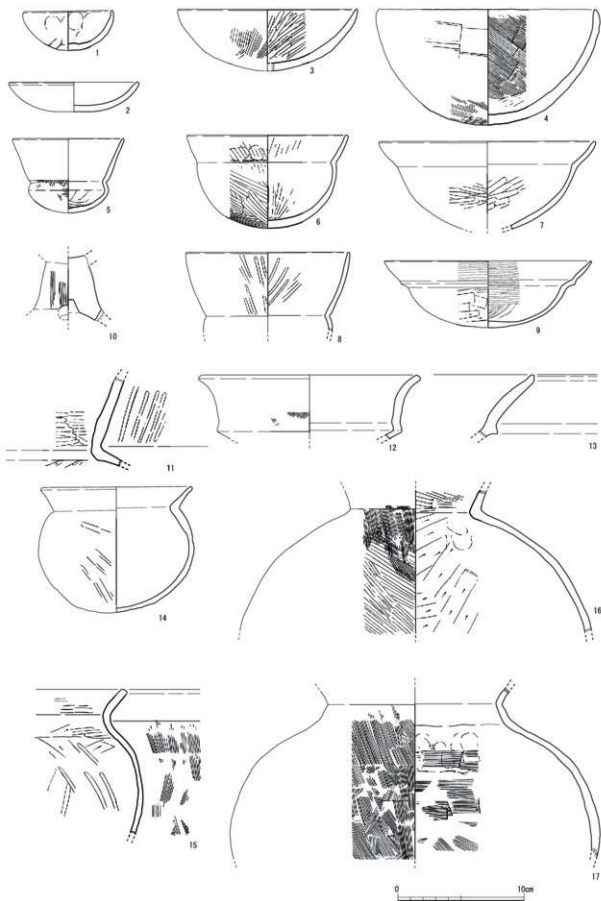
2は、24SX018から出土した平坦な底部を有する土師器碗。24SX018は、24SE008に付随する遺構であり、24SE008出土遺物として扱う事にする。胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい褐色を呈し、内面指ナデ、外面ナデ後に指おさえ調整で口径約10.3cm、器高2.3cmを測る。内外面の一部に黒斑が認められる。

3は、土師器碗で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色、外面暗褐色～にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約14.2cm、器高4.9cmを測る。

4は、土師器碗で、口縁部は内湾気味に立ち上がり端部は指で摘み上げ丸く処理をしている。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色～黒色を呈し、内面ハケメ、ハケメ後ナデ調整で口径17.1cm、器高9.2cmを測る。内面に黒斑が、外面に煤の付着が認められる。

5は、土師器小形丸底壺で、胎土は石英・長石・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面橙色～にぶい橙色を呈し、内面指ナデ、外面ナデ後ミガキ調整で口径12.0cm、器高15.1cmを測る。

6は、小形丸底壺で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面にぶい



第141図 24SE008 出土遺物実測図① (1/3)

橙色を呈し、内面指ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径 17.1 cm、器高 9.2 cm を測る。外面の一部に煤付着が認められる。

7 は、土師器鉢。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面指ナデ後ミガキ調整で口径 17.2 cm、器高 $7.2 + \alpha$ cm を測る。

8 は、土師器小形丸底甕内外面ナデ後ミガキ調整。外面に煤付着が認められる。

9 は、山陰系土師器二重口縁鉢で、胎土は石英・長石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ後丁寧なミガキ、外面底部ケズリ後ミガキ調整で口径約 16.2 cm、器高 5.3 cm を測る。器壁は薄く、丁寧な作りで、胎土も地元産ではなく、いずれかの持込み品といえる唯一の鉢である。調査の結果、福岡市早良区西新所在の西新町遺跡出土遺物に酷似しており、この遺跡もしくは、福岡平野からの持込みの可能性が高い。

10 は、高坏の脚部で、内面は粘土を充填させている。外面は縦方向のハケメ調整である。脚部に 4 ケ所の穿孔が認められる。

11 は、土師器壺頸部。内面横方向のミガキ、外面ヨコナデ後縦方向のミガキが認められる。

12 は、土師器複合口縁甕の口縁部。内外面ナデ調整で、外面に煤付着が認められる。

13 は、畿内第 5 様式複合口縁甕の口縁部。口縁端部外面に 1 条の沈線を巡らせ、内外面ナデ調整である。

14 は、小形丸底甕。胎土は石英・雲母・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面橙色～にぶい橙色を呈し、内面工具ナデ後ナデ、外面ナデ後ミガキ調整で口径 12.0 cm、器高 15.1 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

15 は、土師器壺で、胎土は石英・長石・白色粒子を含み、色調は、内外面暗褐色～黒色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ後ミガキ風ナデ調整である。

16 は、土師器壺で、胎土は長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は、内面灰黄褐色、外面にぶい黄褐色を呈し、内面口縁部は粗いハケメ、胴部ケズリ後ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で頸部径 16.3 cm を測る。

17 は、土師器壺で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内外面明黄褐色を呈し、内外面ハケメ調整で、頸部径 13.8 cm である。

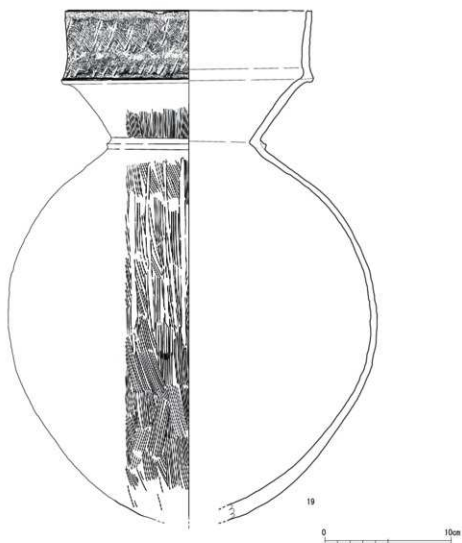
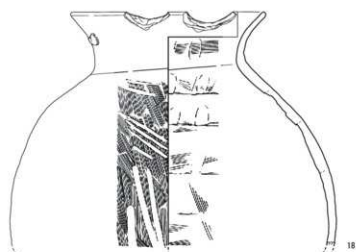
(第 142 図 18・19) 18 は、土師器壺で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は、内外面明赤褐色を呈し、内面口縁部ハケメ、胴部ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整である。胴部内面に輪積み痕が多数見られ、処理もずさんである。頸部付近に指頭圧痕が認められる。外面に煤付着が認められ、煤は、炭素 14 年代測定サンプル 5 として採取した。測定結果として、 1750 ± 45 、較正年代 AD210—AD195 に 87.3% の確立密度と出ている。

19 は、複合口縁甕で、口縁部外面に波状文を施す安国寺式甕である。口縁部が内傾ではなく上に立ち上がっている。更に胴部も球形化しており、安国寺式甕の新しい様相が見られる。頸部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面赤褐色～黒褐色、外面明赤褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後縦方向のミガキ調整で口径 19.5 cm、器高約 $40.5 + \alpha$ cm、頸部径 10.8 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

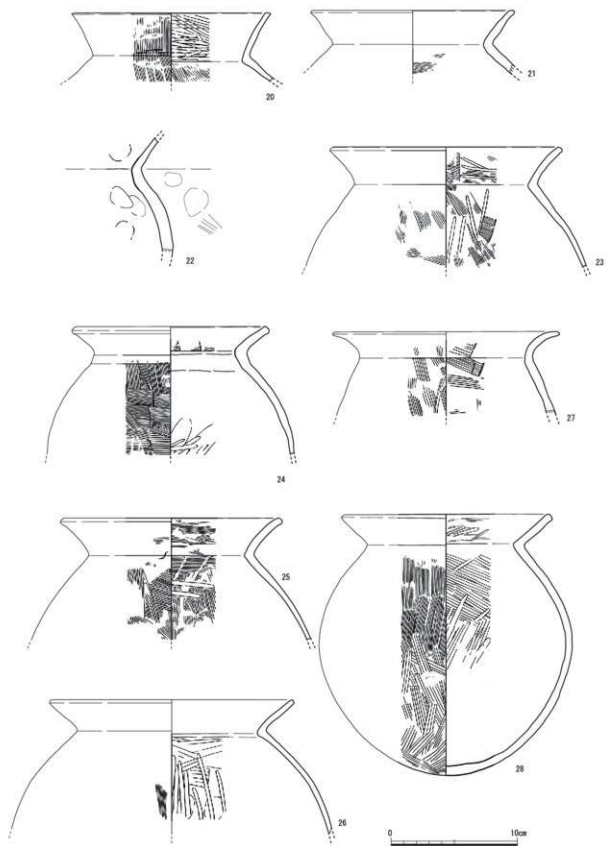
(第 143 図 20～28) 20・21 は、土師器甕口縁部。20 の色調は、内外面赤褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約 15.4 cm を測る。21 の口縁部は、約 16.2 cm を測る。

22 は、土師器甕の胴部。内面ケズリ後ナデ調整外面ハケメ後ナデであるが雑な作りである。内外面に指頭圧痕、外面に煤付着が認められる。

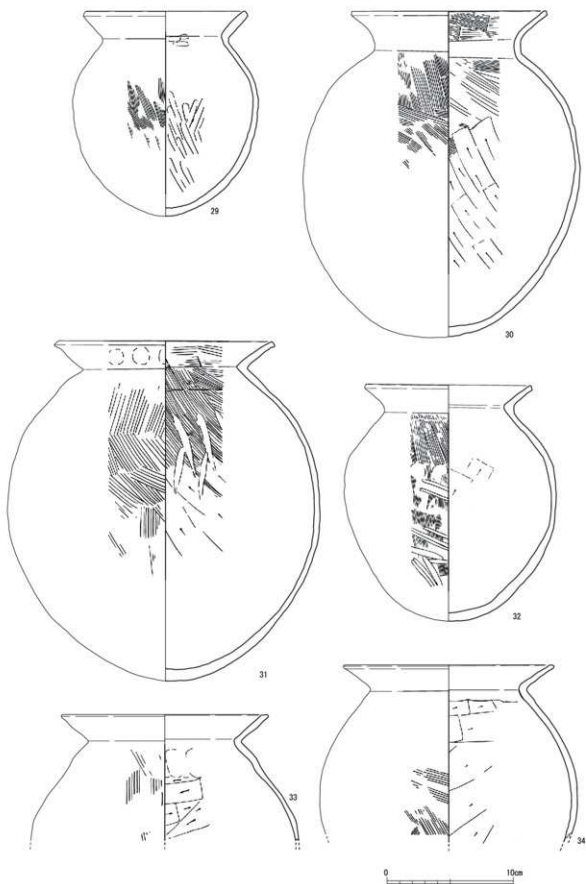
23 は、土師器甕。在地系の製作技法であるが器壁は薄い。胎土は長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は、内面橙色、外面明褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径 18.4 cm を測る。外面に煤付着が認められる。



第142図 24SE008 出土遺物実測図② (1/3)



第143図 24SE008 出土遺物実測図③ (1/3)



第144図 245E008 出土遺物実測図④ (1/3)

24 は、土師器甕。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面赤褐色～暗赤褐色、外面暗赤褐色～黒色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ調整で口径 15.0 cm を測る。頸部内外面に指頭圧痕、外面に煤付着が認められる。

25 は、土師器甕。在地系の製作技法で、胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は、内外面にぶい橙色を呈し、内面ハケメ後粗いミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径 17.0 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

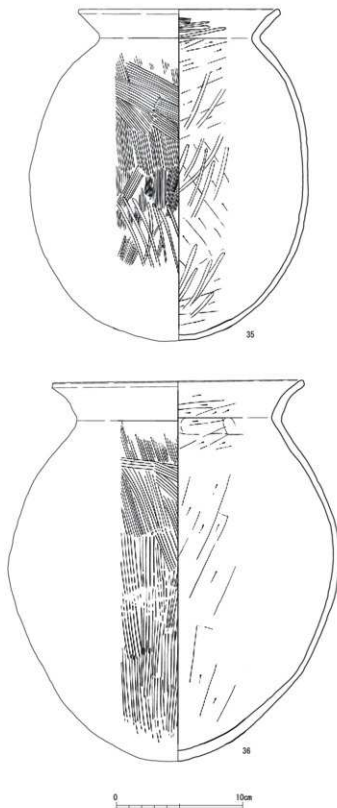
26 は、土師器甕。胎土は、石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は、内外面明黄褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約 19.0 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

27 は、土師器甕。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面赤褐色、外面暗赤褐色～ぶい褐色を呈し、内外面ハケメ調整で口径 18.0 cm を測る。

28 は、土師器甕の完存品。製作技法は在地系であるが器形は布留系を意識している。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面橙色～ぶい橙色、外面明褐色を呈し、内面ハケメ後粗いミガキ、外面口縁部横ナデ、胴部ハケメ調整で口径 16.1 cm、器高 20.7 cm を測る。外面に煤付着が認められ、煤は、炭素 14 年代測定のサンプル 2 として採取した。測定結果として、 1800 ± 70 、較正年代 AD70—AD395 に 95.4% の確立密度と出ている。

(第 144 図 29～34) 29 は、小形の土師器甕。製作技法は在地系で、胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内外面明黄褐色～黒褐色を呈し、内面工具ナデ後ミガキ、外面口縁部横ナデ、胴部ハケメ後ナデ調整で口径約 13.0 cm、器高 16.3 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

30 は、土師器甕。製作技法は、折衷型であり器壁も薄い。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内外面明褐色～黒褐色を呈し、内面胴部の上部はハケメ、下部はケズリ、



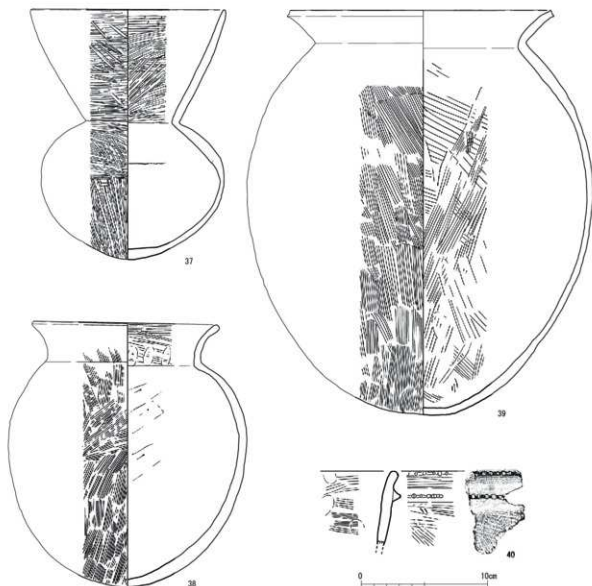
第 145 図 245E008 出土遺物実測図⑤ (1/3)

外面口縁部はナデ、胴部はハケメ調整で口径 15.5 cm、器高 25.9 cm を測る。外面に煤付着が認められる。煤は、炭素 14 年代測定 of サンプル 3 として採取したが、煤の採取量が少なく測定結果を出す事は出来なかった。

31 は、土師器甕。製作技法は、折衷型であるが、器壁も薄く、器形もかなり布留系の甕を意識している。胎土は、石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面黄橙色～黒色、外面明黄橙色～黒色を呈し、内面胴部の上部はハケメ、下部はケズリ、外面口縁部はナデ、胴部の上部ハケメ、下部ナデ調整で口径 17.5 cm、器高 27.1 cm を測る。口縁部外面に指頭圧痕が、胴部外面に煤付着が認められる。

32 は、土師器甕の完存品。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内外面明褐色～黒褐色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部はケズリ、外面口縁部はナデ、胴部ハケメ調整で口径 13.2 cm、器高 14.9 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

33 は、布留系の土師器甕。口縁部はより外反し口縁端部は平坦にまとも器壁は薄い。胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 16.4 cm を測る。外面に煤付着が認められる。



第 146 図 24SE008 最下層出土遺物実測図 (1/3)

34も33と同様な布留系の土師器。胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面黄褐色～にぶい黄褐色、外面黄褐色～黒色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約16.4 cmを測る。外面に煤付着が認められる。

(第145図 35・36) 35・36は、布留系の土師器であり器壁も薄い、口縁形態はどちらも在地系に近い。35の胎土は、石英・長石・雲母・白色粒子を含み、色調は、内面灰黄褐色、外面黄褐色を呈し、内面口縁部ハケメ後ナデ後粗いミガキ、外面口縁部はナデ、胴部ハケメ後ナデ後粗いミガキ調整で口径約16.0 cm、器高26.3 cmを測る。外面に煤付着が認められる。36の、胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面黄褐色～黒色、外面褐色～黒色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面口縁部はナデ、胴部は縦方向のハケメ調整で口径約19.8 cm、器高30.4 cmを測る。外面に煤付着が認められる。

(第146図 37～40) 37～38は、井戸の最下層から出土したものである。37の土師器長頸壺と土師器は完存品である。また、39の土師器は、底部破片であったがほぼ復元できたものである。ただし、最下層出土の接合を試みたが口縁部から3.0 cmまでで終了した。しかしながら井戸上層と24SX018出土の口縁部が接合できた。これらのことから、この壺は口縁部を祭祀使用の為打ち欠かれて、廃棄された可能性も考えられる。

37は、土師器長頸壺の完存品で、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、胴部は球形をなす器形で、胎土は、角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面褐色～黒褐色、外面褐色～黄褐色を呈し、内面口縁部はミガキ、胴部はナデ、外面横方向後縦方向のミガキ調整で口径約15.4 cm、頸部径7.5 cm、器高19.9 cmを測る。ミガキ調整が丁寧に施されており外部からの持込を窺わせる物であるが胎土等を観察すると在地で製作されている事がわかる。

38は、土師器の完存品で内面にケズリが施されているが器形は在地系である。胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面黒褐色、外面黒色を呈し、内面口縁部ハケメ、胴部ケズリ、外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約14.6 cm、器高21.1 cmを測る。外面全体に煤付着が認められ、内面にも焦げた痕跡がみられた為、炭素14年代測定を行う為、外面の煤と考えられる物をサンプル1-a、ふきこぼれと考えられる煤をサンプル1-bとして採取した。

測定結果として、

サンプル1-aは、1740 ± 30、較正年代AD235—AD390に95.4%。

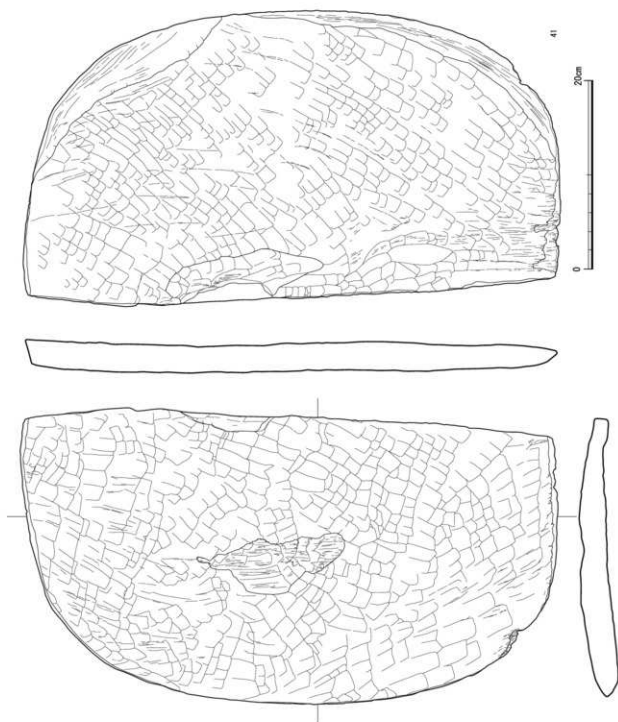
サンプル1-bは、1750 ± 50、較正年代AD205—AD400に95.4%の確立密度と出ている。

39は、土師器で、口縁部が「く」の字状に外反し、やや球形化した胴部を持つ壺で、胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は、内外面黄褐色～黒褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約20.5 cm、器高32.1 cmを測る。外面に黒斑と煤付着が認められる。

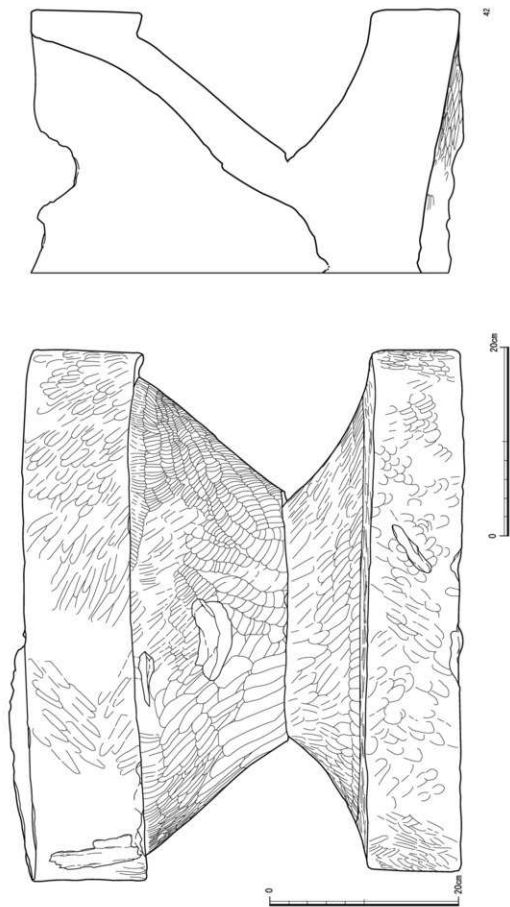
40は、弥生土器の口縁部。突帯の口縁部で、口縁部外面に刻み目が見られることから弥生時代前期末と考えられるものである。この遺物は、24SE008の時期に所属しない。

(第147図) 41は、白の蓋と考えられるものである。大分県内の民俗調査例によると白の蓋は2枚1組で使用するとの事。41は、2枚組みの1枚と考えられる。樹種は出土した白と同様クスノキ製である。最大長56.4 cm、最大幅30.4 cm、最大厚3.2 cmを測るもので、内面は、少し窪ませて、蓋が安置し易いような器形にしている。内外面共にヤリガンナによる加工痕がみられ、かなり丁寧な作りである。

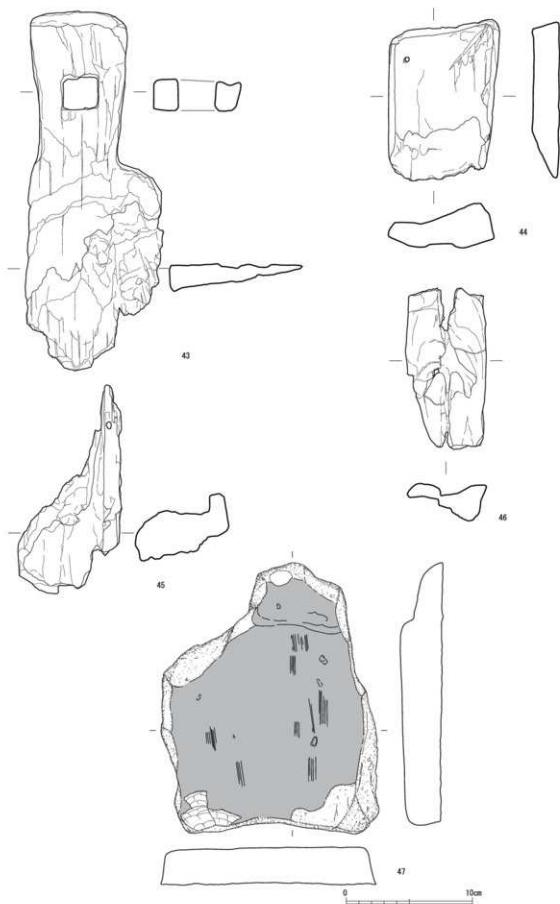
(第148図) 42は、クスノキ製の白である。外面の一部に樹皮が見られることから、伐採したクスノキを丸太に加工し作られている。白の大きさは、口径55.2 cm、器高45.6 cm、底径56.4 cm、鉢部深さ30.4 cmを測るも



第147図 245E008出土 白蓋実測図 (1/4)



第148図 245E008出土 白実測図(1/4)



第149図 24SE008出土 石器・石器実測図(1/3)

のでありヤリガンナで丁寧に製作されている。また、底部内面は中心部が1.2～1.4 cm程削られており、白のすわりが良くなる様に考え作られている。白の内部はかなり深くまで使用痕が認められる事から、餅搗き用としてではなく、収穫を終えた穀物の処理としての穂から穀粒を分離する「脱穀」、籾殻を取り外す「籾摺り」用として使用された可能性が高い。器形は、弥生時代前期に出土する白に類似するが、今まで、このような器形の完存品の出土例はない。古墳時代の白といえば、福岡県原深町遺跡で出土した白の様にクリ材製で、口径34.8 cm、底径31.7 cm、高さ53.0 cm、深さ23.3 cmを測るものであるが単純な器形をしており、次第に背が高くなる傾向がみられる。しかしながら24SE008出土の白は器高も低く、製作時のヤリガンナ痕が良く見受けられもので、デザイン性も芸術的である。

使用されたクスノキは、紀元289年頃伐採されたもので、樹齢は107 + α 年であることが判明している。現代でも白は、ケヤキ材やクスノキ材を使用している例がある。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ25.0 m、径0.80 m ぐらいであるが、高さ50.00 m、径5.00 mに達するものもある。材は堅硬で、耐久性が高く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工等に使用されている。

(第149図 43～47) 43は、用途不明の木製品で、四角形の穿孔が見られ、上面から下面に、直角に柄を取り付けているものと考えられる。aの部分は本来の形であると考えられる。先端に向かって薄くなっているのが特徴である。最大長28.5 cm、最大幅10.7 cm、最大厚2.6 cmを測る。

樹種は、コナラ属アカガシ亜族で、アカガシ亜族には、アカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30.0 m、径1.5 m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられることが多い。

44は、樹種不明の木製品であるが、観察してみるとシイ属ブナ科ツブラジの可能性がある。用途は不明であるが、先端を尖らせている事から楔として使用した可能性が高い。最大長12.0 cm、最大幅8.7 cm、最大厚2.1 cmを測る。

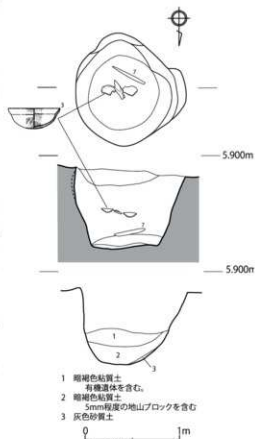
45は、井戸p-15として取り上げた木製品で用途は不明であるが、加工痕(穿孔)がみられることから木製品とした。樹種は、ムクロジである。ムクロジは、本州(茨城県、新潟県以南)、四国、九州、沖縄に分布する落葉高木で、高さ25.00 m、径1.00 mに達するが、やや軽軟で、脆弱な材で、器具、家具などに用いられるものである。最大長6.5 cm、最大幅8.0 cm、最大厚3.7 cmを測る。

46は、樹種不明の用途不明の木製品。最大長12.8 cm、最大幅6.3 cm、最大厚2.7 cmを測る。

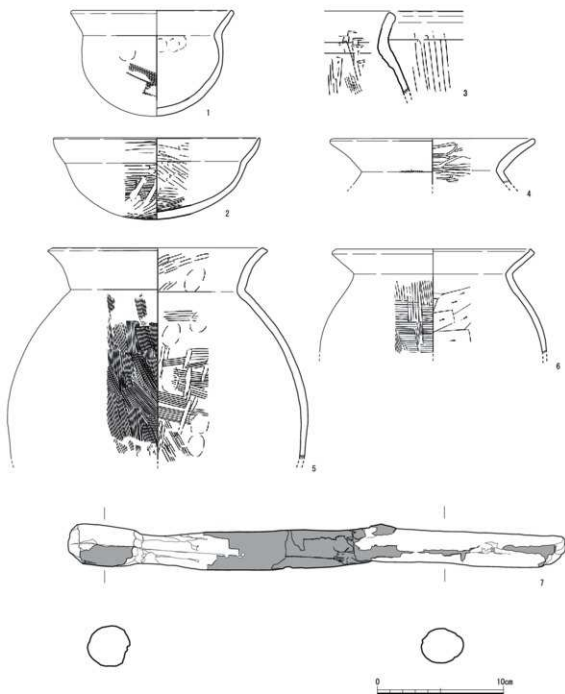
47は、安山岩製の石皿。裏面は欠損しているが、表面は、磨石を使いかなり使い込まれている。長さ21.5 cm、最大幅17.3 cm、厚さ3.4センチを測るもので、重さ1680gを量る。

24SE009 (第150図)

調査区南部で検出された遺構で、浅いピット(24SP014)に



第150図 24SE009 平面・断面・土層断面
実測図(1/40)



第 151 図 24SE009 出土遺物実測図 (1/3)

切られている。径1.10～1.20mの不整円形状を呈し、検出面からの最大深は0.90m程度である。湧水が認められ、特に下底部では著しい。壁面には湧水によるとみられるオーバーハングが認められる。埋土は上部が黒灰色土(作図していない)で、下部は概ね黒褐色の粘質土で構成される。下部の埋土からは加工痕を有するものを含む木片等の有機物も出土した。井筒は検出されず、土層からもその痕跡は認められないが、激しい湧水がある土層まで掘り込まれており、井戸と考えられる。出土した土師器類から、古墳時代前期の遺構と判断される。

出土遺物(第151図)1は、小形丸底甕で、胎土は石英・長石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面にぶい橙色、外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約12.9cm、器高8.4cmを測る。内外面に黒

斑が認められる。

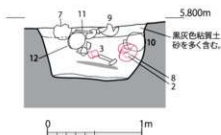
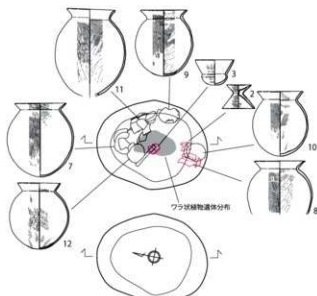
2は、小形丸底鉢で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面明赤褐色、外面にぶい赤褐色～にぶい褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約16.4cm、器高6.5cmを測る。

3は、土師器甕で、胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面明褐色～黒色、外面にぶい黄褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ後ズリ後ナデ、外面縦方向のハケメ調整で外面に黒斑が認められる。

4・6は、土師器甕口縁部で、4は内面ナデ後ミガキ、外面ナデ調整で口径約16.2cmを測る。6の胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色～にぶい褐色を呈し、内面ケズリ、外面横方向のハケメ後縦方向のハケメ調整で口径約16.0cmを測る。4は在地系、6は布留系を意識して作られている。

5は、土師器甕。口縁部が立ち上がり気味に外反し端部をまとめる器形で胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色、外面暗褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整で口径約17.4cmを測る。外面に煤付着が認められる。

7は、材質は、不明ながら径約3.2cmの杭を削り播り粉木状に作っている。網掛けの所は樹皮が残っている。遺物は古墳時代前期と考えられる。



245E010 (第152図)

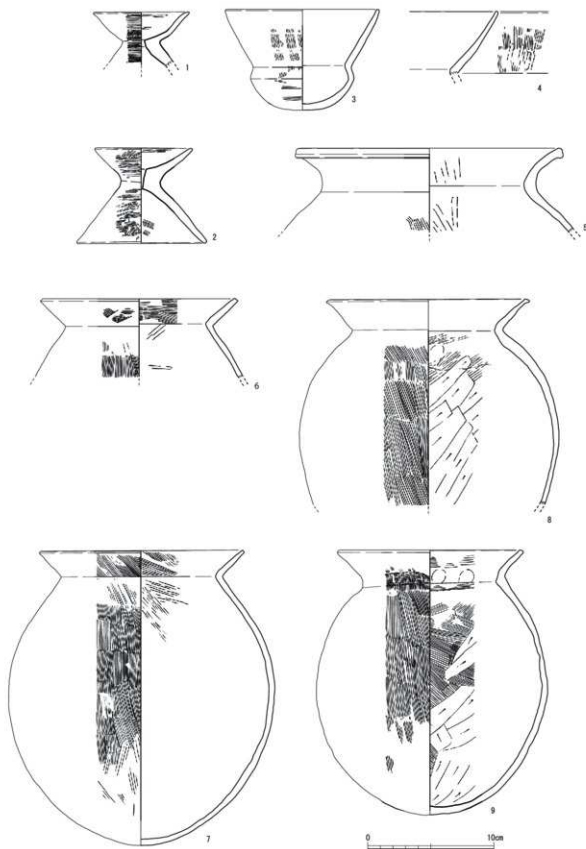
調査区南部で検出された遺構で、周辺の井戸・土 第152図 245E010 平面・断面・遺物出土状態図 (1/40) 坑群の中で比較的高い位置 (標高約5.80m)

にあったものである。長軸約1.20m 短軸約0.90mの楕円形状を呈し、検出面からの最大深は0.60m程度である。標高5.50m前後から下では湧水があり、機能時に滞水していたためか壁面のオーバーハングが認められる。埋土は上部が砂を多く含む黒灰色粘質土であり、下部は黒色の粘質土である。完形のものを含む少なくとも12個体を超える土師器類が出土しており、一括廃棄された可能性が高い。土器群とともに木片等の有機物も出土したが、土器が多量に出土した土層の直下においては藁状の植物遺体が出た。出土した土師器類から、古墳時代前期の遺構と判断される。

出土遺物 (第153図) 1は、土師器小形器台で、坏部がやや内湾気味に外反し口縁端部は丸みを帯びる。胎土は長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面暗赤褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面横方向のミガキ調整で口径7.6cm、器高4.5+αcmを測る。

2は、土師器小形器台。1に比べ口縁部がなだらかに外反し端部は丸みを帯びる。胎土は長石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、坏部内面ナデ後ミガキ、脚部内面ナデ、外面ナデ後ミガキ調整で口径7.8cm、器高7.6cm、底径10.3cmを測る。内外面に黒斑が認められる。

3・4は、土師器小形丸底甕で、3の胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内



第153図 24SE010 出土遺物実測図① (1/3)

面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 12.2 cm、器高 8.0 cm を測る。

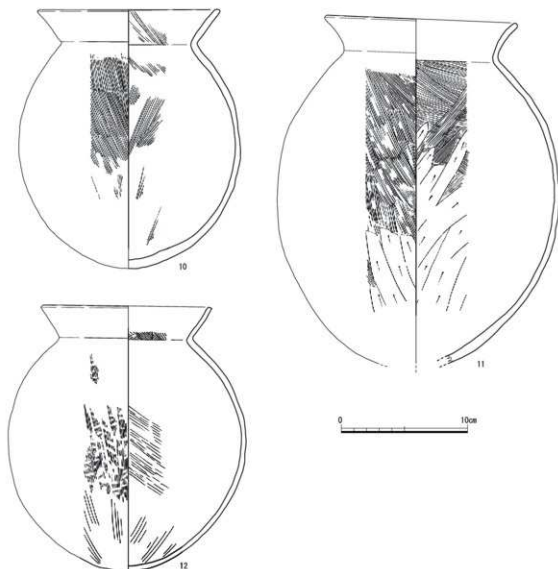
5 は、土師器壺口縁部。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面にぶい褐色、外面黒色～褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約 21.2 cm を測る。

6 は、土師器甕で、口縁部が「く」の字状に外反し端部は丸みを帯びる。胎土は角閃石・赤色粒子・白色粒子・砂粒を含み、色調は内外面黒色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約 15.6 cm を測る。

7 は、土師器甕で 6 と同様な器形で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面黄褐色、外面明黄褐色を呈し、内面ハケメ後丁寧なナデ、外面ハケメ調整で口径約 14.6 cm、器高 21.0 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

8 は、土師器甕で 6 と同様な器形であるが口縁部端部を摘み上げるように処理している。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色～黒色を呈し、内面ハケメ後ケズリ、外面ハケメ後調整で口径約 16.1 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

9 は、土師器甕。製作技法は、在地系と布留系の折衷型である。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面黄褐色、外面明黄褐色～黒褐色を呈し、内面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ後ケズリ、外面口縁部



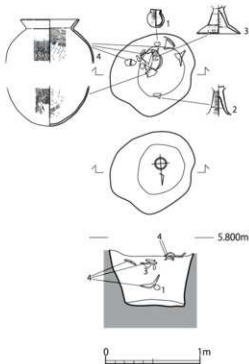
第 154 図 245E010 出土遺物実測図② (1/3)

ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約 17.2 cm、器高 23.4 cm を測る。外面全体に煤付着が認められる。

10 は、土師器甕。製作技法は在地系である。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色～黒色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約 14.4 cm、器高 20.6 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

11 は、土師器甕。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色～明褐色を呈し、内面ハケメ後ケズリ後粗いナデ、外面口縁部横方向のハケメ・胴部ハケメ後ケズリ後工ナデ調整で口径約 15.3 cm、器高 27.7 + α cm を測る。外面に煤付着が認められる。

12 は、土師器甕。口縁部はやや内湾気味に外反し、口縁端部は平坦に仕上げるもので、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面明黄褐色～黄褐色、外面褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約 13.5 cm、器高 21.1 cm を測る。外面全体に煤付着が認められる。



第 155 図 24SE012 平面・断面・遺物出土状態図 (1/40)

24SE012 (第 155 図)

調査区南部で検出された遺構で、周辺の井戸・土坑群の中で比較的標高が低い位置(標高約 5.65m)にあったものである。長軸約 0.90m、短軸約 0.85m の不整形形状を呈し、検出面からの最大深は約 0.60m 程度である。標高 5.50m 前後から下では激しい湧水があったが、壁面のオーバーハングはほとんど無い。埋土は概ね黒色の粘質土で構成される。完形のミニチュア土器を含む土師器類が出土したが、ミニチュア以外の土器はいずれも完形に復元できるものではなかった。さらに加工痕を有するものを含む木片等の有機物も出土した。出土遺物から、古墳時代前期の遺構と判断される。

出土遺物(第 156 図) 1 は、ミニチュア土器の壺。胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 3.0 cm、器高 5.8 cm を測る。頸部内外面に指頭圧痕が認められる。

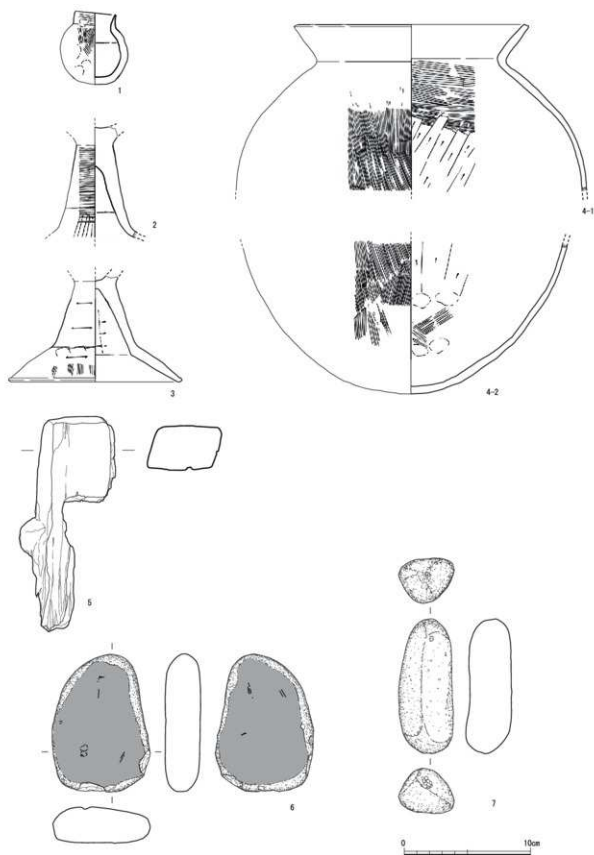
2・3 は、高坏脚部。3 の胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面横方向のナデ、外面ハケメ後ナデ調整で底径約 13.8 cm を測る。

4 は、土師器甕。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は平坦に仕上げるもので、胎土は石英・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面明黄褐色～黄褐色、外面褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整で口径約 18.6 cm、器高 25.2 + α cm を測る。外面に煤付着が認められる。

5 は、木製品で、樹種は不明であるが、ブナ科コナラ属アカガシ亜属と考えられる。最大長 17.0 cm、最大幅 6.2 cm、厚さ 3.5 cm を測る。器種は不明であるが加工痕が見られる。なんらかの用途に使用されたものと考えられる。

6 は、安山岩製の磨石。長さ 10.9 cm、幅 7.8 cm、厚さ 2.7 cm、重さ約 400g を測る。下部は、敲石として使用されている。

7 は、角閃石安山岩製の敲石で、上面と下面に使用痕が認められる。長さ 10.8 cm、幅 4.3 cm、厚さ 3.5 cm、重さ約 280g を測る。



第 156 図 24SE012 出土遺物実測図 (1/3)

溝状遺構 (SD)

24SD003 (第132図、土層：第158図)

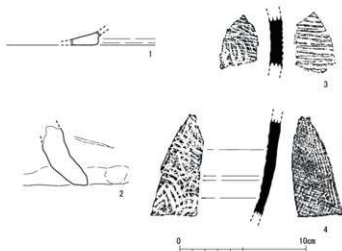
調査区中央を北東から南西に斜行する溝状遺構で、N-68°-Eを指向する。幅0.60～1.00m、最大深は0.40mである。埋土上部は暗褐色土、下部は灰褐色粘質土で、水流の痕跡は無く、区画溝と思われる。24SD015との切り合い関係は明らかにできず、同時に存在した可能性もある。出土遺物は土器小片のみであるため、帰属時期は不明であるが、24SD015と同時期となる可能性がある。

24SD005 (第158図)

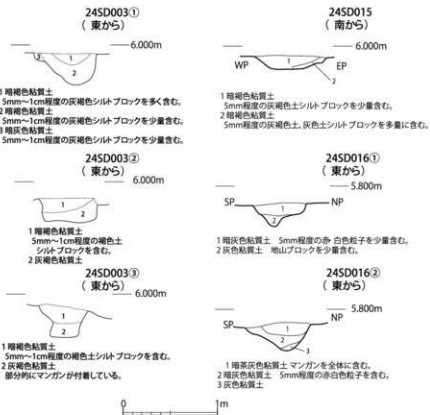
調査区南東端部で検出された溝状遺構で、N-69.4°-Eを指向し、24SD003とほぼ平行する。幅0.40～0.50m 最大深0.20mを測る。24SD017を切っている。黒灰色砂質土で埋積している。出土遺物は無く、時期は不明である。

24SD015 (第132図、土層：第158図)

調査区北東端で検出された溝状遺構で、N-15.8°-Wを指向する。幅0.70～0.80m、最大深0.40mを測る。24SD003とは同時期に存在した可能性があり、切り合いは不明である。また、指向する方位については、調査区内で交



第157図 24SD015 出土遺物実測図 (1/3)



第158図 24SD003・015・016 土層断面実測図 (1/40)

差が確認できないが、24SD016 とほぼ直交する。埋土の状況から、水流は窺えず、区画溝と考えられる。出土遺物から、古代に属する可能性がある。

出土遺物（第157図） 1 は、土師器坏底部。色調はにぶい褐色を呈し、底部ヘラ切り、内面ナデ調整である。

2 は、器台の脚部と考えられるもの。胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい褐色を呈し、内面ナデ、外面ナデと指オサエ調整である。

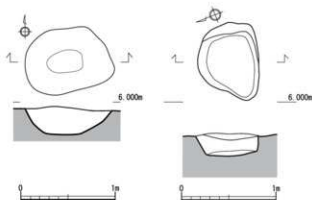
3・4 は、須恵器甕の胴部破片。器高 $25.2 + \alpha$ cm を測る。外面に煤付着が認められる。

24SD016（第132図、土層：第158図）

調査区南東部で検出された溝状遺構で、N-74.2° -E を指向する。幅 0.60～0.75m、最大深 0.40m である。暗灰色～灰色粘質土で埋積しており、土色としては近世溝にも類似するが、近世溝の埋土とは土質や土の質感が異なり、中世以前に属すると思われる。近世遺物は出土せず、土器小片が出土したのみであり帰属時期は不明である。

24SD017（第132図）

調査区南端で検出された溝状遺構で、N-46.5° -W を指向する。24SD005 に切られている。幅 0.65～1.10m、最大深 0.50m で他の溝状遺構に比べ規模が大きい。埋土は暗灰褐色シルト質土である。他のどの溝とも異なる方で、むしろ近世溝 24SD001 と直交する角度に近いが、埋土の土質が大きく異なっている。出土遺物は土器小片であり、帰属時期は不明である。



第159図 24SK024・025 平面・断面実測図（1/40）

土坑（SK）

24SK024（第159図）

調査区西部で検出された遺構で、長軸約 0.90m、短軸約 0.70m の不整楕円形状を呈し、検出面からの最大深は 0.30m 程度である。埋土は暗褐色シルト質土で粘質土である。遺物は僅少であるが、時期の推定できる土師器片が出土しており、古墳時代前期の可能性が高い。

24SK025（第159図）

調査区南部で検出された遺構であるが、周辺で検出された井戸群と異なり、比較的浅い遺構である。長軸約 0.80m、短軸約 0.70m の不整楕円形状を呈し、検出面からの最大深は 0.25m 程度である。黒褐色土を基調とする埋土である。出土遺物は僅少であるが、土師器小片が出土しており、井戸群と同様な古墳時代前期の遺構と推定される。

小結

第24次調査で出土した遺構のうち、出土遺物により詳細な年代のわかるものは古墳時代前期の井戸跡と考えられる遺構6基である。これらは、調査区南側の24SD016周辺に集中して検出された。一部の井戸には切り合い関係も認められることから、繰り返し掘られた可能性が考えられる。この検出位置は今回の調査区の中で最も標高が低い場所であり、土層断面図で提示したように無遺物の黒色土が厚く堆積していた場所である。おそらく原地形上では浅い谷状となる部分であり、黒色土はこれに周囲から流れ込んで厚くなったと推定される。古墳時代当時の地表面標高がどの程度であったか判断が難しいが、当時にも緩やかな谷状の地形が保持されていたとすれば、比較的浅い掘り下げで地下水位に達する位置であったため井戸がこの場所に集中していると推論することもできようか。

当該期の住居跡等集落を構成する他の遺構については井戸群の北及び南側と考えられる。このうち南側については、試掘調査でも遺構が発見されておらず、低湿地に移行していくことが確認されている。北側については隣接する第11次調査区においても当該期の遺構が検出されてはいるが、住居跡は検出できていない。おそらくは近世以降の水田化とくに昭和初期の耕地整理において著しい削平を受けたため残っていないものと思われる。

今回、特筆すべきものは、24SE008の存在である。井戸祭祀を行った後に白や白の蓋や土器を廃棄している状況がみられたことである。この井戸は古墳時代初頭に比定されるものである。井戸に白を廃棄する例は珍しく全国的に見て、2例目である。1例目は、佐賀県牛津町所在の生立ヶ里遺跡から検出された井戸-94から出土した白である。井戸跡は、弥生時代中期前半に比定されるものである。この遺構では、多くの土器片に混じって木製品が出土している。中層付近では、ほぼ完形の白が倒置された状態で出土している。他に板皮を巻いた竹製品、また最下層では、杓子が出土している。白は底まで貫通しており、かなり使い込まれた状況が想定できる。24SE008出土の白もかなり使用されており、長年使用したことに対する感謝の念をもって廃棄されたものだと考えられる。

遺物観察表

遺物観察表は本文に合わせて節ごとに順に掲載している。
ただし、縄文土器については、調査次順に掲載している。

第3章

第1節

大道遺跡群第9次調査

大道遺跡群第15次調査

第2節

大道遺跡群第10次調査

大道遺跡群第14次調査

大道遺跡群第17次調査

大道遺跡群第18次調査

第3節

大道遺跡群第16次調査

大道遺跡群第19次調査

大道遺跡群第22次調査

大道遺跡群第25次調査

第4節

大道遺跡群第11次調査

大道遺跡群第24次調査

縄文土器

大道遺跡第10次調査

大道遺跡第14次調査

大道遺跡第15次調査

第2表 大道遺跡群第9次調査 出土遺物観察表

調査番号	遺物名	種類	形状	胎土	内面	外面	内面	外面	口数/厚	法 線高/ 幅	法 線厚/ 径	最大断 面/厚	備考
第9図1	950001	磁器	碗	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉	-	2.6+α	(2.5)	-	肥前産
第9図2	950001	磁器	皿	精製土	オリーブ黄色	灰白色	施釉	施釉	-	2.4+α	4.5	-	蛇の目輪刺び
第9図3	950001	青瓷	皿	精製土	明緑灰色	灰白色	施釉	施釉	-	1.4+α	(3.4)	-	豊後産、赤明度
第9図4	950001	磁器	大壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	-	8.5+α	-	-	
第9図5	950010	土器	小形丸底壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・後ミガキ	ナデ・後ミガキ	(11.4)	6.6+α	-	-	
第9図6	950010	土器	小形丸底壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	褐色	ミガキ・ナデ	指オサエ・後ナデ	(12.2)	3.8+α	-	-	
第9図7	950010	土器	小形丸底壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	褐色	ナデ・指オサエ	ケズリ・後ナデ・ミガキ	-	10.0+α	-	-	内面輪刺び
第9図8	950010	土器	長頸壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・指オサエ	ハケム・後ナデ・ミガキ	-	10.8+α	-	12.8	
第9図9	950010	土器	壺	石灰・長石・角閃石	にぶい褐色	にぶい褐色	ケズリ・ハケム・後ナデ	ハケム・ハケム・後ナデ	(18.0)	8.8+α	-	-	ハケム単位(9.8cm/cm)
第9図10	950010	土器	布留蓋	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ケズリ・指オサエ	ナデ・ハケム・後ナデ	(13.4)	19.7	-	(18.4)	
第9図11	950010 95P011	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石	明褐色	にぶい褐色	ナデ・ハケム	ナデ・ハケム・後ナデ	(20.5)	14.8+α	-	-	ハケム単位(7.8cm/cm)
第9図12	950010 95A008	土器	複合口縁壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	明黄褐色	明黄褐色	ハケム・ナデ	ハケム・ナデ	(21.8)	11.5+α	-	-	安南寺式土器、波状文ハケム1cm/2本
第9図13	950010	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	にぶい褐色	ナデ・ハケム	ナデ・ハケム	(20.0)	8.6+α	-	-	ハケム単位 外: (9.8cm/cm) 内: (9.8cm/cm)
第9図14	950010	土器	複合口縁壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	にぶい黄褐色	ハケム・後ナデ	ナデ・ハケム	-	8.5+α	-	-	安南寺式土器 ハケム単位(11.8cm/cm) 貼付実帯
第9図15	950010	土器	複合口縁壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	明黄褐色	にぶい黄褐色	指オサエ・ハケム	ハケム	-	13.7+α	-	-	安南寺式土器 ハケム単位(9.8cm/cm) 貼付実帯
第9図16	95A008 95P008	土器	鉢	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	褐色	ハケム・後ミガキ	ハケム・後ナデ	(29.3)	15.1+α	-	-	ハケム単位(8.8cm/cm) 貼付実帯
第9図17	95A007	土器	長頸壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	褐色	ナデ	ハケム・後ミガキ	(13.7)	12.8+α	-	-	ハケム単位(9.8cm/cm)
第9図18	95A007 95P008	土器	鉢	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・指オサエ	ハケム・後ナデ・ハケム	(26.4)	8.7+α	-	-	ハケム単位(9.8cm/cm) 貼付実帯近縁式
第9図19	95A007	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	(14.4)	3.8+α	-	-	
第9図20	95P011 95A007	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	明褐色	明褐色	ハケム・指オサエ	ナデ・ハケム	(8.3)	5.4+α	-	-	
第9図21	95A007	土器	脚台付鉢	石灰・長石・角閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ハケム・ケズリ	ナデ・ハケム・後ナデ・指オサエ	(16.0)	14.8	9.2	-	ハケム単位(9.8cm/cm)
第9図22	95A007	土器	脚台付鉢	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	明褐色	にぶい黄褐色	ケズリ・ミガキ	ナデ・ケズリ	-	4.1+α	(8.2)	-	
第9図23	95P008 95P011	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ・ケズリ	ハケム・後ナデ	(19.5)	8.5+α	-	-	ハケム単位(11.8cm/cm)
第9図24	95P011	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	褐色	ハケム・後ミガキ	ハケム	(18.2)	8.3+α	-	-	ハケム単位(9.8cm/cm)
第9図25	95P011	土器	小形丸底壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	明黄褐色	明黄褐色	ナデ・指オサエ・ナデ	ナデ・ミガキ・ケズリ	-	10.8+α	-	-	
第9図26	95A005 95D010	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石	褐色	褐色	ハケム・後ミガキ・ナデ	ナデ	(16.8)	7.2+α	-	-	ハケム単位(7.8cm/cm)
第9図27	95A005 95D010	土器	壺	石灰・長石・赤色粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	ケズリ	ナデ	(19.4)	3.7+α	-	-	
第9図28	95A005 95P008	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	明褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ケズリ	ハケム・後ナデ	(18.4)	7.9+α	-	-	
第9図29	95A005 95D010	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	褐色	ケズリ・後ハケム・後ミガキ	ハケム・後ナデ	(16.8)	22.0+α	-	(21.4)	
第9図30	95A005 95D010	土器	鉢	石灰・長石・赤色粘土	褐色	にぶい褐色	ハケム・ハケム・後ナデ・ナデ	ナデ・ハケム	(44.0)	10.5+α	-	-	ハケム単位(9.8cm/cm) 貼付実帯近縁

第3表 大道遺跡群第15次調査 出土遺物観察表

調査番号	遺物名	種類	形状	胎土	色 質	表面状態	内面	外面	口徑/底 径	高 さ/厚 さ	最大 径/厚 さ	備考
第15図1	155E003 155E004	土師器	碗	長石・角閃石・ 白色粘土・黒色	褐色	褐色	ミドリ色ナ ズ・ミドリ	ハケメ	(15.8)	6.0+ α	-	外面一部スス付着 ハケメ単位(8~13cm)
第15図2	155E003	土師器	小形丸底鉢	長石・長石・角 閃石・白色粘土	明赤褐色	明赤褐色～褐 色	ミドリ色ナ ズ・ミドリ	ハケメ後ミ ドリ色ナズ	14.1	9.3	-	内面黒スス付着
第15図3	155E003	土師器	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	褐色	褐色	ケズリ後ナ ズ	ハケメ	(15.8)	16.8+ α	-	外面黒～底面スス付着 ハケメ単位(5cm)
第17図4	155E004	土師器	碗	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	にぶい褐色	ハケメ後ミ ドリ	ハケメ後ナ ズ	(12.2)	4.7+ α	-	ハケメ単位(5cm)
第17図5	155E004	土師器	碗	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	にぶい褐色	ナズ・ミドリ ナズ	ナズ後ミ ドリ	17.4	5.7	-	外面黒
第17図6	155E004	土師器	鉢	長石・長石・角 閃石・白色粘土	赤褐色～明赤 褐色	赤褐色	ハケメ後ナ ズ	ハケメ	18.5	10.1	-	外面黒部一部黒ス ハケメ単位(12cm)
第17図7	155E004	土師器	小形丸底壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	明赤褐色	明赤褐色	ナズ・ミドリ ナズ	ナズ・ハケメ	(13.4)	6.3	-	内面2/3に黒スが付着
第17図8	155E004	土師器	台付鉢	長石・長石・角 閃石・白色粘土	明赤褐色	にぶい赤褐色	ハケメ後ミ ドリ	ハケメ	18.0	10.5+ α	-	外面スス・底面付着 ハケメ単位(8~7cm)
第17図9	155E004	土師器	小形丸底壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケメ後ナ ズ	ハケメ	13.3	11.3	-	ハケメ単位(5cm)
第17図10	155E004	土師器	複合口縁壺	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	褐色	ナズ	ナズ・ハケメ後 ナズ	20.0	8.1+ α	-	内面口縁部1/4スス付着
第17図11	155E004	土師器	壺	長石・白色粘土	赤褐色	赤褐色	ナズ・ナズ 後ナズ	ミドリ・ハケメ 後ナズ	(22.0)	12.4+ α	-	外面2/3スス付着 ハケメ単位(5cm)
第17図12	155E004 出所不明	土師器	壺	長石・角閃石・ 白色粘土	にぶい黄褐色 明赤褐色	赤褐色	ハケメ後ナ ズ	ハケメ後ナ ズ	(15.0)	22.7	-	外面黒～底面スス付着 破損 で断面不明 内ハケメ単位(5cm) 外ハケメ単位(7cm)
第17図13	155E004 155E005	土師器	壺	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	黒褐色	ハケメ後ナ ズ	ハケメ後ミ ドリ	(18.0)	4.8+ α	-	口縁外面スス付着 内ハケメ単位(5cm) 外ハケメ単位(5cm)
第18図14	155E004	土師器	壺	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	褐色	ハケメ後ミ ドリ	ハケメ後ミ ドリ	(16.8)	9.4+ α	-	ハケメ単位(5cm)
第18図15	155E004	土師器	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	明赤褐色	赤褐色	ミドリ・ハ ケメ後ナ ズ	ミドリ・ハケメ 後ナズ	13.2	17.0	-	ハケメ単位(7cm)
第18図16	155E004	土師器	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	褐色	明赤褐色	ミドリ・ハ ケメ後ナ ズ	ミドリ・ハケメ 後ナズ	18.8	24.1+ α	-	外面ほぼ全面スス付着 ハケメ単位 内(4cm) 外(7cm)
第18図17	155E004	土師器	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	明赤褐色 赤褐色(底面)	明赤褐色	ハケメ後 ナズ・ハケメ 後ナズ	ミドリ・ハケメ 後ナズ	(17.1)	24.9	-	内面に褐色斑 内面部分的に黒ス ハケメ単位 内(7~8cm) 外(8~9cm)
第18図18	155E003 155E004	土師器	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	褐色	褐色	ハケメ後 ナズ・ハケメ 後ナズ	ハケメ後ナズ・ハ ケメ	(15.0)	26.8	-	胴部下スス付着 ハケメ単位 内(8~7cm) 外(8~9cm)
第18図19	155E004	土師器	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	ケズリ後ナ ズ	ナズ	-	15.8+ α	-	内外面黒部スス付着 サンプル17
第20図20	155E005	土師器	台付鉢	長石・長石・角 閃石・白色粘土	明褐色	明褐色～褐色	ナズ後ミ ドリ	ナズ後ミ ドリ	(12.4)	7.6+ α	-	内面黒部～口縁黒スあり 外面黒部で赤～黒色の部 分あり
第20図21	155E005	土師器	長頸壺	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	赤褐色	ケズリ後ナ ズ	ハケメ	13.5	14.9	-	内面黒部～口縁黒スあり 外面黒部で赤～黒色の部 分あり
第20図22	155E005	土師器	小形壺	長石・角閃石・ 白色粘土	にぶい黄褐色	赤褐色	指オサエ ナズ・ハケメ 後ナズ	ハケメ後ナズ	13.6	13.7	-	全体スス付着 ハケメ単位(5cm)
第20図23	155E008 黒黄灰色 砂質土	土師器	坪	長石・長石・角 閃石・白色粘土	黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ミドリ・ヘラ 切ナズ	-	1.5	(10.0)	-
第20図24	155E008 黒黄灰色 砂質土	土師器	高台付坪	長石・角閃石・ 白色粘土	にぶい褐色	褐色	黒ナズ	ナズ・ミドリ・ ミドリ	-	2.1+ α	(7.0)	貼付高台?
第20図25	155E008 黒黄灰色 砂質土	土師器	高台付坪	長石・長石・白 色粘土	にぶい黄褐色	明赤褐色	ナズ	ミドリ・ナズ・ミ ドリ	-	1.3+ α	(10.0)	貼付高台
第20図26	155E008 黒黄灰色 砂質土	土師器	高台付坪	長石・角閃石・ 白色粘土	黄褐色	褐色	ナズ	ミドリ・ナズ・ミ ドリ	-	2.0+ α	(8.0)	貼付高台
第20図27	155E015	弥生土器	下皿式蓋	長石・黒母・白 色粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	指オサエ ナズ	ハケメ後ナズ・黒 母(黒)	-	2.3+ α	-	黒ス?底面
第20図28	155E018	土師器	壺	1~3mmの石 灰・白色粘土	褐色	褐色	ナズ・ミドリ ナズ	工具によるナズ ミドリ・ナズ	(22.4)	5.6+ α	-	注1)1条 外面に黒部による赤ス ハケメ単位(5cm)

図面番号	透視名	種類	形状	地土	内周	外周	内周	外周	口徑/長	法 器高/ 幅	厚 度/ 重	最大径/ 重	備考
第21図29	155020	土器類	小形丸底蓋	灰石・角閃石・ 赤色粘土・白色 粘土	明褐色	褐色	ハケメナ デ・ミナ	ハケメナデ	10.2	8.1	-	-	内面一部黒変あり
第21図30	155020	土器類	高弁部	灰石・灰石・ 角閃石・白色粘土	明褐色	明赤褐色	ヨコナデ・ヘラ ケズリ・メナ	ヘラ・ヘラ ケズリ・メナ	-	9.1+α	-	-	粘土結付付 ハケメナ位(5cm/α)
第21図31	155020	土器類	横合口縁蓋	灰石・灰石・ 角閃石・白色粘土	明褐色	明褐色	ヨコナデ・ヘラ ケズリ・メナ	ヨコナデ・ヘラ ケズリ・メナ	(18.6)	9.6+α	-	-	内面黒変 外周縁部、入土付着のため腐 蝕不明
第21図32	155020	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・白色粘土	灰褐色	灰褐色	ナデ・ケズリ・ ヘラ・メナ	ヨコナデ・ハケメ ナデ	(14.0)	17.9+α	-	-	
第21図33	155020	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・黄褐色 粘土・褐色粘土 粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヘラによるヨ コナデ	ヘラによるヨコ ナデ	(18.4)	2.5+α	-	-	
第21図34	155020	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・黄褐色 粘土・褐色粘土 粘土・白色粘土	明褐色～褐色	明褐色～褐色	ヨコナデ・ハ ケメナ・メナ	ヨコナデ・ナデ 後ナデ	(18.2)	9.0+α	-	-	
第21図35	155020	土器類	杯	白色粘土	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	強いナデ・ヨコ ナデ	(14.4)	3.0+α	-	-	
第21図36	155020	土器類	蓋	灰石・角閃石・ 赤色粘土・白色 粘土	灰色	灰色	ヨコナデ・ケ ズリ	回転ナデ後部 ナデ	-	3.0+α	(8.4)	-	
第22図27	155002	土器類	碗	灰石・角閃石・ 白色粘土	明赤褐色	灰褐色	回転ナデ後 部ナデ	回転ナデ	(11.4)	3.2+α	-	-	
第22図28	155003	土器類	碗	灰石・角閃石・ 白色粘土	明赤褐色	明赤褐色	ミナ・メナ ナデ	ヨコナデ・ハケメ ナデ	13.1	4.8	-	-	ハケメ単位(10cm/α)
第22図29	155003	土器類	蓋	灰石・角閃石・ 赤色粘土	黄褐色	黄褐色	ハケメ工具 によるナデ・ ケズリ・メナ	ヨコナデ・ハケメ ナデ	(15.0)	9.8+α	-	-	横合口 外周入土付着 ハケメ単位(11cm/α)
第22図40	155002	土器類	杯	灰石・灰石・ 角閃石・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・回転ナ デ	ナデ・回転ナ デ	-	1.3+α	(8.6)	-	
第22図41	155008	土器類	土器	灰石・灰石・ 角閃石・白色粘土	-	-	-	-	長4.9+ α	幅1.7	-	-	重14.7g
第22図42	155007	土器類	打製石斧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	重189.0g
第22図43	155026	土器類	杯	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	明黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	(15.0)	3.3	(10.0)	-	
第22図44	155026	土器類	杯	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ナデ ハケメ	回転ナデ・ナデ	-	1.1+α	(8.7)	-	
第22図45	155026	土器類	高台付杯	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	黄褐色	明黄褐色	ナデ・後ナデ	ヨコナデ・ナデ	-	2.0+α	(8.6)	-	
第22図46	155026	土器類	高台付杯	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	明黄褐色	暗褐色	ヨコナデ・後 部ナデ	回転ナデ・後 部ナデ	-	1.7+α	(8.6)	-	
第22図47	155026	土器類	高台付杯	黄褐色粘土 粘土・白色粘土	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ヨコナデ・ナデ	-	1.6+α	(8.6)	-	
第22図48	155026	土器類	杯蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	明黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ・後 部ナデ	(16.2)	1.8	-	-	
第22図49	155026	土器類	長皿蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土	灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	-	
第22図50	155026	土器類	金匚型蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	灰黄褐色	黄褐色	ヨコナデ・ナ デ	ヨコナデ・ハケメ ナデ	(19.6)	5.3+α	-	-	ハケメ単位(4.8cm/α)
第22図51	155026	土器類	土器	灰石・灰石・ 角閃石・白色粘土 粘土・赤色粘土 粘土・白色粘土	-	-	-	-	長6.1	幅1.8	-	-	重16.5g
第22図52	155026	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケメ後ナデ ナデ・後ナデ	-	4.4+α	(4.8)	-	
第22図53	155026	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ・後 部ナデ	ヨコナデ・後部 ナデ	(21.4)	5.0+α	-	-	
第22図54	155026	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	明黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ・後ナデ	(28.0)	7.1+α	-	-	粘土実部
第24図55	155027	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・後ナデ ナデ	ナデ	-	3.6+α	-	-	穿孔2ヶ所あり
第24図56	155027	土器類	横合口縁蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・後ナ デ	(9.0)	3.4	-	-	
第24図57	155027	土器類	杯	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	(11.7)	4.1	(8.6)	-	黄褐色縁部 高台の裏面部分黒変あり
第24図58	155027	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	-	5.4+α	(11.8)	-	
第24図59	155027	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	-	3.3+α	(15.8)	-	
第24図60	155027	土器類	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	透明釉	透明釉・回転ナ デ	-	2.3+α	(3.8)	-	
第24図61	155027	土器類	白磁 蓋	-	灰白色	灰白色	透明釉	透明釉	-	1.0+α	(7.5)	-	黄褐色部分黒変
第24図62	黄土	弥生土器	蓋	灰石・灰石・ 角閃石・赤色粘土 粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・後ナデ	ナデ・後ナデ	(14.2)	4.5+α	-	-	口縁部に割欠あり

第4表 大道遺跡群第10次調査 出土遺物観察表

図面番号	遺物名	種類	数量	出土	色	形状	内面	外面	内面	外面	口徑/厚	通 径 (mm)	最大径 (mm)	備考
第32図1	10SD002 10SD026 2 得	京都系土師器 坪	1	石炭・灰石・赤 色粘土	灰色	灰色	回転ナデ	ナデ	-	3.2+φ	-	-	-	
第32図2	10SD008 反転軸土	土師器 大形管状土師	1	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	-	ナデ	-	8.8+φ	-	148 kg	-	
第32図3	10SD010	弥生土師	高坪	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ハクメ	ナデ・ハクメ・ハ クメ・横へうナデ	(10.7)	5.0+φ	-	-	-	ハクメ単位 (5.5cm)
第32図4	10SD010	弥生土師	台付鉢	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	褐色	ナデ・横へうナ デ	ナデ・横へうナ デ	-	5.1+φ	-	-	-	
第32図5	10SD010	弥生土師	高坪	石炭・灰石・霰 母・角閃石	褐色	褐色	ミナギ・ハクメ 横へうナデ	ミナギ・ハクメ 横へうナデ	(14.5)	13.3+φ	-	-	-	
第32図6	10SD010	弥生土師	長腹壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	黄灰色	褐色	シロリ底・サ サミ線ナデ	ナデ・横へうナ デ	-	12.8+φ	5.1	13.7	-	
第32図7	10SD010	弥生土師	台付鉢	石炭・灰石・霰 母・角閃石	褐色	褐色	横へうナ・ハ クメ・横ナデ	横へうナ・ナ デ	-	7.5+φ	(11.6)	-	-	
第32図8	10SD010	弥生土師	長腹壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	黄褐色	黄褐色	ナデ・横へう エ・ナデ	ハクメ	(10.4)	13.8+φ	-	-	-	ハクメ単位 (5.5cm) 軸付実等
第32図9	10SD010	弥生土師	長腹壺	石炭・灰石・角 閃石	黄褐色	黄褐色	ハクメ・ナ デ	ハクメ・ナ デ	-	9.6+φ	-	-	-	ハクメ単位 (3-4.5cm)
第32図10	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	褐色	褐色	ハクメ	ハクメ・ナ デ	-	21.7+φ	-	-	-	ハクメ単位 (5.5cm)
第32図11	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・角 閃石・赤色粘土	反黄褐色	褐色	ミナギ	ハクメ・横ナ デ	-	5.6+φ	(7.8)	-	-	ハクメ単位 (5.5cm)
第32図12	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	明黄褐色	明黄褐色	ナデ・ミナギ ナデ	ナデ・ミナギ ナデ	-	7.2+φ	(8.0)	-	-	
第32図13	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ナ デ	ナデ・横ナ デ	(16.2)	5.6+φ	-	-	-	
第32図14	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	明赤褐色	黄褐色	ナデ・ナ デ	ナデ・横ナ デ	-	3.5+φ	-	-	-	
第32図15	10SD010 継ぎ縄文土	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	褐色	にぶい黄褐色	横へう・ヘ ウ・ナデ	ミナギ・ハクメ	(19.4)	8.5+φ	-	-	-	ハクメ単位 (5.5cm) 実等目録
第32図16	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミナギ・ナ デ	ミナギ・ナ デ	(20.0)	4.5+φ	-	-	-	
第32図17	10SD028 1 得	弥生土師	壺	石炭・灰石・角 閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横へう・エ ・ナデ	ナデ・ハクメ	(22.6)	4.4+φ	-	-	-	ハクメ単位 (5.5cm)
第32図18	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミナギ	ミナギ・ハクメ	(20.3)	10.2+φ	-	(21.3)	-	下城式 ハクメ単位 (3-10.5cm) 新目録実等
第32図19	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ハクメ 横ナデ	ナデ・ハクメ	(22.6)	4.3+φ	-	-	-	下城式 ハクメ単位 (5.5cm)
第32図20	10SD010	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・赤色粘土	反黄褐色	反黄褐色	ナデ	ミナギ・ハクメ	20.3	8.4+φ	-	-	-	下城式 ハクメ単位 (4.5cm)
第32図21	10SD010 反転軸土	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	反黄褐色	褐色	横へう・エ ・ナデ	ハクメ・ナ デ	-	10.8+φ	5.0	-	-	
第32図22	10SD010 反転軸土	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハクメ	-	7.1+φ	8.5	-	-	ハクメ単位 (4.5cm)
第32図23	10SD010 反転軸土	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	-	3.1+φ	(8.6)	-	-	
第32図24	10SD010 反転軸土	弥生土師	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハクメ	-	9.2+φ	(8.6)	-	-	ハクメ単位 (5.5cm)
第32図25	10SD028 2 得	京都系土師器 坪	1	石炭・灰石・赤 色粘土	褐色	褐色	回転ナデ	ナデ	-	2.2+φ	-	-	-	
第32図26	10SD028	京都系土師器 坪	1	石炭・灰石・赤 色粘土	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ・横 ナデ	(12.8)	2.1+φ	-	-	-	
第32図27	10SD028	横前儀 横鉢	1	石炭・灰石	灰色	灰色	横前儀・横 鉢	回転ナデ	-	4.1+φ	-	-	-	
第32図28	10SD028	土師器	ミニチュア土師	石炭・灰石・角 閃石・赤色粘土	明褐色	明褐色	横へう・エ ・ナデ	横へう・エ ・ナデ	2.8	4.3	1.1	-	-	
第32図29	10SD028 木田町	土師器	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	暗黄褐色	褐色	ナデ・横ナ デ	ナデ・横ナ デ	12.7	5.5	-	-	-	ハクメ単位 (5.5cm)
第32図30	10SD028 木田町	土師器	高坪	石炭・灰石・霰 母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	シロリ底・サ サミ線ナデ	ミナギ	-	15.8+φ	(18.6)	-	-	遺失あり
第32図31	10SD028	土師器	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	赤褐色	赤褐色	ミナギ	ハクメ・横ナ デ	-	5.2+φ	(5.7)	-	-	ハクメ単位 (4-5.5cm)
第32図32	10SD028 1 得	土師器	壺	石炭・灰石・霰 母・角閃石	黄灰色	黄灰色	横へう・エ ・ナデ	-	-	2.4+φ	(3.5)	-	-	
第32図33	10SD028	弥生土師	壺	石炭・灰石・角 閃石・赤色粘土	反黄褐色	反黄褐色	ハクメ・ナ デ	ナデ	(3.2)	4.4+φ	-	-	-	

図面番号	透視図	部 材		地 土	色 調		断面図		法 定 (mm)				備考
		種類	等級		内面	外面	内面	外面	口径/厚	高さ/幅	透径/厚	最大断面	
第34図2	105K042	養生土器	壁	石灰・長石・雲母・赤色顔料	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	ナデ・ハケタ後5年?	ハケタ後ナデ	(24.8)	9.1+0	-	-	

第5表 大道遺跡群第14次調査 出土遺物觀察表

調査番号	品名等	種類	用途	質				断面形状		口径/厚	経緯/厚	長さ(m)	備考
				粘土	内面	外面	内面	外面					
第42図1	1453005	土師器	坏	長石・肉閃石・白色粒子	褐色	褐色	ハクメナデ	ヨコナデナデ	-	2.8+α	(11.6)	-	底部へびつり
第42図2	1453005	土師器	坏	長石・肉閃石	褐色	黄褐色	ハクメナデ	ナデ	-	2.9+α	(11.6)	-	底部へびつり
第42図3	1453005	土師器	坏	長石	褐色	赤褐色ににぶい褐色	ヨコナデ後込ガキナデ	ヨコナデ、ミガキ	(13.2)	3.5+α	-	-	-
第42図4	1453005	土師器	坏	長石・肉閃石・白色粒子・赤色粒子	褐色	褐色	ナデ	ナデ	(14.6)	3.5	(8.6)	-	底部へびつり
第42図5	1453005	土師器	坏蓋	長石・白色粒子	黄褐色	赤赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	1.4+α	-	-	-
第42図6	1453005	土師器	蓋土器	白色粒子	赤赤褐色	褐色	-	-	-	4.3+α	-	-	-
第42図7	1453005	土師器	炊飯土器	白色粒子	灰白～白色	灰色	-	-	-	2.5+α	-	-	-
第42図8	1453005	土師器	研臼	石質・長石・肉閃石	赤赤褐色	赤赤褐色	ヨコナデ	-	-	-	-	-	外底面等一部に磨痕・上へびつり
第42図9	1453005	土師器	長頸壺	石質・白色粒子	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	-	1.6+α	(12.4)	-	貼付面合内外面とも磨痕著しい
第42図10	1453005	土師器	磨研器	白色粒子	灰色	灰色	圓粒ナデ	圓粒ナデ	-	7.0+α	-	(22.0)	磨研面節部で貼りあわせか
第42図11	1453005	土師器	磨研器	長石・白色粒子	黄灰色	黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	-	6.8+α	-	(22.0)	磨研面節部で貼りあわせか
第42図12	1453010	土師器	碗	長石・肉閃石・白色粒子	黒色	にぶい褐色	ミガキ(内蓋)	ヨコナデへびつり	-	4.1+α	-	高台付(7.8)	-
第42図13	1453010	土師器	高台付杯	石質・長石・肉閃石・白色粒子	褐色	褐色	-	ヨコナデ	-	1.7+α	-	高台付(8.2)	貼付面合内外面とも磨痕著しい 磨痕不明
第42図14	1453008	土師器	碗	長石・肉閃石・白色粒子	にぶい褐色	黒色	ヘラナデ・指オサエ	指オサエナデナデ	(12.6)	3.1	-	-	-
第42図15	1453008	土師器	鉢台	石質・長石・肉閃石・黒色	にぶい褐色	褐色	ナデ	ヨコナデ・磨丸	-	6.5+α	(12.2)	-	-
第42図16	1453008	土師器	高杯	石質・長石・肉閃石・白色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	(18.0)	6.2+α	-	-	-
第42図17	1453008	土師器	高杯	石質・長石・肉閃石・2～3mm石粒	にぶい褐色	淡黄褐色	圓粒ナデ	ナデ	15.0	12.2	12.0	-	外周部・外面、磨研外周縁?不明
第42図18	1453005 2cm下	土師器	小形丸底蓋	長石・長石・肉閃石・白色粒子	赤赤褐色	褐色	ヘラナデ?	ヨコナデかヘラナデ?	11.7	8.5	-	-	内外面とも磨痕著しい 磨痕不明
第42図19	1453006	土師器	小形丸底蓋	肉閃石・白色粒子	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(16.4)	5.8+α	-	-	磨痕著しい 磨痕不明
第42図20	1453006	土師器	台付鉢	石質・肉閃石・赤色粒子	褐色	褐色	ハクメナデ	ハクメナデ	(13.6)	6.1+α	-	-	-
第42図21	1453006	土師器	台付鉢	長石・肉閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ハクメナデナデ	ハクメナデ	(18.0)	6.8+α	-	-	-
第42図22	1453006	土師器	台付鉢	長石・肉閃石・白色粒子	黒色	赤褐色	ナデ	ヨコナデ・ハクメナデ・ハクメナデ	(17.0)	12.2	-	-	内面全体黒染
第42図23	1453006	土師器	大形鉢	石質・肉閃石・白色粒子	褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	5.4+α	-	-	貼付突帯あり
第42図24	1453006	土師器	大形鉢	長石・肉閃石・白色粒子	淡黄褐色	にぶい黄褐色	ハクメナデ	ナデ	-	4.9+α	-	-	貼付突帯
第42図25	1453006	土師器	大形鉢	長石・肉閃石・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ・ハクメナデ	ヨコナデ・ハクメナデ	(18.0)	7.0+α	-	-	貼付突帯
第42図26	1453006	土師器	大形鉢	長石・肉閃石・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ・ハクメ後ヨコナデ	ヨコナデ・磨研突帯紋文	(20.2)	4.8+α	-	-	突帯形状
第42図27	1453006	土師器	大形鉢	長石・肉閃石・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	(15.0)	10.5+α	-	-	突帯形状
第42図28	1453006	土師器	大形鉢	長石・肉閃石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ハクメナデ	ハクメ後ヨコナデ	(14.0)	6.7+α	-	-	ハクメ後込内(4～5cm)外(4～6cm)
第42図29	1453006	土師器	大形鉢	石質・肉閃石・白色粒子	褐色	褐色	ナデ・オサエナデ	ナデ・ヨコナデ・ハクメ後ナデ	(17.2)	24.5+α	-	-	磨研面あり
第42図30	1453006	土師器	大形鉢	長石・長石・肉閃石	にぶい黄褐色	赤赤褐色	ハクメ後ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・ハクメナデ	(18.8)	5.1+α	-	-	磨研面あり(10～11cm)
第42図31	1453006	土師器	坏蓋	長石・肉閃石・赤色粒子・白色粒子	褐色	黄褐色	ナデ・ハクナデ	ナデ・ナデ	(16.4)	2.2+α	-	-	-
第42図32	1453006	土師器	坏蓋	長石・肉閃石・白色粒子	褐色	褐色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・へびつり	(18.0)	3.2+α	-	-	-
第42図33	1453006	土師器	坏	長石・白色粒子	にぶい褐色	淡黄褐色	ヨコナデ・圓粒ナデ後ナデ	ヨコナデ・圓粒ナデ	(14.2)	3.5+α	(16.6)	-	-
第42図34	1453006	土師器	坏	長石・黄褐色・白色粒子	褐色	褐色	ナデ	ナデ	(12.0)	3.6+α	-	-	-
第42図35	1453006	土師器	坏	長石・肉閃石・白色粒子	黄褐色	黄褐色	オサエナデ	ナデ・オサエナデ	(13.8)	4.4+α	-	-	-

図面番号	遺構名	種類	器種	出土	色・質		表面状態	口縁/底	寸法 (cm)		備考		
					内面	外面			高さ/底径	最大径/厚			
第40図23	145X006 埋蔵層	土器	高台付杯	長石・角閃石・ 白色粘土	にぶい黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ・ヘラケズリ 3コナデ	-	4.7+ (3.4)	-	貼付高台 内面赤褐色・コナデ 黒褐色	
第40図24	145X006 埋蔵層	土器	高台付杯	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	褐色	3コナデ	3コナデ	-	1.4+ (0.8)	-	貼付高台	
第40図25	145X006 埋蔵層	土器	高台付杯	長石・長石・角 閃石・白色粘土	淡黄褐色 →黄褐色	淡黄褐色	3コナデ	3コナデ・回転ナ デ	-	1.8+ (1.0)	-	貼付高台 内面赤褐色 黒褐色・内面 外周黒褐色	
第40図26	145X006 黒灰色粘 質土	土器	高台付杯	角閃石・白色粘 土	明黄褐色	淡黄褐色	回転ナデ	ナデ・回転ヘラ ケズリ	-	2.1+ (1.1)	-	貼付高台	
第40図27	145X006 埋蔵層	土器	皿	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	褐色	3コナデ	3コナデ	(14.2)	2.0	(12.8)	-	内作面黒褐色
第40図28	145X006 黒灰色粘 質土	深蓋器	高杯	長石・角閃石・ 白色粘土	灰白色 →灰色	灰白色	ナデ・ヘラ ケズリ?	ナデ	-	9.9+	-	-	外周黒褐色
第40図29	145X006 黒灰色粘 質土	深蓋器	杯	白色粘土	灰色	緑灰色	3コナデ	3コナデ	-	3.4+	-	-	-
第40図30	145X006 深蓋器	高台付杯	白色粘土	淡黄色	灰白色	ヘラナデ	ヘラナデ	-	2.0+	黄褐色 (19.0)	-	-	-
第40図31	145X006 黒灰色粘 質土	土器	瓶	長石・長石・角 閃石・白色粘土	にぶい褐色	褐色	3コナデ	ナデ・ハケミナ デ	-	5.0+	-	-	管線大分型 ハケミ単位(8~9cm/cm)
第40図32	145X006 埋蔵層	土器	鉢	長石・長石・角 閃石・赤色粘 土・白色粘土	淡黄褐色	淡黄褐色	3コナデ	3コナデ	-	4.7+	-	-	-
第40図33	145X006 黒灰色粘 質土	土器	蓋	長石・白色粘 土・2~4mmの 石粒	黒色	褐色	ナデ	ナデ	-	3.3+	-	-	内作面黒褐色
第40図34	145X006 埋蔵層	土器	壺	白色粘土	灰色	灰色	3コナデ・オ サエナデ	タタキナデ	-	6.35+	-	-	-
第40図35	145X006 埋蔵層	土器	飲食型壺	長石・角閃石・ 白色粘土・1~ 2mm石粒	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ・ハケミ	-	4.8+	-	-	ハケミ単位(8~17cm/cm)
第40図36	145X006 埋蔵層	土器	飲食型壺	長石・角閃石・ 白色粘土	黒色	明褐色	ハケミナデ	ナデ・ケズリ	-	4.6+	-	-	-
第40図37	145X006 埋蔵層	土器	飲食型壺	長石・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	-	4.1+	-	-	内作面黒褐色
第40図38	145X006 埋蔵層	土器	壺	長石・角閃石・ 白色粘土	黒褐色	黒褐色	3コナデ	ハケミ	(25.6)	9.6+	-	-	内作面黒褐色 外周黒褐色 表面に凹凸あり
第40図39	145X006 埋蔵層	土器	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	褐色	褐色	3コナデ	3コナデ	(30.0)	9.2+	-	-	-
第40図40	145X006 埋蔵層	土器	瓶	長石・長石・白 色粘土	褐色	褐色	3コナデ	ナデ・3コナデ	(31.0)	8.1+	-	-	管線大分型 内作面(3~3.5cm注)
第40図41	145X006 瓦	軒平瓦	瓦	白色粘土	灰白色	灰色	焼目タタキ目	瓦目	縦 26.7 横 14.7	横 19.0 縦 13.0	-	厚 2.0 厚 2.0	-
第40図42	145X006 瓦	軒平瓦	瓦	長石・角閃石・ 白色粘土	灰色	灰色	焼目タタキ目	ナデ	縦 26.7 横 14.7	横 19.0 縦 13.0	-	厚 2.0 厚 2.0	-
第40図43	145X006 瓦	軒平瓦	瓦	長石・角閃石・ 白色粘土	灰白色	灰白色	焼目タタキ目 ナデ	ナデ・タタキ 焼目ナデ	縦 11.0 横 11.0	横 9.3 縦 9.3	-	厚 1.8 厚 1.8	-
第40図44	145X006 瓦	軒平瓦	瓦	角閃石・白色粘 土	灰白色	淡黄褐色	焼目タタキ目	瓦目	縦 8.9 横 11.5	横 11.5 縦 8.9	-	厚 2.4	-
第40図45	145X006 赤褐色粘 質土	弥生土器	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	灰黄褐色	褐色	ナデ	ハケミ・3コナデ	-	7.4+	(6.5)	-	ハケミ単位(8~9cm/cm) 下城式
第40図46	145X006 弥生土器	壺	壺	長石・長石・角 閃石・白色粘土	褐色	褐色	ハケミ・3コナデ	ハケミ・3コナデ・オ サエ	-	9.2+	(7.4)	-	ハケミ単位(5~6cm/cm)
第40図47	145X006 土器	土器(管状)	土器	長石・角閃石・ 赤色粘土	灰白色	灰白色	-	磨付紐庄底	長さ3	幅1.7	-	第24.7	孔径0.5cm
第40図48	145X006 土器	土器	土器	長石・角閃石・ 赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	-	磨付紐庄底	長さ3	幅1.2	-	第3.3	孔径0.4cm
第40図49	145X006 土器	土器	土器	長石・長石・角 閃石・赤褐色粘 土・白色粘土	褐色	褐色	-	磨付紐庄底	長さ3	幅1.3	-	第3.3	孔径0.35cm
第40図50	145X006 土器	土器	土器	長石・長石・角 閃石・赤褐色粘 土・白色粘土	にぶい褐色 →明褐色	にぶい褐色 →明褐色	-	磨付紐庄底	長さ3	幅1.2	-	第3.3	孔径0.4cm
第40図51	145X006 土器	土器	土器	長石・角閃石・ 赤褐色粘土	褐色	褐色	-	磨付紐庄底	長さ3	幅1.2	-	第3.3	孔径0.4cm

第6表 大道遺跡群第17次調査 出土遺物観察表

調査番号	遺構名	原 産 地		土 質	色 質		表面状態		寸法(mm)			備考	
		種類	産地		内面	外面	内面	口縁/底	底径/幅	高さ/厚	最大径/長さ		
第38図1	175E010	土器	杯	石炭・角閃石・赤色粘土・白色粘土	褐色	褐色	ナデ・3コナデ	3コナデ・底無切V底ナデ	(13.8)	3.8+α	(0.8)	-	-
第38図2	175E010	土器	高台付杯	石炭・角閃石・赤色粘土・白色粘土	黒褐色	黒褐色	3コナデ・ハケミナデ・ミナデ	3コナデ・ミナデ	(15.8)	4.3+α	-	-	-
第38図3	175E010	土器	皿	石炭・長石・角閃石・霞石・赤色粘土・白色粘土	赤褐色	明赤褐色	ナデ・回転ナデ	ナデ・回転ナデ	(16.5)	2.2+α	-	-	-
第38図4	175E010	土器	壺	石炭・長石・角閃石・霞石・白色粘土	黒色	明赤褐色	ナデ	ナデ	(12.2)	2.8+α	-	-	-
第38図5	175E010	土器	瓶	石炭・長石・角閃石・霞石・赤色粘土・白色粘土	赤褐色	にぶい黄褐色	ナデ	3コナデ・ミナデ・ハケミ	-	8.8+α	-	-	-
第38図6	175E010	土器	瓶	石炭・長石・角閃石・霞石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	褐色	ナデ	先ヶ口調整	-	7.85+α	(17.0)	-	-
第38図7	175E010埋蔵土層	土器	製造土層	石炭・角閃石・赤色粘土・白色粘土	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	-	4.0+α	-	-	-

調査番号	遺構名	新 築		跡土	色 質		断面図表		法 量(m)				備考
		種類	形状		内面	外面	内面	外面	口幅/厚	幅高/幅	底色/厚	最大径/厚	
第34図8	1750010	縄文土器	鉢 胴部	石英・角閃石・ 霞母・白色粘土	暗灰色	浅黄褐色	ミガキ	黄緑赤褐色	-	4.1+α	-	-	
第34図9	1750010	石製品	磨石	-	-	-	-	-	長さ15.5	幅5.7	-	重600	
第34図10	1750010	石製品	石鏝	-	-	-	-	-	長さ10.0	幅6.7	-	重205	
第40図1	1750003	反砂色粘 質土	京都高土器部 坪	赤色粘土・白色 粘土	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	-	1.5+α	-	-	
第40図2	1750003	反砂色粘 質土	白磁 硝	靑灰・黒色粘土 わずかに黒心	灰白色	灰白色	施釉	施釉	-	2.3+α	-	-	
第40図3	1750009	陶磁器	硝	-	青みがかった 透灰	黄褐色	施釉	施釉	-	3.7+α	-	-	
第40図4	1750009	反砂色粘 質土	皿	靑灰・黒色粘土	灰白色	灰白色	施釉	施釉	-	1.6+α (5.6)	-	-	蛇の目輪刺付
第40図5	1750009	縄文土器	深鉢 胴部	霞母・赤色粘 土・白色粘土	浅黄褐色	浅黄褐色	横方向の条 痕	ナメ方向の条 痕・波線文	-	5.9+α	-	-	
第42図1	1750002	中国産陶器	天目碗	白色粘土	黒褐色	黒褐色	施釉	施釉	(13.4)	3.3+α	-	-	
第42図2	1750002	土器部	高台付坪	石英・長石・角 閃石・霞母・赤 色粘土・白色粘 土	黒色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	-	1.7+α (5.6)	-	-	
第43図1	1750007	瓦	丸瓦	石英・長石・角 閃石・霞母・赤 色粘土・白色粘 土	暗灰色	暗灰色	工具によるク ズリ	工具ナデ	-	-	厚2.20	-	
第43図2	1750014	縄文土器	浅鉢 胴部	石英・長石・角 閃石・霞母・赤 色粘土・白色粘 土	明黄褐色	浅黄褐色	黄緑赤褐色	黄緑赤褐色	-	3.7+α	-	-	
第43図3	1750014	黒褐色粘 質土	甕	石英・角閃石・ 霞母・赤色粘 土・白色粘土	灰黄褐色	褐色	ヨコナデ・ナ デ・ハツケナ デ	ヨコナデ・ナ デ・ハツケナ デ	(22.6)	5.9+α	-	-	

第7表 大道遺跡群第18次調査 出土遺物観察表

調査番号	遺構名	新 築		跡土	色 質		断面図表		法 量(m)				備考
		種類	形状		内面	外面	内面	外面	口幅/厚	幅高/幅	底色/厚	最大径/厚	
第44図1	185X001	土器部	甕	石英・長石・角 閃石・霞母・赤 色粘土・白色粘 土	明黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	-	-	1.8+α	-	-	外面著しく摩耗
第44図2	185X001	土器部	坪	石英・長石・角 閃石・赤色粘 土・白色粘土	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(12.8)	2.8+α	-	-	
第44図3	185X001	土器部	坪	石英・霞母・赤 色粘土・白色粘 土	浅黄褐色	灰黄色	ナデ	ナデ	(11.2)	3.7+α	-	-	
第44図4	185X001	土器部	硝	石英・長石・角 閃石・白色粘 土	黒色	灰黄色	ミガキ	ナデ	(16.2)	3.7+α	-	-	
第44図5	185X001	土器部	高台付坪	石英・長石・角 閃石・霞母・赤 色粘土・白色粘 土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	-	1.2+α	8.0	-	
第44図6	185X001	土器部	甕	石英・霞母・赤 色粘土	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	(12.4)	1.7+α	-	-	
第44図7	185X001	土器部	坪	石英・角閃石・ 白色粘土	灰白色	黄灰色	ヨコナデ	回転ナデ	-	2.7+α	-	-	
第44図8	185X001	土器部	高台付坪	白色粘土	青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ	-	1.3+α	7.8	-	
第44図9	185X001	土器部	全敷型	石英・長石・角 閃石・霞母・赤 色粘土・白色粘 土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ・ナ デ	ヨコナデ・硝 部	-	4.4+α	-	-	
第44図10	185X001	土器部	全敷型	石英・角閃石・ 霞母・赤色粘 土・白色粘土	明黄褐色	明黄褐色	ヨコナデ・硝 部	ナデ	-	4.0+α	-	-	
第44図11	185X001	土器部	全敷型	石英・角閃石・ 霞母・赤色粘 土・白色粘土	褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・ハツケ ナデ	-	4.6+α	-	-	
第44図12	185X001	土器部	硝	石英・長石・角 閃石・霞母・赤 色粘土・白色粘 土	黒色	にぶい褐色	-	ヨコナデ・ナ デ	-	4.0+α	-	-	内作蓋入付蓋
第44図13	185X001	土器部	甕	石英・角閃石・ 霞母・赤色粘 土・白色粘土	黒褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	-	2.5+α	-	-	
第44図14	185X001	土器部	甕	石英・長石・角 閃石・白色粘 土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(15.6)	4.1+α	-	-	全体的に黒く曇変

図番	遺構名	土質		色 質		形状・質感		厚 度		備考		
		種類	状態	内面	外面	内面	外面	口部/底	幅/横			
第64図15	黒灰褐色砂質土	土層	新	石質・角閃石・炭母・白色粒子・白色砂子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	-	6.7+α	-	-
第64図16	185D001 黒灰褐色砂質土	底層	新	石質・白色砂子	灰色	灰色	面転ナデ	3コナデ	(27.2)	5.0+α	-	-

第8表 大道遺跡群第16次調査 出土遺物観察表

図面番号	遺構名	土質		色 質		形状・質感		厚 度		備考				
		種類	状態	内面	外面	内面	外面	口部/底	厚さ/幅					
第72図1	165D001	白磁	破	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉・露出	-	2.6+α	4.6	-	-	伊万直産
第72図2	165D001	磁製品	破鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	52.4
第72図3	165D002	磁器類	大壺	石質・白色砂子	にぶい赤褐色	暗赤褐色	3コナデ	3コナデ	-	7.0+α	-	-	-	-
第72図4	165D002 灰土褐色粘質土	鉄	瓦質土器	鉄	白色砂子	灰色	灰色	ハケメ	ハケメ後ナデ	-	6.1+α	-	-	ハケメ単位3~12cm/cm
第72図5	185D029 1層	縄文土器	鉄	石質・角閃石・白色砂子・炭母	明褐色	明褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	-	-
第72図6	185D029 1層	縄文土器	鉄	石質・炭母・白色砂子・白色砂子	褐色	赤褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	-	-
第72図7	185D029 1層	縄文土器	鉄	石質・炭母・白色砂子	黄褐色	明褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	-	-
第72図8	165D001 黒灰褐色砂質土	京都系土器	坪	精製土 白色砂子	灰白色	灰色	ナデ	ナデ・工具ナデ	-	2.6+α	-	-	-	-
第72図9	165D001 黒灰褐色砂質土	京都系土器	坪	石質・長石・白色砂子	灰白色	灰白色	ナデ	強いナデ・工具ナデ	-	2.4+α	-	-	-	-
第72図10	165D030 灰土褐色砂質土	京都系土器	坪	炭母・白色砂子	灰白色	淡黄褐色	3コナデ	3コナデ	(9.2)	1.5+α	-	-	-	-
第72図11	165D030 黒灰褐色砂質土	京都系土器	坪	石質・角閃石・炭母・白色砂子・白色砂子	灰黄色	灰黄色	3コナデ	3コナデ	10.7	2.3+α	-	-	-	-
第72図12	165D030 黒灰褐色砂質土	京都系土器	坪	石質・角閃石・赤色砂子・白色砂子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3コナデ・ハケメナデ	3コナデ・薄オサエ	(14.6)	2.1+α	-	-	-	-
第72図13	165D030 黒灰褐色砂質土	瓦質土器	銅製部	長石・白色砂子	灰白色	黒色	ナデ	ナデ	-	4.7+α	-	-	-	防長系瓦質土器
第72図14	165D030 土・灰層	漆器類	漆鉢	石質・炭母・白色砂子	褐灰色	灰褐色	面転ナデ・スリ目	3コナデ	-	4.5+α	-	-	-	-
第72図15	165D030 黒灰褐色砂質土	漆器類	漆鉢	-	暗赤灰色	暗赤灰色	スリ目・3コナデ	3コナデ	-	4.6+α	-	-	-	-
第72図16	165D030 黒灰褐色砂質土	青磁	破	-	透明緑	透明緑	施釉	施釉	-	2.2+α	-	-	-	蓮子破
第72図17	165D030	白磁	底	精製土 くわがに黒い砂	灰白色	灰白色	施釉	施釉	(12.4)	1.9+α	-	-	-	豊後産
第72図18	165D030	青磁	底	粘土色・灰白色	紫オリーブ灰色	紫オリーブ灰色	施釉	施釉・露出部のみ	-	1.5+α	(9.6)	-	-	津所産
第72図19	165D030	漆器類	破	石質・3mm程度の石粒混入	オリーブ灰色	黄褐色	施釉・裏入	施釉・露転ハケメ・工具ナデ	-	3.0+α	3.5	-	-	見込み砂目確認多量
第72図20	165D030 漆器	漆器類	大壺	石質・赤色砂子・白色砂子	灰赤色	褐灰色	3コナデ	3コナデ	-	11.2+α	-	-	-	-
第72図21	165D030	漆器類	漆鉢	石質・赤色砂子・白色砂子	赤灰色	灰赤色	スリ目・ナデ	ナデ	-	10.3+α	-	-	-	-
第72図22	165D030 黒灰褐色砂質土	土製品	燗台	-	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・摩孔	ナデ・摩孔	-	5.2+α	6.0	-	-	内部に摩孔あり・摩孔内部に木刺残存
第72図23	165D030	土製品	土器	石質・角閃石・炭母・白色砂子	-	-	-	-	長4.7+α	幅1.4	-	-	-	重3.2g
第74図1	185D005 灰土褐色砂質土	灰土陶磁器	底	灰白色	透明緑	透明緑	施釉	施釉	(12.6)	2.9	(7.1)	-	-	肥前産
第74図2	165D015	瓦質土器	漆鉢	石質・白色砂子	灰色	灰色	スリ目	ナデ	-	4.5+α	-	-	-	-
第74図3	165D005	金属製品	煙管(破口)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	重3.5g
第74図4	165D005	金属製品	釘	-	-	-	-	-	-	長4.5	幅1.0	-	-	重2.5g
第74図5	165D015	瓦質土器	下城式蓋	石質・長石・角閃石・白色砂子	黒色	にぶい黄褐色	3コナデ・ハケメ	3コナデ・ハケメ	-	6.3+α	-	-	-	断面目安率2倍・ハケメ単位3~9cm/cm
第74図6	165D022	土器類	高坪	石質・長石・角閃石・炭母・赤色砂子・白色砂子	褐色	褐色	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ・露出部	13.8	7.6+α	-	-	-	-
第74図7	165D022	土器類	壺	石質・炭母・赤色砂子・白色砂子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ケズリ後ナデ・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	13.1	20.9	-	-	-	外面底部にスリ付・ハケメ単位3~8cm/cm

図面番号	通称名	部 類		地 土	色 質		地 質 調査		地 質 調査		最大径/量	備考	
		種類	特徴		内面	外面	内面	外面	口幅/厚	厚さ/長さ			
第74図8	16SK028	土器類	高坪	石英・黄褐色・角閃石・赤色粘土・白色粘土	褐色	褐色	ヨコナデ・ハクメ後ナデ	ヨコナデ・ナデ後ナデ	13.2	12.9	11.4	-	粘土剥落のため断面不明
第74図9	16SK028	土器類	小壺	石英・角閃石・赤色粘土・白色粘土	赤褐色	赤褐色	ケズリ後ナデ	ハクメ	11.5	16.9	-	-	外面に入付層 ハクメ単位(10~15cm)
第74図10	16SK028	土器類	甕	石英・黄褐色・白色粘土	明黄褐色	にぶい黄褐色 →明黄褐色	ハクメ	ケズリ後ナデ	16.3	25.7	-	-	ハクメ単位(3cm)
第74図11	16SK028	土器類	複合口縁蓋	石英・黄褐色・角閃石・赤色粘土・白色粘土	暗赤褐色	暗赤褐色	ハクメ・ケズリ後ナデ	ナデ・ハクメ	(15.0)	18.0+	-	-	ハクメ単位 内(10cm・cm) 外(10cm・cm)
第77図12	16SK028	土器類	高坪	石英・角閃石・赤色粘土・白色粘土	褐色	褐色	ヨコナデ後ナデ ガキ層下方 内(10cm)	ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ	13.8	5.5+	-	-	断面接合部分に黒変あり
第77図13	16SK028	土器類	甕	石英・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	赤褐色	赤褐色→褐色	ケズリ	ハクメ	-	13.0+	-	15.1	
第77図14	16SK028	土器類	甕	石英・黄褐色・角閃石・赤色粘土	赤褐色	黄褐色 →明赤褐色	ヨコナデ・ハクメ後ナデ ヨコナデ・ハクメ後ナデ	ヨコナデ・ハクメ後ナデ	14.8	19.1	-	-	外面断面→断面にスス付層 ハクメ単位(10~15cm)
第77図15	16SK035	白磁	花瓶	精製土	-	-	-	-	(4.0)	4.9+	-	-	
第77図16	16SK035 黒灰褐色 砂質土	灰土層	紅土	精製土	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ・ヘラウツリ後ナデ・黒土	(5.8)	2.1	(2.8)	-	断面接合部分に黒変あり
第77図17	16SK035	灰土層	灰土	精製土	透明	透明	黒土	黒土(スランブ)	-	4.3+	(4.3)	-	断面接合部分に黒変あり
第77図18	16SK035	灰土層	灰土	精製土	透明	透明	ヨコナデ・黒土	黒土	(19.0)	4.3	-	-	口縁部接合部分に黒変あり
第77図19	16SK035 黒灰褐色 砂質土	灰土層	灰土	精製土	褐色	褐色	ナデ	ナデ・ヘラウツリ後ナデ・黒土	(8.6)	2.2	(5.2)	-	断面接合部分に黒変あり 口縁部接合部分に黒変あり
第77図20	16SK035	瓦	軒平瓦	黄色粘土・1~3mm程度の石砂少量混入	暗灰色	灰色	ナデ	ナデ・強いナデ	-	-	-	-	断面接合部分に黒変あり
第77図21	16SK035 黒灰褐色 砂質土	灰土層	灰土	精製土	褐色	褐色	ナデ	ナデ・ヘラウツリ後ナデ・黒土	-	5.9+	(11.8)	-	断面接合部分に黒変あり
第77図22	16SK045 1層	土器類	甕	石英・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	褐色	にぶい褐色	ハクメ後ナデ ナデ・ケズリ	ハクメ	15.3	24.4	-	-	外面に入付層 ハクメ単位 内(10cm・cm) 外(10cm・cm) 口縁部→断面に黒変あり
第80図23	16SK050 1層	土器類	複合口縁蓋	石英・長石・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	明赤褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ後ナデ・ガキ・波紋文後ナデ・ヨコナデ後ナデ・ガキ・波紋文後ナデ・ヨコナデ後ナデ・ガキ・波紋文後ナデ	(18.4)	10.0+	-	-	
第80図24	16SK050 1層	土器類	安曇式 複合口縁蓋	石英・長石・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	褐色	褐色	ヨコナデ・ハクメ後ナデ ナデ	ハクメ後ナデ ナデ・ハクメ後ナデ	16.0	19.7+	-	-	ハクメ単位 内(10cm・cm) 外(10cm・cm)
第80図25	16SK050 黒褐色 灰土	土器類	甕	石英・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	明褐色	明褐色	ナデ・ケズリ	ヨコナデ	(15.0)	15.5+	-	-	
第80図26	16SK050	土器類	甕	石英・長石・角閃石・赤色粘土	赤色	赤色	ヨコナデ・ナデ ハクメ後ナデ	ヨコナデ・ハクメ後ナデ	14.5	21.1	-	-	断面接合部分に黒変あり 外面断面にスス付層 ハクメ単位(10~15cm)
第80図27	16SK050 1層	土器類	甕	角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	褐色	にぶい褐色	ヨコナデ・ナデ ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハクメ後ナデ ケズリ後ナデ	15.1	25.0+	-	-	外面断面にスス付層
第80図28	16SK050	土器類	甕	石英・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	褐色→にぶい褐色	褐色→にぶい褐色	ハクメ後ナデ ケズリ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	(17.8)	22.0+	-	-	外面に入付層 断面に黒変あり ハクメ単位(8cm)
第81図29	16SK050 1層	土器類	甕	石英・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	褐色	赤褐色	ナデ後ナデ ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハクメ後ナデ	-	30.0+	-	(22.8)	外面に入付層
第81図30	16SK058 1層	土器類	安曇式 複合口縁蓋	石英・長石・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	明褐色	褐色→明赤褐色	ヨコナデ・ハクメ後ナデ ナデ	ヨコナデ・ハクメ後ナデ ナデ後ナデ	(23.0)	10.7+	-	-	断面接合部分に黒変あり
第81図31	16SK058 2層	土器類	複合口縁蓋	石英・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	明赤褐色	明赤褐色	ナデ ケズリ後ナデ	ヨコナデ ケズリ後ナデ	(23.3)	8.4+	-	-	
第81図32	16SK058	土器類	甕	長石・角閃石・赤色粘土	褐色→黄褐色	褐色	ヨコナデ・ハクメ後ナデ ナデ	ヨコナデ・ハクメ後ナデ	19.5	26.4	-	-	断面に黒変あり 外面断面にスス付層 ハクメ単位(10~12cm)
第81図33	16SK058	土器類	甕	石英・角閃石・黄褐色・赤色粘土	褐色	褐色	ヨコナデ後ナデ ナデ	ヨコナデ・ハクメ後ナデ	(18.8)	12.1+	-	-	断面に黒変あり 外面断面にスス付層 ハクメ単位(10~15cm)
第83図1	16SK007	灰土層	灰土	石英・赤土・黄褐色	にぶい黄色	にぶい黄色	断面ヘラウツリ後ナデ	断面ヘラウツリ後ナデ	-	3.0+	(4.8)	-	断面接合部分に黒変あり
第83図2	16SK007	灰土層	灰土	石英	オリーブ灰色	灰色	断面	断面	-	1.8+	(3.8)	-	断面接合部分に黒変あり
第83図3	16SK007	灰土層	灰土	石英・赤土・黄褐色	灰黄色	明赤褐色	断面	断面	-	3.5+	4.4	-	断面接合部分に黒変あり
第83図4	16SK007	灰土層	灰土	石英・赤土・黄褐色	灰白色	明赤褐色	断面	断面	(14.0)	2.4+	-	-	断面接合部分に黒変あり
第83図5	16SK007	灰土層	灰土	石英・角閃石・赤色粘土・白色粘土	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・自然釉	5.9+	-	-	-	

調査番号	遺構名	新 種		粘土	色 質		断面形状		法 量				備考
		種類	形状		内面	外面	内面	外面	口幅/長	幅高/厚	底径/厚	最大径/厚	
第82図6	16SX007	京都系土師器	坪	石灰・角閃石・白色粘土	灰白色	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデナデ	(10.6)	1.8+α	-	-	
第82図7	16SX007	土師器	坪	石灰・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデナデ	ヨコナデナデ	-	2.2+α	-	-	
第82図8	16SX007	奈良陶磁器	皿	角閃石・白色粘土・土色・明赤褐色	灰褐色	灰褐色	施釉	施釉	(26.6)	3.0+α	-	-	肥前産
第82図9	16SX007	藤原鏡	腰鉢	石灰・白色粘土・赤褐色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヨコナデ・スリ目	ヨコナデ	(27.6)	6.2+α	-	-	
第82図10	16SX007	藤原鏡	腰	石灰・角閃石・赤色粘土・白色粘土	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・自然釉	-	5.6+α	-	-	
第82図11	16SX007	藤原鏡	腰鉢	白色粘土	暗赤褐色	にぶい赤褐色	スリ目	ヨコナデ・ナデ	(33.0)	14.4	(17.0)	-	
第82図12	16SX007	瓦質土器	火鉢	石灰・角閃石・白色粘土・土色・にぶい黄色	灰色	灰色	ヨコナデ・エッジにぶいケズリ	ナデ・エッジナデ	(29.8)	9.8+α	(27.0)	-	
第82図13	16SX007	瓦	平瓦	石灰・白色粘土・土色・灰白色	灰色	灰色	横目線ケズリ	エッジナデ	8.6+α	6.3+α	2.0	-	
第82図14	16SX007	瓦	丸瓦	石灰・角閃石・白色粘土	暗灰色	灰色	布目・つり線・ケズリ	ナデ	12.8+α	8.5+α	2.4	-	
第82図15	16SP008	土製品	煎餅車	-	-	-	-	-	-	-	-	-	重8.3g
第82図16	16SP008	赤褐色粘質土	赤土	石灰・長石・角閃石・白色粘土・2mm程度の石粒が少量混入	明褐色	褐色	ヨコナデ	ミガキ・ナデ	-	5.8+α	-	-	下層野式

第9表 大道遺跡群第19次調査 出土遺物観察表

図番	遺構名	種類	形状	粘土	色 質		断面形状		法 量 (cm)				備考
					内面	外面	内面	外面	口幅/底径	底径/厚	底径/厚	最大径/厚	
第82図1	19SD000a	土師器	製造土器	石灰・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	褐色	明褐色	ナデ・自然目	ヘラ切り・ナデ	-	2.9+α	-	-	六邊角式土器
第82図2	19SD000b O1層	土師器	坪	石灰・角閃石・雲母・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	淡黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.7)	1.9+α	-	-	
第82図3	19SD000d 墓込め	土師器	坪	石灰・角閃石・雲母・赤色粘土・白色粘土	褐色	明赤褐色	ケズリ・横ナデ	ヨコナデ	-	2.7+α	-	-	
第82図4	19SD000e	土師器	坪	石灰・角閃石・赤色粘土・白色粘土	褐色	褐色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	-	1.4+α	(10.4)	-	
第82図5	19SD002 1層	赤土土器	腰	石灰・角閃石・雲母・赤色粘土・白色粘土	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(16.8)	2.6+α	-	-	
第82図6	19SD002 墓上	赤土土器	腰	石灰・長石・角閃石・雲母・赤色粘土・白色粘土	褐色	明赤褐色	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ	(16.2)	3.6+α	-	-	ハケ目単位 内(4.8+α/cm) 外(3.8+α/cm)
第82図7	19SD018 反褐色粘質土	土師器	製造土器	石灰・赤色粘土・白色粘土	褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	2.4+α	-	-	内外面とも磨削面らしい
第82図8	19SD020 1~2層	土師器	腰	石灰・長石・角閃石・雲母・赤色粘土・白色粘土	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	(26.8)	2.7+α	-	-	
第82図9	19SD020 1~2層	土師器	腰	石灰・長石・角閃石・雲母・赤色粘土・白色粘土	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ・海オサエナデ	ヨコナデ・ハケ	(25.6)	7.8+α	-	-	淡緑・赤・白ハケ目単位(3→6.8+α/cm)
第82図10	19SD020 高灰褐色土・砂質土	土師器	腰	石灰・長石・角閃石・雲母・赤色粘土・白色粘土・5mm程度の石粒を含む	暗灰色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ・ナデ・横ハケ・ヨコナデ	-	11.8+α	6.2	-	ハケ目単位(3→6.8+α/cm)
第82図11	19SD020 高灰褐色土	土製品	煎餅車	-	-	-	-	-	-	長10.7	幅7.2	-	重700g
第82図12	19SD020 高灰褐色土	赤土土器	腰	石灰・角閃石・雲母・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(23.0)	4.2+α	-	-	横紋式土器
第82図13	19SD020 高灰褐色土	赤土土器	腰	石灰・角閃石・雲母・赤色粘土	暗灰色	黄灰色	海オサエ	ナデ・横オサエ	-	3.6+α	(5.4)	-	
第82図14	19SD020 高灰褐色土・墓上	赤土土器	腰	長石・角閃石・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ・ナデ・エッジにヨコナデ	ヨコナデ・ハケ	(23.0)	13.0+α	-	-	外周スリ付 ハケ目単位(3→6.8+α/cm)
第82図15	19SD020 高灰褐色土	赤土土器	腰	長石・角閃石・白色粘土	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ハケ・ナデ	(20.2)	9.3+α	-	-	ハケ目単位 内(5→8.8+α/cm) 内(7→8.8+α/cm)
第82図16	19SD020 高灰褐色土	土師器	腰	石灰・長石・角閃石・1~4mm大の砂粒	明褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.8)	4.4+α	-	-	
第82図17	19SD020	土師器	坪	石灰・雲母・赤色粘土・白色粘土	にぶい褐色	にぶい赤褐色	ハケ・横ナデ・横ミガキ・ナデ・横ミガキ	ナデ・横ミガキ	(13.0)	3.2+α	-	-	
第82図18	19SD020 高灰褐色土	土師器	坪	石灰・長石・雲母・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	(14.6)	3.0+α	-	-	

製品番号	品名	種類	形状	土質		色		表示方法		口径/高	寸法		備考
				内装	外装	内装	外装	口径/高	底径/厚		底径/高		
第00215	1900030 黒曜石色 土	土師器	坏	石莖・肉閃石・ 黄母・赤色粒子・ 白色粒子	褐色	褐色	30ナデ	30ナデ	(14.6)	1.9+α	-	-	
第00216	1900030 黒曜石色 土	土師器	坏蓋	石莖・肉閃石・ 黄母・赤色粒子・ 白色粒子	褐色	明赤褐色	ナデ像2ナデ	30ナデ・5ナデ・ ナデ	(14.0)	2.4+α	-	-	
第00217	1900030 黒曜石色 土	土師器	坏蓋	石莖・赤色粒子・ 白色粒子	褐色	褐色	ナデ	ナデ	(18.2)	2.7+α	-	-	
第00218	1900030 黒曜石色 土	土師器	坏	肉閃石・赤色粒子・ 白色粒子	灰白色	灰色	30ナデ	図板ナデ	(14.6)	1.8+α	-	-	
第00219	1900030 黒曜石色 土	土師器	坏	石莖・赤色粒子・ 白色粒子	灰色	灰色	図板ナデ	図板ナデ・ナデ	(11.4)	3.3+α	-	-	
第00220	1900030 黒曜石色 土	土師器	坏蓋	赤色粒子・白色 粒子	灰白色	灰色	ナデ	ナデ	-	1.6+α	-	-	
第00221	1900030 黒曜石色 土	土師器	坏蓋	白色粒子	灰色	灰色	図板ナデ像 ナデ	ナデ・ケズエ	(14.0)	2.1	-	-	
第00222	1900020 黒曜石色 土	土師器	手持ち壺	石莖・肉閃石・ 赤色粒子・白色 粒子	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ・ケズエ	-	-	-	底部分に 漆を塗り入れ	
第00223	1900020 黒曜石色 土	土師器	製造土器	石莖・黄石・橙 色粒子・白色粒子	-	-	-	ハヤツ離し像ナ デ・像オサエ	-	5.0+α	-	-	
第00224	1900020 黒曜石色 土	土師器	製造土器	石莖・長石・黒 色粒子・赤色粒 子・白色粒子	-	-	赤目	像オサエ	-	5.5+α	-	-	
第00225	1900020 黒曜石色 土	土師器	甕	黄石・肉閃石・白 色粒子	黒褐色	黒褐色	ハケ像ナデ	30ナデ・ナデ	8.5+α	-	-	-	
第00226	1900020 黒曜石色 土	土師器	甕	石莖・肉閃石・ 黄母・赤色粒子・ 白色粒子	にぶい黄褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	4.3+α	-	-	
第00227	1900030 黒曜石色 土	土師器	金倉型甕	石莖・黄母・赤 色粒子・白色粒 子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ・ハケ像ナ デ	(17.4)	4.1+α	-	-	
第00228	1900020 黒曜石色 土	土師器	金倉型甕	3mm次の石莖・ 赤母・肉閃石・ 黄母・赤色粒子・ 白色粒子	明褐色	褐色	30ナデ・ナ デ・像オサエ	30ナデ・ハケ ナデ	(20.0)	6.1+α	-	-	
第00229	1900020 黒曜石色 土	土師器	金倉型甕	石莖・長石・肉 閃石・黄母・赤 色粒子・白色粒 子	赤褐色	赤褐色	5ナデ・ナデ	5ナデ・ナデ像 2ナデ	-	3.4+α	-	-	
第00230	1900020 黒曜石色 土	土師器	小形丸底甕	石莖・長石・ 肉閃石・黄母・ 赤色粒子・白色 粒子	明赤褐色	明赤褐色	ケズエ・ハケ 像2ナデ	30ナデ・ハケ 像2ナデ	(13.7)	9.0+α	-	-	
第00231	1900020 黒曜石色 土	土師器	甕	石莖・肉閃石・ 黄母・赤色粒子・ 白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	30ナデ・ナ デ	30ナデ	(15.2)	5.4+α	-	-	
第00232	1900020 黒曜石色 土	土師器	金倉型甕	3mm次の石莖・ 赤母・肉閃石・ 黄母・赤色粒子・ 白色粒子	黄褐色	明赤褐色	ナデ・像オサ エ	30ナデ・ハケ ナデ	-	5.1+α	-	-	
第00233	1900020 黒曜石色 土	土師器	製造土器	石莖・赤色粒子・ 白色粒子	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	-	2.3+α	-	-	
第00234	1900020 黒曜石色 土	土師器	製造土器	石莖・赤色粒子・ 白色粒子	にぶい赤褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	3.8+α	-	-	
第00235	1900020 黒曜石色 土	土師器	小形丸底甕	長石・肉閃石・ 赤色粒子・白色 粒子	明赤褐色	褐色	ナデ・ハケ・ ケズエ・像ナ デ・5ナデ	30ナデ・ハケ 像2ナデ・ハケ ケズエ・像ナ デ・5ナデ	11.4	8.4	-	-	
第00236	1900020 黒曜石色 土	土師器	甕	石莖・長石・肉 閃石・黄母・赤 色粒子・白色粒 子	褐色	褐色	ハケ像ナデ・ ハケ	30ナデ・ハケ ナデ	(18.0)	7.2+α	-	-	
第00237	1900020 黒曜石色 土	土師器	甕	石莖・長石・肉 閃石・黄母・赤 色粒子・白色粒 子	にぶい黄褐色	黄褐色	ナデ・ハケ像 ナデ	ナデ・ハケ像ナ デ	(17.6)	2.1+α	-	-	
第00238	1900020 黒曜石色 土	土師器	甕	石莖・肉閃石・ 黄母・赤色粒子・ 白色粒子	灰白色	黄褐色	ナデ・30ナ デ	30ナデ・ハケ像 ナデ	(26.4)	8.9+α	-	-	
第00239	1900020 黒曜石色 土	土師器	甕	石莖・長石・肉 閃石・白色粒子	灰白色	黄褐色	ナデ	ハケ・30ナデ・ ナデ	-	6.6+α	8.4	-	
第00240	1900020 黒曜石色 土	土師器	甕	石莖・長石・肉 閃石・赤色粒子	明赤褐色	明赤褐色	30ナデ	30ナデ・図板ナ デ	14.0	4.0	8.5	-	
第00241	1900020 黒曜石色 土	土師器	高台付杯	石莖・黄母・白 色粒子	明赤褐色	明赤褐色	30ナデ・5ナ デ	ナデ像5ナデ・コ コナデ	-	1.4+α	(9.5)	-	
第00242	1900020 黒曜石色 土	土師器	金倉型甕	石莖・赤母・白 色粒子・肉閃石・ 黄母・赤色粒子	黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ・ハケ	-	4.0+α	-	-	
第00243	1900020 黒曜石色 土	土師器	高坪	黄石・肉閃石・白 色粒子	褐色	褐色	5ナデ・オサ エ・ナデ・ハケ	ナデ・5ナデ・オ サエ・ナデ・ハケ	-	11.7+α	-	-	
第00244	1900020 黒曜石色 土	土師器	高坪	石莖・長石・肉 閃石・赤母・白 色粒子・白色粒 子	褐色	褐色	ナデ	5ナデ・オサ エ・ナデ・ハケ	-	4.7+α	(14.6)	-	
第00245	1900020 黒曜石色 土	土師器	高坪	石莖・長石・肉 閃石・白色粒子	灰白色	黄褐色	ナデ	像像像像像・ナ デ	-	3.0+α	-	-	
第00246	1900020 黒曜石色 土	土師器	高坪	石莖・長石・肉 閃石・白色粒子	灰白色	黄褐色	ハケ像ナデ	ハケ	-	3.5+α	-	-	

調査番号	遺構名	土質		土質		土質		土質		土質/土質	土質/土質	土質/土質	土質/土質	土質/土質	備考
		種類	層位	内面	外面	内面	外面	内面	外面						
第97図19	19SK020 1層	原生土層	横谷口縁部	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	暗褐色	灰褐色	ナシ	ヨコナデ・ハク後ナシ	ナシ	-	6.7+	-	-	-	灰帯1箇所あり
第97図20	19SK020 1層	原生土層	壁	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	にぶい黄褐色	灰黄褐色	暗オサエ	ナシ・ハク後ナシ	暗オサエ	-	5.5+	-	-	-	灰帯1箇所あり
第97図21	19SK023	原生土層	壁	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナシ・ハク後ナシ	ナシ	ナシ	23.6	38.7	5.0	-	-	口縁部打ち欠き 銅部厚し
第97図22	19SK023 1層	原生土層	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	明黄褐色	ナシ・ハク後ナシ	ヨコナデ・丁寧ナシ	ヨコナデ	(14.0)	11.0+	-	-	-	
第97図23	19SK025	土師器	高坪	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	赤褐色	褐色	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ	14.8	5.3+	坪部1.4	-	-	口縁部打ち欠き2箇所あり 内面1/3高さ 外面口縁部一部欠入付着
第97図24	19SK025	土師器	高坪	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	にぶい赤褐色	赤褐色	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ	14.7	5.3+	坪部7.5	-	-	口縁部打ち欠き2箇所あり
第97図25	19SK025 1層	土師器	高坪	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナシ	ヨコナデ	ヨコナデ	-	2.6+	(7.2)	-	-	銅部
第97図26	19SK025 1-2層	土師器	壁	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	淡黄褐色	褐色	ハク後ヨコナデ・ハク後ナシ	ハク後ヨコナデ・ハク後ナシ	ハク後	18.2	6.4+	-	-	-	ハケ目単位(12~13cm/cm)
第97図27	19SK025	土師器	壁	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明赤褐色	明褐色	ハク後ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ	(16.5)	9.9+	-	-	-	ハケ目単位(7~8cm/cm) 外面欠入付着
第97図28	19SK025 5層	土師器	壁	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	黄褐色	ヨコナデ・ハク後ナシ・ハク後ナシ	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ	14.9	24.9	-	-	-	ハケ目単位(7~8cm/cm) 内外面欠入付着
第98図1	表土	土師器	手持ち皿	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	黄褐色	銅ナシ・ハク後ナシ	銅ナシ・ハク後ナシ	銅ナシ	-	8.2+	-	-	-	
第98図2	表土	土師器	製塩土器	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	-	-	-	ハケ目単位(12~13cm/cm)	ハケ目単位	-	3.5+	-	-	-	六通式土器

第10表 大道遺跡群第22次調査 出土遺物観察表

調査番号	遺構名	土質		土質		土質		土質		土質/土質	土質/土質	土質/土質	土質/土質	土質/土質	備考
		種類	層位	内面	外面	内面	外面	内面	外面						
第101図1	22SE010	土師器	碗	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明褐色	明褐色	ナシ	ナシ	ナシ	9.8	5.0	-	-	-	外周1/3高さ
第101図2	22SE010	土師器	碗	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナシ	ナシ	ナシ	14.0	4.9+	-	-	-	
第101図3	22SE010	土師器	高坪	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明赤褐色	明赤褐色	ナシ	ナシ	ナシ	20.0	6.2+	-	-	-	坪部のみ
第101図4	22SE010	土師器	小形丸底蓋	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	11.6	6.1	-	-	-	
第101図5	22SE010	土師器	小形丸底蓋	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	にぶい褐色	ヨコナデ・ミナギキ・ナシ	ヨコナデ・ミナギキ・ナシ	ヨコナデ	(12.8)	5.5+	-	-	-	
第101図6	22SE010	土師器	小形丸底蓋	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明褐色	明褐色	ヨコナデ・ナシ	ヨコナデ・ナシ	ヨコナデ	(10.2)	10.3	-	-	-	内面ほぼ高さ
第101図7	22SE010	土師器	小形丸底蓋	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	褐色	ハク後ナシ・ナシ	ナシ・ハク後ナシ	ナシ	-	8.8	-	-	-	外周1/3高さ
第101図8	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明赤褐色	にぶい褐色	ハク後ナシ	ナシ・ハク後ナシ	ナシ	-	6.9+	-	-	-	
第101図9	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明赤褐色	黄褐色	ハク後ナシ・ナシ	ハク後ナシ・ナシ	ハク後ナシ	(16.2)	6.8+	-	-	-	ハケ目単位 内(8~7cm/cm) 外(12cm/cm)
第102図10	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ	22.0	15.6	-	-	-	鉢状安曇 口縁部欠入付着
第102図11	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	褐色	ナシ	ナシ	ナシ	-	5.9+	(8.8)	-	-	口縁部内面欠落 内面高さ
第102図12	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	黄褐色	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ	-	5.7+	-	-	-	内外面一部高さ ハケ目単位 内(8~6cm/cm) 外(8~9cm/cm)
第102図13	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	黄褐色	ナシ・ハク後ナシ	ハク後ナシ	ハク後ナシ	-	8.7+	-	-	-	内外面高さ ハケ目単位 内(8~6cm/cm) 外(8~7cm/cm)
第102図14	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	黄褐色	ナシ・ハク後ナシ	ハク後ナシ	ハク後ナシ	18.6	5.3+	-	-	-	ハケ目単位(7~8cm/cm)
第102図15	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	褐色	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ・ハク後ナシ	ヨコナデ	(10.8)	14.7+	-	-	-	高さ2ヶ所
第102図16	22SE010	土師器	底	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	褐色	褐色	ナシ	ナシ	ナシ	-	-	-	-	-	銅部系
第102図17	22SE010	土師器	製塩土器	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナシ	ナシ	ナシ	-	-	-	-	-	
第102図18	22SE010	土師器	碗	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明赤褐色	褐色	ハケ目ナシ	ハケ目ナシ	ハケ目ナシ	7.2	5.3	-	-	-	全縁1/3高さ
第102図19	22SE010	土師器	付付丸底蓋	石灰・赤土・赤色砂子・白色砂子	明赤褐色	明赤褐色	ハケ目ナシ	ナシ・ハク後ナシ	ナシ	11.8	12.0+	11.4+	-	-	

調査番号	産地名	新 産 地		防土	色 質		新産地調査		白磁/黒	赤磁/白	赤色/黒	最大径/量	備考
		種類	産地		内面	外面	内面	外面					
第108図3	225D16	土師器	高坪	石灰・白色粒子			ハケナデ	ミガキナデ・厚 ミガキナデ	-	7.8+	(20.0)	-	
第108図4	225D16	土師器	彦	石灰・赤石・角 閃石・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	工具ナデ・ナ デ・オサエ	ナデ	12.0	4.6+	-	-	
第108図5	225D16	土師器	笠岡市式 鏡台口縁部	石灰・赤石・霏 母・白色粒子	赤褐色	褐色	ナデ・ハケ ・奥サエ	ナデ・ハケ	11.5	9.2+	-	-	
第107図6	225D16	土師器	彦	黒石・霏母・白 色粒子	灰褐色	褐色	ミコナデ・ハ ケ・指オサエ	ミコナデ・ハケ後 ナデ・ミガキ	(19.8)	17.8+	-	-	ハケ目単位(3~8本/cm)
第107図7	225D16	土師器	彦	角閃石・赤色粒 子	明赤褐色	明赤褐色	ミコナデ・ハ ケ	ミコナデ・ハケ後 ナデ・ナデ	(20.4)	7.4+	-	-	ハケ目単位(4~5本/cm)
第107図8	225D16	土師器	彦	黒石・霏母・赤 色粒子・白色粒 子	褐色	暗褐色	ミコナデ・ハ ケ後ナデ・ズ リ	ミコナデ・ハケ後 ナデ・ナデ	18.1	20.7+	-	-	
第107図9	225D16	土師器	大鉢	石灰・赤石・角 閃石・白色粒子	褐色	褐色	ハケ後ナデ・ ミガキ	ミコナデ・丁寧な ナデ・ミガキ	(35.0)	24.2+	-	-	
第108図1	225D002	土師器	坪	石灰・赤石・角 閃石・白色粒 子・白色粒子	褐色	褐色	ナデ	ミコナデ・ミガキ	(10.8)	3.6	(8.4)	-	
第108図2	225D002	土師器	坪	石灰・赤石・角 閃石・白色粒 子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ・後ミガキ	ナデ・後ミガキ	18.4	4.6	8.1	-	
第108図3	225D001 225D002 鏡台・横出	土師器	端	黒石・角閃石・ 白色粒子	褐色	黄褐色~褐色	ナデ・指オサ エ・白色粒	ミコナデ・ハケ	14.0	5.1	-	-	ハケ目単位(3~6本/cm)
第108図4	225D002	土師器	坪	石灰・赤石・角 閃石・赤色粒 子・白色粒子	褐色	褐色	ミコナデ・後ミ ガキ・ナデ・後 ミガキ	ミコナデ・後ミガ キ・工具ナデ	(15.0)	6.1+	(8.8)	-	
第108図5	225D002	土師器	坪	石灰・赤石・角 閃石・赤色粒 子・白色粒子	褐色	褐色	ミコナデ・後ミ ガキ	ミコナデ・後ミ ガキ・ズリ・後ミ ガキ	(15.3)	1.6+	-	-	口縁端部に黒炭
第108図6	225D002	土師器	坪	石灰・角閃石・ 赤色粒子・白色 粒子	褐色	褐色	ナデ・後ミガキ	ナデ・後ミガキ	(14.8)	1.8+	-	-	
第108図7	225D002	土師器	坪	石灰・赤石・白 色粒子	褐色	褐色	ナデ・指ナデ ナデ	ナデ・ハケナデ 後指ナデ	(18.0)	2.4	-	-	
第108図8	225D002	調査器	高坪付坪	赤色粒子・白色 粒子	灰白色	灰白色	ナデ	ミコナデ	-	1.8+	(8.4)	-	全体磨耗跡あり
第108図9	225D002	調査器	彦	黒石・白色粒子	灰色	灰色	指ナデ	指ナデ	-	3.3+	-	-	
第108図10	225D002	調査器	長頸蓋	石灰・角閃石・ 白色粒子	灰色	灰色	指ナデ	指ナデ	-	4.9+	-	-	
第108図11	225D002	調査器	長頸蓋	石灰・白色粒子	灰白色	灰色	ミコナデ	ミコナデ	-	9.8+	-	-	
第108図12	225D002	土師器	企鵝型壺	石灰・赤色粒 子・白色粒子	オリーブ黒色	にぶい褐色	ナデ・ハケ後 ナデ	ナデ・ハケ後ナ デ	-	6.2+	-	-	口縁内面に黒炭
第108図13	225D002	土師器	新産土器	石灰・角閃石・ 白色粒子	褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	-	4.1+	-	-	
第108図14	225D002	土師器	新産土器	石灰・角閃石・ 白色粒子・1mm 大の砂粒	にぶい黄褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	3.6+	-	-	
第108図15	225D002	土師器	新産土器	白色粒子・1~ 3mm大の黒炭 が多く含む	褐色	褐色	ナデ	指オサエ	-	3.8+	-	-	
第108図16	225D002	土製品	土師	石灰・赤石・角 閃石・黒色粒 子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ・ハケメ	長5.3	幅1.5	-	-	重10.9g
第111図1	225D003	弥生土器	彦	黒石・角閃石・ 霏母・白色粒子	褐色	褐色	ハケメ後ナデ	ハケメ	(22.0)	25.0	(5.4)	-	下城式土器 新産土器 ハケ目単位(4~7本/cm)
第111図2	225D003	弥生土器	彦	石灰・赤石・角 閃石・霏母・赤 色粒子・白色粒 子	明黄褐色	淡黄褐色	ミコナデ	ミコナデ	-	2.4+	-	-	
第111図3	225D003	弥生土器	彦	石灰・白色粒子	暗黄褐色	灰黄色	ナデ	ナデ・ハケ後ナ デ	-	7.0+	-	-	下城式土器 新産土器 ハケ目単位(4~7本/cm)
第111図4	225D003	弥生土器	彦	石灰・霏母・赤 色粒子・白色粒 子	黒褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケメ	-	6.9+	8.8	-	内面黒炭 ハケ目単位(5本/cm)
第112図1	225D001	弥生土器	彦	石灰・角閃石・ 赤色粒子・白色 粒子	褐色	黄褐色	ミガキ	ミガキ・ハケメ	-	5.9	(3.4)	-	外面に一部黒炭あり
第112図2	225D005	土師器	小形丸蓋	石灰・角閃石・ 霏母・白色粒子	褐色	褐色	ハケ・工具ナ デ	ハケ後ナデ	(15.0)	6.8	-	-	ハケ目単位(3~8本/cm)
第112図3	225D005	土師器	彦	石灰・角閃石・ 白色粒子	褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	4.5+	-	-	
第112図4	225D005	土師器	小壺	石灰・赤色粒 子・白色粒子	褐色	にぶい黄褐色	指オサエ	ナデ・指オサエ	-	1.9+	3.2	-	外面に一部黒炭あり

第11表 大道遺跡群第25次調査 出土遺物観察表

調査番号	遺構名	種類	時期	土質				色				形状・特徴				測定値(mm)				備考
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	口縁	底面	口縁	底面	長さ	幅	高さ	重量	
第117図1	25SX001	瓦葺陶器	仏舎鉢	白色粘土・黒色粘土	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	丸軸	丸軸・丸軸	—	3.6+α	4.1	—	—	—	肥前産
第117図2	25SX001	瓦葺陶器	皿	—	灰白色	褐色	褐色	丸軸	丸軸	—	—	—	—	3.9+α	—	—	—	—	—	肥前産
第117図3	25SX001	瓦葺陶器	円蓋	白色粘土	灰白色	灰白色	灰白色	ナデ	丸軸ナデ	—	—	—	—	2.7+α	(13.4)	—	—	—	—	透かし孔・底面残存 突帯と糸足付
第117図4	25SX001	石製品	磁石	—	灰白色	灰白色	—	—	—	—	—	—	—	長さ62	幅3.6	厚1.1	—	—	—	重28.4
第117図5	25SX001	土製品	土鉢	石灰・黒石・角閃石	灰白色	灰白色	—	ナデ	丸軸	—	—	—	—	長さ84	幅3.6	—	—	—	—	重101.4g、孔径1.1mm
第118図1	25SX005	土製品	杯	黒石	褐色	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラズリ	—	—	—	—	2.15+α	—	—	—	—	—	—
第118図2	25SX005	土製品	杯	石灰・黒石・赤色粘土	褐色	褐色	褐色	ナデ	ナデ	—	—	—	—	2.5+α	—	—	—	—	—	—
第118図3	25SX005	土製品	杯蓋	赤色粘土・石灰・黒石・角閃石	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	1.1+α	—	—	—	—	—	—
第118図4	25SX005	土製品	杯	石灰・黒石・赤色粘土・角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	—	—	—	1.3+α	—	—	—	—	—	—
第118図5	25SX005	瓦葺陶器	高台付坪	石灰・黒石	灰白色	灰白色	灰白色	ナデ・ヨコナデ	ナデ	—	—	—	—	1.4+α	—	—	—	—	—	貼付高台
第120図1	25SX010	土製品	杯	石灰・黒石・赤色粘土・黒色粘土	褐色	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	2.2+α	—	—	—	—	—	—
第120図2	25SX010	土製品	杯	石灰・黒石・黒色粘土・赤色粘土・角閃石	褐色	褐色	褐色	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	2.15+α	—	—	—	—	—	—
第120図3	25SX010	土製品	杯	石灰・黒石	褐色	褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラズリ	—	—	—	—	1.4+α	—	—	—	—	—	—
第120図4	25SX010	土製品	杯蓋	黒石・石灰・黒色粘土	淡褐色	淡褐色	淡褐色	ヨコナデ・ミダキ	ヨコナデ	—	—	—	—	2.4+α	—	—	—	—	—	—
第120図5	25SX010	土製品	杯蓋	石灰・黒石・赤色粘土・黒石	淡褐色	淡褐色	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	1.2+α	—	—	—	—	—	—
第120図6	25SX010	土製品	杯蓋	黒石・石灰・角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	丸軸ナデ	丸軸ナデ	—	—	—	—	1.8+α	—	—	—	—	—	—
第120図7	25SX010	土製品	杯	石灰・石灰	暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	ナデ・ヨコナデ	ナデ	—	—	—	—	1.7+α	—	—	—	—	—	底面欠け残り
第120図8	25SX010	土製品	杯	黒色粘土・黒石	淡褐色	淡褐色	淡褐色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	—	—	—	2.0+α	—	—	—	—	—	—
第120図9	25SX010	土製品	杯	石灰・黒石・角閃石・黒石	褐色	褐色	褐色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	—	—	—	1.05+α	—	—	—	—	—	—
第120図10	25SX010	土製品	高台付坪	石灰・黒石・角閃石	褐色	褐色	褐色	ヨコナデ	ヘラズリ	—	—	—	—	1.45+α	—	—	—	—	—	貼付高台
第120図11	25SX010	土製品	高台付坪	石灰・黒石・赤色粘土	褐色	褐色	褐色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ミダキ	—	—	—	—	1.5+α	—	—	—	—	—	貼付高台
第120図12	25SX010	土製品	高台付坪	石灰・黒石・黒色粘土・赤色粘土	灰白色	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ・ヨコナデ	—	—	—	—	1.1+α	—	—	—	—	—	高台破損
第120図13	25SX010	瓦葺陶器	蓋	石灰・黒石	青灰色	青灰色	青灰色	ナデ	丸軸ナデ	—	—	—	—	1.1+α	—	—	2.9	—	—	宝珠形ツマミ
第120図14	25SX010	瓦葺陶器	杯	白色粘土・赤色粘土	明褐色	明褐色	明褐色	ヨコナデ・ナデのち指サエ	ヘラ切リ	—	—	—	—	1.1+α	—	—	—	—	—	—
第120図15	25SX010	瓦葺陶器	高台付坪	石灰・黒石・赤色粘土	明褐色	明褐色	明褐色	丸軸ナデ	丸軸ナデ	—	—	—	—	1.85+α	—	—	—	—	—	削り出し高台
第120図16	25SX010	瓦葺陶器	蓋	石灰・黒石	灰白色	灰白色	灰白色	ヨコナデ・タタキ	タタキ・ヨコナデ	—	—	—	—	2.6+α	—	—	—	—	—	内面塗て黒色あり
第120図17	25SX010	瓦葺陶器	鉢	石灰・黒石	灰白色	灰白色	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	3.4+α	—	—	—	—	—	中世
第120図18	25SX010	土製品	蓋	角閃石・石灰・白色粘土・赤色粘土	淡褐色	淡褐色	淡褐色	ナデのち指サエ	ヨコナデ	—	—	—	—	4.3+α	—	—	—	—	—	内面破損、突帯貼付
第120図19	25SX010	土製品	壺形半	石灰・角閃石・赤色粘土・黒色粘土・白色粘土	灰白色	灰白色	灰白色	淡黄褐色	ナデのち指サエ	—	—	—	—	3.0+α	—	—	—	—	—	—
第120図20	25SX010	土製品	壺形半	石灰・赤色粘土・黒色粘土	褐色	褐色	褐色	ナデ	指サエ	—	—	—	—	3.1+α	—	—	—	—	—	—
第120図21	25SX010	土製品	壺形半	石灰・黒石	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	2.2+α	—	—	—	—	—	—
第120図22	25SX010	土製品	製塩土器	角閃石・石灰	褐色	褐色	褐色	爪状オサエ・指サエ	ナデのち指サエ	—	—	—	—	5.4+α	—	—	—	—	—	—
第120図23	25SX010	土製品	土鉢	石灰・黒石・角閃石	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	—	指サエ	—	—	—	—	長さ63	幅2.1	—	—	—	—	重21.7g
第121図1	25SX010	土製品	壺	石灰・白色粘土	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデのち指サエ	ナデ・ヨコナデ	—	—	—	—	3.1+α	—	—	—	—	—	—
第121図2	25SX010	石製品	俵(黒鉄)	—	—	暗褐色	暗褐色	—	—	—	—	—	—	長さ3.6	幅1.7	1.7	1.7	—	—	重16.5g

第12表 大田遺跡群第11次調査 出土遺物観察表

図面番号	遺物名	形状		土質	色		断面図		寸法(mm)		備考			
		種類	用途		内面	外面	内面	外面	口径/底径	高さ/厚さ				
第125図1	115D019	白磁	皿	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉(裏面)	(12.5)	2.9	(7.8)	-	青磁磁質	
第125図2	115D019	陶磁器	皿	精製土	明緑灰色	灰白色	施釉	施釉	(12.8)	3.0	a	-	肥前産 内面黒子文 外面黒子文	
第125図3	115D019	陶磁器	紅皿	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉	(5.8)	2.1	2.7	-	肥前産	
第125図4	115D019	陶磁器	小坪	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉	(7.4)	2.8	a	-	外面黒線および山水文	
第125図5	115D019	陶磁	壺	石灰・長石・赤色粘土	黄灰色	黄褐色	面転ナデ・施釉	施釉	(12.2)	3.7	a	-	福岡産	
第125図6	115D019	陶磁	鉢蓋	石灰・長石・雲母	黒色	にぶい黄褐色	施釉	面転赤切ナデ	-	1.8	a	-	福岡産	
第127図1	115K040	土器	坪	長石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	面転ナデ	面転ナデ	-	2.9	-	-	-	
第127図2	115K040	土器	坪	石灰・長石・雲母	にぶい褐色	にぶい褐色	ミガキ・ナデ	ナデ	(12.8)	2.8	a	-	-	
第127図3	115K040	土器	坪	石灰・長石・雲母・赤色粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	面転ナデ	面転ナデ・ヘラ切リ・使手持ちヘラナデ	-	1.5	(7.5)	-	-	
第127図4	115K040	土器	高台付坪	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	褐色	にぶい黄褐色	ココナデ	ココナデ	-	1.8	(8.8)	-	貼付黒台	
第127図5	115K040	土器	坪蓋	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	面転ナデ	面転ナデ	(14.8)	1.7	a	-	-	
第127図6	115K040	陶磁器	高台付坪	石灰・長石	灰色	灰色	面転ナデ	面転ナデ・ナデ	-	1.3	(8.4)	-	貼付黒高台	
第127図7	115K040	陶磁器	壺	石灰・長石	灰白色	灰白色	ココナデ・当て具	ココナデ・タタキ	-	3.8	a	-	-	
第127図8	115K040	土器	製塩土器	石灰・長石・赤色粘土	灰色	灰色	布目底	ヘラ切リ・ナデ	-	3.8	a	-	六通鳥式土器	
第127図9	115K040	土器	製塩土器	石灰・長石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	指ナデ・指縁底	ヘラ切リ・ナデ・指縁底	-	5.5	a	-	六通鳥式土器	
第127図10	115K040	土器	製塩土器	石灰・長石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	指ナデ	ヘラ切リ・ナデ	-	1.8	a	-	六通鳥式土器	
第128図1	115K045	土器	製塩土器	石灰・長石・赤色粘土	褐色	褐色	布目底	指縁底	-	7.6	a	-	六通鳥式土器	
第130図1	表土	野生土器	浅鉢	石灰・長石・雲母	にぶい黄褐色	黒色	ミガキ	ミガキ	-	8.2	a	-	下瀬野式土器	
第130図2	表土	野生土器	壺	石灰・長石・角閃石・赤色粘土	褐色	褐色	ケズリ・後ナデ	ケズリ・後ナデ	-	5.5	(4.8)	-	-	
第130図3	表土	土器	小形丸底壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ・ナデ	ハケ・ミガキ	-	5.0	a	-	-	
第130図4	表土	土器	小形丸底壺	石灰・長石・雲母・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ナデ・後ミガキ	ナデ・ハケ・後ミガキ	-	7.0	a	-	-	
第130図5	表土	土器	小形丸底壺	石灰・長石・角閃石	褐色	褐色	ナデ・後ミガキ	ハケ・後ナデ	(13.4)	8.1	-	-	-	
第130図6	表土	土器	壺	石灰・長石・雲母	褐色	褐色	ナデ・後ミガキ	ハケ・後ナデ	(12.8)	7.7	a	-	-	
第130図7	表土	土器	壺	石灰・長石・雲母・赤色粘土	褐色	明赤褐色	ナデ・ハケ・ハケ・後ミガキ	ナデ・ハケ・ハケ・後ナデ	(15.1)	12.7	a	-	-	
第130図8	表土	土器	壺	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	明赤褐色	明赤褐色	ハケ・後ミガキ・ケズリ	ハケ・後ナデ・ハケ・後ミガキ	(14.8)	9.9	a	-	-	
第130図9	表土	土器	坪	石灰・長石・雲母・角閃石・赤色粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	ミガキ	ミガキ	-	3.8	a	-	-	
第130図10	表土	土器	高台付坪	石灰・長石・角閃石・赤色粘土	黄褐色	にぶい黄褐色	-	ケズリ・ナデ	-	2.8	(8.8)	-	内面黒線の為調査不詳	
第130図11	表土	黒色土器	碗	石灰・長石・角閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	黒色	ヘラミガキ	面転ナデ・面転ヘラミガキ	-	2.5	(8.8)	-	-	
第130図12	表土	陶磁器	高台付坪	長石	灰白色	灰白色	ナデ・面転ナデ	面転ナデ	-	3.5	(10.2)	-	-	
第130図13	表土	陶磁器	内面碗	石灰・長石・雲母	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	-	4.0	a	-	-	透かしあり
第130図14	表土	土器	壺	石灰・長石・角閃石・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	(25.2)	8.2	a	-	-	入付付着
第130図15	表土	瓦	平瓦	石灰・長石・角閃石・赤色粘土・黒色粘土	にぶい褐色	黄褐色	布目底	タタキ底	長 8.5 ± a 幅 6.0 ± a	1.7	-	-	-	-
第131図16	表土	瓦質土器	瓦礫	石灰・長石	灰色	灰色	ミガキ	面転ナデ	(15.8)	4.0	a	-	-	-
第131図17	表土	青磁	皿	精製土	灰白色	灰白色	オリーブ灰色	施釉	(12.0)	2.0	a	-	-	輪文底
第131図18	表土	緑銅	大壺	石灰・長石・雲母・赤色粘土	灰褐色	灰白色	ナデ	ナデ	-	8.1	a	-	-	-
第131図19	表土	陶磁器	小壺	精製土	灰白色	明緑灰色	面転ナデ・施釉	施釉	3.1	3.8	a	-	-	肥前産

調査番号	産物名	原産地		産土	色 質		断面形状		口縁/底	器高/口径	底径/口径	最大径/口径	備考
		種類	産地		内面	外面	内面	外面					
第142図19	245E008 土器	土器	横白口産	石灰・長石・白色粒子	赤褐色～黒褐色	赤褐色	ヨコナデ・ナデ	縞線状文・ナデ・ハクメナデ	19.5	40.3±a	-	-	家型式土器 外面保存 内面黒装
第142図20	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ハクメナデ・ミギキ・ハクメナデ	ハクメナデ	(15.2)	5.6±a	-	-	
第142図21	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・赤褐色・白色粒子	褐色	暗褐色	ハクメナデ・横方ナデ	横方ナデ	(16.2)	5.1±a	-	-	口縁部注線状
第142図22	245E008 土器	土器	横	石灰・長石・角閃石・赤褐色・白色粒子	褐色	褐色	ナデ	細い工具ナデ	-	9.5±a	-	-	外面保存
第142図23	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	褐色	暗褐色	横方用ハクメナデ・横方ナデ	横方用ハクメナデ・横方ナデ	(16.4)	9.5±a	-	-	口縁部2/3のみ 外面全体土器付着
第142図24	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	赤褐色～褐色	赤褐色	ナデ	ヨコナデ・ハクメナデ	(15.0)	10.3±a	-	-	外面保存
第142図25	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・角閃石・赤褐色・白色粒子	褐色	にぶい褐色	ハクメナデ・ハクメナデ	ハクメナデ・ハクメナデ	(17.0)	9.7±a	-	-	外面保存
第142図26	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・角閃石・赤褐色・白色粒子	赤褐色～褐色	赤褐色	ヨコナデ・横方ナデ・ハクメナデ	ヨコナデ・横方ナデ・ハクメナデ	(19.0)	10.4±a	-	-	内外黒装・ナデ付着
第142図27	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ハクメナデ・ハクメナデ	ヨコナデ・ハクメナデ	(16.0)	6.7±a	-	-	
第142図28	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	褐色～にぶい褐色	暗褐色	ハクメナデ・ハクメナデ	ヨコナデ・ハクメナデ	16.1	20.7	-	-	※G10M-2 内外黒装・ナデ付着
第142図29	245E008 土器	土器	横	石灰・長石・角閃石・白色粒子	赤褐色～黒褐色	赤褐色	ハクメナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	(13.0)	16.3	-	-	外面保存
第142図30	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	赤褐色～黒褐色	赤褐色	ヨコナデ・ハクメナデ	ヨコナデ・ハクメナデ	(15.5)	25.9	-	-	外面保存 内外黒装・ナデ付着 ※G10M-4
第142図31	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	黄褐色～黒褐色	黄褐色	ハクメナデ・ナデ	ナデ・ナデ	17.5	27.1	-	-	外面保存 内外黒装
第142図32	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	赤褐色～黒褐色	赤褐色	ハクメナデ・ナデ	ヨコナデ・ハクメナデ	13.2	14.9	-	-	外面保存 内面ナデ付着
第142図33	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・角閃石・赤褐色・白色粒子	褐色	にぶい褐色	ヨコナデ・ハクメナデ	ヨコナデ・ハクメナデ	(16.4)	10.0±a	-	-	外面保存 外面保存 内面ナデ付着
第142図34	245E008 土器	土器	横	石灰・長石・角閃石・白色粒子	黄褐色～にぶい黄褐色	黄褐色	ナデ・ナデ	ナデ	(20.6)	13.6±a	-	-	外面保存 外面保存
第142図35	245E008 土器	土器	横	石灰・長石・白色粒子	灰黄褐色	黄褐色	ナデ・ナデ	ハクメナデ・ナデ	16.0	26.3	-	-	外面保存 外面保存
第142図36	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	黄褐色～黒褐色	褐色～黒褐色	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	15.0	30.4	-	-	外面保存 外面保存
第142図37	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	褐色～黒褐色	褐色～黒褐色	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	15.4	19.9	-	-	
第142図38	245E008 土器	土器	横	石灰・白色粒子	黒褐色	黒褐色	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	14.6	21.1	-	-	内外黒装に黒多量に付着 ※G10M-1
第142図39	245E008 土器	土器	横	石灰・赤褐色・白色粒子	黒褐色	黒褐色	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	(20.5)	32.1	-	-	外面黒装
第142図40	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	-	5.9±a	-	-	
第142図41	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	56.4	63.0	3.2	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図42	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図43	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図44	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図45	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図46	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図47	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図48	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図49	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図50	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図51	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図52	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量
第142図53	245E008 土器	土器	横	石灰・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	55.2	45.6	56.4	-	ヤリガシナによる加工多量

調査番号	遺構名	土質		土質		土質		土質		調査/層	調査/層	調査/層	備考
		種類	状態	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
第151図4	245E009	土器類	変	石灰・黄白・赤色 粘土・白色粘土	明褐色	明褐色	ナデ・ナデ ズリ	ハケム・ナデ	ハケム・ナデ	(16.2)	3.7	-	-
第151図5	245E009 明褐色土	土器類	変	長石・角閃石・ 白色粘土	にぶい黄褐色	暗褐色	3コナデ・ミガ キ・ナデ・ナ デ・ハケム	3コナデ・ハケム	3コナデ・ハケム	(17.4)	16.8	-	-
第151図6	245E009	土器類	変	石灰・長石・角 閃石・黄白・赤 色粘土・白色粘 土	にぶい黄褐色 ～にぶい褐色	にぶい黄褐色 ～にぶい褐色	3コナデ・ク ズリ・ナデ	3コナデ・ハケム	3コナデ・ハケム	(18.0)	8.3	-	-
第151図7	245E009	木製品	種類不明	-	-	-	-	-	-	長10.8	幅3.2	-	-
第152図1	245E010	土器類	小形器台	長石・角閃石・ 赤色粘土・白色 粘土	暗赤褐色	暗赤褐色	3コナデ・ミガ キ・ナデ・ナ デ	3コナデ・ミガ キ	3コナデ・ミガ キ	7.6	4.5	-	-
第152図2	245E010 2 層	土器類	小形器台	白色粘土	黒褐色 ～褐色	黒褐色 ～赤褐色 ～暗赤褐色	ナデ・ミガキ・ ハケム・ナデ・ミ ガキ	ナデ・ミガキ・ ハケム・ナデ・ミ ガキ	ナデ・ミガキ・ ハケム・ナデ・ミ ガキ	7.6	7.6	10.3	-
第152図3	245E010 2 層	土器類	小形丸底蓋	長石・角閃石・ 白色粘土	赤褐色	赤褐色	3コナデ・ナ デ	ハケム・ミガキ・ ナデ	ハケム・ミガキ・ ナデ	(12.2)	8.0	-	-
第152図4	245E010	土器類	小形丸底蓋	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色 ～暗赤褐色	褐色 ～暗赤褐色	3コナデ	ハケム・ミガキ・ ナデ	ハケム・ミガキ・ ナデ	-	5.1	-	-
第152図5	245E010 1 層	土器類	変	石灰・長石・角 閃石・白色粘土	にぶい褐色	褐色 ～褐色	ナデ・工員ナ デ	ナデ	ナデ	(21.2)	6.7	-	-
第152図6	245E010 最下層	土器類	変	角閃石・赤色粘 土・白色粘土・ 砂鉄	黒色	黒色	ハケム・ナデ・ ハケム・ナデ	ナデ・ハケム	ナデ・ハケム	(15.8)	6.2	-	-
第152図7	245E010 1 層	土器類	変	長石・角閃石・ 白色粘土	褐色	暗褐色 ～暗赤褐色	ハケム・ナデ	ハケム・ナデ	ハケム・ナデ	(17.2)	23.4	-	-
第152図8	245E010 2 層	土器類	変	長石・角閃石・ 白色粘土	黒褐色 ～褐色	赤褐色 ～暗褐色	ハケム・ミガ キ	3コナデ・ハケム	3コナデ・ハケム	16.1	16.4	-	-
第152図9	245E010 1 層	土器類	変	長石・角閃石・ 白色粘土	黄褐色	明黄褐色 ～黄褐色	ハケム・ミガ キ	ハケム	ハケム	14.6	21.0	-	-
第154図10	245E010 2 層	土器類	変	石灰・長石・角 閃石・白色粘土	褐色 ～褐色	明褐色 ～褐色	ハケム・ナデ	3コナデ・ハケム・ ナデ	3コナデ・ハケム・ ナデ	14.4	20.6	-	-
第154図11	245E010 2 層・最下層	土器類	変	角閃石・赤色粘 土・白色粘土	暗赤褐色 ～暗褐色	暗赤褐色 ～暗褐色	ハケム・ミガ キ・ナデ・ミガ キ	ハケム・ミガ キ・ナデ・ミガ キ	ハケム・ミガ キ・ナデ・ミガ キ	(15.3)	27.7	-	-
第154図12	245E010 2 層	土器類	変	長石・角閃石・ 白色粘土	明黄褐色 ～黄褐色	褐色	3コナデ・ミ ガキ・ハケム・ ナデ	ナデ・ハケム・ ミガキ	ナデ・ハケム・ ミガキ	13.5	21.1	-	-
第156図1	245E012	土器類	ミニチュア土	石灰・角閃石・ 白色粘土	褐色	褐色	ナデ	ナデ・ミガキ・ ハケム	ナデ・ミガキ・ ハケム	3.0	5.8	-	-
第156図2	245E012	土器類	高坪	石灰・赤色粘 土・白色粘土	褐色	褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	ナデ	-	8.7	-	-
第156図3	245E012	土器類	高坪	石灰・角閃石・ 赤色粘土・白色 粘土	褐色	褐色	3コナデ・ク ズリ	ミガキ・ハケム・ 工具類	ミガキ・ハケム・ 工具類	-	8.3	(13.8)	-
第156図4	245E012	土器類	変	石灰・赤色粘 土・白色粘土	暗赤褐色 ～赤褐色	暗赤褐色 ～赤褐色	ハケム・ミガ キ	3コナデ・ハケム	3コナデ・ハケム	(18.8)	13.2	-	-
第156図5	245E012 下層	土器類	変	長石・角閃石・ 白色粘土	赤褐色 ～黒褐色	赤褐色 ～黒褐色	ナデ・ミガ キ・ナデ・ミガ キ	ハケム・ミガ キ・ナデ・ミガ キ	ハケム・ミガ キ・ナデ・ミガ キ	-	12.0	-	-
第156図6	245E012	木製品	種類不明	-	-	-	-	-	-	長17.0	幅6.2	-	-
第156図7	245E012	石製品	磨石	-	-	-	-	-	-	長10.9	幅7.8	厚2.7	-
第156図8	245E012	石製品	磨石	-	-	-	-	-	-	長10.8	幅6.8	厚3.3	-
第157図1	245D015	土器類	坪	石灰・角閃石・ 赤色粘土・白色 粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	ナデ	-	1.8	-	-
第157図2	245D015	土器類	器台	石灰・長石・角 閃石・黄白・赤 色粘土	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	ナデ	-	3.7	-	-
第157図3	245D015	灰蓋器	変	赤色粘土・白色 粘土	灰色	灰色	炭で裏底	平行タタキ	炭で裏底	-	4.3	-	-
第157図4	245D015	灰蓋器	変	石灰・白色粘土	灰色	灰色	炭で裏底	平行タタキ	炭で裏底	-	7.8	-	-

第14表 大道遺跡群第10次調査 縄文土器遺物観察表

調査番号	遺構名	土質		土質		土質		土質		調査/層	調査/層	調査/層	備考
		種類	状態	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
第17図1	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・白色粘 土・褐色粘土	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	3コナデ	3コナデ	-	3.3	-	-
第17図2	105D010	縄文土器	深鉢 口縁部	長石・角閃石・ 黄白・白色粘 土・赤色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ミガ キ	ナデ・ミガ キ	ナデ・ミガ キ	-	4.7	-	-
第17図3	105D010	縄文土器	浅鉢 口縁部	石灰・白色粘土	にぶい褐色	暗褐色	工員ナデ・ 割目	ナデ・割目	ナデ・割目	-	3.9	-	-
第17図4	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	長石・白色粘土	褐色	褐色	割目・ナデ	割目	割目	-	5.2	-	-

図説番号	遺構名	種類	部位	色		断面観察		留意			備考	
				内面	外面	内面	外面	口径/底高/幅/厚	底文/厚	底文/量		
第37図5	1050010	縄文土器	鉢 口縁部	角閃石・黒石・赤色粒子・褐色粒子・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	条痕状ナズ	ナズ	—	4.4+α	—	内面条痕
第37図6	1050038	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・黒石・石英・白色粒子	灰白色	浅黄褐色	ナズ	ナズ・布目痕	—	4.5+α	—	口縁部に棒状工具による沈線2条
第37図7	1050010	縄文土器	浅鉢 口縁部	黒石・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	指痕・ナズ	ナズ・条痕文	—	2.2+α	—	—
第37図8	1050010	縄文土器	深鉢 口縁部	黒石・黒色粒子・褐色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	褐色	工具ナズ・指ナズ	工具ナズ・指ナズ	—	4.8+α	—	口縁部折り目付
第37図9	1050028	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・褐色粒子・白色粒子	灰白色	灰白色	条痕状ナズ	条痕状ナズ	—	4.5+α	—	—
第37図10	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子	灰白色	灰白色	条痕状ナズ	3コナズ	—	4.2+α	—	安帯貼付、外面沈線
第37図11	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・黒石・赤色粒子・褐色粒子・白色粒子	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	3コナズ	3コナズ	—	2.5+α	—	口縁上方に圧痕
第37図12	黒褐色土層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	3コナズ	3コナズ	—	1.9+α	—	口縁部折り目付
第37図13	1050010	縄文土器	鉢 口縁部	角閃石・黒石・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	指ナズ・工具ナズ	工具条痕・ナズ	—	3.9+α	—	外面に工具による条痕・褐色文あり
第37図14	包含層	縄文土器	鉢 口縁部	角閃石・黒石・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	工具ナズ	工具ナズ	—	4.2+α	—	厚み1.7cm確認
第37図15	1050038 1050010 側溝	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・白色粒子	にぶい褐色	灰褐色	ナズ	ナズ	—	2.3+α	—	後部凹部 口縁部
第37図16	1050010	縄文土器	浅鉢 口縁部	角閃石・黒石	灰黄色	灰黄色	工具ナズ・爪状圧痕	3コナズ	—	2.3+α	—	口縁内面に爪状圧痕
第37図17	1050038	縄文土器	深鉢 胴部	角閃石・赤色粒子・褐色粒子	灰白色	灰白色	条痕状ナズ	ナズ・押点文・条痕状ナズ	—	5.8+α	—	外面沈線2条
第37図18	1050038 磨光シムト	縄文土器	深鉢 胴部	角閃石・黒石・赤色粒子	灰白色	灰白色	指ナズ・工具ナズ	ナズ・押点文	—	6.0+α	—	小池面上層式土器外面に沈線・棒状工具による加工痕あり
第37図19	1050010 磨光土層	縄文土器	深鉢 胴部	角閃石・黒石・褐色粒子・白色粒子	灰黄色	黄灰色	工具ナズ・ナズ	3コナズ	—	6.1+α	—	内外面に条痕あり
第37図20	1050010	縄文土器	深鉢 胴部	角閃石・黒石・褐色粒子	にぶい黄褐色	灰白色	ナズ	ナズ	—	3.5+α	—	内外面に条痕あり
第38図21	1050038 2層	縄文土器	鉢 破片	角閃石・黒石・褐色粒子・白色粒子	灰白色	浅褐色	ナズ	ナズ・押点文	—	5.0+α	—	外面に沈線2条・押点文あり
第38図22	1050010	縄文土器	深鉢 胴部	黒色粒子・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	浅黄褐色	ナズ・指痕ナズ	工具ナズ	—	5.2+α	—	内面に爪状圧痕
第38図23	包含層	縄文土器	深鉢 胴部	石英・赤色粒子・白色粒子	灰褐色	褐色	ナズ・指痕ナズ	工具ナズ	—	6.4+α	—	外面に条痕あり
第38図24	1050010	縄文土器	深鉢 胴部	角閃石・黒石・褐色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケム後ナズ	ハケム後ナズ	—	10.5+α	—	—
第38図25	1050010	縄文土器	深鉢 胴部	角閃石・黒石・白色粒子	明褐色	明褐色	ナズ	ナズ	—	8.3+α	—	内外面に条痕あり
第38図26	1050042	縄文土器	深鉢 破片	角閃石・赤色粒子・褐色粒子・白色粒子	灰褐色	にぶい褐色	条痕状ナズ	条痕状ナズ	—	6.0+α	—	—
第38図27	1050038 最上層	縄文土器	鉢 胴部	角閃石・白色粒子	にぶい褐色	灰褐色	ナズ	3コナズ・条痕	—	2.7+α	—	—
第38図28	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・褐色粒子・白色粒子	浅黄褐色	浅黄褐色	ナズ	ナズ	—	2.8+α	—	口縁部付・外面に条痕文あり
第38図29	1050010	縄文土器	浅鉢 口縁部	角閃石・黒石・石英・白色粒子	褐色	褐色	ナズ	ハケム後ナズ	—	4.65+α	—	外面に黒痕
第38図30	1050010 灰褐色土	縄文土器	鉢 口縁部	金雲母・角閃石・白色粒子	灰色	灰色	ヒガキ	ナズ・ヒガキ	—	4.1+α	—	研ぎ残
第38図31	1050010	縄文土器	深鉢 底部	角閃石・黒石・褐色粒子・白色粒子	にぶい褐色	褐色	ナズ	ヒガキ・指ナズ・儀ナズ	—	2.1+α (8.0)	—	反転後文・底面ヒガキ・網状痕

第15表 大道遺跡群第14次調査 縄文土器遺物観察表

調査番号	遺構名	部 属		出土	色 調		断面観察		口径/底径/厚	最大径/量	備考	
		種類	特徴		内面	外面	内面	外面				
第39図1	145X306	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・黒石・角閃石・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ・磨消痕文	-	3.7+α	-	沈線2条あり
第39図2	145X308 淡黄褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・角閃石・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ナズ	磨消痕文・ナズ	-	4.8+α	-	北久根式土器 沈線1条あり
第39図3	145X308 淡黄褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 胴部	石英・黒石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ・磨消痕文	-	3.2+α	-	沈線2条あり
第39図4	145X306	縄文土器	深鉢 胴部	石英・黒石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	黒褐色	にぶい黄褐色	ヒガキ	磨消痕文・ナズ	-	3.6+α	-	沈線2条あり
第39図5	145X306 灰褐色粘 土層	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	磨消痕文・ナズ	-	5.8+α	-	沈線1条あり

図録番号	透視名	断面		地土	色				断面距離		深さ (cm)		備考
		種類	特徴		内面	外面	内面	外面	口縁/底	口縁/底	最大値/最小値	最大値/最小値	
第31図8	表土	縦文土層	深鉢 口縁部	灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ・磨滅縦文	-	2.7-a	-	-	内面沈積1条 外面沈積2条
第31図7	145X306	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ミガキ	-	3.1-a	-	-	
第31図6	145X306 波長褐色 砂質土	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	浅黄褐色	ナズ	ナズ	-	4.6-a	-	-	沈積1条あり
第31図5	145X306	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ・貝殻状 腐蝕	ナズ	-	5.0-a	-	-	
第31図10	145X306 波長褐色 砂質土	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	黄褐色	にぶい黄褐色	薄オササキ ナズナズ	条痕	-	3.8-a	-	-	
第31図11	145X306 波長褐色 砂質土	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	灰黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ・条痕	-	4.5-a	-	-	
第31図12	145X306 波長褐色 砂質土	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	条痕後ナズ・ナズ	-	6.0-a	-	-	全体的に磨滅
第31図13	145X306	縦文土層	深鉢 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	条痕	ヨコナズ	-	4.6-a	-	-	
第31図14	145X306	縦文土層	深鉢 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	明黄褐色	明黄褐色	条痕	条痕	-	7.2-a	-	-	
第32図15	包含層	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	条痕	条痕	-	3.3-a	-	-	
第32図16	145X306	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	条痕後ナズ	-	10.6-a	-	-	
第32図17	145X306	縦文土層	浅鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・白色粘土	黒褐色	にぶい黄褐色	割目・条痕	割目・条痕	-	4.3-a	-	-	
第32図18	145X310	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	浅黄褐色	不明	不明	-	5.7-a	-	-	磨滅が激しい
第32図19	145X306 波長褐色 砂	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ	-	3.7-a	-	-	
第32図20	145X306	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・白色粘土	浅黄褐色	にぶい黄褐色	条痕後ナズ	条痕か?	-	2.8-a	-	-	
第32図21	145X306 波長褐色 砂質土	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ナズ・条痕後ナズ	-	3.7-a	-	-	
第32図22	包含層	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ヨコナズ	丁寧なナズ	-	3.5-a	-	-	
第32図23	145X306	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ	-	3.8-a	-	-	
第32図24	表土	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ヨコナズ	条痕	-	4.5-a	-	-	
第32図25	145X306 包含層	縦文土層	深鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	貝殻状条痕	貝殻状条痕	-	10.3-a	-	-	外面入り付層
第32図26	145X306 波長褐色 砂	縦文土層	鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ	-	3.4-a	-	-	沈積3条?
第32図27	包含層	縦文土層	鉢 口縁部	角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ	-	2.1-a	-	-	沈積2条あり
第32図28	145X306	縦文土層	鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	黄灰色	浅黄褐色	ミガキ	ミガキ	-	4.0-a	-	-	
第32図29	145X306	縦文土層	鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	黒褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ	-	4.8-a	-	-	沈積1条あり
第33図30	145X306	縦文土層	不明 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	条痕	-	4.7-a	-	-	
第33図31	145X306 波長褐色 含炭土	縦文土層	不明 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	条痕	-	4.0-a	-	-	一部条痕
第33図32	145X306	縦文土層	不明 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	明黄褐色	にぶい黄褐色	条痕後ナズ	条痕後ナズ	-	5.2-a	-	-	
第33図33	145X306	縦文土層	不明 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ	-	4.6-a	-	-	接合条
第33図34	145X306	縦文土層	不明 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	灰褐色	明褐色	ミガキ	条痕	-	5.7-a	-	-	
第33図35	145X306 波長褐色 砂質土	縦文土層	不明 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	褐色	条痕後ナズ	条痕後ナズ	-	5.2-a	-	-	
第33図36	145X306 波長褐色 砂	縦文土層	不明 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	条痕後ナズ	条痕後ナズ	-	6.4-a	-	-	
第33図37	145X306 層状層	縦文土層	不明 胴部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	明黄褐色	にぶい黄褐色	条痕	条痕	-	6.8-a	-	-	
第33図38	145X306	縦文土層	鉢 口縁部	石炭・灰石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	条痕後ナズ	条痕後ナズ	-	4.1-a	-	-	

図録番号	産地名	産 地		胎土	色 質		断面調査		造 査 (mm)		備考	
		種類	部位		内面	外面	内面	外面	口縁/底	底径/口		
第33図38	1453005	縄文土器	深鉢 胴部	石黒・長石・角閃石・白色粘土	にぶい黄褐色	灰黄褐色	条痕淡ナズ	条痕	-	4.4 $\times$ a	-	-
第33図40	1453005	縄文土器	深鉢 胴部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	条痕淡ナズ	-	4.1 $\times$ a	-	-
第33図41	1453005	縄文土器	深鉢 胴部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	灰褐色	褐色	ナズ	ヘラケズリ	-	5.0 $\times$ a	-	-
第33図42	1453005	縄文土器	深鉢 胴部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	淡黄褐色	淡黄褐色	条痕淡ナズ	条痕淡ナズ	-	6.0 $\times$ a	-	-
第34図43	1453006	縄文土器	深鉢 胴部	長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	黒色	赤褐色	ナズ	条痕淡ヘラケズリ	-	7.7 $\times$ a	-	阿波系土器 内面黒家アタ
第34図44	1453006	縄文土器	深鉢 胴部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色～褐色	条痕淡ナズ	条痕淡ナズ	-	8.2 $\times$ a	-	-
第34図45	1453006	縄文土器	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ	-	4.1 $\times$ a	(4.6)	-
第34図46	1453006	縄文土器	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	暗灰黄色	明黄褐色	ナズ	ナズ	-	2.6 $\times$ a	(7.6)	-
第34図47	1453006 深灰褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	淡黄色～灰褐色	褐色	条痕淡ナズ	条痕ナズ	-	2.9 $\times$ a	(7.2)	-
第34図48	産土	縄文土器	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	明褐色	明赤褐色	ナズ	微細正ナズ	-	4.6 $\times$ a	(8.6)	-
第34図49	1453006	縄文土器	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	褐色	ナズ	微細正淡ナズ	-	4.8 $\times$ a	(8.6)	-
第34図50	1453007 黒灰色粘 土	縄文土器	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	淡黄色～褐色	ナズ	ナズ	-	4.0 $\times$ a	-	磨耗激しい
第34図51	1453006	縄文土器	深鉢 底部	石黒・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	明黄褐色	ナズ	ナズ	-	2.5 $\times$ a	(12.2)	-
第34図52	1453006	縄文土器	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	ナズ	-	2.8 $\times$ a	-	-
第34図53	トレンチ	縄文土器	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色～明黄褐色	褐色	工具ナズ	ナズ	-	4.9 $\times$ a	(15.2)	-
第35図54	1453006 (早期)	弥生土器	浅鉢 口縁部	石黒・長石・角閃石・黄緑・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	条痕淡ナズ	条痕淡ナズ	-	3.1 $\times$ a	-	外周沈線(条あり)
第35図55	1453005 (早期)	弥生土器	浅鉢 口縁部	石黒・長石・角閃石・黄緑・赤色粘土・白色粘土	灰黄色	にぶい黄褐色	工具ナズ	ナズ	-	3.7 $\times$ a	-	刻目突帯
第35図56	包合層	弥生土器 (早期)	深鉢 口縁部	長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	条痕淡ナズ	条痕淡ナズ	-	3.2 $\times$ a	-	-
第35図57	1453006 (早期)	弥生土器	浅鉢 胴部	石黒・長石・角閃石・黄緑・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ミガキ	-	3.1 $\times$ a	-	-
第35図58	1453006 (早期)	弥生土器	浅鉢 胴部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	灰黄褐色	黒褐色	ミガキ	ミガキ	-	3.3 $\times$ a	-	刻目突帯
第35図59	1453010 (早期)	弥生土器	唐 皿部	石黒・長石・角閃石・白色粘土	明黄褐色	灰黄色	ナズ	ナズ	-	5.2 $\times$ a	-	-
第35図60	1453006 (早期)	弥生土器	浅鉢 胴部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ミガキ	ミガキ	-	3.3 $\times$ a	-	外周沈線(条あり)
第35図61	1453006 深灰褐色 砂	弥生土器 (早期)	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	接合痕	ナズ	-	1.7 $\times$ a	-	-
第35図62	1453010 黒褐色粘 土	弥生土器 (早期)	深鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	黒褐色	ナズ	ナズ	-	2.4 $\times$ a	-	-
第35図63	トレンチ	不明	浅鉢 底部	石黒・長石・角閃石・白色粘土	暗褐色	明黄褐色	ナズ?	ナズ?	-	2.1 $\times$ a	-	内面黒家アタ 内周黒とも磨滅により不明
第35図64	1453006 深灰褐色 砂質土	弥生土器 (早期)	浅鉢 底部	石黒・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナズ	微ナサエ	-	1.8 $\times$ a	-	-
第35図65	1453006 (早期)	弥生土器	浅鉢 底部	石黒・長石・黄緑・赤色粘土・白色粘土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色～褐色	ナズ	ナズ	-	2.1 $\times$ a	5.2	-

第16表 大道遺跡群第15次調査 縄文土器遺物観察表

調査番号	遺物名	形 態		胎土	色 質		表面装飾		口縁/底	測 量 (cm)			備考
		口縁部	胴部		内面	外面	内面	外面		口縁高/底	底径/口縁径	最大径/高	
第25図1	155K001 黒灰色砂質土	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・ 長石・白色粒子	黒褐色	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	4.2・a	-	-	黒木式土器 口縁部に穿孔4ヶ所
第25図2	155X037	縄文土器	深鉢 口縁部	雲母・角閃石・ 石英・長石・白 色粒子	にぶい赤褐色	褐色	ヨコナデ	ナデ後とびき・割 目	-	2.3・a	-	-	津置土器式土器 口唇部縁部あり
第25図3	包含層	縄文土器	浅鉢 口縁部	角閃石・石英・ 長石・白色粒子	褐色	暗赤灰色	指オサエ後 ナデ	爪状の割目	-	2.6・a	-	-	船元式土器 外面に爪状文様あり
第25図4	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・ 長石・白色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ後 ナデ	指オサエ後ナデ	-	7.2・a	-	-	
第25図5	155D012	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角 閃石・褐色粒 子・赤色粒子 白色粒子	淡黄褐色	にぶい黄褐色	糸痕後ナデ	糸痕後ナデ	-	7.0・a	-	-	内面磨耗著しい
第25図6	検出時	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・ 長石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	糸痕後ナデ	糸痕後ナデ	-	4.9・a	-	-	
第25図7	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・ 長石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	糸痕後ナデ	糸痕後ナデ	-	4.8・a	-	-	
第25図8	155D012	縄文土器	浅鉢 口縁部	石英・長石・白 色粒子	にぶい褐色	褐色	糸痕後ナデ	糸痕後ナデ	-	4.5・a	-	-	外面斜め方向に磨削(4条)
第25図9	155D008 淡黄灰色 砂質土	縄文土器	鉢	角閃石・石英・ 長石・褐色粒 子・赤色粒子 白色粒子	褐灰色	にぶい褐色	糸痕後ナデ	糸痕後ナデ	-	2.7・a	-	-	
第25図10	検出時	縄文土器	深鉢 鉢部	角閃石・石英・ 長石・褐色粒 子・褐色粒子 白色粒子	灰白色	灰褐灰色	糸痕後ナデ	ナデ	-	7.7・a	-	-	外面糸痕
第25図11	155K001	縄文土器	深鉢 底部	角閃石・石英・ 長石・褐色粒 子・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	高台貼付付後 ナデ	-	3.5・a	-	-	高台貼付
第25図12	155K001 黒灰色砂 質土	縄文土器	深鉢 底部	角閃石・石英・ 長石・褐色粒 子・白色粒子	褐灰色	灰黄褐色	糸痕・ナデ	糸痕・ナデ	-	5.3・a	-	-	小池原上層式 深鉢の底部
第25図13	155K001	石製品	石斧	凝灰岩	-	-	-	-	8.7 (最大 径)	9.2 (最大 幅)	-	-	重150g

第4章 自然科学分析

第1節 大分市大道遺跡群第15次調査出土土器の年代学的調査

歴博年代研究グループ

藤尾慎一郎・坂本稔

I 調査の概要

2007年3月27日、大分市教育委員会駅南事務所において、大分市大道遺跡群第15次調査において出土した古墳前期初頭（布留1、1～2式併行段階）の土器の付着炭化物を採取し、前処理後、AMS-炭素14年代測定をおこなった。その結果、計3点の炭素14年代値を得た。本稿では得られた測定結果について報告する。

調査の結果、布留系土器や在地の土器は炭素14年代値で1800、1880、1940（いずれも±30年）であった。Ⅱは、土器の考古学的な特徴について記す（藤尾）。Ⅲは前処理について記す（坂本）。Ⅳで測定結果の報告と考察をおこなった（藤尾・坂本）。

なお、測定試料の調製は、歴博年代研究グループの坂本稔がおこなった。

Ⅱ 測定した土器

1 土器の概要

土器は15SE004土坑から出土し、布留系甕、在地系甕、甕の底部破片に付着した炭化物を測定した。

2 試料の採取状況

土器（図1）の考古学的な特徴は第3章第1節に詳細な報告があるので参照してもらうとして、年代測定に必要な点について記述しておく。

①（第17図12）は布留系甕で布留1式に比定されている。底部外面や胴部最大径の外面から炭化物（OIFJ-101）を採取した。

②（第18図18）は在地系甕で布留1～2式に比定されている。胴部外面から大量の炭化物（OIFJ-102）を採取した。

③（第18図19）は甕の底部破片で布留1～2式に比定されている。外面から大量の炭化物（OIFJ-103）を採取した。

Ⅲ 試料前処理

各試料は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室で測定試料への調製を行った。まず、年代測定試料に対する一般的な処理法である酸・アルカリ・酸処理（AAA処理）を施した。乾燥、秤量を行い、元素分析計を接続した真空装置を用いて、試料中の炭素を二酸化炭素として抽出し精製した。精製された二酸化炭素は装置内で水素と混合し、還元反応によりグラファイト炭素に転換した¹⁾。同様の操作で、炭素14を含まないブランク試料（添川理化学炭素：No. 75795A）2点、炭素14の標準試料（米国標準技術局シェウ酸：SRM 4990C、通称NIST OxII）5点のグラファイト炭素を調製した。グラファイト炭素はAMS（Accelerator Mass Spectrometry：加速器質量分析法）測定に供するため、専用のホルダに充填した。AMS測定は、（株）加速器質量分析研究所に依頼した。

なお、AAA処理済試料の一部を分取し、昭光通商（株）に炭素・窒素分析を依頼した。

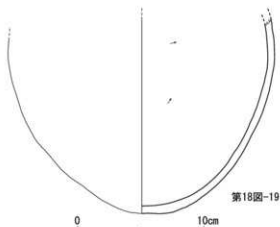
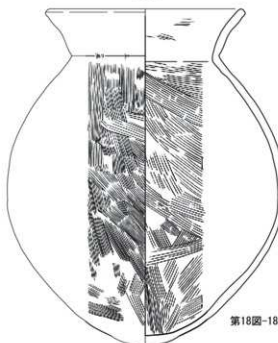
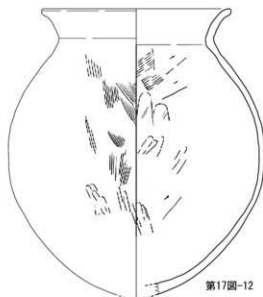


図1 大道遺跡群第15次調査
出土測定した土器実測図(1/3)

IV 測定結果

1. 炭素 14 年代と較正年代

測定試料一覧と結果を表1に示す。OIFJ-103 (re) は上記Ⅲで二酸化炭素の精製をやり直したことを示し、試料自体は OIFJ-103 と同一である。測定機関番号にある IAAA は(株)加速器分析研究所の AMS 装置で測定されたことをあらわす。炭素 14 年代 (^{14}C BP: Before Present) は、同位体分別を補正し、 ^{14}C の半減期を 5,568 年と仮定して計算された経過年数を、西暦 1950 年からさかのぼった値である。報告値は下一桁を丸めることが慣習的に行われている。

較正曲線 IntCal04²⁾に基づき、較正プログラム RHC³⁾を適用して導いた各試料の較正年代の確率密度分布を図2に示す。較正年代は確率密度が2 σ (95.4%) になるよう年代幅が調整されている。中央値はその両側で確率密度が等しい年代を意味し、最尤値は最も高い確率を示す年代を意味する。いずれも統計学上の値であり、試料を代表する年代とは限らない。

2. 炭素・窒素分析

炭素・窒素分析の結果を表2に示す。OIFJ-103 は試料量が十分でなく $\delta^{13}\text{C}$ 値のみの測定である。いずれの試料も $\delta^{13}\text{C}$ 値が -26‰ を上回ることなく、また炭素・窒素比も 20 を超えるため、海洋動物の影響は認められないと考えられる。 $\delta^{15}\text{N}$ 値は土器外面に付着する炭化物として一般的な値である。

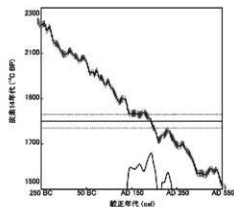
3. 考察

IntCal04⁴⁾に基づいて較正した年代(表1)で、OIFJ-103 は明らかに古い値がでている。炭素・窒素分析の結果からは海洋リザーバー効果の影響は認められず、理由は不明である。

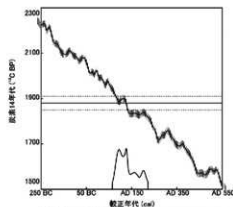
OIFJ-101 と OIFJ-102 に相当する炭素 14 年代では、IntCal04 と日本産樹木による較正年代が異なってくる可能性がある(図3)。101 の場合、IntCal04 では中心値が3世紀の前半に来るが、日本産樹木によれば3世紀中頃と4世紀前半に来る。布留1式の場合は、日本産樹木による較正値に整合性がある。102 の場合、IntCal04 では中心値が紀元100年頃に来るが、日本産樹木による場合、2世紀前半から3世紀前半までの広い範囲に来る。どちらで

表1 土器附着炭化物の年代測定結果

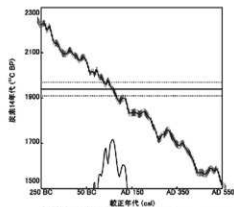
試料名	詳細	種類	測定機関 番号	炭素14年代 (^{14}C BP)	較正年代 (cal)	確率 密度 (%)
OIFJ-101	布留系裏・底部 外面・布留系裏	スス	IAAA-71923	1800 $\pm$ 30	AD130-AD260	82.9
					AD280-AD325	12.6
OIFJ-102	在地系裏・胴部 外面	スス	IAAA-71924	1880 $\pm$ 30	AD65-AD225	95.4
OIFJ-103(re)	底部外面	スス	IAAA-71925	1940 $\pm$ 30	BC20-BC15	0.7
					AD1-AD130	94.7



試料名	OIFJ-101
機関番号	IAAA-71923
炭素14年代	1800 $\pm$ 30 ^{14}C BP
	cal AD 130 - cal AD 260 82.9%
	cal AD 280 - cal AD 325 12.6%
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	95.4%
中央値	cal AD 215
最大値	cal AD 235



試料名	OIFJ-102
機関番号	IAAA-71924
炭素14年代	1880 $\pm$ 30 ^{14}C BP
	cal AD 65 - cal AD 220 95.4%
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	95.4%
中央値	cal AD 125
最大値	cal AD 135



試料名	OIFJ-103 (re)
機関番号	IAAA-71925
炭素14年代	1940 $\pm$ 30 ^{14}C BP
	16 cal BC - 16 cal BC 0.7%
	1 cal BC - cal AD 130 94.7%
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	- - - -
	95.4%
中央値	cal AD 65
最大値	cal AD 65

図2 確率密度分布図

表2 土器付着炭化物の炭素・窒素分析結果

試料名	詳細	種類	$\delta^{13}\text{C}$ 値	$\delta^{15}\text{N}$ 値	窒素濃度	炭素濃度	炭素・窒素比
O1FJ-101	布留系甕 底部外面 布留系甕	スス	-28.0‰	12.1‰	1.95%	51.3%	26.3
O1FJ-102	在地系甕 胴部外面	スス	-26.2‰	11.8‰	2.84%	65.6%	23.1
O1FJ-103	底部外面	スス	-26.0‰				

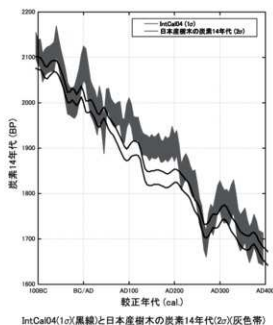


図3 IntCal04 と Jcal の較正曲線

較正しても布留1～2式の較正年代としては100年ぐらい古い値である。ただし、海洋リザーバー効果の影響は受けていないと思われる。

謝辞

グラファイトの充填に南部逸江氏の助力を賜った。記して感謝する。国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室は、科学研究費補助金(学術創成)「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築」の実施に伴って整備されたもので、今回の試料調製においてはその資源の一部が利用された。

文献

- 1 M. Sakamoto et al. (in press). Design and Performance Tests of an Efficient Sample Preparation System for AMS- ^{14}C Dating. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B*.
- 2 P. J. Reimer et al. (2004). IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26Cal Kyr BP. *Radiocarbon* 46: 1029-1058.
- 3 今村峯雄 (2007). 炭素14年代較正ソフト RHC3.2 について. 国立歴史民俗博物館研究報告 137: 79-88.

第2節 大分市大道遺跡群第24次調査出土白と土器の年代学的調査

歴博年代研究グループ

藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔

I 調査の概要

2008年4月23日、大分市教育委員会駅南調査事務所において、大分市大道遺跡群第24次調査で出土した古墳前期初頭（布留1式併行段階）の白（クスノキ）から木材試料を10年おきに11点採取し、前処理後、炭素14年代測定をおこなった。一部については重複して測定し、それぞれ炭素14年代値を得た。本稿では、白から得られた測定結果とその解析結果について報告し、その実年代について考察する。あわせて同年3月27日に白に伴って出土した布留1式に併行すると地元で考えられている在地系裏に付着したスなどの炭化物の年代測定結果も記す。

調査の結果、この白は西暦290年ころ白に加工されたと推定される。第一回目の測定を基に得られた予備結果では270年ころと推定したが〔藤尾・今村2008〕、第二回目の結果と併せて判断すると、第一回目のデータには全体的な傾向と大きく外れる測定値が含まれており、これを除外して総合的に判断すると西暦290年ころとなる。白の年輪は107年輪であったので、180年前後に生まれたクスノキが107年後に伐採されたことになる。そして10～20年ほど使用されたあと紀元3世紀末～4世紀初頭頃になって井戸に投げ込まれたというシナリオとなる。

以下、Ⅱでは、Iで土器、2で白のサンプル採取について記す（藤尾）。Ⅲでは試料の採取について（今村・坂本）、またⅣで試料採取と前処理（今村・坂本）、Ⅴで得られた炭素14年代値をもとにした測定結果と解析結果を報告し（今村）、Ⅵで考察をおこなった（藤尾・今村・坂本）。

なお、試料調製は、歴博年代研究グループの今村峯雄と坂本稔がおこなった。

Ⅱ 測定した土器付着炭化物と白

1 概要

白は布留1式土器に併行する在地の土器とともに井戸に投げ込まれた状態で見つかった。布留1式は考古学的に西暦300年を前後する土器と考えられているが約100年の存続幅を持つので、その間のいつ頃投げ込まれたのかを知ることは考古学的に難しい。そこで投げ込まれていた土器（図1 180頁）の外面に付着したススを4点採取してAMS—炭素14年代測定を行った（表1）。土器の型式学的特徴は本文を、サンプリング箇所や試料名は表1を参照していただきたい。図2は確率密度分布図である。

測定した土器はすべて布留1式に併行するが、一括投棄された土器のすべてが布留1式土器の範囲内と担当者から聞いている。

2 白の特徴

白の考古学的な特徴は本文第3章第3節に詳細な報告があるので、詳細については参照していただきたい。ここでは年代測定と関連した事項について記述する。白の底面（写真3・4）と内面（写真2）に107本の年輪を認めることができる。また上端には外皮が遺っているため（写真1）、伐採年代を知ることができる。大道遺跡群の白は丸太状のクスから作られ、底面の裏側に107本の年輪を確認することができ、一番外側の年輪は樹皮に限りなく近い部分と考えられることから、生育が始まってからほぼ107年後に伐採されたとみることが出来る。

一般に、スギやヒノキなどは、年輪数が100以上あれば年輪幅のパターンを調べることで、かなり高い確率で年代を知ることができる。年輪年代法と呼ばれる方法である。しかし残念ながら広葉樹であるクスは年輪幅の

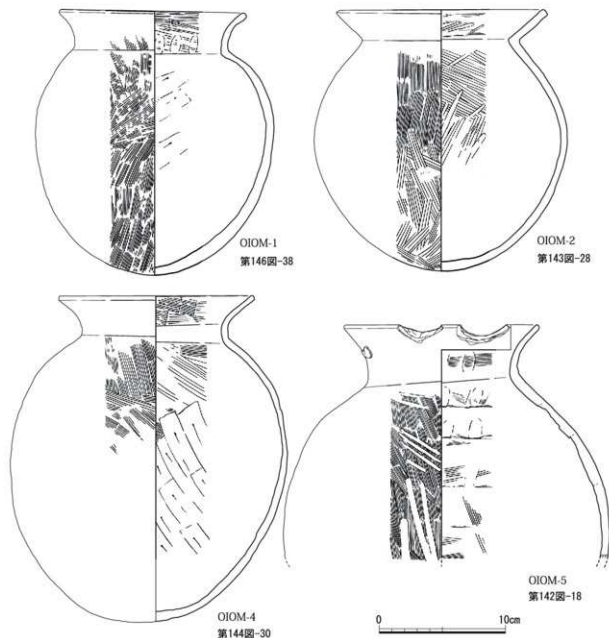


図1 大道遺跡群第24次調査 SE008 出土測定した土器実測図 (1/3)

変化が樹木によって個性があるため、共通のパターンを認識することが難しく、年輪年代を測定することはできない。このような場合、炭素 14 ウィグルマッチ法と呼ばれる方法が有効である。

III 試料の採取

2008 年 4 月 23 日、大分市教育委員会駅南調査事務所において、大分市大道遺跡群第 24 次調査で出土した古墳前期初頭（布留 1 式併行段階）の白（クスノキ）から木材試料を 10 年おきに 11 点採取した（写真 4 参照）。試料採取は、白の保存処理に先立って行ったもので、大分市教育委員会職員の立ち会いの下、107 本ある年輪を芯から 5 年輪目から始めて、10 年輪ごとに 11 のサンプルを採取した（表 2 参照）。試料採取は、化学器具として用いられる径 5mm の中空のコルク・ボーラー（鉄製）を用いて今村が行った。具体的には白の底部の該当

表1 白に伴った蘆の年代測定結果

試料名	詳細	種類	測定機関 番 号	炭素14年代 (^{14}C BP)	校正年代 (cal)	確率 密度 (%)	$\delta^{13}\text{C}$ 値 (‰)
OIOM-1 a (re)	在地系裏・胴部 外面・布留1式	スス	MTC-12209	1740 $\pm$ 30	AD235-AD390	95.4	-26.9
OIOM-1 b	在地系裏・口縁部 外面・布留1式	吹きこぼ れ?	MTC-11511	1750 $\pm$ 50	AD135-AD200 AD205-AD400	10.5 84.9	-27.2
OIOM-2	在地系裏・胴部 外面・布留1式	スス	MTC-11512	1800 $\pm$ 70	AD70-AD395	95.4	未測定
OIOM-4	裏・胴部上位外面 布留1式	スス	MTC-11513	1860 $\pm$ 60	AD20-AD260 AD280-AD325	90.7 4.7	-27.0
OIOM-5	壺・胴部中位外面 布留1式	スス	MTC-11514	1750 $\pm$ 45	AD140-AD160 AD165-AD195 AD210-AD195	2.9 4.7 87.4	-26.1

する年輪にコルク・ボーラーを1 cmほど押し込み、引き抜いて中に入り込んだ試料を回収した。

IV 試料採取と前処理

白の年輪試料は水洗後乾燥し、標準的な AAA 処理によって行った。すなわち、1N 塩酸で約 80℃で 1 時間ずつ 2 回洗浄したのち、1N 苛性ソーダ溶液で約 80℃で 1 時間ずつ計 3 回洗浄し、溶液中の着色がほとんどなくなったことを確認した。さらに、1N 塩酸で中和しさらに純水で洗浄して洗浄液が中性であることを確認した。

土器から得られたススの処理は、上記の作業を機械的に行う全自動 AAA 処理装置 (Sakamoto et al, in press) を用いて行った。

これらの前処理は国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室で行った。白試料については今村が、土器付着炭化物については坂本が処理を行った。

白試料のうちパレオ・ラボに AMS 測定依頼した試料については、AMS 測定のための炭素抽出、グラファイト化も含め依頼した。東京大学大学院工学系研究科で AMS 測定を行った試料については、炭素抽出、グラファイト化を国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室で坂本が行い、AMS 測定試料として調製した。

土器付着炭化物は、AAA 処理済みの試料を昭光通商 (株) に炭素同位体分析を依頼した。その結果は表 1 の $\delta^{13}\text{C}$ 値に示した。

V 炭素 14 測定結果とウィグルマッチングによる白の年代解析

1 炭素 14 年代

測定は、2008 年度と 2009 年度の二回に分けて行った。第一回目は、第 5 年輪から 20 年輪ごとに 6 試料を (株) パレオ・ラボに測定を依頼した。このうち表面に近い OIOM-C1 105 1 点については、東京大学大学院工学研究科の AMS 測定施設 (測定機関記号 MTC-) においても測定を行った。第二回目は、残りの 5 試料と、第一回目で測定した試料のうち第 65 と第 85 年輪の 2 試料、計 7 試料を測定した。

また、土器付着試料 4 点については、東京大学大学院工学研究科の AMS 測定施設で測定した。うち 1 点については重複して測定を行った。東京大学大学院工学研究科の AMS 測定施設での測定は坂本が行った。

試料と測定結果を表 1、図 2 に示す。

重複して測定した試料の結果のうち、特に、第 85 年輪試料については第 1 回目より第 2 回目より大きく、統計

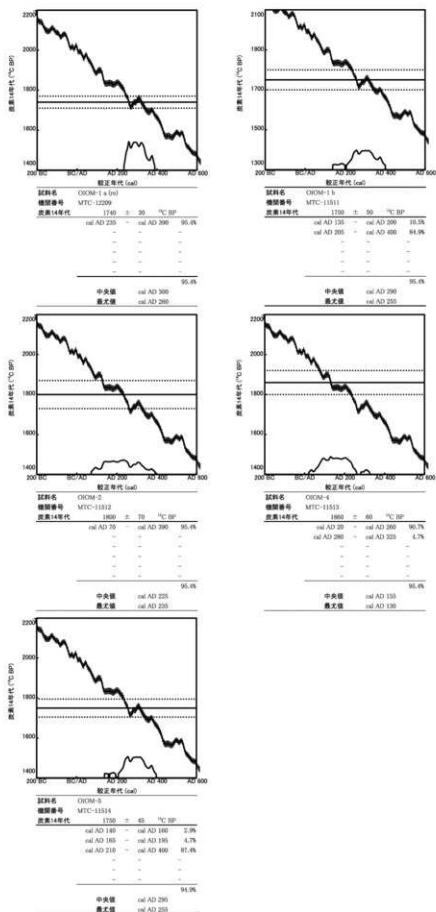


図2 土器付着炭化物の確率密度分布図



写真1 外皮が剥けているのが見える



写真2 杵で撞いた痕がみえる



写真3 芯から外側までのサンプリング位置



写真4 サンプリングした年輪 (拡大)

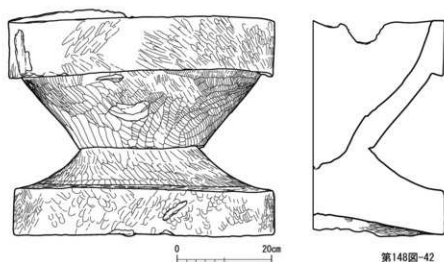


図3 245E008 出土白実測図 (1/8)

誤差を大きく超えて差が見られた。

測定誤差は、AMS 測定における統計誤差（1 標準偏差）であり、試料の汚染など、埋没時の試料の変化や取り扱いに伴う汚染の評価は含まれていない。経験的に、統計誤差を超えてこれらの汚染が観測されたケースはほとんどないが、歴博においてはデータの信頼性を担保するため重複した試料の測定などを行って評価することになっている。

上記の重複測定のうち第 85 年輪試料のケースでは、同じ前処理済み試料から時期を分けて採取したものであり、その原因は不明である。

ほかの 2 つのケースでは、第 5 年輪では 30 炭素年、第 65 年輪では 54 炭素年、差が見られたが、これらは測定誤差の許容範囲である。

2 ウィグルマッチングによる白の年代解析

1 回目と 2 回目の測定結果をまとめてウィグルマッチング解析を行った結果を図 4・5 に示す。解析は RHC3.2w（今村、2007）を用い、解析の基礎データとなる暦年較正曲線には、日本産樹木による紀元前 240 年～紀元 395 年のデータを用いた。具体的には、尾崎らが測定した長野産ヒノキおよび箱根スギのデータ（尾崎ほか、2009）に一部今村による測定も加え評価したものを用い 400AD 以降については IntCal04 を用いた。図では、便宜的に「JCAL」と表記した。

図 4 での解析では、較正年代として、最外層の年代として 281～294 cal AD が得られる。しかしながらこの解析では、図で示されるように、測定値の暦年較正曲線との一致は必ずしもよくはなく、 χ 二乗解析から解析はクライテリアを満たさないと判定された。第 1 回目の測定値は、何らかの原因で測定が安定していなかった可能性がある。

そこで、パレオ・ラボの第 1 回目の測定を除いた測定値を用いて、解析を行った（図 5）。較正曲線は図 1 と同じである。

その結果は、図 4 で得られた結果とほぼ同じく、282～291 cal AD と得られた。このケースでは較正曲線と測定値の一致はよく、 χ 二乗検定を満たす結果となった。

OIOM-C1 (#1+#2)

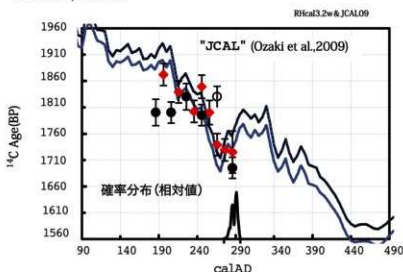


図4 大分大遺跡群第24次調査で出土した白の炭素14 ウィグルマッチングによる解析結果。この解析では第1回目の測定と第2回目の測定を合わせて解析した。ただし第85年輪の第1回目測定値(図の白抜き○)は除外した。この解析では、暦年較正曲線との一致が乱れており、 χ^2 乗解析検定を満たしていない。

3 在土器付着ススなどの年代解析結果

表1に炭素14測定値とともに、IntCal04による較正年代が示してある。 $\delta^{13}\text{C}$ 値は標準的なC₃植物の数値を示しており、較正年代に対して海洋性の影響を考慮する必要はない。図5の較正曲線と比較して明らかに、得られた年代値は3世紀後半から4世紀前半の年代と整合的である。178頁の図3で見るように日本産樹木 ^{14}C は、1、2世紀で古い値を示すが、3、4世紀では若干古い傾向を示す程度であるので結果にあまり影響はない。なお測定値の誤差が大きいことや、較正曲線がこの領域で屈曲しながらもほぼなだらかなために年代をこれ以上絞り込むことは困難である。

VI 考察

発掘されたクスノキ製の白の年輪試料と白が廃棄された時期と見られる在土器付着のススを炭素14年代測定によって分析した。較正年代の解析には国際的なデータベースであるIntCal04と、白の年輪試料に加え、日本産樹木に基づくデータを用いて解析した。

その結果、白が加工された年代、すなわちクスノキの伐採年代は、白の年輪を用いるウィグルマッチ法で解析した結果、282～291 cal ADと得られた。すなわち西暦287±5年ごろであると推定された。

2008年の予備結果の報告では、今回の報告のうち第一回目の測定を基に得た結果を用いて白に用いられたクスノキの伐採年を269年ごろと推定したが、第二回目の結果も併せた結果から、その判断を若干修正する必要ができた。すなわち、第一回目のデータには全体的な傾向と大きく外れる測定値が含まれることが判明したので、総合的に判断するとこれを除外するのがよいと判断された。その結果、上記に示した西暦287年頃が、クスが伐採された年代であると結論された。

土器付着炭化物から得られた廃棄年代と絡めると、白の一生を次のように表現することができる。白の材料となったクスの原木は、西暦180年前後に誕生し、107歳ちよつとで伐採され、白に加工された。そして10

表 2 白試料の年代測定結果

試料採取年輪位置 (中心=1)	測定機関番号	炭素14測定値 (^{14}C BP)	測定誤差 (1 σ)
105	PLD-10994	1695 $\pm$ 20	
105	MIT-10990	1725 $\pm$ 40	
95	PLD-13134	1729 $\pm$ 21	
85	PLD-10989	1830 $\pm$ 20	
85	PLD-13133	1739 $\pm$ 21	
75	PLD-13132	1800 $\pm$ 23	
65	PLD-10988	1795 $\pm$ 20	
65	PLD-13131	1849 $\pm$ 22	
55	PLD-13130	1802 $\pm$ 21	
45	PLD-10987	1830 $\pm$ 25	
35	PLD-13129	1839 $\pm$ 21	
25	PLD-10986	1800 $\pm$ 20	
15	PLD-13128	1872 $\pm$ 21	
5	PLD-10985	1800 $\pm$ 25	

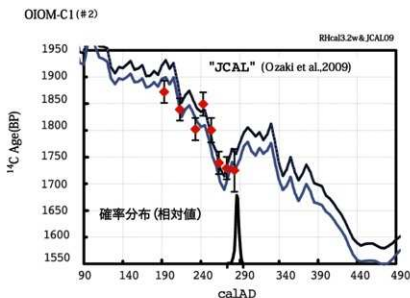


図5 大分大道路跡第24次調査で出土した白の、炭素14ウイグルマッチングによる解析結果。この解析では第1回目のMALT-AMSでの測定と第2回目のパレオ・ラガ測定を合わせて解析した。この解析では、暦年較正曲線との一致はよく、 χ^2 乗検定を満たしている。

～20年ぐらい使用されたあと、西暦4世紀初頭頃に井戸に投げ込まれて一生を終えたというストーリーとなる。

学校の学習における年表にこれらの情報を位置づけてみるならば、この白は、卑弥呼と同じ時代にクスとして生育したことになる。そして、卑弥呼が死んだあと約40年経った頃に伐採されて白として加工された。

これまでの考古学的な調査では、ともに廃棄されていた土器の型式から4世紀前半に投げ込まれたことは推定できた。また縦枠で描かれた部分はかなりくぼんでいて摩滅していることから、長年にわたって使い込まれていることも想像できた。さらに年輪を数えることによってクスの木が生育を始めてから107年と少したってから伐採されたこともわかる。

しかし白を観察するだけでは西暦何年にこの木が生まれ、何年に伐採され白として作られたのか、何年ぐらい使われたのかを知ることができない。

今回の調査のように、土器に付着したススや白の底の年輪部分について、炭素 14 年代法という自然科学的な方法を用いることによって、年代を明らかにする手がかりが得られる。年代が明らかになると同時に、大道遺跡群の白は卑弥呼の時代と重なることになる。年代研究は、私たちに新たな古代史情報をもたらしてくれたのである。

Ⅶ おわりに

本調査で試料採取および関連情報の提供でお世話になった大分市教育委員会、ならびに、AMS 炭素 14 測定で便宜を図っていただいた東京大学松崎浩之氏に感謝します。

参考文献

- M. Sakamoto et al. (in press). Design and Performance Tests of an Efficient Sample Preparation System for AMS-¹⁴C Dating, *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B*.
- P. J. Reimer et al. (2004). IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0 - 26 Cal Kyr BP. *Radiocarbon* 46: 1029-1058.
- 今村峯雄 (2007). 「炭素 14 年代校正ソフト RHC3.2 について」. 『国立歴史民俗博物館研究報告』137: 79-88.
- 藤尾慎一郎・今村峯雄 (2008). 「白の一生—卑弥呼と同時代に生きたクスがたどった人生—」『学術創成研究ニューズレター』11: 2-3
- 尾崎大真ほか (2009). 「③樹木年輪の炭素 14 年代測定」(データ集)『弥生農耕の起源と東アジア』研究成果報告書(西本豊弘編), 国立歴史民俗博物館: 508-524.